
残響の導き

藍村 泰

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

残響の導き

【Nコード】

N5223L

【作者名】

藍村 泰

【あらすじ】

たかまのはらく
高天原国に永久の繁栄を。

時はさかのぼり、史実にも残っていない太古。高天原国と黄昏国は争いを繰り返していた。

ヤナギは己の立場に苦しみ、世を憂いていた。やがて、彼女の迷いは高天原国を熾烈な戦へと誘う。

和風ファンタジー。

「あなたとこのまほろばで会えたことに感謝する」

2010・08・27 完結しました。

現在改稿中です。2010・10・07、一章まで済み

序章 姫巫へひめみこ

割れ鐘のような響きが脳内に広がる。

少女は口許を押さえてその場に倒れ込んだ。

意識が朦朧とする。

睡魔に負けまいと下唇を噛みしめたものの、抗い難い眠気は彼女を侵蝕し、瞼を閉ざす。

「姫巫^{ひめみこ}。いずれこの国の行く末を握ることとなる運命の子供。

今は夢に遊ぶがいいさ。いずれ定めの際は来るよ、わたくしの後裔」
遠い意識の淵で、少女は声を聞いた。

酷く冷えた、氷のような女の声。

しかし、どこか憐憫も含んでいる声でもあった。

「触れるな」

低く、地表を這う声でした。

「誰が貴様如きに渡すものか。こいつは姫巫にはならん。即刻立ち去るがいい」

女に向かって誰かが言う。

怒気を含んだその言の葉は温かな言霊となり、少女の護りとなる。

「無駄だよ。もう抗うことさえ赦されていない、わたくしたち青草には、ね」

女は感情の立ち消えた声でなおも言い紡ぐ。

もう一つの声はそれを鼻で笑った。

「赦^{ゆる}し、と。誰に赦しを乞うと言うのか。神にならば、もう既に赦されようとも思っていない」

轟音がした。

何かが大きな音を立てて崩れていく。

少女は夢と現の狭間で、浮遊していた。

最早、何の音さえ聞こえない。

一・

響くは始まりと終わりを告げる宿運ときが関との声。
歴史に埋もれし真実はそのままだに、いざ逝かん。

導くは愛かなしい者の足跡。

大地に広がりし陽光はやがて、民を救わん。
巡りめぐった全てを抱き、ようやく帰巢せん。

残響さんきやうきやう帰巢。唯一無二の居場所はかの心なり。

常闇が世の全てを支配していた。
あかとき

暁あかときが昇る気配は未だなく、ひっそりと静まり返った高天原国たかまのはらこくの都
の中心に座す王宮では、盛大な宴が行われている。

この国では、闇夜は穢れを呼ぶと言い伝えられており、大晦おおつごもりは特
に忌むべき日、大闇おおくらという異称もある程だった。

だから、こうして大晦には台王たいおうきみ 高天原国王に与えられるほま
れある尊称 の住まう寝殿の更に奥にある楽屋で夜を徹して、雅
楽に酒に興じる。

神に仕えし巫みこが歌を口にし、踊りを舞えば、闇は地下にある蛮族ばんぞく
たちがはびこる国々へ還ると云われていた。

わたしの
渡殿の端に備え付けられた燭台が明々と二つの影を照らし出す。
「ヤナギ様、楽屋は相も変わらずとても騒がしいところですね」

付き童の中でも最年長であるサコが溜め息を吐いた。

付き童とは巫に仕える者のことで、主に巫力なき童が就く職である。彼女たちは十を過ぎると御殿内の雑務を担う宮仕えとなり、巫の世話から外れる。来年、サコは十になる。

そんなサコに、巫 ヤナギは花がほころぶように笑いかける。
床に着きそうなくらい長く艶やかな髪に飾られた波留はるや瑪瑙めのう、瑠璃りといった宝石類が一樣にさんざめく。

清き川を思わせる流麗な装束は、まだあどけなさの残る顔に似合わない。

「初めてあの宴に出席した時、そなたはすごく興奮していたわよね」
ヤナギに言われてサコは顔を真っ赤にし、俯うつむいた。

そうこう話しているうちに、二人はいつの間にか巫たちの暮らす離れへ到着していた。

彼女たちはもっぱらこの離れにいるため、自然と緊張の糸が緩む。
台王の御殿内でも最も奥まった位置にある巫たちの離れは大層広い。

庭には多くの木と花が植えられており、四季折々に景色を変える。
その中の池には美しい白き魚が悠々と泳いでいる。池に架かる石橋は暗闇でも淡く光を放っており、幻想的な雰囲気をも少し出していた。

砂利じゃりは綺麗にならされており、調えられている。庭師は今回、高天原国の縮小図を砂利で描いたようだ。

サコは離れの妻戸を引きながら、思い立ったようにヤナギへ問い掛けた。

「そういえば、ヤナギ様……宴の途中で退席してしまって大丈夫なのですか」

基本的に巫たちは宴の途中で抜け出すことを許されていない。

サコは、そのことでヤナギが怒られることを心配したのだらう。

「大丈夫よ。今回の宴は例年より騒がしかった。巫の一人が抜け出したところで誰も気が付かないわ。それに」

ヤナギは唇をぎゅっと引き結び、双眸に力を入れた。

「姫巫様もいらっしやらなかったですものね。そのことに台王も皆も注視しておりましたから、ヤナギ様が抜け出したことに気付く者はおりますまい」

サコがヤナギの言葉を引き継いだ。それにヤナギは首肯する。

自室に辿り着いたヤナギは、サコに早く寝るように言って付き童たちが暮らす部屋へ帰した。

疲れているだろうに、ヤナギに白湯ちやうを作ると申し出てくれたのだが、サコは大切な人である。体を壊して欲しくない。

ヤナギが十で、サコが九つ。長い間二人は共に過ごしている。この宮へ来た時から一緒にいるのだとサコは他の付き童たちにいつも自慢しており、ヤナギとサコの仲は相当年季が入っていた。

ヤナギはしらずと装束を脱いだ。そして、枕元に置いてあった寝着に袖を通す。

(……………姫巫……………)

高天原国つ神の口より生まれ、神言を授かる巫たちを束ねる者それが姫巫である。

今代の姫巫は齢数百を重ねた偉大なる巫だ。常人ならばよく生きても百で死地へ赴くものだが、姫巫は違う。

姫巫になるとは人の輪廻から外れて仙となること。ヤナギは巫たちの教育係を担う大巫おおみこからそう習った。

老齡であるにも関わらず、姫巫のその姿、女神の如く麗しく気高い。

ヤナギは四年前　この宮殿へ召されてから今まで、姫巫を何度はいえつか拝謁はいえつしている。それは催事の時だったり、先のような宴の席だったり。

豊かな黒い御髪を頭の天辺でまとめており、白い肌に切れ長の目唇に引かれた真つ赤な紅は鮮血を思い起こさせた。

一体どれだけの人間をその口で屠ほふってきたのだらうといつもヤナギは思っていた。

“神の口”を持つ者にのみ赦された、真象しんしょうの力。

それは口にしたことを具現化する、恐ろしき力だ。

ひとたび姫巫に真名まな 人の持つ本当の名 を呼ばれば、傀儡くわいとなってしまう。

それほど、姫巫の力は強大だった。

ヤナギにとつて、姫巫は尊敬の対象ではなく、恐怖の対象である。今もこうして考えるだけで心が凍てつく。

時折、ヤナギのもとへ届く姫巫からの高価な贈り物にさえ、触れることを恐れた。

「ヤナギ様、お帰りなさいませ。お疲れのところ申し訳ありませんが、これから楔みそぎをして頂きます」

物思いに耽ふけるっていたヤナギは飛び上がらんばかりに仰天した。

慌あわてて振り向くと、引き戸のところに数人の采女うねめがいた。

采女とは、姫巫の世話をする優秀な女官たちのことである。ということは間違いなく、彼女たちは姫巫からの使いに違いない。

「姫巫様が私に何か御用なのでしょうか」

取り澄まして問えば、采女たちは一様に頷く。一人の年老いた采女がヤナギの方に進み出る。

「あの方はそなたに大事な話があるという。心を無にして姫巫様の邸やしきまでおいで。もちろん、一人で来るんだよ。楔を済ませ、陽炎かきろいがちらつき始めたら梔子齋森くちなさいのもりに入りなさい。その刻限のみ、禁足地しんはやまにある神杷山の入り口を開く。……………このことを付き童に話してはいけないよ。そんなことをすれば、姫巫様の呪じゆが降り注ぐだろう」
不穏なことを言い残し、采女たちは掻き消えた。幻影だったのだ。ヤナギはしばし茫然としていたが、頭を左右に振って意識を覚醒させた。

立ち竦すくんでいる時間はない。早く楔を済ませ、姫巫のいる神杷山しやでんの社殿へ行かなければいけない。

姫巫の命令は、台王の命令の次に優先すべき事柄である。
ヤナギは震える手足を無理矢理動かして部屋を出た。

離れと梔子齋森のちょうど境にある鏡月池きよづけいけは古くより、姫巫に会う際に楔を行うのに使われる。

鏡月池の水はぬるく、この寒空の下で薄く湯気立っていた。
ヤナギは息を殺して池に足を入れた。つんとした空気が辺りに充満している。

ゆっくりと肩まで浸かり、ほうと息を吐いた。
白い装束を身に着けたまま行っ楔は、何度やっても慣れない。
ヤナギは目を瞑った。風花の如く曇りなき肌と他の巫たちに誉めたたえられる肌が湯気によって朱まるのを感じる。

鏡月池を囲うように張り巡らされた橘の木が明け方の風に揺れる。
「大した用じゃないわ」
ぼそりと願いを言の葉にし、空へ流した。姫巫ほどの巫力はなくとも、ヤナギだって巫である。言霊にそれなりの呪いまじなの力を乗せることは可能だ。

ヤナギは掌を空へとかざした。
長い髪は水面に漂い、ゆらゆらと扇状に広がる。どこから迷いこんだか、薄墨色の花卉が水面を滑った。

約束の刻限は待つてくれない。

大気の流れが止まってしまえば姫巫のもとへ行かなくて済むのに、と無理なことを思いながら、ヤナギは楔を終える。
清めた体に木綿もめんの衣をまとい、腰のおしひざを浅葱の帯で縛る。
そうして慣わしに従い裸足のまま、梔子齋森へ足を踏み入れた。
途端に尋常ならぬ凍て付いた空気が楊を取り巻いた。梔子齋森は

神の宿る神域。静まり返ったそこは、人の身にはいささか堪える。
霧深い森の中、迷わずにいたのは一重に道を標す鬼火がヤナギを導いていたからだった。

針葉樹の生い茂る森には至るところに墓石がある。

高天原国に従わなかった多くのまつろわぬ人々が、ここで凄惨な最期を遂げたのだと巫の一人が教えてくれたのを思い出す。

ヤナギはちょうど手近に咲いていた彼岸花を手折った。そして、墓石が密集している場所に供えた。

「……………どうか、黄泉路は迷わぬように。この赤き彼岸花が導しるとなりましょう」

ここに埋葬された人々は、誰にも弔うやむやってもらえなかったろう。

その悲しみが、苦しみが、彼らを縛り、その魂を現世と常世を惑わせる。惑う内に、ちはやぶる神となってしまう者さえいる。

「死した後さえも苦しまなくてよいのです。後は現世に生きる者達に託して、しばし常世で遊山ゆさんされよ」

淡い光が蛍のようにヤナギの周りを舞った。それはやがて天へと向かい、消えて行った。

ヤナギはしばらくその様子を見守っていたが、本来の目的を思い出して慌てて鬼火を追いかける。

鬼火は一定の速度を保ってヤナギを導いた。

もう半刻は歩いただろう。鬼火は巨大な楠の前で止まった。そこが姫巫のもとへ続く道なのだ。

ヤナギは意を決して、その大木の樹皮に触れる。

すると、辺りは一変に様変わりした。ヤナギは姫巫のいる小高い

神の山　神しん杷は山はやまの裾野に辿り着いた。

ここから先は一本道のように、役割を終えた鬼火は大気に融け出す。

神杷山には四季など関係なく、様々な花が咲き誇っている。常世さながらの異質さがあった。

ここに姫巫は住んでいる。

木の枝や小石によってたくさんの傷を負った足の裏が熱い。だが、ヤナギは気丈に山の頂上を目指した。

朝陽が完全に昇る頃、ヤナギは頂上に到着した。

大晦が明けて新しい年を迎えるこの瞬間、世界は美しく輝く。深い闇の後に見る光ほど、眩しいものはない。

目の前に広がる景色は想像を絶する。朝露に煌めく橘の木、沙羅双樹の花、池に架かる朱塗りの橋、池に泳ぐ黄金の魚。

社殿は豪華な造りを以ってヤナギを迎えた。

新年をここで迎えることになるうとは、予想外だった。常であつたら離れで他の巫たちに新年の挨拶をしていることだろう。

「遅参ちさんが過ぎます」

苛立ちのこもった声と共に、幾人かの采女が社殿内より現れた。

皆、王宮の者でも一部しか着られない質の良い仕立ての装束を着ている。布地は絹に違いない。

「たいへん申し訳ありません」

ヤナギは素直に頭を下げた。

「まあ、いい。ほら、後に続きなさい。姫巫様は首を長くしてお待ちです」

采女たちは身を翻して社殿の中へ入って行く。慌ててヤナギも後に続いた。

長い外廊を歩き、渡殿に行く。

王宮と同じような構造をしているため、ヤナギは思っていたよりも鼓動を落ち着かせることが出来た。

最奥だと思われる観音開きの扉の前で、年老いた采女は振り向いた。

その形相が尋常のものではなかったため、ヤナギはたじろぐ。

「いいね、小さき巫。これから見るものを口外してはいけないよ。

このことは台王さえも知らないんだ」

「はい」

頷く以外にヤナギに出来る選択肢はなかった。

それを確認し、采女たちは静かに扉を開け放った。

部屋の中央には神事を行うためにある、ゆずりはと橘の葉で囲われた祭壇がある。そして、奥まった箇所に寝台があった。普通の部屋と取り立てて代わり映えない。

唯一違つところを挙げるとすれば、住んでいる者が高貴な人というだけだ。

「ようやく来てくれた。わたくしはそなたを待っていた」

黎明たる声が部屋に響く。采女たちは叩頭した。

ヤナギは目を丸くし、寝台に気だるげに横たわる人物を見つめていた。

思わず口を両手で覆う。

「ヤナギ……………わたくしを初めて見た時、そなたは恐怖したね。宿運ときが関との音がそなたに響いたのだろう」

姫巫は上体を少しだけ起こして手招きした。

しかし、ヤナギの足は根が生えたようにその場から動かない。

姫巫は初めて会った時と同じく微笑んだ。

「姫巫様」

声が震え、上手く喋れない。

「その お顔は」

姫巫の顔は、醜い老婆のそれだった。

半年前に催事の折、遠目より見たはずの豊かな黒髪も白髪に変わり果て、真珠の肌も茶色く萎びた色に変化している。

ヤナギの青ざめた表情を眺め、姫巫は神妙な面持ちで言った。

「終焉は近付いている。もうわたくしは長く持たない」

「そのような戯言。姫巫様はこの数百年、人の齡を超えて高天原国ふところがたなが懐刀として君臨し続けてこられたお方。貴女様がこの世を去るなど、誰が信じましょうか」

「そう、ずっと長い間生きてきた。姫巫になった瞬間より成長が止まり、わたくしは神の贄となった。ただどね、今回ばかりはついに代替えの刻が来たようだ。半年前より体が急速に年を取って、今で

はこの様よ」

姫巫は自嘲的に笑い、乾いた自分の手を擦る。

「まだ戦は終わっていないというのに」

名残惜しそうに呟く姫巫に対してヤナギは初めて、恐怖を感じず相対していた。

「姫巫様、希望は常に己の身の内に宿っていると聞きます。それを見出すか否かは本人の心持ち次第。お気持ちを強く持てば、病など

「残念ながら、神意に逆らえる者などいない。わたくしの御代はここまで」

きっぱり言い切って、姫巫は強い眼差しをヤナギに送る。

「これからはそなたの時代。だから、ここに呼んだのだよ。全てそなたに授けてからわたくしは黄泉路を逝く」

ヤナギの顔が強張った。

再び恐怖が頭をもたげる。じつと頭を垂れていた采女たちは姫巫が指一本動かした瞬間、ヤナギを取り押さえて姫巫の目の前へ引きずった。

「いやっ、何をするの。私はただの巫
姫巫などにはなれない、そのような力ありません！」

姫巫はヤナギを、静かな瞳で見据えた。

ヤナギの動きが止まる。大量の冷や汗が身体中を伝う。

姫巫はヤナギの真名を口にした。ヤナギと肉親以外、知る者はいないはずのその真名を口にしたのだ。

彼女は真名を以ってヤナギを縛った。

にんまりと姫巫は口角を上げた。

「逃がしはしないよ。そなたが生まれた時よりこうなることは決まっていた。新たな高天原国つ神の贅となる少女よ、その大きな眼でとくと見るがいい。古から今日まで受け継がれてきた歴史の全てと姫巫の全てを」

姫巫は己の両腕にしていた勾玉を素早く外し、それをヤナギの両腕へ滑らせた。

部屋中にヤナギの絶叫が轟いた。

姫巫は昏倒したヤナギの髪を梳^すいた。

薄墨の花弁が一枚、その髪に絡まっているのを見た刹那、姫巫の形相が変わる。

「これは……………さて、何が紛れ込んだか」

二・

地下には、高天原国たかまのはらいくと同等か、それ以上の勢力を誇る国があった。
名を黄昏国たそがれこく。

猛威を奮う王に圧されて、民衆は日々死と隣り合わせで暮らしていたと高天原国の書物には記されている。

高天原国と黄昏国は何度も何度もぶつかった。

地上と地下を結ぶ蜘蛛の廻廊かいろうを登り降り、激戦は繰り返された。

その戦を下火にさせたのが今代姫巫だった。

今代姫巫が黄昏国と戦を始めてから数百年余りが経過した今、黄昏国は傾国となっている。最早、いつ何時潰れてもおかしくないだろう。

また、姫巫は四年前に高天原国の領土にて暮らしていた黄昏国の残党を散り散りにもした。

国を愛す、姫巫の心が大業を成し得たのだ。

そんな采女うねめたちの話を聞きながら、ヤナギは凡庸ぼんような表情をして采女たちにされるがまま、姫巫の証である七色の装束を身にまとった化粧を施されている間も黙りこくり、ぼんやりと窓の外を見つめていた。

冬晴れは大層空気が澄む。このような日に儀が執り行われるのは幸先がいいと采女の一人は満足げに頷いた。

先日、姫巫は死地に旅立った。

姫巫の座は亡くなった姫巫の望んだとおりヤナギへ譲られることになった。

滞りなく姫巫代替わりの儀は進む。

あとは神の御印を身に刻むだけだ。

一步、一步、緩やかに祭壇に近付く。

この日のために王宮の謁見の間に建てられた祭壇には、巫たちの中でも最年長である大巫おおみこが緊張した顔で待ち構えている。手には刻印を標すために、高温に熱された銅印を持っていた。

「これより、神の御印をそなたに刻みます」

大巫は気高くもそう言つて、ヤナギの顎を上向かせる。

ヤナギは全てを諦めた瞳を伏せて舌を出す。

まだ触れてもいないのに舌が燃えるように熱い。

肉を溶かす音と共に、刻印はヤナギの舌に刻まれた。

儀に集まった者達はまだ十一になったばかりの幼い少女があまりの痛みに舌を噛み切ってしまうのではないかと心配していたが、その憂いは無用だった。

ヤナギは無言のまま、青い空を見つめていた。

「ヤナギ様……………っ。大巫様、もうその銅印をヤナギ様より外して下さい！　こんなあんまりです。まるで罪人のようではないですか」

サコの悲しい叫びが上がる。

サコが放った“罪人”という言葉に幾人かはぎょっと目を剥いた。「その無礼な付き童を捕らえよ！　反省の色が出るまで岩牢にでも突っ込んでおけ！」

台王付きの護衛官が顔を真っ赤にさせて怒鳴り散らした。武人たちはサコを取り囲み、捕らえる。

（サコ）

声にならない言葉をヤナギは発した。

舌が引き千切られるように壮絶な痛みが思考も何もかも全て麻痺させる。

三日三晩　いや、それ以上、ヤナギは悶え苦しんだ。

舌は喉を圧迫する程に肥大し、高熱が続いた。死んでしまうのだ

ろうかと思つた最中、脳裏に過ぎつたのはサコの悲しむ顔だった。自分が死んで悲しむ者がいる。それだけが、ヤナギをこの世に留まらせた。

「よくぞ我慢しました。先代の目は確かだったようです」

あくる日、薄く目を開いたヤナギに采女がその声を掛けてきた。

ヤナギは重い体を起こして彼女に訊いた。

「……………サコは？」

「ああ、あの儀を穢した付き童ですか」

「無礼なことを言わないで」

怒気を発したヤナギに怖気づいたのか、采女はすぐに呼んで参りますと言つて退席した。

ヤナギは未だ痛む舌と心にようやく涙を零す。掛け布団に顔を埋めて声を押し殺し、泣いた。

真名縛りを受けた証拠にヤナギの爪の色は桜色から血色に変色した。

縛つた者の僕としての印。

先代が死んだ今、それを消す方法を知る者はいない。先代の遺した真名を縛る呪が消える気配はなかった。その身をていして行つた呪だったのだ。

それによつて、姫巫の座を降りることを許されない状況に追い込まれていた。逃げようとしても、先代の遺した言霊がそれを阻止する。

ヤナギが死ぬまでそれは変わらない。真名の持つ力は大きかった。「もつと、力ある巫が姫巫になるべきよ」

夢の狭間で幾人も人が枕元で囁き合うのを聴いた。ヤナギには並の巫力しかない。取り柄もない。

どうして、そのような者が姫巫に選ばれたのだと怨咀が耳にこびりついて離れない。それに加えて、姫巫の儀によつて得た蒼き刻印と古の記憶はヤナギをさいなむ。

「ヤナギ様っ」

はりのある呼びかけが、がらんとどの部屋に響いた。ヤナギは涙に濡れた双眸を持ち上げる。

目の前には、ヤナギと同じように涙で顔をくしゃくしゃにしたサコが佇んでいた。

ヤナギは思わず彼女に抱き付いた。二人は何も言わずにただ抱き合っていた。

少しして、落ち着きを取り戻したヤナギはサコのため、高杯たかはいに白湯を注いだ。

「どうぞ遠慮はしないで。長い間、岩牢に閉じ込められていたのでしょう。この白湯でも啜って元気を出して」

サコは沈んだ顔をしていた。

「わたし………… ヤナギ様の付き童になって良かった」
しみじみと、彼女は言葉を紡いだ。

「姫巫になられたヤナギ様にはもう、仕えられないけれど、サコは転生しようがあなたのことを忘れません」

泣き笑いしたサコは、とても凜としている。ヤナギは暗い気持ちになった。

サコのことが心配過ぎて忘れていたのだが、姫巫には付き童はつかない。

代わりに、多くの経験を積んだ采女が付くのだ。

「けれど、そなたは今年、十になる。采女になれる年齢でしょう。

私はそなたを姫巫の采女に推薦するわ。そうしたら」

「いいえ」

即座にサコは答えた。

「わたしは、采女にはなりません。なれないのです」

ヤナギは不審げにサコを見つめる。

付き童を経験した娘は、采女となる資格を有す。たしかに、巫力がある者の方が采女として採用されやすいが、推薦さえあれば、身分に関係なく華々しい姫巫仕えとしての役目が与えられることも多々あった。

サコは采女になりたいとずっと口にしていたし、その分、作法や楽などの勉強にも励んでいた。

巫たちの中でもサコの優秀ぶりは度々話題に上っており、良い采女になるだろうと誰もが賛辞した。

ヤナギにとって、佐子は姉妹同然。この宮殿の中で最も近い存在である。

「私は……………サコがいてくれないと寂しい」

素直な感情を吐露したヤナギに対し、サコは曖昧に微笑んだ。

「もうそろそろ、ヤナギ様が大人となる時期なんですよ。その時、わたしがいては妨げになる。先代様のように、誰にも頼らない、立派な姫巫となつて下さいますよう。サコは貴女のことをいつまでもいつまでも、見守っておりますから。長居してしまい、申し訳ございません。これでサコはお暇致します」

「待つて」

ヤナギは思わずサコに追い縋った。

小袖を幼子のように掴むヤナギを横目見、サコはそれを振り払う。大層、冷たい態度であった。

「……………もう、ヤナギ様のお傍にいるのは疲れました」

小袖を掴んでいた手の力が抜ける。サコは踵を返した。弱々しく伸ばされた手をそのままに、サコは部屋を後にした。

入り口付近に控えていた采女が戸を閉める直前に、サコは何か助けを乞うかのような眼差しでヤナギを振り返った。

しかし、サコに投げ付けられた言葉の衝撃が酷く、ヤナギはサコの眼差しに潜む真意に気付くことが出来なかった。

姫巫となつたヤナギのいる神杷山を下り終わり、くちなさいのもり梶子斎森へ差しかかったサコは、無言だった。

サコは空を仰いだ。

純粹な青は空一面に広がっており、それを背の高い木々の緑が彩る。風のざわめきは生命を育む匂いを感じさせ、鳥のさえずりは傷付いた人を癒す力となる。

呪詛の声が満ち満ちるこの森は、どこか優しくサコを包む。

帰りの案内を買って出た若き采女をどうにか追い返し、サコは梶子斎森をあてどなく歩いていった。

ぼくと数多の光が彼女を取り囲む。未だ現世から常世へ続く道で惑っている魂だろうとサコは思った。

「ヤナギ様なら、あなたたちを導いてくれるから、もう少し待っていて。あの方は平穩を連れて来てくれる。殺し合いを好んだ先代とは違う」

自分に言い聞かせるかの如く、サコは光に語りかける。

「まほろばにまつるわなかった者たちよ、あなた達の無念を今代の姫巫は汲み取って下さる。きつと」

光たちが一段と輝きを増した。

高天原国を呪うその赤き光は落ち葉が乱れる湿っぽい地面の中へともぐって行った。

ふと、風のざわめきによってくさむらの向こう側に滝が見え隠れした。

サコはゆっくりとそちらへ足を踏み入れる。

そこに広がる景色は、浮世離れた蓮が浮かぶ泉だった。対岸にあるたいそう古い洞窟を隠すかのように滝が流れている。

「……………これが、師範の言っていた常闇洞泉……とこやみどうせん。ただ虚ろな世界が泉に映るだけ。迷いや、恐怖、憎しみ、怒り」

そう言っサコはその泉に近寄る。水面に映っていたのは、醜く歪んだ己の顔だった。

堪えていたものが溢れ出す。

サコは、わっと顔を両手にうずめて泣いた。

「どうして、どうして、ヤナギ様が姫巫にならなければならぬの」
常闇洞泉は静かに彼女を見守っている。

「でも、この方がいい。これでいいの。ヤナギ様は何も知らず、笑っていて欲しいから。そうよね、師範」

サコは遠くにいる師範に向かって答えを求める。

返事はなかった。少女の切なる願いはただ一つ。ヤナギの幸せだった。

その日、宮殿は何やら騒がしかった。

舌の痛みもだいぶ引き、台王へ元気になった顔を見せるために神杷山から下りて、王宮を訪れていたヤナギは異様な熱気に押されて顔をしかめる。

（催事でもあるのだろうか）

しかし、催し物などがある際は必ず姫巫は参加しなければならな
い決まりだ。

そのような催し物があるとは采女の誰にも聞き及んでいないため、
その線は消えた。

外廊にいても、堀の外のざわめきが聞こえてくる。

ちらちらと赤い旗が見え隠れする。

「ああ、そう言えば今日ですね。何たること。姫巫様をここへお連れ
するのではなかった」

采女は顔を扇で隠した。

庭を幾人かの武官が駆けて行く。

ヤナギの目にする者は誰しも興味津々といった表情をしている。

「何があるの？」

ヤナギの質問に対して、一人の若き采女は驚いたように目を丸く
した。

「姫巫様 今日付き童であるサコの斬首日でございますよ」
「もしや知らなかったのでございますか、と嘲笑を交えて続けるう
ら若き采女を他の采女たちが扇で叩いた。」

「何たる侮辱、サコより授かった最期の頼み……姫巫様には斬首の旨は内密にという頼みを反故^{ほご}し、あまつさえ姫巫様を嘲るか」

「そちに人の子の血は通ってないようですね！」

「お前など、宮仕えから外すよう台王にお頼み申し上げてくれるわ！」

他の采女になじられながらも、うら若き采女は湖畔のように静かな眼差しでヤナギを見つめる。

「貴女様は、一番近きサコの心の声も聞こえない愚か者。あの時、どう言った気持ちでサコが姫巫様に暴言を吐いたのか。退室する時どのような気持ちで貴女様を振り返ったのか。入り口で控えていたわたくしにはわかったのに……」

鈍器で殴られたような痛みが走る。

次の瞬間、ヤナギは外廊を一目散に走り出した。

手すりを飛び越え、西門へ急ぐ。処刑が行われるのは、決まって王宮の西門前だ。

忌み部屋という名称で呼ばれる拷問部屋がある西門前は、人ごった返していた。

御殿中、市井中から人が見物に来ているのだろう。

「通して、通して！　お願い、やめて！　台王様、お願いします。」

サコを殺さないでっ」

悲鳴に近い声を上げながらヤナギは人ごみを掻き分けて処刑台へ進む。

姫巫にのみ赦される真象の力を使おうとしたが、心が荒立っているため上手くいかない。

自分の無力さが憎かった。

「お嬢ちゃん、もう手遅れだよ」

やっと最前列に到達した時、しなびた大きな手がヤナギの両肩を抱いた。

老人は痛々しい面持ちで頷きかけるが、とうのヤナギはそれどころではなかった。

処刑人の持つ剣がサコに振り下ろされようとしている。
声が出なかった。

ただ、手を伸ばした。全てがゆっくりと動く。

サコは、驚愕した顔でヤナギの方を見た。容赦なく剣はサコへ舞い降りる。

最期の瞬間、サコは満たされた安らかな笑顔を見せた。

大量の血液が宙に飛散する。首がごろりと鞠のように落ちた。

自分にかかったその血を拭い取りもせず、制止をかける老人の声も聞かず、前へ躍り出る。

処刑人は眉をひそめた。処刑人たちが咎める声も、ざわめく見物人たちの声も、ヤナギの耳には入って来ない。

手を叩く音がした。

ヤナギは射殺さんばかりの迫力で拍手をした者を睨み据える。

「姫巫や、そなたがこの場に来るとはわしも予想外であった」

心底驚いていると言った声音で台王は口を開いた。

「だが、その付き童は、そなたが姫巫になることに頑なに反対し、あまつさえわしを愚弄したのだ。万死に値する。その者を赦せば、反逆者は次々に現れるだろう」

恨みのこもった目で躊躇いなく台王を睨みつけるヤナギには、鬼気迫る迫力があつた。

さも面白げに含み笑い、台王は豊かな己の髭を撫でた。

「まあ、良い。処刑は滞りなく済んだ」

その一言で、この処刑は終わりを告げた。皆、興醒めした様子で散り散りと去って行く。

処刑人は非情にも、サコの長い髪を乱雑に掴み上げて桶の中に入

れる。

（あれは、サコであってサコでない。ただの抜け殻）

必死に、ヤナギは自分に言い聞かせた。

ともすれば、処刑人に掴みかかってその骸を抱きしめたかったが、それは愚かなことでしかない。

縋り、泣いて死人が息を吹き返すというならば、迷わずサコの亡骸^{がら}を抱きしめよう。

しかし、骸^{むくろ}を抱いても体温は戻らない。

（梶子斎森に……サコも打ち捨てられるのだろうか）

高天原国に逆らった裏切り者として。

「……ごめんなさい」

気付けなかった。

うら若き采女が見たという助けを求めるサコに、ヤナギは全く気付けなかった。

ヤナギは嗚咽を洩らし、声の限り泣き叫んだ。

悲痛な叫びは真っ赤な旗と真っ赤な処刑台、そして風だけが聞いていた。

静寂が包み込む霊峰^{れいほう}、神杵山の頂に幽玄な社殿は鎮座している。

そこからは都の様子が一望出来、東門、西門、南門に囲まれた王宮もくつきりと見える。

王宮の北側に座すこの場所は都内でも有数の禁足地であるため、入れるのはその山の主神^{おもさね}か、姫巫が赦した者だけである。

朝霧に紛れて全てはおぼろげとなり、陽光が雲海^{うんかい}に射す。風が雲を動かし、まるで波が寄せるかの如く感じさせる。

「サコは、ヤナギ様を姫巫とするのは酷だと台王に進言しました。それが台王の逆鱗に触れないわけがない。即座に処刑が決まりましたよ。ええ、わたくしはその場におりましたから、よく覚えており

ます。サコはこう言いました。『せめて、お元気になったヤナギ様の姿を一目見させて下さい。そうしたら、安らかに黄泉路も辿れます』と」

サコがこの世を去って早数ヶ月が経とうとしていた。その間、ヤナギは社殿より一步も外に出なかった。

季節は刻々と過ぎ去り、穂波が大地を黄金色に満たす季節が巡って来ていた。ヤナギは、神聖で美しく、しかし温かみに欠ける雲海から視線を逸らさない。

ヤナギの後ろに立つ人物は言葉を続けた。

「何故、都より追放される予定であつたわたくしを助けた。それだけの行動と発言をした、このわたくしを」

「そなたのおかげでサコの死に目に間に合ったから」
ようやく、ヤナギは後ろを振り返った。

齒を食い縛り、うら若き采女は拳を震わせている。

「姫巫などに、礼は言わない」

「いいわ。礼を言わなければならないのはこちらだもの。……そなた、いくつ？ 名は？」

「チズコ。今年九つでございます」

ヤナギは目を丸くした。九つの少女でも采女となれるなど、聞いたことがない。

少女の横顔には深い悲しみの色が差していた。

「……いい名」

「真名はお教え致しません。姫巫に真名を呼ばれたら縛られるのでしょうか？」

皮肉げにチズコは片端を上げる。

ヤナギは先代の遺した神言を思い出し、気分が沈んだ。

自分は、あのような形で人を縛りたくない。

「……ねえチズコ、戦はどうすれば終わると思う？」

チズコの皮肉には返事をせず、ヤナギは出し抜けに言葉を口にした。

彼女は意味がわからないと言いたげな表情でヤナギの顔を覗き込んだ。

「わたくしにはわかり兼ねますが」

「戦は、武力でしか終わらせられないもののなの？」

「姫巫様、一体どうなされたのですか。急にそのようなことを」

「わからない、もう、わからない」

ヤナギは静かに静かに意識の海へと沈んで行く。

サコはもうこの世にいない。

唯一ヤナギの心を解き放つことができた、優しい娘。

その少女の死が、ヤナギの心を殺した。

ヤナギは、心を凍り付かせる道を選んだ。

誰も傷付かない、自分も傷付かない、ただ平らな世界。

高天原国の皆が忌み嫌う常闇へと落ちて行く。

少女は、すいと瞳を開いた。視界一面に薄墨色の花卉が舞っている。碧い空にそれはよく映えた。

「……………」

何も言わずに頬を濡らす涙を拭う。

少女は秋風によってかじかんだ両手を双眸にあてがった。過去の鈍き記憶が、彼女の最奥から溢れ出てくる。

金に色付く稲穂の波の中、少女はひと時の休息を取っていた。遮るものが何もないこの地は空高く飛ぶ鳥たちの鳴き声と、風の匂い、稲穂が揺れる音しかない。

戦も、天災も、飢餓きがもないような錯覚をもたらす、この豊穡の大地。

澄んだ風を胸いっぱい吸い込み、背を預けていた穂波の中央にただ一本佇んでいる落葉樹に向き直る。

そして、木に手を触れて額をつけた。

微かな水の音は、その木が生きている証拠だ。

少女は瞑目し、薄く笑んだ。

「そなたも私と同じ。ただ独り、皆のことを見守る役目を担いしモノ」

その大人びた言い方は、どう見ても十五の少女のものではなかった。

「姫巫様ひめいっ」

「姫巫」

「どこにおられるのですかっ」

遠く、風が運んできた幾つもの声は、どれも“姫巫”を案じる声

だった。

少女はゆつくりと黒曜石色の瞳を開いて木から体を離すと、立ち上がる。

目には幾千もの願いを宿し、風にひるがえるぬばたまの長き髪には底知れぬ決意を秘めて、彼女は唇を動かした。

「姫巫ならばここに、ここにいます」

高天の原国が懐刀と謳われる戦神　　姫巫は、声高に叫んだ。

しばらくすると、一人の少年が駆けて来た。

海松色をした髪を頭の天辺で一つにまとめ上げている彼は、涼しげな表情をしている少女と対照的に肩で息をしている。

少女はそれに驚いて、片眉を上げる。

「ムロ、そんなに急がなくても私は逃げない」

ムロは、苦しげな息と共に言葉を発した。

「……違います、そのような……心配ではありません。ヤナギ様の御身に何かあったらと……」

少女　ヤナギは戸惑うように目を丸くし、視線を伏せる。

彼女は小さな声で「ごめんなさい」と呟いた。

ムロは屈託なく笑い、大丈夫ですと返す。まだ幼いながら、端正な顔立ちをしたムロは深呼吸をし、息を整える。

彼もヤナギと同じように、薄い生地を着物の上から簡素な布製の鎧とゆがけを身に着けている。その小さな体軀には不釣り合いな二本の太刀を腰帯に、背中には長物を背負っていた。

長い前髪を払い、ムロはヤナギの両手首を掴んだ。芥子けしの実色をした切れ長の瞳がヤナギを映し出す。

「ヤナギ様、休息を取らねたいのならば、皆に一声かけて下さい。あなたが高天の原国のために尽力しているのは我々も存じ上げております故」

高天原国の王　　台王が「あな、瑠璃や瑪瑙などの宝石も霞むほどの美しさ」と賞賛したヤナギの顔が歪む。

一点の曇りなき純粹さは、時として毒となる。

ヤナギはムロの手を振り払った。

「放っておいて」

拒絶の言葉を受けて、ムロは傷付いた表情を象った。

ヤナギは緩く首を振った。

「姫巫になど、触らぬ方がいい。この身には幾重もの憎悪と死しか詰まっていないのだから」

そう言つと、ヤナギは皆の待つ陣へ駆け出した。慌ててムロも後を追う。

稲穂は二人の姿が見えなくなつても、秋風に吹かれて揺れていた。

ヤナギとムロが陣へ帰ると、既に軍議は始まっていた。

国に忠誠を示した兵の中でも、選りすぐりの戦士たちが顔をつき合わせて地図を見ている様は、何とも異様であつた。

「皆の者、ヤナギ様がお戻りになられたぞ」

ムロの声に皆が振り返り、安堵の顔を覗かせた。

「ああ、姫巫様。お帰りなさいませ」

「戦局は変わらず？」

ヤナギの問い掛けに雄々しい髭を生やした大男は神妙な顔をして頷く。

「はい、高天原国にまつろわぬ者たちはどうやら、今回の蜂起ほしぎを綿密に計画していた様子でございまして……。森の様々なところに呪術が施されております。迂闊に動けば、森の中で惑うことに」

「なるほど」

ヤナギは地図を眺めた。

ヤナギたちは、高天原国にまつろわぬ者たちの蜂起を平定せよと

いう台王の命によって、都から西へ下ったところにある第二の都、
沢良宜^{さわらい}に来ていた。

敵は何も地下の国々だけにいるわけではない。この国の中にも多くいる。

沢良宜の最南端の邑^{むら}に敵は潜伏していた。

その邑に行くためには榊森^{さかき}という靈験高き森を抜けなければなら
ないのだが、森に精通しているまつろわぬ者たちはそこら中に呪い
を施し、ヤナギたちの行く手を阻んでいた。

「この森を抜けることさえ出来れば、平定など造作ないものを」
苛立ちを募らせた武官の一人が齒軋りした。
それは誰もが胸中で思っていることであつた。

「……………わかつた」

ヤナギはこうなることを予期していたような眼差しで軍議に参加
している者たちの相貌を見回した。

彼らは固唾^{かたず}を呑んで彼女の言を待っている。

「榊森を焼く」

「お言葉ですが、ヤナギ様」

明朗な声がヤナギを制す。

ム口は厳しい顔をして言った。

「榊森は小さき神々の宿りし森です。その森を焼くのは……………」

「若造が尻込みか。姫巫様のお力があれば、神々も畏るるに足らず」

「違う！ 決して臆病風に吹かれたわけでは」

「これだから、まだ十二のム口を軍に入れるのは反対だつたんだ。

腕が立つとは言ってもまだ討伐軍の指揮官としては甘いと見える。

安心しろ、姫巫様の出向かれた戦で負け戦など一つもない」

矢継ぎ張りに勇猛果敢な兵共は年少のム口を茶化す。

ム口は怒りに顔を紅潮させて強く地面を踏みしめた。

「ヤナギ様の身を案じる者は誰もいないのか！ 神を殺めれば、殺
めし者に呪いがかかる。それをあなた方は……………」

「ム口」

ム口を咎めたのは、ヤナギだった。
いたって冷静な目でム口を見やる。

「軍に入りたてのそなたは知らなくて当然のこと。大丈夫、私は神殺しの業などで命を落したりしない。姫巫は高天原国つ神の口より生まれし者」

「え……？」

「“神の口”を 真象の力を有する者。私が巫力を込めて発した言葉には神が宿り、それは現実のものとなる。地方の小さき神がいくら呪おうと、この身に張った結界が弾き返す」

静謐なるヤナギの瞳は真摯な色合いを以ってム口の反論を押し留めた。

しかし、軍議が終わる直前まで彼はヤナギの身を案じていた。
それは若さ故の素直さか、それとも無知なのか、誰も推し量れる者はいない。

捉え方一つで物事は形を変えるものだ。

「では、これにて軍議は終わる。そなたらの部下にもよく伝えておけ」

鶴の一声。

ヤナギが軍扇を目前に広がる森へと向ける。

銀の鳥羽で作られた軍扇は力強く行く末を指し示す。

「森が燃上したが合図。混戦は覚悟の上、私たちは一刻も早く戦果を上げて凱旋せねばならない。迷いは捨て、前へ進め」

兵たちは一斉に声を上げる。

それを見てヤナギは淡く笑み、踵を返した。

艶のある黒髪は空高くに昇りつめた陽光を浴びていつそう輝きを増す。

肌寒い風が一陣吹き抜けていく。

崖の上より見る景色は、とても美しい。

海の漣は光を反射して虹色に煌めき、すぐ傍にある神が遊ぶ森は深き緑が密集しており何とも形容しがたい。

古より伝わる多くの伝承が詰まっているだろう榊森をじっと凝視していたヤナギだったが、やがて溜め息を吐き、空を仰いだ。

「このようなところに居られたのですか」

後ろに立つ者の気配に、ヤナギは柔らかに笑んだ。

「そなたは随分と私に懐いたね、ムロ」

ヤナギの横にムロは並んだ。

同じように眼下に広がる大地を眺め、彼は目を細めた。

「……ヤナギ様。戦の焰は、いつになれば鎮火するのでしょうか」

ムロの問いに、ヤナギは口を噤んだ。

途方もない問いかけ。

だが、同時に誰もが尋ねたい問いかけでもある。

ヤナギはゆつくりと吟味するように顎を引き、彼女なりの答えを提示する。

「姫巫を継ぐ者がこの世から消えた時」

ムロがゆつくりとヤナギの方を見る。

ヤナギの顔は西日によって隠されている。

「己の生に悲観しているわけではないけれど、姫巫のような戦女神がいる限り、戦は続く。ねえ、ムロ。人は欲するのよ、全てを……神をも」

ムロは言葉を搜して視線を彷徨わせていたが、やがて肩を落とし、て俯き呟いた。

「ムロはまだ、“姫巫”というのが、どういうお役目を担っているのか半分も知りません」

「戦を勝利に導くため……高天原国がために存在し、巫たちを統括する者。……言うより生むが易し。今から私がどうやって敵を滅ぼすか、見ているといい」

ヤナギは憂いを含んだ顔を、すっと変化させる。

何も感じない、無の状態へと自らを持っていき、玲瓏^{れいろう}なる声を響かせた。

『榊森の西端にある一本の木に火がともる』

彼女が口にした途端、紅紅とした炎が森の西側から上がった。

『それは秋の乾いた風に乗って次第に他の木へ、他の木へと燃え移り、煉獄の焰となり威力を増して邑を取り囲む』

『そして、我が軍の行く手にありし炎は神風によって左右に拓け、軍を傷付けぬ』

ム口が生唾を嚥下する音がした。

四方八方に潜んでいたのだろっ伏兵たちの大音声はここまで聞こえてくる。

彼らが進む道は、ヤナギが口にしたとおり炎が道を開ける。

ヤナギは大きく袖を広げる火を確認すると、唇を弓形に曲げた。

「さあ、ム口。戦の始まりだ」

地獄絵図を描く戦場は、ヤナギの目を潰しそうな勢いで目前に迫った。

（これは、一体）

動揺して周囲を見回すが、誰しも我を忘れて逃げ回っている。

狂気を孕^{はら}んだ目で人を斬る兵たちは、殺戮^{さつりく}人形としか見えなかった。

ここにては殺されてしまっと思ったヤナギは、やっこの思いで走り出した。

怒号が止む気配はない。

木々や家屋は炎上し、人々は逃げ回る。

しかし、背の低い叢くさむらの影に身を潜めたヤナギはようやく場の異常さに気が付いた。

兵たちは逃げ惑う人々をなぶり殺している。しかし、兵はヤナギを殺そうとしない。

昔、大巫から教わったことがあった。

強い巫力を持つ者は、現実のものと取り違えるくらいに鮮明な夢を見ると。

「……これは、夢……？」

口に出した途端、風景は薄く揺らいだ。

次に目にした光景は、先代の姿だった。

声高に軍兵に指示を出すその様は、男顔負けの存在感を放っている。

美貌の姫巫は、妖艶に微笑み、敵の兵に軍扇を向ける。

先代が何事かを呟いたと思った矢先、雷が空から降り注いだ。敵の悲鳴が木霊す。

畳みかけるように地面も裂け、敵の軍兵を呑み込んだ。

これが、世の誰もが恐怖する先代姫巫の力なのだと、ヤナギは改めて実感し、腕を抱えて身震いした。

姫巫の援護を行っている巫たちも容赦なく敵を殺す。

『助けてくれ！』

敵の兵が武器を放り出して姫巫の前で額を地面へ擦りつけた。

先代は無情な瞳でそれを見やり、水面のように刃の部分が波打つ剣を彼に落とした。

血は水しぶきの如く舞い、そこから中に飛び散った。

「もうやめて！」

姫巫の両腕を押さえつけようとしたが、するりと彼女の体を通り抜けてしまう。

この夢の中で、ヤナギは何にも触れられなかった。

死んでゆく人々を助けることも出来ず、指を啜えて見ていること
しかできない。

せめて、夢では傷付く人を見たくはなかった。
毎夜毎夜、悪夢にうなされ続けてきたヤナギだが、こんなにも鮮
明な夢は初めてだった。

妙に現実味がある。

景色は次々と変わるが、その全てが戦であつた。

熾烈な戦いは目を焼いてしまいたい程に惨く、一方的であつた。

姫巫の力は戦に重宝される。姫巫の“真象の力”は戦の趨勢を一
瞬で決めることが可能な力だ。

姫巫が一言呟けば、敵は手も足も出なくなる。

ヤナギは他の巫たちと違って、先代の出向いた戦に連れて行つて
もらったことが一度しかなかった。

王宮へ入つてすぐの頃だ。

その貴重な一戦の記憶はとても曖昧模糊としており、よく憶えて
いない。もったいないことだと他の巫たちはヤナギのことをいつも
憐れんでいた。巫たちにとって、姫巫の力を見るのはとても誇れる
ことだったから。ヤナギは憐れまれる度に、疎外感を感じたものだ。

と、一閃の光がヤナギの後ろで轟いた。

慌てて振り向くと、目に入るもの全てが炎上していた。

先代が怒りと戸惑いの入り混じった表情で何者かの肩を揺さ振つ
ているのが垣間見えた。

それはすぐに猛る炎で遮られ、見えなくなる。

「……夢路に迷つておおせか」

低くくぐもつた声がヤナギのすぐ傍で囁いた。

気配がなかったので、全く気が付かなかったヤナギは身構えてそ
の場を飛び退く。

いつの間にか立ち込めていた霧によって男の顔は定かではない。

この霧がヤナギと男の夢を区切る境なのだろうと、ヤナギには即座にわかった。

夢を見ていると、ふとした拍子に誰かの夢の琴線と触れてしまう時がある。

それは同じ過去を共有する者だったり、同じ景色、想いを持つ者であつたりする。

「ああ、もう思い出したくもない景色だ」

男はぶつかり合う軍兵の方を向いて言った。

顔が見えないのに、声だけで彼の大きな悲愴は伝わってきた。

「戦は………何も産まない。緑も、人も、食物も。ただ削つていくだけ」

「そう言えるのは、あなたが恵まれているからだろ。私からすれば、削れた土地を還してもらつたために………戦がある」

男の口ぶりで、彼が高天原国の者でないとすぐに判断出来た。

取り戻すための戦　　高天の原国が奪い取ったものを取り返すために戦っている男は言っている。

「無謀だと年老いた者は言う。だが、全てを諦めて儚く消えるくらいなら、いつそ雄々しく最期の一瞬まで戦う」

揺るぎない意志は、移ろうヤナギの心によく染み渡った。

景色が滲んだ。

明るさが増していき、戦の光景も、男も泡沫うたかたのように消える。

夢の終わりが近付いているのだ。

いつか見た、薄墨色の花卉が視界一面を遮る。
向こう側に人影があつた。

その人物はこちらに向かつて手を伸ばしている。

花卉の合間より、その人物の唇が動くのを見た。

驚いて目を見開いたと同時に、花卉が一気に吹き荒んだ。

あまりの激しさにヤナギは目を瞑ってしまった。

急いで再び目を開けたら、見知った天幕が見えた。

ヤナギはしばらくぼんやりとしていた。

姫巫の受け継ぐ数多の歴史と業。

それが先ほどの夢を見せたとしか思えなかった。

目が覚めた今でもしっかりと内容を覚えているのは、あまり喜ばしくないことである。

朝から重苦しい気持ちになってしまう。

胸の鼓動も収まらず、ヤナギは一人途方に暮れた。

昨日の戦は圧勝であった。

敵味方問わず一人の負傷者もなく、乱を鎮圧することができた。

だが、その土地に住む者たちは、自分たちを加護してくれていた榊森の消失に嘆き悲しみ、拳で地面を叩いていた。その様子を見たヤナギは、やり切れぬ思いですぐに陣へ舞い戻ったのだった。

高天原国の大軍は、ひとまず勝利に杯を交し合い、昨晚は盛大な宴を催した。

ヤナギはあまり酒が進まず、すぐに寢床に向かったのだが、それが悪かったようだ。

このところ深く眠っていなかったため、悪夢に対する耐性が落ちていた。

（なんとも情けない）

ヤナギは自嘲の笑みを浮かべ、額に貼りついた髪を払う。

しずしずと入り口に張ったムシロが開いた。

そちらを見やれば、青白い顔をしたチズコが佇んでいた。

彼女は姫巫の采女筆頭つねめひつととして、常時ヤナギの傍に仕えている。

弱々しく微笑めば、チズコも困ったように微笑み返してくれた。珍しいこともあるものだと言ナギは失礼ながら思った。

チズコがヤナギに向かって素直な笑顔を見せることなど滅多にな

い。

「随分とうなされていたので」

そう言いながらチズコはヤナギに餅を手渡す。

ヤナギの顔が華やいだ。

「氣遣つてくれてありがとう」

餅を口にした途端、芳醇な花の匂いが胸に満ちた。

丁寧に練り込まれた薬草はしっとりとした食感をしており、これまでヤナギが作ってきたどの餅よりも美味しかった。

「おいしい」

本心をありのままに言えば、チズコはほっとした表情を浮かべた。

「少し、顔色が戻りましたね。良かった」

「……私、それほどうなされていた？」

チズコはヤナギの質問に頷く。

「はい、とても。『やめて』と叫ばれていたので飛んで来てみれば、お姿が消えそうになっておりました」

ヤナギは呆氣にとられてチズコを見た。彼女が嘘を言っているようには見えない。

しかし、消えそうになっていたというのは、にわかに信じがたい。強い巫力を持つ者は、時に時限さえ越えると言います」

チズコは虚ろな瞳でヤナギを見つめた。

その双眸にはヤナギではなく、他の誰かが映っているように思えた。

気のせいかな、鋼色のはずの瞳が波打って見える。

「あなたは　ともすれば、先代をも超える巫力を保有している」

「馬鹿なことを。先代は史上最高を誇る姫巫よ」

「……もしか、先代はこうなることを予想していたのでしょうか……」

「……?」

ヤナギの言葉など、チズコに届いていなかった。何をチズコが言いたいのかさっぱりわからない。

「ねえ、どうしたの。そなたの方が、顔色が悪い」

チズコの細い手がヤナギの髪に伸びる。

思わず目を瞑った。

姫巫となる儀の時に刻まれた、他人が自分を傷付けるといふ恐怖が拭える日は来ないだろう。

反射的に身構えてしまう。

「拯^{しゅ}漚^{みづみづ}の花弁がついております」

ヤナギの髪についていた花弁が、チズコによって取り除かれる。

言われて初めて気がついたが、ヤナギの体のそこかしこに薄灰色をした無数の花弁がついていた。

それは、夢の終わりに一面広がった花弁であった。

寝台中に散らばる花弁を掻き集め、チズコはそれに顔を埋めて目を瞑った。

「この花は現世と常世を繋ぐ花。死者を導く標^{しるべ}。とても不思議な花で、黄昏国にしか咲かないのです。高天原国では、すぐに枯れてしまふ儚い花」

チズコの様子が常時と違うのは、一目瞭然だった。

何かに取り憑かれたような彼女が心配になったヤナギは立ち上がって、チズコを寝台へ座らせた。

チズコは仰天したのか目を大きく見開く。

「ヤナギ様……？」

「気分が落ち着くまで座っていていい。私は立っていた方が楽だから」

「はい」

チズコは嗚咽を洩らした。

必死に声を出さないようにしている姿は、見ているこちらが痛ましくなる程であった。

チズコの頬を伝う涙は悲しみに満ち満ちており、深い闇の匂いがした。

ヤナギは、冷たい床の上をゆっくりと歩く。鳥のさえずりが微か

ながら聴こえた。

「……………ヤナギ様」

小さな声に反応して振り向けば、チズコが寝台に横たわっていた。本当に気分が悪そうでぐったりとしている。

彼女の傍へ近寄ると、チズコはヤナギの手を強く握った。

「ヤナギ様ご自身の未来はわたくしにもわからない。ただ、暗き道と明るき道が見えるだけ。暗き道には一閃の光もない。明るき道はまぶしすぎて前が見えない。あなたは、どちらの道を辿るのだろう」
はらはらとチズコはまた涙を零し始めた。

「わたくしの父と母は占師の一族の出でした。その父が、近々邑に姫巫がやって来ると言った時、邑の誰もが国の守り神である姫巫と会えると喜んでいた。でも、わたくしには視えていたのです。姫巫が邑を殲滅させる様が」

ヤナギはただ黙って聞いていた。

チズコは必死で何かを伝えようとしている。

それを横から口出しして、止めたくなかった。

「わたくしは懸命に言った。姫巫を邑へ迎え入れてはならない、かの人は禍を持ってくると。だが、誰も五つの子供の言うことに耳を傾けなかった。結果、邑は滅んだ。黄昏国の残党を匿っているという名目のもと、大人たちは全員処刑された。そして、ちょうど邑の子供たちと野で遊んでいたわたくしの視界を真白き光が奪ったと思ったら、目に見える全てが燃え盛っていたのです」

その話はどこかで聞いたことのある話であった。

とても昔、いや、とても最近。

そう、先の夢で見たような光景である。

一閃の光と、猛る炎。

確かその場に姫巫もいた。

「姫巫は全て奪った。あまつ、わたくしに占師の血が流れているのを知るや否や、ここへ強引に連れて来た。憎い、憎い、憎くて仕方がない。あなたも……………彼女と同じ道を行くのですか？」

胸に突き刺さる問いだった。

ヤナギが心に負った傷を誰も癒せないのと同じで、チズコが心に負った傷もヤナギが癒すことなどではしない。

無言のヤナギにチズコは更に噛みついた。

「姫巫は……………高天原国は、いずれ現世も常世も常闇に還してしまう定め」

「だから、大人しく地下の国に滅ぼされたいの」

「違う。わたくしが言いたいのは、ヤナギ様がこれ以上、修羅しゅらの道を歩む必要などないということ」

ヤナギは眦まなじりを吊り上げた。ふつつと熱いものが喉元に込み上げてくる。

「私が姫巫になるのが定めだと先代は言った。そして、そなたは姫巫が 高天原国が全てを無に還す定めだと言う。そこまで定めに拘るならば、少しは模索しなさい、違う道を。私を殺し、それに乗じて都を落とすように仕向ければいい。それで現世が救えるのなら、本望よ」

ヤナギが言つてのけると、チズコは怒りを露にしてヤナギを睨み付けてきた。

「わたくしがあなたを殺そうとしたことがないとお思いですか？ 何度も何度も、殺そうとしましたとも。その度に、何も知らないあなたを殺すことに良心の呵責かしゃくを覚えて思い留まった。今はもう……殺せないのではなく、殺したくない。わたくしはヤナギ様を殺したくない。大切な喧嘩相手なのですから」

真心さえ感じられるチズコの言葉に、ヤナギは二の句がつけなげなかった。

「……そなたは、一体どうしたいの。その眼に未来が視えているのなら、どうすれば最善かわかるでしょう」

チズコは甘く誘う毒のように心酔わせる香りを放つ拯溟の花を抱きしめたまま答えた。

「知っていますか、占師は未来を予見出来ても物事を動かす力はな

いのです。それでも、ヤナギ様は助けたいと思った。高天原国より亡命するなりなんなりして戦から遠ざかりたいと言うならば、手を貸そうと思っていました。あまりに今朝視た未来は せいさん 凄惨だった。わたくしはもう、嫌だ。この眼など、潰れてしまえばいいのに」

その眼は何を視たというのだろうか、とヤナギは華奢な体を震わせるチズコの脇で、彼女の手を優しく撫でながら考えていた。

自分に未来を視る能力があつたならば、どのようなことを思つただろう。

もしかしたら、発狂していたかもしれないと思い至り、苦笑した。自分が視たとおりに起こる出来事。

それは、とても辛いことなのかもしれない。

「……………もうすぐ、来ます。拯溟の花があれを連れてくる。大きな定めを担^{にな}つた者たちを」

チズコのうわ言に、ヤナギは何も言わなかった。

ヤナギ自身も感じていた。

今日見た夢は異様だった。

何かが変化する予兆にしか思えない。

ヤナギの巫力がそれを察知し、それを示したとしか言いようがなかった。

「かいな 神の腕」

チズコが呟くと同時に、遠く大地が揺れる音がした。

四・

月が雲に隠れていた。

朔のごときその夜は、高天原国たかまのはらこくの都に住まう人々に闇という恐怖を運び、無音を誘う。

人っ子一人いないはずの市井で、荒い呼吸を必死に整える者がいた。

常ならば一寸の乱れもなく結わえている髪は乱れた呼吸同様乱れている。上衣は胸が肌蹴はだけており、下衣には無数の泥が飛び散っている。

ヤナギは息を押し殺して路地裏より表を覗き見た。

追手も馬鹿ではないらしい。気配を隠している。

しかし、近くにいます。

どんなに彼らが闇に紛れようとしても、鎧と衣が擦れる微かな音でも空気は揺れる。

それを察知するくらいの敏感さはヤナギにもある。だてに巫の修行を十数年して来たわけではない。

近頃はめつきり修練もしていなかったが、積年の修行は身に染みついているらしい。修行をしていて良かったと思えたのは、この時が初めてだ。

ヤナギは左手首につけた勾玉の腕輪を無意識のうちに触り、固く目を閉じる。

両手首につけた勾玉は、先代より受け継いだものである。こめかみからは冷や汗が伝った。

沢良宜さわらぎの乱を平定したヤナギはその後、一月ひとつきかけて都へ凱旋がいせんした。

しかし、台王だいおうきみからはねぎらいの言葉も何もない。それが常だった。かの王は、姫巫のことなど政まつを行おこなう上での道具としかみなしていない。

特に気にするでもなく、ヤナギは神杷山しんはやまへ帰った。

台王が遣いを送ってくるなど滅多になかった。

祭事や大きな行事がある時はその旨を伝える仕官を送ってくるものの、それ以外では全く音沙汰なかった。

その台王より、文が届いたのがつい二日ほど前のことであった。いぶかしく思いながらも、その内容を見れば、姿を見たい。執務が終わった後、日が暮れてから台王の寝殿へ来てくれとの内容が書かれていたので、ヤナギも、それを届ける役目を仰せつかったチズコも首を傾げた。

兎にも角にも、行ってみようと思い至り、一人寝殿へ行ったヤナギだったが、その結果がこのさまである。

行かなければ、もしくは供を連れて行けば良かったと今更悔やんでも詮無きことだろう。

だが、嘆かずにはいらなかった。

「おお、姫巫よ、しばらく見ぬうちに艶めかしくなったのう」

「お久しゅうございます、台王。こうして面と向かってお会いしたのは六年前以来ですね」

「そう言えば、そんなにも会っていなかったな。そちは祭事にも何にも参加しなかったせいだ」

「……………申し訳ございません。ですが、これからは心を入れ替えて精進して参ります故。ご温情頂きたく存じます」

ああ、と台王はぞんざいな口調で言った。

何気ない会話を交わしていた二人だったが、場の状況は異様だった。

少なくとも、ヤナギは逃げ出してしまいたいと思っていた。

台王は舐めるような眼つきでヤナギを見る。
彼の四方には裸で眠る巫たちの姿があった。

姫巫として神杷山にこもるまでは、ヤナギよりも高位にあった巫たちの醜態にヤナギは目を背ける。

高天原国台王はヤナギの様子を面白がるように、巫の体を玩もてあそんでいた。

「おやめ下さい。今は私と話しているのですしう」

真っ直ぐな眼差しで言えば、くつくつと台王は嘲笑する。

「やはりそちの巫力は先代に劣るか。そちが言の葉を紡ごうと、わしは痛くも痒くもない。先代の言葉にはある程度の重みを感じたが、そちの言葉には全く重みなど感じぬわ」

ヤナギは齒軋りした。

台王の言いたいことは彼女自身が一番わかっている。

台王はそれなりに呪いを撥はね退ける術を取得している。

真に強き言葉でないと呪いの力は効かない。

ヤナギの表情が歪む。

神の加護は純潔を喪ったとしても衰えない。

大巫より習った教えではそうあったが、やはり純潔を守るのが強き巫だとも教えを受けていた。

なのに、ここにいる高位の巫は台王に身を委ゆたね、恍惚けいごうの表情さえ浮かべている。汚らしいと思った。

胸のうちに苦い物が込み上げてくる。

「房中術じゅうちゅうじゆつ、というのを知っているかね。姫巫」

脱ぎ捨てていた薄絹を羽織り、台王が寝室の戸の前で佇たたずんでいるヤナギに近寄ってくる。

その手がヤナギの輪郭をいやしい手つきでなぞる。

鳥肌が立った。

「触らないで！」

怒りを込めて台王の手を思い切り払いのける。彼はそんなヤナギの態度に不快感を表すでもなく笑う。

先代の姫巫とは違う恐怖を感じた。

巫たちは鬱陶しげにヤナギを半眼で見つめる。彼女たちの顔は、巫のそれではなく、女のそれであった。

「台王様……………私は房中術など、まやかしだと思っています」

「ほう。ここにいる巫たちの位を言い連ねてもそう言えるのか。わしは房術に長けておつてな。わしの房術を受けた巫たちは皆、他の者より圧倒的な巫力を有し、高い位についている」

ヤナギは反論出来なかった。

確かに、ここにいるのは高い地位にある巫ばかりであった。

しかし、房中術とは男と女の交わりによって体内の気を高めたり、乱したりできる術であり、この国では、闇のまた闇の禁術と云われるくらいに穢れしものである。

暗殺の方法の一つにもなる房中術を使える者は、希少だった。その筋の子供か、古い書物や暗殺者に通じている者しか習得できない。それを台王が心得ているとは思えない。

「房中術を使えばそちの巫力など、すぐに開放できる。えもいわれぬ快樂と共に、力まで得られるのだ。良いことだろう。幼きそちにそれを施すのは酷だと思い、成人するこの時まで待っていただけ有難いと思つて欲しいものだ。もう十五であろう」

ヤナギは答えなかった。いや、答えたくなかった。

その間にも、台王の骨ばった手は楊の胸元まで進んだ。

ふと、脳裏に過ぎったのは、自分が姫巫の役目を全うすることが最善のことだという考えだった。

台王に身を預ければ、それは容易に成せるかもしれない。ヤナギの心は揺れに揺れた。

時間にすれば数秒だろうが、長い時間悩んだように感じられる。

しかし、台王の次の言葉で迷いは霧散した。

「かつての姫巫がそうであったように、姫巫は、妖艶に腰を振って

夜伽よいかをすれば良い」

ヤナギの中で何かが弾けた。両の腕輪の勾玉が飛散した。

お逃げ。

誰かが耳元で囁く声がする。

熱い空気に抱擁ほうようされる。

気が付けば、勝手に口が動いていた。言葉ならぬその無音の声は、台王の部屋全体に広がり、ヤナギ以外の全ての者を縛った。見えないう系が彼らの体にまとわりついている。

「姫巫よ……何を……何をしたのだ……っ」

喉元を押さえて片膝つく台王は立ち竦むヤナギを仰ぎ見た。

ヤナギは首を緩く振り、一目散に部屋を飛び出した。外に控えていた数人の護衛官にぶつかる。

彼らは急に部屋より飛び出してきたヤナギに面食らう。

護衛官たちはこの中で行われていることを知っているのだから、ことがすぐにわかった。

よどんだ瞳は台王のそれと似ている。

狂っている。

ありつただけの憎しみを込めて護衛官たちを睨んだ。

怖気づいたのか、彼らは躊躇いの色を見せる。

しかし、「何をしている、姫巫を捕らえよ！」と叫ぶ台王に背を押されて護衛官たちはヤナギににじり寄る。

ヤナギは慌てて装束の裾をたくし上げて細く長い廊を走り抜け、

王宮を出た。

履物を履く余裕などなく、裸足のままひた走る。

後ろを振り向きはしなかった。

不開あかずの門がある東門へ一旦逃げて、追手が集うのを待った。

叢くれむいの陰より、ある程度の大きさをした石を反対方向に投げる。

案の定、彼らはそちらに注目する。

その隙について、ヤナギは鬱蒼と茂る木々の合間を縫って西門へと急いだ。

東門を抜ければ峽谷けいこくに繋がる道があり、南門か西門を抜ければ市井に出る。どこから逃げるのが好都合かぐらいは、混乱したヤナギの頭でも考えることが出来た。

チズコの待つ神杷山に続く北門に行くことも考えたが、チズコも巻き込んでしまうと判断したので西門から逃げることを選んだ。

少なくとも、ヤナギを庇わなければ殺されはしないだろう。

南門は市井と王宮とを繋ぐ、最も重要な箇所であるので常時台王の配下の者がいる。その南門より市井に逃れようと思う度胸はヤナギになかった。

都合の良いことに、西門は台王と近い者でない　直轄下
にない武官たちの寝所がある。包囲の目も薄いとヤナギは睨んだ。

自分がこんなに頭が回るとは、自身でも思ってみなかった。

火事場の馬鹿力とはよく言ったもので、土壇場になって初めて人は力を発揮するものだ。

（逃げなければ）

その思いだけでヤナギは走っていた。走るのをやめれば捕まってしまう。

捕まってしまうえば、台王の前に引き立てられて惨い仕打ちを受けるのは目に見えていた。

「ヤナギ様っ？」

西門を突破する際にぶつかった兵の一人が己の名を呼んだが、無我夢中で走った。それが、ムロであると気付いていてもなお、走り抜けた。

こうして、今に至る。

もう、追手は目前まで迫っていた。

あちらはかくれんぼの玄人^{くわんと}である。

室内にこもりきりで祈祷を捧げたりする巫とは役割が違う。

確かに、姫巫も戦に行くことはある。しかし、兵と違い、姫巫は巫力を使って敵を制す。

己の体力を削って相手を制す彼らと、己の血や精神力を使って敵を制する姫巫は潜り抜ける修羅場の種類さえ違う。

「姫巫様」

ついに見つかってしまった、とヤナギは絶望を孕^{はら}んだ目で行く手を阻む護衛官を見た。

頬が削げ落ちた男は無表情でこちらに腕を伸ばす。

雲間に浮かぶ青白い満つる月の弱々しい光の中、伸ばされた腕は恐怖そのものが具現化したように思えた。

真象の力は使えない。

あれは、大地に神気が溢れ、自分の精神が凧^ないだ時にしか使えないのだ。無理に使えば死ぬだろう。

先ほど台王の部屋で起こったような神事が都合良く再び起こり得るはずもなく、ヤナギは己が身を呪^{のの}った。

ヤナギはサコが死んでから、初めて慟^{なみ}哭した。

月はかげり、風は嘶^いなく。

一瞬の出来事だった。白き光が弧を描いた。

群雲^{むらくも}より月が姿を現した時、追手は既に事切れていた。背中には鮮やかな一筋の紅き剣筋が残っている。

微かな金属音が場を支配する。

ヤナギの前に立っていたのは、異国民とすぐにわかる出で立ち鉛で出来た鎧に鮮やかな色の着物、狼の毛皮で作った履物をした青年だった。朽葉色の髪目が月光に色づき鮮やかだ。

涼しげな面差しは、夜でもよく映える。

その青年は戸惑った様子で口を開こうとしたが、後ろから聞こえた足音に眼つきを変える。

そうそうたる数の仕官がそこにはいた。

ヤナギは目に溜まる涙を拭い、逃亡することを諦めて前へ進み出ようとする。

大体、逃げたところで身を寄せるところなどなかったのにどうして、逃げようとしたのか自分でも不思議だった。足掻く自分が惨めに思えた。

『お逃げ』

あの声のせいだと今更ながら思う。

ヤナギは、己を恥じた。

青年の手が、つとヤナギが進み出るのを阻んだ。

怪訝な顔で彼を見やれば、邪魔だと言わんばかりに後ろへ押し返される。

「ちよつと……………」

抗議の声は続かなかった。

青年が地面を蹴って追手に突撃したからだ。

剣舞でも見ているかのような錯覚を起こす。月に反射したその横顔は異様な程に美しかった。

たじろぎながらも次々と襲いかかるてだれたちを青年は鋭い剣で捌きつ、彼は乱れなく舞った。

鋭利な瞳からヤナギは目が離せなかった。

血の華は、現に存在する何よりも美しいと先人たちは伝える。

そのとおりだとヤナギは感じた。

血だまりの中、剣刃を死人の上衣で拭う彼に戦慄せんりつより感動を覚える。

異常の中に長く身を置くと、それが正常だと思ってしまふように人間の頭はなっているらしい。あまりの異常さに思考が麻痺する。

もう追手はいない安心感から、どつと涙が零れて来た。

その場にへたり込む。

声なく流れ落ちる涙に、青年は戸惑ったようだった。青年は腰まである乱れたざんばら髪を肩の辺りで一つに縛るとヤナギの正面に腰を落とした。

「平気か」

淀みなき声がますます涙腺を刺激する。

屍の臭いが立ち込める路地裏で、見ず知らずの男に縋ってヤナギは思い切り泣いた。

青年は何も言わず、ただヤナギに袖を貸していた。

夜は厳かに更け行く。

朝の日は、靄も空気も金色に染める。

ふと、ヤナギは目を数回瞬かせる。霞む目を手で擦った。

いつの間にか、都の外れにある藁葺き屋根わらぶきの空き家にもたれかかっていた。

「……………」

寝惚け眼で首をひねると右側に青年の横顔があつたので、思わず小さく悲鳴を上げた。

彼はその反応に対して関心を持つでもなく、淡々と言葉を発した。「目が覚めたのなら、どことなりとも逃げるといい。お前と会ったことは誰にも言わないでいくから」

その代わり、俺が追手を殺したと誰にも言うなよと青年は釘を刺してきた。

ヤナギはぐつと拳を握って答える。

「逃げるわけには、いかない」

姫巫として在る以上、この国から逃げおおせることは出来ない。

「そなたが護衛官を殺したことは、決して口外しないと約束するわ」ヤナギは、自分自身を奮い立たせて立ち上がった。

「自ら進んで、死地へ赴くというのか」

命を粗末にしていると解釈したのだろう。青年は声を低めてヤナギに問う。

ヤナギは口を一字に引き結ぶ。

「逃げられない」

定めに抗える自由が、ヤナギには与えられていない。

この体は高天原国の傀儡なのだ。

ヤナギの心底にある悲鳴を絞め殺し、高天原国つ神は彼女を御殿へ戻らせようと見えない糸を引く。

足が勝手に王宮の方へ歩み出す。

「ありがとう、異国の人。そなたのおかげで一夜だけ、私は自由だった」

青年と二度と会うことはないだろうが、厚く礼を述べ、ヤナギは薄く笑んで彼に背を向ける。

「俺は……ハルセと言う」

何の前触れもなく、突如かけられた言葉。

ヤナギは顔だけ青年の方へ向けた。

青年　ハルセはそれだけ告げ、たなびく髪を翻して朝靄の中に消えて行った。口許には笑みが浮かんでいた。

まだ商人達も表に出ていない。喧騒とは無縁の大通りを一人歩く。ヤナギを捜して今も王宮は騒然となっているだろう。

案の定、王宮の西門には大勢の兵がいた。ヤナギは生唾を呑んで彼らに近づく。

と、ヤナギと兵の間に背の高い少年が素早く体を入れた。

「あなたはどこまで、ム口を心配させるのですか！」

ム口の声は震えていた。

ム口、と名を呼ぶ前に腕の中へ閉じ込められる。

「台王にはチズコが上手く取り繕つくろっていますから、何も気に病むことはございません」

小声でム口はヤナギにそう告げた。

聞き返そうとしたが、すぐにム口は彼女から体を離す。

「皆の者、ヤナギ様はお帰りになられた！ 安心して訓練に励め！」そして、何事もなかったかのように兵に迅速な指示を出し、朝の訓練を始める。ム口は討伐軍に駆り出される時以外は、西門軍の副武官長を務めている。

兵士たちはム口の声に、各々の武器を手にして縦横美しく整列した。

「北門でチズコが待っています」

所在なさに立ち尽くすヤナギに向かってム口が助け舟を出してくれた。

取り敢えず、北門 王宮の北に広がる梔くちなし子齋森さいのもりの入り口 へ

と足取りを速めた。

途中、擦れ違う誰もがヤナギと目を合わせようとしない。

ヤナギが王宮から脱走したという話はもう広まっているらしい。重々しい雰囲気包まれた巫たちの離れを抜け、北門をくぐってすぐにある鏡月池まで辿り着いた。その池をしゃがんで覗く少女が一人。

チズコである。

何と声をかけたらいいかわからず黙っていると、チズコは立ち上がり、ヤナギを見やる。

「おてんば姫巫のお守りは大変です」

肩をすくめて言うチズコの瞳には、悪戯な輝きがあった。

「安心して下さい、ヤナギ様。台王には戦の直後で精神状況が安定してないと言ったら、あいつも納得しました。王子の口添えもあって、今回はお咎めなし」

「クルヌイ王子が？」

クルヌイは台王唯一の息子であり、王位継承権第一位の王子であ

る。

まだ齡十四を迎えたばかりだ。

生まれつき体の弱かった王子は空氣の良い地方で育てられていた。最近ようやく体も丈夫になったらしく、ここ都へやって来た。

「はい。ちょうどわたくしが申し開きに赴いた時、^{おもむ}台王のもとに彼もいたのです。王子に感謝して下さい。必死になってヤナギ様のことを庇っていた」

一度、冬と春の境の季節に王子が姫巫の社殿にやって来たことがあったが、その時、ヤナギと王子は会話らしい会話を交わさなかったはずだ。

なのに、王子はヤナギを助けようとしてくれたと言う。

「とても、心の真っ直ぐな方」

「穢れを知らないだけだと思います。あの無垢さが続くことやら」
厭味を言うチズコを無視して、ヤナギは梶子斎森へ足を踏み入れた。慌ててチズコが後に続く。

「ねえ、ヤナギ様」

少しだけ緊張した声でチズコはヤナギを呼んだ。いぶかしく思い、顔を傾ける。

「先程まで鏡月池が真っ赤に染まっていたのだけれど、心当たりはありますか」

びくりと背筋が震える。それを肯定と受け取ったチズコは、大袈裟に溜め息を吐く。

「どうしてこうも厄介事ばかり抱え込むのか。こんな調子だったらわたくしの身がいくらあっても足りない」

「あれは……」

「異国の民がやった」

的確なチズコの答えにヤナギは驚き入って言葉を失った。

「鏡月池に異国人が映っていました」

「お願い、あの人は私を救ってくれた。一夜だけでも姫巫の性より解放してくれた。台王に彼のことを言わないで、恩人なの。追手を

殺したのは私だと言ってもいいから」

懸命に頼み込むヤナギを、チズコは目を細めて見つめた。

「言いませんとも。どうして、わたくしがそんな七面倒くさいことを報告しなければならんですか。夜盗が殺したと詭弁^{きへん}を吐きますよ。護衛官たちは私腹を肥やすのに夢中ですから、武の腕が錆びている。今や夜盗にさえ殺される腑抜けでございますとでも付け加えましょうか」

華麗な毒舌に、思わず噴出す。

「そなたの口には、姫巫の口を持つ私も参る」

チズコは、どうもと片眉を上げる。

「事実を述べているだけですかね」

飄々と言うチズコは、ヤナギの横に並んだ。

二人が常闇洞泉^{じょうあんどうせん}を横切ろうとした時、周囲を靈魂が取り巻いた。

「やれやれ、これだからあまり俗世とは関わりたくないんです。こうして彷徨える光たちが寄ってくるのは現^{うつろ}の匂いをわたくしたちが漂わせているからに違いない。王宮はひずみだらけです。大体、台王より文をもらったからと言って、一人で山を下るだなんて……無鉄砲もほどがある。貴女はわたくしに采女^{うねめ}の役目を全うさせる気がないらしい」

靈魂のざわめきがいつもに増してうるさい。

それを忌々しげに半眼で見回しながら、チズコは愚痴を零した。

ヤナギは軽やかに口を開く。

『大丈夫、黄泉路の道は開いています。無念も怨みも、現の未練は私が引き受けましょう。そなたたちは安らかに眠る権利がある。ほら、常闇洞泉もそなたたちを案じて波立っている。行くといい、暗き道の果てには常世がある』

神の言葉は魂を浄化する。

光たちはヤナギとチズコの周りから離れて、常闇洞泉の滝壺へと向かう。

滝壺の裏側にある洞窟の先には常世があるという言い伝えもある。

誰も生きてその洞窟より還ってきた者はいないので真実かは定かでない。

「行きましょう」

連なる光たちの行方を最後まで見守ってから、ヤナギたちは神杷山に続く楠の木を目指した。

浮世と神世を繋ぐ楔部分くさびに当たる場所にある鏡月池おぎわの面が妖しく漣立ち、水底に黒い影が揺れた。

桐一葉きりひとは落ちて天下の秋を知る

一章 鮮輝へせんき 宿りし瞳へめ

着いた早々、見上げた空は虹色だった。

己の腕に抱えられるものは限られている。それをわかっているからこそ、男はここまでやって来た。

どんな犠牲も厭いとわない。

一途な決意は、決して折れないだろう。

男は気だるげに周囲を眺望ていぼうした。

切り立った岸壁の上より眺める地表は真白い。彼自身が吐き出す息も寒さに白く濁る。

男が暮らしていた、姫巫ひめみこの脅威に怯える国とは正反対の色合いを持つ高天原国たかまのはらこく。

この国はあたたかい。自然がまだ息をしている。

見渡す限りに広がる森林と天とが、遙か彼方に一本の線を引き、境目を作っている。その境には陽炎かげろうが燻くすぶっている。

（共存しているのだ）

男は祖国を出奔する際に幼子より貰った勾玉をきつく握りしめ、瞑目した。

彼が薄く目を開くと同時に、小さく砂を擦る音がする。男は威厳ある態度で振り返る。

そこにいる者たちは皆一様に傳かしき、男の言葉を待ち構えていた。

その様があまりに形式的過ぎて滑稽に思い、彼は皮肉げな笑みを洩らした。

「カガミ様、命を」

急かす声がかかる。

カガミは心底退屈だとも言いたげに肩を回すと、佇まいを正した。総勢九人の部下たちに一人一人、目を配る。

ここに到るまでに、失った部下は五十を下らない。

カガミは忌まわしき蜘蛛の廻廊での出来事を思い出して親指の爪を強く噛んだ。

彼は外套を打ち棄て声を張った。

「蜘蛛の廻廊を潜り抜けてここまで辿り着いた勇猛果敢な兵どもよ。高天原国へ潜伏して内情を掌握せよ。時期が来た時、俺が帰国の狼煙^{のろし}を上げる。……受けし恥辱を、忘れるな。我らは高天原国に滅されし、黄昏^{たそがれこく}国の民。今代の力なき姫巫など恐るるに足らず。姫巫という名の邪神に守られたこの国、内側から打ち砕くのだ」カガミの言葉に、皆は腹の底から返事をした。

高天原国は、数多の国々の中でも特に際立つた権勢を見せつけ、
世に栄華を誇っていた。その属国は百を下らないと云われている。

都に積もった粉雪は、柔らかな日差しによって融けて川に流れる
清水の一部となる。

まだ春がやって来たとまでは行かないものの、冬の凍りつく空気
は幾分和らぎ、暖かな太陽の光が射している。

ヤナギは左手を天へかざし、束の間の休息を過ごしていた。

代々姫巫に与えられる、梶子斎森の一角にある神杷山。

そこに四季という概念はない。下界と切り離されたそこは、神々
の遊山場と呼ばれるほどに浮世離れしている。四季折々の花がいつ
ぺんに咲き、冬でも雪は滅多に降らない。

とても不可思議な場所 不安定な場所である。

「あまりゆつくりとしている暇はございませんよ」

ぼんやりと斎庭の大石に腰かけて空を見上げていたヤナギに向か
って、きびきびとした声がかかる。

振り向くと、そこには二人の采女を伴ったチズコがいた。ヤナギ
は大袈裟に溜め息を吐いてみせた。

「久々の我が家なのに、一息つく暇もない、と」

「はい、ございませぬ。よもや、姫巫に自由時間があるとでも？」

言いながらチズコは、ずいと持っていた反物をヤナギへ差し出し
た。ヤナギは怪訝な顔をしてそれを見る。

「これは」

「明晩、王宮で大きな宴が催されるとのことです。姫巫も必ず出席
をとの旨を先ほど臣より伝えられました」

「……………何も、このような時期に宴をせずともいいものを」

ヤナギの眩きは最もである。今は、高天原国が真に天下を統一出来るかの分かれ目。

宴に労力を裂くくらいならば、一人でも優秀な人材を宮へ召集して強い軍を編成した方が国のため。

しかし、チズコは一笑した。

「このような時だからこそその宴でございましょう。姫巫ご自身の休息はないも同然ですが、ひ弱な兵たちは息抜きがないと、次の行軍に耐えられないでしょうからね」

ヤナギは黙り込んだ。

次の戦は東方だと聞いている。東方は、地上の中でも地下の国々と癒着の強い地域だ。

それ故、今まではおいそれと手出しをしなかったのだが、最近になって地下の国々の動きが活発化してきているので、先手を封じる意味合いも兼ねて東方を支配下にしようと台王や臣たちは考えているようだった。

たくさん犠牲が出るだろう。

ヤナギは今からそのことで憂鬱な気分になった。

東方にはまだ古き神の教えが強く残っている。高天原国にまつるわぬ土着の民の中でも特に戦闘に秀でている者たちが潜んでいるとも聞いたことがある。

先代の姫巫でさえ、何度も遠征に赴き、何度も痛手を負って都へ帰ってきていたくらいだ。

だからこそ、ヤナギは東方への遠征を拒否するわけにはいかない。先代よりも力があるとは言いがたい。しかし、もう先代はこの世にはいないのだ。

今はまだいい。他国は、新たな姫巫であるヤナギが先代よりも力が劣るの知らない。

それを悟られぬためにも、今回東方で完璧な勝利を収める必要があった。

（私は、先代のように大きな事象を具現化することは、できない）

森の一角に火を起こすことくらいならば造作ない。

しかし、先代が戦でやってのけたという敵軍を雷によって焼き払うなどという芸当は無理である。

人にはそれぞれ巫力の限度がある。かの先代姫巫はそれが無尽蔵にあつたらしいのだが、ヤナギは並み。無理をすれば人体に影響を及ぼしてしまう。

やれやれ、とヤナギは伸びをした。背筋を伸ばすと、嫌でも気が引き締まる。

「討伐軍の大将であるはずの私が着物を羽織るというのも妙な話だが……しょうがないね」

ヤナギの言葉にチズコも不服げに頷いた。

「全くです。わたくしとしては、おいそれと姫巫の姿を下郎に見せたくはございません。台王はこれだから……」

チズコは後ろに控えている采女に目をやって、ヤナギの身支度を手伝うよう無言で命令する。

チズコはたいそう厳しいと他の采女や女官らの中でも噂らしく、二人のまだ若い采女は肩を震わせ、慌てた様子でヤナギの横に立った。

ヤナギは焦り、二人の采女とチズコを交互に見る。

「ちよつと待つて。ここで身支度をするの？　ここは外でしょう」

「ヤナギ様」

チズコは渋い顔をし、腰に手を当てた。

「では中にお戻り下さい。化粧も何もしていないまま外に出られている姫巫がどこにいますか。お恥ずかしい。この反物は明晩用ですのでお召しにならなくよろしいですが、せめて寝着で徘徊はいかいされるのはやめてくださいな」

もうすぐ、武官長様がこちらへ参られるのです、とチズコは言っ

た。

人がこの神杷山にやって来るのは珍しい。

ヤナギは興味深げにその話を聞いた。どうやら、今回の宴は新し

く就任することになった武官長やその他武官、護衛官長のためのものらしい。

その新しい武官長は、宴の前にどうしても姫巫に挨拶をしておきたいと台王に頭を下げたようだった。討伐軍の指揮官である姫巫にぜひ挨拶を、と律儀に考えるところから見ると私腹を肥やしたどこぞの貴族の息子でないことは間違いない。

「新しい武官長、か」

武官長といえば、高天原国の都を護る重要な役目を持つ、戦場に於いての最高司令官だ。

実質、討伐軍に身を置く姫巫よりも身分が高い。

先の武官長は高齢で、いつ引退してもおかしくなかった。ようやく役職にふさわしい人材が見つかったのだろう。

ヤナギはしぶしぶ社殿の中へ引っ込んだ。采女二人は何も物言わずに後に続く。

姫巫という名は人々を畏怖させ、平伏させる。ヤナギは采女たちと戯れるつもりは毛頭なく、声もかけなかった。

チズコはと云えば、武官長をお出迎えしてきますと言い残して場を去った。

沈黙が場に重く押し掛かる。

（私を恐れる者と口を聞きたくはない）

ヤナギは唇を一字に引き結び、着物を着込む。

終わりに萌黄色の羽織りを肩にかけると、鏡台の前に立った。

素早く采女の一人が彼女の前へ回り込み、白粉をヤナギの顔全体に叩く。元から色白ではあるが、それによつて一層白さが増した。

薄紅色の頬紅を塗り、唇に真っ赤な紅を乗せる。瞼の上にも紅の線を入れた。

瞑っていた目を開くと、鏡の中にある顔は、先代とそっくりだった。真っ赤な口は屠ってきた魂の色を映し出したように見える。

ヤナギは自嘲的に笑む。

「あれほど恐ろしいと思った顔が、今や我が顔か」

思わず呟いた。

采女たちは顔を見合わせて首を傾げる。

ヤナギは踵を返した。

「何でもない。さあ、武官長がもう到着なされていてはまずいだらう。行ってくる」

「あ、お待ちくださいませ。姫巫様」

大股で歩くヤナギの後ろに采女たちは慌てて続いた。

齋庭には四季など関係なく様々な花や木が乱れているが、これ程までに美しいと思ったのは初めてだ。

景色が澄んでいる。自然の匂いがヤナギを癒す。肌にまとわりつく空気は、初めてここに来た五年前のものと変わらず清廉だった。

朱塗りされた橋のすぐ脇に置かれた長椅子に、長い髪を高い位置で縛った武官長とおぼしき人物はいた。

彼は、薄い生地を着物の上から簡素ではあるが、布製の鎧とゆがけをつけている。

前屈みになっているため顔はわからないが、そわそわと指をしきりに動かしており、緊張しているのが露骨に見て取れた。

ヤナギは着いてこようとする采女たちを手で制し、武官長へ歩を進める。

（私を見たら、後ずさりするに違いない。いいさ、わざわざ挨拶に来ようと思った心意気だけでも買おう）

天弓の橋を渡り、彼の後ろ側から少し距離を保って声をかける。

「もし」

武官長は勢い良く顔を上げた。髪がしなやかに波打つ。

「私に会いに来たという武官長とはそな」

言いつつ、武官長の正面に立ったヤナギは啞然とした。

「……ヤナギ様……。戦場で見えた時とは随分と印象が異なりますね」

ム口は素早く立ち上がると、膝を付いて頭を垂れる。小刻みに震

えているのがわかった。

「次の戦までの小休止、いかがお過ごしでしたでしょうか」

「ああ、顔を上げて。本当に、本当にそなたなのか」

ムロはヤナギの頼みに従い、顔だけ上げる。

ヤナギを見上げる彼の顔は、よもや十二の少年のものではなかった。

吊り上がった双眸に意志の強そうな眉。体つきも十五のヤナギよりしっかりしている。浅黒く焼けた肌がまた、ムロの精悍さを際立たせている。

ヤナギは酷く困惑した。つい二月ほど見ないうちに、ムロは尋常ではない成長の仕方をしていた。

自分よりも幼かった者が何かが憑依したかのごとく大人びている。この事実を前に、うろたえない者はいないだろう。

「何があつたの。ついこの前顔を合わせた時は、そこまで背丈もなかったし、声も低くなかった。いくら成長する時期と言っても、その変わりようはおかしい」

「や、ヤナギ様……落ち着いて。取り敢えず、椅子に腰を下ろしましょう」

質問をぶつけるヤナギをムロが制す。

渋々、ヤナギは長椅子に腰かけた。

チズコが用意したのだらう茶と菓子を、ムロはてきぱきとヤナギに渡す。

二人とも、ゆつくりとそれらを味わった。一息吐いて、ムロは口火を切る。

「ムロはヤナギ様に言わなければならないことがあります」
開口一番にムロは頭を下げた。

ヤナギは面食らう。何のことが皆目見当もつかなかった。

ムロは長い睫毛を伏せて形の良い眉を寄せる。

「サコを、ヤナギ様はご存知だと思います」

「サコ……？ ムロ、お前 サコを知っているのか」

ムロは力なく笑う。

「ヤナギ様は覚えていらっしやらないようだ。七年前、サコとともに暮らしていた同郷の子供が武官長、サブライと都を後にしたことを」

あ、とヤナギは驚きの声を洩らした。

「あの時の童^{わいへ}がそなただと言うのか」

ムロは前屈みになり、指を組んで答えた。

「そのとおり。……サコの訃^{ふほう}報は、遠く離れた邑^{むら}に身をおいていたムロたちのもとへも伝わりました。師　サブライが何と悲しんだことか。あの時、ムロは誓ったのです。……どんなことをしてでも強くなるう、いや、サコや師のためにも強くななければいけないかった。ただ泣くだけの幼子でありたくなかった」

サブライ元武官長は七年前まで武官長の座にいた人物であり、戦災孤児のサコやムロを引き取り育てた人物でもあった。

“激昂^{おろち}の大蛇”と呼ばれるほどに勇ましい人であったが、戦場^{いくさば}以外では温厚な人柄だったため、皆より慕われていた。

だがしかし、サブライは七年前のとある日、収賄^{しゅうわい}の罪で武官長の座と都を追われた。

その時、もう既にヤナギの付き童となっていたサコは都に残ることになった。

「サコと離れ離れになったのはまだムロが二つの時でしたが、サコのことはよく憶えています。幼いムロの手を引き、修羅のような場から連れ出してくれた」

遠い目をしてムロは言葉を紡ぐ。

「そして、一年前……ムロはこの都に戻って来たのです」

一年　そんな短期間で武官長の地位まで上り詰めたというのは前代未聞の出来事だ。恐らく、高天原国の長き歴史の中でも初めてに違いない。

ヤナギは下界に起こる出来事全てに関心を持っていなかったため、神杵山を下りる機会も皆無に等しく、そういったことさえ知る由も

なかった。

ムロは黙ったままでいるヤナギの顔を、おずおずと覗き込む。燃える夕陽が彼の左半分を赤く染める。

「立派な地位を勝ち取ってからヤナギ様にサコのことを告げようと思つてこの一年過ごして参りました。サコの代わりなどいらぬと言われるのは覚悟の上です。でも、もしも許されるならば、近くで貴女を守りたい」

「駄目」

ヤナギはその申し出を素っ気なく拒否した。

ムロはあからさまに落胆の気色を浮かべる。

「そなたは武官長という、国を守る地位に就いた。私だけを守るのでは役目を果たせない。サコも、そんなことは望んでいないと思う。ムロにはきちんと役割を果たしてほしいと言うはず」

ヤナギは本心からそう言っていた。

ムロがもしもヤナギだけを守ろうとした場合、彼が手に入れた強い発言力を持つ地位はもろくも崩れ去ってしまうだろう。

（ムロは優しい子だから、きっと私が一緒にいてほしいと言ったらここにずっといるだろう。そして、武官長の持つ役目を放り出してしまふ）

悔やんだところで、零れたものが盆にかえることはない。

「自ら選んだ道を行きなさい」

覇気のなかったヤナギの目に、僅かながら力がこもる。

「私は自分で自分を守るから。きっと、そなたの力は高天原国に必要な力」

「高天原国に……」

「そう、日々の小さな幸せを最も尊たつといものだとする人々がたくさん住んでいるこの国を守る力。守るための強い武力は、どんなに昏き場所でも正道に行く」

それは幼き頃、まだ王宮へ入る前にある人物から聞いた言葉だった。

軍を束ねる者が国の行く末を決めるとも言っていたその人物の顔は残像のように臃^{おぼろ}で思い出せないが、ヤナギに鮮烈な印象を与えたのは間違いない。

「わかりました。それがヤナギ様を守ることに繋がるのなら、ム口は命を賭してでもこの道を行きましょう」

真摯な光の宿る瞳が、ヤナギには眩しかった。

ム口は椅子から腰を上げる。つられてヤナギも立ち上がった。

「では、また来ます。武官達の訓練もしなければならぬので」

「…………… 都は今、冬か。たいそう寒いでしょうね」

「はい。ヤナギ様も遊びに来てみるといい。一面の雪景色に咲く椿がとても綺麗だから。この寒空の下、子供達は裸足で駆け回っております。その笑い声がやがて、この神杷山にも穏やかな春を連れて来ることでしょう」

ム口の口調は楽しそうだった。

ヤナギの眼前にその光景がいきいきと広がる。寒い冬でも笑い合って生きる人々、美しく咲き誇る花。それらはとても大切なことで「都に下りたくなったらすぐにチズコへ伝言して下さい。飛んで参りますから」

「そうね、わかった。明日の宴には顔を出すつもりだけど、お忍びで都へ行く時はム口に言う。それにしても、そなたなら本当に飛んで来かねない」

口元を綻ばせてヤナギは最後の言葉を呟いた。

「やっと笑ってくれた」

ヤナギは気づいていなかったが、彼女は全く笑顔を見せていなかった。ム口に言われて初めてその事実に気が付いたヤナギは、はっとしてム口を見上げると、彼は今にも泣き出しそうだと思わせる表情を形成していた。

「戦場で誰と馴れ合うでもなく、常に笑顔もなかったのは、サコのことを未だご自分のせいだと責め続けているからですか？」

返答に詰まった。

そうではないと否定することは嘘を吐くことになる。

凶星と悟ったムロは、寂しげに自分の長い髪の毛先を弄った。

「本来、ムロの髪色は黒ではありません。鳶色　　陽光に透ける色」
「何を」

困惑してヤナギは声が大きくなる。

「よくよく瞳の色を見れば、誰でもわかるはず。ムロの目は芥子けしの実色をしていますから。サブライ師範の計らいによって彼に引き取られた時から今まで、常に染髪しておりました」

「もう、それ以上言っては駄目。誰が聞いているともしれないのに」
ヤナギのとがめにムロは耳を傾けようとしなない。

「かまわない」

これ以上、ムロに言わせてはならないと頭のどこかで警鐘けいしゅうが鳴る。
「駄目だったら」

「　　サコもそうだった。ヤナギ様も薄々勘づいていたのでは
ありませんか。そう、ムロとサコは地上の人ではない。黄昏国人で
す」

ああ、とヤナギは呻うめいた。

ムロは言ってしまった。サコが処刑台に運ばれた一番の理由を。
疲弊困憊ひへいこんばいした黄昏国から流れてくる人民は数多くいる。その誰もが、敵国出身だというだけで些細な罪も許されない。黄昏国出身だ
というだけで理不尽な扱いや仕打ちを受ける。

地下の人々は総じて髪や目の色素が薄いため、それを隠そうと染
髪したり目隠ししたりする者も多い。

王宮など、特に黄昏国人への風当たりが厳しい場所である。黄昏
国人を始めとする地下の人々は能力の高いものが多いので、それな
りに重宝がられるし王宮に呼ばれたりもする。だが、それは監視の
意味も込められていた。

「サコが殺されたのは台王に叛そむく意思を見せたからに他ならない。
他国人が齒向かったらこうなるという脅しだったのです。王宮に数
多くいる他国籍の者達への見せしめでもあった」

ムロは自嘲的に笑った。

「風の噂で聞いたのですが、当時、宮中の他国籍人が蜂起ほつきを企てていたそうです。それを抑制するには、同じ地下の国の者を裁くが最良の方法だったのでしょうか。人は二種いる。同胞を殺され立ち上がる者と、怖気づく者。宮中にいる者たちは誰しも後者だった。台王は確かな目をお持ちだ。それを考慮した上の策だったのでしょうか」

ムロの瞳の奥にあるものは、悲哀の炎であった。

思わずヤナギはムロの手首を掴んだ。ヤナギより頭一つ高い位置でムロの頭が揺れる。

「ムロ」

名を呼んだ。

姫巫の力が眠る自分が名を呼ぶことで、先代がヤナギにしたように誰かを縛ってしまうかもしれないという盲信じみた考えを振り払い、はつきりとムロの名を呼んだ。

真名ではない名にその人を縛る効力などないのだ。

「ムロ、ありがとう。わかったから……わかったから、もう言わなくていい」

ムロは虚を突かれた顔をした。そして、わなわなと唇を震わせた。

「……はい……」

蚊の鳴く声で呟いたムロの目から大粒の涙が零れた。それは止まることを知らず、零れ落ち続ける。牟呂は慌てて乱雑にそれを拭う。大人びた彼を、涙は子供に戻す。

「もう泣かないと、サコが死んだと知った日に誓ったのに。ヤナギ様は酷い」

「私のせいじゃない。ムロが泣き虫なだけ」

軽口を叩き、二人は笑い合った。

芽吹きめぶきの時期が来たのだとヤナギは思った。

小さく丸くなり、常闇に身を委ねているだけではいけないのだと、痛感した。

ムロはサコが死んで五年間、血を吐くような日々を過ごしていた

に違いない。武官長になるには武の才もさることながら、一定の教養も必要になる。加えて異国民であるムロが武官長になるには、通常より何倍もの努力と精神力が必要だっただろう。

「サコが願ったヤナギ様の幸せ。ムロはきつと守ってみせます」
言い残し、ムロは踵を返した。

その後ろ姿は凜としており、遠く沈む夕陽の赤をまとうて輝いていた。

一人斎庭に残ったヤナギは目を瞑った。

淡い風が頬を打った。

宵の宴は久方ぶりの賑にぎわいを見せた。

都中の貴族や武官らが集まり、大声で酒盛りをしている。

静粛な祈祷などとは大違いだとヤナギは苦笑を洩らした。

先代姫巫が亡くなってからというもの、こういった催しはついぞ開かれたためしがなかったので、皆の心も躍っているに違いない。

ヤナギは口を一文字に引き結び、広間の片隅で宴の様子を観察していた。

仕立ての良い衣装は見る者全てを惹きつける。

ヤナギ様は見栄えのする容貌を持っていて羨ましいです、とチズコは小声で言う。

チズコの言葉を無視し、ヤナギは格子の向こうに広がる夜空を見ている。

爪の形をした月の光は淡く雪を照らし、幻想的な雰囲気を作り出している。奏でられている楽の音がより一層、美しさを引き立てていた。

外の凍える美しさと反対に、広間は人でごった返しており、熱気立っている。

今回の宴の主役であるム口は、台王の座す御簾みすの前で皆に囲まれて祝いの言葉をかけられているようだった。

嬉しそうなム口の表情は、ヤナギまで嬉しくさせる。

「こうして宴に興じるも、悪いことではないな」

独りごちると、近くにいた貴族が愛想笑いを浮かべて頷いた。

貴族は愛想笑いを浮かべながらも、どうして姫巫が広間の端にいるのだと言いたげな表情をしている。

国の懐刀とはいえ姫巫もこういった宴の席ではただの招かれ人である。どこにしようが関係ない。しかし、名の知れた貴族や武官は

ヤナギのそのような考えをよしとしない。

先代は常に台王の横、もしくは一番近くに控えていた。それが彼らの頭にあるのだらう。

「ヤナギ様、ム口は立派に宣誓致しましたね。わたくしが気を揉むこともございませんでした」

チズコは誇らしげに笑顔を見せる。自分より若年のム口のことを、彼女は彼女なりに心配していたらしい。

聞けば昔、王宮の中にある童部屋で寝食を共にしていたというので、ヤナギは少々驚いた。

王宮内は広いようで狭い。誰が誰の知り合いか、皆目見当がつかない。

ム口の武官長着任の儀は滞りなく終わった。

高天原国秘蔵の八雲大蛇大剣を台王より承り、台王への忠誠を誓う。

ム口の瞳には高天原国を一心に背負って職務を全うしようという意志が感じられた。

「素晴らしい就任の挨拶だった」

多くの人々より言葉をもらっているム口に、ヤナギはそっと投げかけた。

その声は決してム口のもとには届いていないだろうに、彼はヤナギの方を振り返る。

ム口は嬉しそうに笑ってみせた。彼の笑顔は凍えるようなヤナギの心にそっと灯を与えてくれた。

宴もより一層宴らしくなってくる後半、最早儀式のことなど誰しも忘れていたのではと危惧するほどに皆酒に興じていた。

ヤナギはチズコに酔いつぶれたム口を部屋へ連れて行くよう命じ、自分は一人のんびりと月の光を浴びていた。

ふと台王のいる上座へ目をやると、闇者^{あんしや} 伝達係のような者が台王に何事か耳打ちしているのが見えた。台王の顔が喜色に染まる。あやしく思い、ヤナギは眉根を寄せる。

台王は立ち上がり、手を打った。急に広間から喧騒が止んだ。

「今日の宴にはもう一つ意味があつてな。先だつて我が息子が都の視察をしていた際に黄昏国より亡命してきた者どもと出会つたらしい。その者共、たいそう稀有^{けう}な舞を披露したそうだ。宴もそろそろ佳境に入ってきたところ。黄昏国人の剣舞、見せてもらおうではないか」

黄昏国の舞。

そう台王が言った途端、ざわめきが起こった。

ヤナギもじかに見たことはないものの、黄昏国に古くから伝わる剣舞は、この高天の原国の剣舞と違って繊細な動きと技術を要するらしい。

しずしずと袈裟^{けさ}を被った男が二人、広間に入ってくる。

周囲は息を呑んだ。

圧倒的な存在感をかもし出し、異質な空気をまとっている彼らは手にした剣を鞘から抜かず、天に掲げた。

ひらりひらりと場を呑み込み、観客たちは花々が散り乱れる錯覚を覚える。

黄昏国の剣舞を披露出来る者の数は限られている。余ほどの剣の使い手でないと、舞は陳腐なものにしか見えない。

技量と器量、度胸。全てを以ってして始めて体現出来るのが剣舞だ。

黄昏国人達の舞は、場をすぐに花化粧させた。誰も声を発しない。一しきり剣舞を舞い終わると、二人は台王の前に片膝をついた。彼らは息一つ乱している気配を感じさせない。

二人がふかぶかと被っていた袈裟を取る。

左側の男が朽葉色^{くちは}をした長い髪を見せた刹那、人々は大きくどよめいた。

この都の中でこうも堂々と異国人であると主張した者はかつていない。

ざわめきが幾分か収まった頃合を見計らって、朽葉の髪色を持つ男は唇を動かす。

「私はカガミと申す者。黄昏国の戦火より逃れるため、命からがら蜘蛛の廻廊を通り、こちらにおりますヤサカニと共にこの都へとやって参りました。此度の台王のご温情、並びに王子の計らいに私どもはいたく感銘かんめいを受けている次第でございます」

ヤナギは小首を傾げた。

カガミの声をどこかでつい最近、聞いたことのある気がする。

カガミと名乗った青年の横にいる黒髪の青年、ヤサカニは唇を一字に引き結んだまま頭を上げない。彼の髪が染色されているのは明らかだ。少しだけ赤い部分が残っている。肩まである髪の間隙せきかんより見える左目につけた眼帯から、ヤサカニが隻眼であることが見て取れた。

カガミは、俯き加減で台王の言葉を待っている。

台王は扇子せんすを広げ、口許の笑みを隠した。ひじ立てにもたれかかり、気だるげに答える。

「よいよい、わしは趣きおもむあるものが好きでな。……剣舞は武に通ずる者にしか舞えぬ。そなたらの動向、楽しみに見守るよ」

微弱ながら棘とげを感じる物言いに気を悪くした様子もなく、カガミたちは面おもてを上げた。

広間にいた女たちの甲高い声が響く。それとは別に、ヤナギの声も上がる。

女たちが声を上げたのは、まぎれもなくカガミとヤサカニが美文夫だったからに他ならない。

しかし、ヤナギが声を上げたのは別の理由からだった。

あの日　　あの台王から逃げ出した日。

ヤナギを救ってくれた青年がいた。

朽葉色のたおやかな流れを作る長髪に鋭い輝きを灯した瞳。全て

を見透かしているような超然さで、ヤナギに“ハルセ”と名乗った青年はそこにいた。

妖艶に笑むカガミとは対照的に、隣にいるヤサカニの表情がヤナギと視線が合った途端に青白く強張った。

社殿へ舞い戻ったヤナギは眠りにつこうと目を閉じた。

しかし、姫巫が受け継ぐ生々しい歴史とカガミの鮮烈な瞳がそれを妨害する。

「何故……………どうして」

口をつくのはうわ言のような言葉のみ。ヤナギは額に右手を当てて、無心に天井を眺めていた。

命の恩人であるカガミに一言礼を述べたい気持ちは山々だったが、あの時、カガミは台王の護衛兵を幾人が殺してしまった。おいそれと近づくわけにはいかない。

（機会があれば、あらためて礼を言おう）

そう心の中で呟き、再び目を閉じる。

眠りの淵に立った彼女の鼻腔びじうにかぐわしい香りが漂ってきた。

『もう、お前を守れない』

誰かは言った。

『願わくは、もう二度と今生でまみえることがないように』

懐かしい声が震えている。

『さよならだ、』

最後の言葉は聞こえなかった。視界は朱色に転じ、体を生温い何かが伝う。生温いものに手を当ててみると、それはがヤナギの体より流れ出た血だとわかった。

無数の声が場に響いている。

何かを訴えている。この夢は何かをヤナギに訴えようとしている。

絢爛豪華な造りをしている王宮内を、我が物顔で歩いている者たち
がいた。

彼らの横を女官が通り過ぎる。女官たちは顔を赤らめてひそひそ
話をする。

「地下の国では、さぞ身分が高い方だったに違いない」

「ああ、せめて一言だけでも声をおかけ下さらないかしら」

「カガミ様とヤサカニ様……お二方がいるだけで、場が華やぎます
こと」

閉鎖的な雰囲気を持つ王宮内では非常にまれな光景である。

高たか天原まのの民ということに自負を持つている宮内の者たちは大抵よ
そ者を嫌い、遠ざける。

しかし、カガミとヤサカニは最善の礼を以って迎え入れられた。
宴の席にいなかった者も、噂を聞きつけて訳知り顔で彼らに話し
かける。

カガミはそのどれもに丁寧な言葉を返していた。彼の影の如く付
き従うヤサカニも、喋りかけられれば適切な言を述べる。

ム口はその様子を一人、西門兵の屯所の近くにある訓練場の前で
眺めていた。今日は、雪解け祭があるためにム口たち武官も休みを
もらっていた。他の武官のように町へ繰り出しても良かったのだが、
何となく自主的に訓練しようと思いつてこの場にいる。

つい先日、カガミもヤサカニも、もう一月すればム口が指揮をと
る西門軍へ入ると台王より聞かされた。それを拒否する権限がム口
に与えられているわけもなく、ム口は、しぶしぶ二人の技能を確か
めさせてもらった。

その時見たカガミたちの力量を思い出し、奥歯を強く噛みしめた。
カガミとヤサカニの能力は非の打ち所がなかった。ヤサカニなど、

左目の不自由などものともせず、西門兵数人を一瞬にして気絶させた。

能力が低ければどうにかして軍へ入ることを防げただろうが、ともすれば自分と比肩する彼らの力をみすみす拒否することはできない。

(……黄昏国の流民……)

ムロ自身が黄昏国の民だからこそわかる。カガミたちを王宮に置いておくのは危険だ、と。

不安要素はいずれ牙を剥き、害をなすだろう。

(台王がどうなるうが構わない。だが　)

「随分と厳しい顔をしている」

はっとして後ろを振り向くと、悩みの元凶であるカガミが佇んでいた。圧倒的な存在感を放つそれは、少しだけ笑った。

「なるほど、頭の切れる武官長は俺たちに疑念を抱いているらしい」

「……気安く話しかけるな」

冷たく言い放つが、カガミはそれを気に留めてもいない。

「聞いた話では、武官長も黄昏国の民らしいじゃないか。同郷の者同士、助け合おう」

ムロは苛立った口調でまくし立てる。

「一緒にするな。俺はヤナギ様に忠誠を誓った者。既に黄昏国とは訣別している」

カガミの眉がぴくりと上がる。

疑念と不快感が渦となつてムロの心を支配する。

「地下深くにもぐっていれば良かったものを」

ムロは抜刀した。切っ先をカガミの鼻先に向ける。

カガミは静謐な瞳でムロを見据えていた。

「カガミ様！　貴様……カガミ様に何をする」

ムロは声の主を横目見た。

怒りに身を震わせた隻眼のヤサカニが今にも飛びかからんばかりの形相で剣を構えていた。

ムロの表情が能面のごとく消失する。整った顔立ちは、ことさら彼を生身の人間から遠ざけた。彼は剣を構え直して名乗りを上げた。「我が名は、高天原国に仕えし武官長が一人、ムロ。少しでも妙な動きを試みる。その首二つとも掻き切ってくれる」

「待った」

中性的な一声に、ヤサカニもムロも動きを止めた。声の主を見つめようと、三人は辺りを見回した。

そして、ムロが「あっ」と叫んだ。

忌み部屋の裏から、チズコが姿を現す。

ヤサカニは目を瞬かせた。

チズコの登場によって、完全にヤサカニとムロから士気は消えてしまった。

「ムロ、この方々は高天原国を救ってくれようとしてるんだ」

「何を……この者は黄昏国の者だぞ！ 良からぬことをたくらんでいるに決まっている！」

拳を握りしめて息巻くムロに、チズコは冷めた視線をやった。

「元は黄昏国の民だが、ヤサカニはわたくしと同じ郷さとの者。彼らは隠密に黄昏国の動向を探ってもらおうと亡き姫巫に命じられていた者たちです」

無茶苦茶な、とムロは毒づいた。

自分がそのようなはったりが通用する人間でないことなど、チズコはわかつているはずである。

幾たびの修羅場を越えて、ここまで生きてきたと思っているのだ。双眸の鋭さは、大男でさえ萎縮いしゆくさせる覇気があるとも言われたこともあるくらいだ。

「そのような話、聞いたことも」

チズコはムロの言を遮って、乾いた笑い声を上げる。

「隠密がいると周囲に洩らしては、隠密は隠密でなくなります」

「しかし、今この時になって高天原国へ戻ってくるなんて、不審だ」

ムロは剣をおさめ、不機嫌さを顔に出しつつ腕を組んだ。

「流れに乗じて高天原国へ帰還しようと思ったんでしょ、きっと。」

「……ねえ、ヤサカニ」

「ああ」

慌てふためいている様子は微塵もなく、ヤサカニは頷いた。

ムロは不審そうにしていたが、さして追及せずに溜め息を吐く。

「わかった。ヤナギ様の采女であるお前がそこまで言うのなら信じよう」

ムロがそう言うと、チズコは一件落着とでも言いそうな顔で笑んだ。

「ありがとう。さて、カガミ様……姫巫への謁見の件ですが」

「ようやく許可がおりたか？」

先程までは無関心そうに場の成り行きを見守っていたカガミが、身乗り出してチズコに詰め寄る。それがまた更にムロの不信感を誘った。

チズコは残念そうに首を横に振る。

「やはり台王の許可がありませんでした。姫巫は高天原国が懷刀。」

おいそれと謁見出来る方ではないのです」

そうか、とカガミは心なし悲しそうに呟いた。

「お前は側近だろう。何とかならないのか」

ヤサカニの気安い物言いに幾分殺氣立ったムロだったが、チズコは気にも留めずに返答する。

「わたくしは側近ではなく采女。姫巫の日常の世話をする者。何とかする権限は持ち合わせていない」

「……………」

重い沈黙が立ち込める。

そんな空気を追い払うかのよう、チズコが二度手を叩いた。

「ささ、そう気を落とさずに。姫巫には会わせられません、その代わり今日はわたくしめが都や王宮内をくまなく案内させて頂きますので」

チズコはそう言い放つとカガミとヤサカニの袖を引っ張り、訓練場より去って行った。

ムロはカガミたちが見えなくなるまでずっとその背を睨み据えていた。

くちなさいのもり
梶子齋森。

その圧倒的な霊圧を持った森より抜け出したカガミたちは、鳥のさえずりさえも消え失せた荒れた土地に出た。

チズコいわく、台王の座す宮殿とは反対にある道に出たらしい。ひたすら真つ直ぐ行けば、第二の都と呼ばれている沢良宜みさわへと辿り着く。

都の中でもあまり人が寄り付かないところを案内してくれと頼んだカガミを、チズコは北門をくぐってここまで案内した。チズコが森に立ちいる前に北門の近くにある池で口をゆすぎ、手を洗うよう頼んできたので、仕方なしにカガミたちは簡素な禊を行なった。最初は木綿の衣をまとして池の中へ入れと言われたが、片時たりとも武器を手放したくないと彼らはそれを拒否した。

梶子齋森の中心にある神杷山へ近付こうとすると、山を守護する主神おもさねが怒るために常人はこの森自体に近付こうとしない。

地平に、大きく燃える火の玉が沈もうとしている。

空の真上は既に藍色の帳とばしがかかっていた。

カガミは左右に広がる竹林を眺める。

「これ程荒れ果てた土地にも、竹は生えるのか」

チズコは当たり前です、と冷たく返す。

「竹は生命力に溢れている。多少のことでは動じません」

二人のやり取りを尻目に、ヤサカニは黙したまま、竹林ではなく煤すすけた地面に目をやっている。通常ならば、地面は土色をしているはずである。しかし、この場所の地面は、墨を一面流したかの如く

真つ黒であつた。

「……………なるほど、この近くにも蜘蛛の廻廊があるらしい」

眉をしかめてヤサカニは呟いた。

カガミは彼の方を振り返る。

蜘蛛の廻廊の出入口がある場所では、絶えず戦が起こる。それは、万人が知っていることである。

チズコは軽やかな風に、装束の端をなびかせながら微笑んだ。

「よく気付いたね。そう、この竹林の奥には蜘蛛の廻廊がある。でも、安易に近付かないのが身のため」

「それは何故だ」

物珍しそうに、黒い塊にしか見えない小石を拾い上げながら、ヤサカニの代わりにカガミが問うた。

チズコは少しだけ逡巡^{しゅんしゅん}してから口を開いた。

「数百年前に起きた戦によって、竹林奥部にある蜘蛛の廻廊の出入口は塞がってしまったっていると伝え聞いています」

「伝え聞いている、と言うことは、じかにその目で確かめたわけではなさそうだな」

嫌に食いついてくるカガミを恨めしげに睨みつけ、チズコは当然でしように首を振った。

「この地は都からほど近いですが、戦で死んだ者たちの思念によって呪われております。むやみやたらと立ち入る者なんていません」

凜然と言い放ったチズコに対し、ヤサカニが啞然とした表情をして見せたと思ったら、彼女に食ってかかった。

「ちよつと待ってくれ、チズコ。そのような地へカガミ様を案内したというのか」

「誰も近付かないような場所が知りたいと仰ったのはカガミ様ではありませんか」

ヤサカニは言葉に詰まり、俯く。

「……………カガミ様たちが王宮に來られたと聞き及んだ時は、驚きました」

カガミは首を捻ってヤサカニを見る。ヤサカニは心得た風情で頷いた。

「最初から都に潜伏するつもりだったんだ」

へえ、とチズコは驚きの声を上げた。

「てつきり、都ではなく沢良宜や近郊の邑むらに潜伏するかと思ってい
たけど……大胆な」

「木を隠すには森だというだろう」

ヤサカニは、からかい口調のチズコに向かって渋い顔をして見せた。

その横で興味なさげに佇んでいたカガミだったが話が一段落すると、すっと目を細めてチズコを見る。その目の強さにチズコはたじろぎ、嚙えんげ下した。彼女は小袖を口許に当てる。

「何か」

「姫巫が采女よ。ヤサカニの友として、俺たちを救ってくれたことには深く感謝している。だが、お前が俺たちの情報を台王、並びにその配下へ流した時は」

一旦、カガミは言葉を切ると、次の瞬間艶やかに笑んだ。

「未来を視ると、宮内でまことしやかに囁ささかれているその眼球。二つとも抉えくってやる」

人間らしさを垣間見せることなく言つてのけたカガミに、チズコは身震いする。

「カガミ様、無駄に脅おどすことはお止めください。……悪いな、チズコ。ああ、そうだ。一応市井の様子も見てみたいんだが」

ヤサカニの頼みをチズコは了承し、竹林道を抜けたら左に曲がり、獣道を通って街道に出るよう指示した。獣道には時たま物盗りが出没することをつけ加える。

「わたくしも一緒に行きたいのはやまやまなのですが、これから神
杷山へ行かなければならないので」

この時間帯であれば、まだ仕事を終えた商人たちが大勢歩いているだろうから、それに紛れて駛はや堀門もん 都に入る際、必ず通る門

へ近づくと。門番は左右に一人ずつと、門上にある高門台　物見やぐらのようなもの　に一人配置されていることも教えてくれた。カガミたちは黄昏国の装束を着込んでいるため、見咎められれば、ただで通行を許してもらえないことは明白である。なので、チズコは木端に書かれた台王の通行許可証を二人に渡してくれた。

「何かあれば、武官長のムロの名か、姫巫　ヤナギ様の名を出せば門を通してもらえるはずです」

言い終え、チズコは来た道を戻り始めた。

それをカガミは呼び止める。ゆっくりとチズコは立ち止まった。

「助かった」

カガミが一言だけ告げると、振り返ることはせずにチズコは言った。

「礼は要りません。わたくしは、導き手ですから」

彼女の言葉は、何か起こることを暗喩あんゆしているように聞こえた。

カガミとヤサカニはその後ろ姿が再び梔子齋森に消えるまで見守っていた。

「今からあいつは、姫巫のもとへ行くのだろうな」

焦燥感を感じさせる声をカガミは絞り出した。彼らしくもない、感情の入り混じった声色にヤサカニは戸惑いを感じたようで小さく「はい」とだけ返事をした。

カガミとヤサカニは、なるべく人目につかないように外套がいとうをしつかりと羽織り、やや猫背気味で道の端を歩いた。

もちろん、異国民だとすぐにわかる髪色をしたカガミは、かぶり笠がさを目深に被っている。

王宮内では名が知れているとは言っても、町で彼を知る者などいないので、異国民と知れば何かしら因縁かいわいをつけられかねない。

軒を連ねる市場の界限かいわいからわざと外れ、二人は狭い民家の隙間を

通つて人気のない区間に出た。

「あまり、大通りから離れるのは得策ではありませんが……どのような通りがあるか確認しておきたいので」

控え目な声でヤサカニは言った。

見るからに、貧困層が住まう地区である。

カガミは何食わぬ顔で寂れた木の下に流れる川を覗いたが、濁流とそれに浮かぶ汚物などの強烈な臭いに顔をしかめた。

物乞いがヤサカニの腕にまとわりつく。ヤサカニは、骨と皮だけの老人に、懷より取り出した銀を二つやった。老人は頭を下げて、おぼつかない足取りで去つて行く。

それを見ていたカガミは芳しくない表情を示した。

「物乞いに金銀をやっても無駄だ。彼らに真に必要なのは、食糧と清潔な衣服なのだから」

「はい、わかつております。ですが、今の私は食糧も、与える衣も持ち合わせておりません」

カガミは鼻を鳴らした。

大体、物乞い一人を助けたところで何が変わると彼は憎々しげに口にした。整った顔立ちの彼が剣呑な瞳をしてそう言つと、ことさら言葉の強さが増す。

ヤサカニは炉端^{ろはた}に座り込んでいる数多の浮浪者を見回し、嘆息した。

「光の高天原国。その甘い言に騙され故郷を棄てここまで来て、住む場所がない人々がどれほどいるのでしょうかね」

「だから何度も言っているだろう」

かぶり笠が風にあおられて飛んでいかないうちに押さえながら、カガミは眉をひそめた。

「この国に光などない。あるのは姫巫が掲げし、まやかしの鬼火だ」
きつぱりと断言した彼の双眸は、獲物を狙う^{とび}鳶の如く、見る者全てを震撼させる。

しばらくして、宮殿へ戻ってきたカガミとヤサカニは少し早い夕餉^{うけ}を食べ、湯浴みした。

宮の中央にある露天の浴室は庭の風景も眺めることが出来、日中の疲れを癒してくれた。本来ならば王族や客人だけしか使うことの出来ない浴室を使わせてもらえるのは、ありがたかった。普通、身分の 높くない者たちは、西門の一角にある木造の浴室で水浴びして体を清める。

寝支度が整うと、カガミは壁に背を預けて持ち込んだ巻物に目を通す。巻物は全て黄昏国から持ってきたものだ。

隣部屋にはヤサカニがいる。二人が与えられたのは、二人一緒でもじゅうぶん広い部屋を一つずつであった。

正式に軍へ入るまではここで過ごしていいと台王が言ってくれたため、ありがたく使わせてもらっている。

窓から流れてくる風に、燭台の炎が頼りなげに揺らめく。

黄昏国のことを記した巻物を横に避け、高天原国のことについて書かれた巻物を開く。ある程度の知識を持つておかなければ上手く立ち回れないことを、カガミはわかっていた。

蜘蛛の廻廊を渡った者は、故郷を忘れる。

巻物に記された一文が目止まる。

教えてはもらっていたものの、実際に高天原国へ来てから改めてそれを実感した。

蜘蛛の廻廊を抜けると、あちらのことが酷く曖昧になる。それは高天原国から他国へ移動した場合もそうなるらしい。記憶はあるが、どこに何があったという地理的なことは思い出せない。

「まるで、夢幻^{むげん}のようだ」

ぼつりとカガミは呟いた。

再び戻れば記憶は戻るというが、移動する度、自らがいた国の地理を忘れてしまうなど、ただことではない。

しかし、それが世の理であるなら仕方ないのだとも理解していた。

数刻後。

燭台の火が掻き消える。

カガミはうつらうつら頭を揺らす。強い睡魔が彼を夢路へ誘った。

『…………… は、とずつ 緒にい 』

夢げに揺れたのは誰か。

『これは黄昏国の尊き犠牲^{たつと}なのだ』

そのような犠牲ならば、いらないと言えば良かった。喉元が酷く熱くて、何も言えずに黙り込んだ自分。

カガミは飛び起きた。膝の上に乗せていた巻物が跳ねる。

びっしりと寝汗をかいていた己に気づき、嘲笑を洩らす。波打つ胸に手を当てて、額の汗を拭う。

今から遠い過去に起こった出来事。そうであるのに。つい最近起こった出来事であるように感じる。

ふとカガミが目線を落とすと、床に拯漚^{しよみづ}の花が散っていた。

いつも、過去の夢を見る時は決まって拯漚の花が現実と夢の境で散る。そして、現^{うつ}にその生々しい灰色の花弁を落とすのだ。

疎ましい。

カガミは心の底からそう思った。

灰色の花は、強い芳醇な香り^で以てカガミを惑わす。思い出したくもない記憶ばかり引きずり出す。

『ハルセあにうえ』

久々に目にした拯漚の花を手にとって見てみると、そう声がした。カガミは表情を強張らせ、拯漚の花を投げ捨てる。

胡座^{あぐら}をかいた足にひじをつくと、両手に顔を埋めた。

しなやかに流れる長い髪が、入念に作りこまれた飾り物の如き端整な顔の一切を隠す。

「拯溟の 花弁^{かへん}一片 散りぬれば 愛^{かな}しき胡蝶 虚空へ消ゆる」
弱々しく吐き出されたその古き歌は、カガミが発したとは思えないほどにか細いものだった。

「ハルセ」は、もういない」

半月と数多の星々が、そんな彼に光を投げる。

四・

姫巫というものは、その親兄弟であつても氣安く相見えることが出来ないのが慣わしであつた。

そう言いながらも催事の度に姫巫が場に姿を見せるのは、台王の権力を民衆に見せつける意図があるのだとヤナギは解釈していた。

「面倒なこと」

軽く呟き、寢台に横たわる。何もする氣力が起きない。

神杷山しんはやまには何百種類の薬草が生えている。ヤナギは暇な時はそれらを採集して様々な薬を作ることが趣味であつたが、一月前にあつた宴以降、無氣力な日が続いていた。

「ヤナギ様」

凜とした声音が響く。

氣だるげに上体を起こして見れば、戸口にチズコと大巫おおみこが佇んでいた。

ヤナギは慌てて立ち上がると、ふかぶかと一礼した。大巫と会うのはいつ以来だろうか。大巫は巫たちを統括する者であり、その叡えい智いちは誰よりも深いと云われている。

ヤナギも幼い頃より彼女に様々なことを教わり、今にいたっている。

大巫は手を腹の前で組み、礼を返した。

「久しゅうございます、姫巫」

「……ヤナギ様、本日は大巫様がお話をしたいとのこと。よろしいでしょうか」

チズコに問われ、ヤナギは頷く。すると、チズコは「ありがとうございます。さあ、大巫様 お入り下さいませ」と言つて大巫をヤナギの寢所に入れ、自らは退席した。

沈黙が流れる。

それを破ったのは、ヤナギだった。

「大巫様……お変わりないようで良かったです」

「姫巫様も……いえ、貴女は変わりましたね」

寂しげに大巫が笑う。その瞳は不安定に揺れていた。

「……貴女の舌に姫巫の証を刻んだわたくしを、さぞ怨んでいることでしょうね」

意外な言葉にヤナギは目を丸くする。それを肯定と取ったのか、大巫は顔を伏せた。

「守ってあげられず、ごめんなさいね」

「大巫様？」

「ああ……いけない。ずっと、それを悔いていたから……つい本来の用件を忘れてしまふところでした」

大巫は薄っすら浮かんでいた涙を拭くと、口許を引き締めた。

「姫巫よ。高天原国は姫巫がいなければ存在しない国と、昔教えたのを憶えていますか」

「は、はい。よく憶えております」

そのことを巫たちに教える時、大巫の顔は鬼気迫るものがあつた。なので、ヤナギもそのことをよく憶えている。

「良かった、貴女は憶えているとは思っていましたが少々不安で。もう何年も前に教えたことでしたからね」

大巫はふつと息を吐いた。

「高天原国が懐刀　姫巫。 “神の口” を持つ戦神。高天原国の全ての秘密を継承する者」

大巫は真剣な表情をしていた。

「良いですか、此度この宮に来た者たちと馴れ合つてはいけません。あれらは禍^{まが}　台王や王子の目はごまかせてもわたくしの目はごまかせない。黄昏国の匂いを色濃く残している者たちでございます」

ヤナギは大巫の話の黙って聞いていた。

大巫が言う“禍”とはカガミとヤサカニのことだろう。

ヤナギは「わかりました」と返事をした。

王宮へ戻っていく大巫を、ヤナギは齋庭より複雑な気持ちで見送っていた。

（あの二人がこの高天原国に害をもたらすというの）

薄暗くなってきた空を見上げると、遠く山間に夕日が落ちるところだった。

翌朝、ヤナギはいつにも増して早く目覚めた。

窓の外を見てみれば、日も昇っていない。ふくろうや虫が鳴いている。まだ真夜中であるらしい。

ヤナギは音を立てないように寝台から起き上がると、机上に用意されている装束に着替えた。今日は桃色の着物に紅色の帯、そして雪色の羽織が用意されていた。

急いでそれらを着込むと、外に出る。

思ったとおり、まだチズコたち采女も起きていないようだった。

社殿には、姫巫の世話をする采女が常駐している。采女の朝は早いのだと、いつもチズコは眠そうな目でばやく。

ヤナギは大巫に、黄昏国から来た者たちと馴れ合うなと言われ、もう少し地下の国々のことを知らなければならぬと思った。

先代より受け継いだ記憶の中にある、地下の国々の知識。それが今の現状と食い違っている可能性もなきにしも非ずだ。

戦場で見えるものも、限られている。

朝になるまで待っても良かったが、思い立ったら居ても立ってもいられなくなった。

王宮内にある書簡保管室には守人が就いているだろうから、ム口に頼み込んで入れてもらおうと考えていた。

（ム口が起きていなかったら……その時は、いさぎよく諦めよう）
ム口が夜間の警備に当たっていることを祈りつつ、神杷山を下り

た。

西門軍 武官長であるムロが統括する軍 は交代で夜間の警備も担っていることを、ヤナギはチズコより小耳に挟んでいる。

武官長であるムロは、日々の責務に忙殺されながらも自ら進んで夜間の警備をしていることも聞き及んでいた。

神杷山と梔子齋森くちなさいのもりを繋ぐ楠の木に触れる。

景色は一変し、薄暗い森がヤナギを迎えた。

ヤナギは一目散に王宮を目指して駆け出した。落ち葉が乾いた音を立てる。地面の湿気にぬかるんでいる箇所で幾度か転びそうになりながらも、彼女は王宮に続く北門を目指す。

「……………姫巫……………」

闇を這う声がした。

ヤナギは立ち止まる。聞いたことがないはずの声であるのに、どこかで聞いたことがあるような声。

常闇洞泉とこやみどうせんのある右手の闇の方を、目を凝らすと薄っすら光る鬼火と共に、一人の男が現れた。

左目に眼帯を当てた黒髪の青年 ヤサカニは、険しい表情でヤナギを見る。

「高天原国の秘宝が何故、このような時刻に、この場所にいるのですか」

「そなたこそどうして、夜分遅くにここにいる」

問い返すと、ヤサカニは答える。

「……………チズコから、梔子齋森には数多の黄昏国の民が埋葬されていると聞きました。だから、せめて供養だけでもと思い」

「昼間にこのような場所に立ち入るのは得策でないから、この時分に来た、と」

ああ、とヤサカニはたいそう不服げに肯定した。

偶然だろうが、ヤサカニが花を手向けた常闇洞泉の近くにある墓石の下にはサコが眠っている。痛む胸を押さえてヤナギは気丈にも会話を続ける。

「そなたは、チズコを知っているのか」

「昔なじみだ」

端的にヤサカニは言葉を返す。

これにはヤナギも驚いた。チズコとヤサカニが昔なじみだという話は初耳だった。

彼は、ゆつくりと常闇洞泉を振り返る。

「あの洞穴の中に、魂が流れ込んでいくのを見ていたら数刻も経ってしまった」

「常闇洞泉の奥に何があるかは誰も知らない。行って帰って来た者がいないの。でも、私は……あの奥には常世があるのだと信じている」

「……常世……か」

感傷的にヤサカニが笑んだ。鬼火が青白く彼の右横顔を照らす。

「高天原国が“地下”と呼ぶ我々の国では、この高天原国こそ常世と、そう呼ばれていた」

ヤサカニはヤナギを今にも殺しそうな目で睨みつける。

「だが、断言できる。この国は、常世などではない。幻想だ」

ヤナギは、何故こんなにもヤサカニが怒っているのかわからなかった。まるでヤナギに対して激怒しているようにも思える。

ヤサカニは燃える瞳にヤナギを映し、一瞬の隙についてヤナギの首もとを両手で掴んだ。

しまった、と思った時にはもう手遅れだった。ヤサカニの指にじわりと力が入った。

「九年前、あの邑むらを焼いたのはあなたか」

「な……にを……？」

しらばつくれるな、と怒声がとどろく。夜の静寂しじまにヤサカニの声が波紋となって響く。

「高天原国でも有名なはず。沢良宜さわらぎの一角にあった邑が、仇隠しの罪の名目で殲滅せんめつさせられたこと」

よもや姫巫であるあなたが知らないはずがありますまい、とヤサ

カニは付け加えた。

ヤナギは息もつけぬ状況で必死に記憶を辿ってみるが、そのような話、覚えていなかった。

「……チズコの邑です」
はつとした。

「私たち家族をかくまったが故に、邑は焼かれた。そして、私の左目左耳も」

ヤサカニは左手だけヤナギの首より離し、肩に零れる髪と左目の眼帯を掻き上げた。そこには見るも無惨な左耳があった。いや、耳とも呼べない。耳の残骸と云おうか。引きつり痕^{あと}だけがある。

そして、左眼があるべきところにあるのは、ただ空虚な穴。

ヤナギは目を背ける。息が苦しい。

ヤサカニは誤解しているのだ。その邑焼きは先代姫巫の仕業^{しわざ}だ。どうかして真実を伝えなければ、と口を開く。

「それ……は、私じゃない。先代……せん……だいが……」
ヤサカニは口角を上げた。

「私は覚えている。あなたがその場にいたことを。燃え盛る生きた炎の中、あなたはいた」

それは有り得ない話だ。姫巫でなかったヤナギに、口にしたことを具現化出来る真象^{しんしょう}の力があるはずもない。

「まだ……わ……たしは、ひめみ……こじゃなかつ……た……」
「嘘を吐くな！」

鬼の形相がヤナギの視界一面に迫る。

呼吸するのも難しくなってきた。ヤサカニは指の力を強める。

真象の力はおろか、助けも呼べない。視界が薄らぐ。ふっと意識が遠のいた。

「……殺して」
「何？」

ヤサカニの眉がいぶかしげに上がる。彼の手の力が弱まった。どつと酸素がヤナギを満たす。

「殺して、神に逆らって、私を輪廻へ戻して」

虚ろな瞳で言い放つ。それは、自分でない誰かが言っているかのような感覚がした。浮遊感にヤナギはまどろむ。

「……………」

ヤサカニは困惑したのか、瞬く。

「姫巫は、いぬ方がいいのです」

ヤナギは静かな瞳で言い切った。

ヤサカニはそんな彼女を不審げに見つめる。瞳の奥に、一縷の躊躇いちろの色があった。

鬼火は二人の周囲をゆつくりと回転している。

「散れ」

清廉な声が大気を切った。

その瞬間、鬼火が掻き消える。

それと同時に、ヤナギの首からヤサカニの手が外れた。いや、正確に言うとは外れたのではない。何者かの出現によって外さざるを得ない状況になってしまったのだ。

ヤナギは咳き込んで、その場に座り込んだ。ようやく普段通り息ができる。

ヤサカニの体が強張っているのが視界の端で見て取れた。

「ヤサカニ」

声はヤサカニを呼ぶ。ヤサカニは声もなく地面に片膝をつき、頭を垂れた。

声は次第に二人に近づいてくる。鬼火の灯りがなくなった今、木々の隙間より地表を照らす月明かりだけが、唯一の光である。

誰なのかなど、姿かたちを確認する前からわかっていた。

声の主は、風によって舞う己の髪を鬱陶しげに払うと、ヤナギたちの前に姿を見せた。

「カガミ様…… 申し訳ありません」

鎮痛な面持ちでヤサカニは彼に謝罪する。それに答えるでもなく、カガミは冷えた視線をヤナギへ送った。

ヤナギの肩がびくりと震える。圧倒的な威圧感はい前助けてもらった時の安心感など一瞬にして霧散^{むさん}してしまうほどに強く、恐怖心をあおる。

カガミは腰をかかめてヤナギの顔を覗き込み、嗤^{わら}った。それは心が凍りつくような笑みで。

彼は唇を動かす。月光を背に浴びたカガミは、どこまでも大きな存在に思えた。

「このことは他言無用にしてほしい。でなければ、今ここで お前を斬る」

優しい手つきでヤナギの頭を撫でながら、口では恐れ戦くことを言うカガミを前にして、ヤナギは何も言えなかった。

姫巫の力を使えば何とかこの場をしのげるかもしれないが、込み上げてくる悲愴感と恐怖感で喉がひりついていた。

ヤサカニに首を絞められていた時よりも、格段に今の方が怖かった。

カガミの目が怖い。そして、彼の言葉が刃のように心臓を突き刺す。

射抜くような瞳はヤナギの全てを見通しているかのごとく妖しく煌めいている。

「……言わないわ」

下唇を噛みしめながら言ったヤナギを、カガミは「いい子だ」とさらに頭を軽く撫^むぜた。

何故か、カガミを無碍^{むげ}にできないと思う。どうしてなのかは自身にもわからない。

（カガミ……いえ、ハルセ。私の命の恩人）
言葉なく、ヤナギはカガミを見据える。

カガミは、ぐいとヤナギの腕を掴んで彼女を立ち上がらせた。

「送ろう」

「大丈夫、一人で行ける」

「だが ……」

カガミの申し出を楊はきつぱりと断った。

「大丈夫」

私は姫巫だから、とヤナギはつけ加え、踵を返した。
宵闇が、ヤナギの姿を隠してくれた。

五・

四季折々に色を変える美しい王宮の庭で、春告げ鳥が桜の枝で軽やかな歌声を響かせる。

常ならば蒼いはずの空も、桃色に霞んで見えるほどの満開の桜や桃の花弁。

ヤナギは清らかな白い衣を身にまとい、浅く息を吸い込んだ。心にある想いを全て霧散させる。

瞳に映るのはただただ紅く彩られた舞台のみ。

数刻の後、その舞台でヤナギは春を迎えるための舞を踊らねばならない。

祝いの舞台。そうであるはずなのだが、ヤナギにとって紅い舞台はサコの処刑を思い起こさせるものでしかない。

「……………ヤナギ様」

気づかわしげにチズコが声をかけてきた。

ヤナギは敢えて彼女の方を向かず、首を横に振る。

「集中したい。悪いけど、話しかけないで」

チズコは黙って一歩後ろに下がる。

祝福の舞を踊るのは、一体いつぶりだろうか。

長い間、戦場で季節の節目を過ごしていたため、舞自体覚えていないかもしれないと嫌な予感もする。

自然、金銀細工の扇を持つ右手に力がこもる。

高らかな足音を立てて、武官達十数人が近付いてきた。舞奉納の準備が整ったのだ。

彼らは先頭にいる少年を筆頭に片膝をつき、頭を垂れた。

「ムロ、そんなに畏^{かしこ}まらなくてもいいのに」

ヤナギの声に、ムロは顔を上げる。彼は瞳を輝かせていた。

「畏まっておりません。ムロは、ヤナギ様の護衛を任せられた

のが嬉しいだけです」

その言葉に嘘偽りは感じられない。ムロの声は弾んでいる。
ヤナギは幾分緊張の糸が緩んだ。

それに、とムロは立ち上がって舞台を眺めた。

「ムロは、ヤナギ様が舞われるのを拝見するのが初めてなので。楽しみです」

「武官長！ 実は某も初めてでございます！」

「わたしもです」

「実は私も……」

武官たちは次々と声を上げる。

彼らが自分の舞を楽しみにしていることを知り、ヤナギは嬉しく思った。

長い冬の終わりと春を告げる舞。形式ばっている舞ではない。ただ、喜びを表現すればいいだけだ。

「ヤナギ様、民に、この国に喜びを運んでください」

チズコはそう言って微笑んだ。皮肉屋である彼女の、精一杯の笑顔だ。

「采女に同感でございます。戦が起こらない春なんて珍しい。姫巫様が舞を踊ればますますいい方向に物事が進むに決まっております」

武官の言つとおりだ。

例年と違い、黄昏国の動きが鈍くなっている今だからこそ、こうして巡る季節を楽しめる。

ふと、ムロたちの後ろに、ぼんやりと周囲にある桜を眺めるヤサカニの姿が見えた。

ヤナギの視線にいち早く気が付いたムロは、忌々しげに下唇を噛む。

「ヤサカニ！ 余所見をしている暇がおまえにあるのか。仮にも台王よりヤナギ様の護衛の任、賜ったのだろっつ」

ヤサカニはムロの鋭い瞳に目を丸くさせながらも頭を垂れた。

「申し訳ございません。不遜な態度を」

「私はそういう意味でそなたを見たわけでは。……顔を上げて」
そろりと頭を上げたヤサカニへ、ヤナギは艶やかに笑みを浮かべた。

一月と少し前、ヤサカニに首を絞められたことを忘れたわけではないが、どうしてもヤサカニやカガミを悪者とは思えなかった。

「黄昏国に桜はないと聞く。珍しかったんでしよう？」

「……はい。久しぶりに桜を見たので、少し懐かしくなっていました」

「ほら、ムロ。いいじゃない、桜は美しい。魅入ってしまう気持ち、ムロにもわかるでしょう」

ヤナギがヤサカニを庇うことに、どうしても納得出来ないのだろう。ムロは頷かず、腕を組んで小さく呻いた。

「それにしても、カガミはどうした。ヤサカニ」

チズコの言葉にヤサカニは肩を竦めた。

「こっちが知りたい。カガミ様も姫巫の護衛の任を受けていたのだが」

「大方、さぼっているんだろう。あいつは鍛錬もさぼる」

ムロは眉間に皺を寄せて毒づいた。

ヤサカニは明後日の方を向く。カガミのさぼり癖は事実なのだろう。

（折角の春の宴なのに。あの人は来ないつもりなのかしら）

ヤナギの脳裏に、口端を上げて酷薄な笑顔を見せるカガミが浮かぶ。

冷たい美貌。笑っているのに、笑っていない氷細工の心。
きゅつと胸が軋んだ。

薄紅色が王宮全体を飾っている。

台王直々に姫巫護衛の任を命じられた時、正直、カガミは勘づかれていると思った。ヤナギが台王にカガミたちのことを喋ったのかと案じた。

だが、どうもそれにしては台王のカガミやヤサカニに対する信頼には揺るぎないものがある。

『かの王は、身内を信じていないのです』

ヤサカニはそう言った。台王は高天原国の者を信じていない、と。だから、外から来た者をすぐに王宮へ入れる。常に内部を入れ替えている。裏で散々怨まれるようなことをしてきたでしょう。俺たちへの信頼もやがては新しい者に移ろっていくはず』

カガミには台王の気持ちはわからない。わかりたくもない。

それにもうこれ以上、カガミはヤナギに近づきたくなかった。

「また任務を放り出しているのですか？」

カガミが与えられている室に、一言も断りもなく痩せた少年は入ってきた。

質のいい衣装を着ているにも関わらず、それが厭味にならないのはその少年の人柄もあるのだろう。もともと体が弱く、最近になってようやくこの王宮に戻ってきたと聞いている。

カガミはその少年を横目見ると、ふいと立ち上がる。

「いいえ、クルヌイ王子。そのような恐れ多いことするわけがないではありませんか」

「カガミ」

クルヌイの声に、微かに咎め^{とが}の色が含まれている。

「僕は君やヤサカニが他の武官たちから悪し様に言われて欲しくないんだ。折角、素晴らしい武才を持っているんだから」

「…………… 光栄です」

カガミはそっけなく答える。

クルヌイは一瞬言いよどんだが、拳を握ってカガミに言った。

「ねえ、カガミ。君には姫巫をちゃんと見て欲しい」

意外な言葉に驚き、カガミはクルヌイを凝視した。

「地下の国々を苦しめている元凶である姫巫。君は彼女が憎い？」
カガミは答えられなかった。

答えないカガミを責めるでもなく、クルヌイは室の奥へ歩を進めた。陽射しを遮るためにかけられた御簾にそつと触れる。

「全ての災厄は、姫巫が運んでくる。そう、誰かが言っていた。でも、本当は、彼女はこの国に縛りつけられている哀しき人形ではない。己の思考を敢えて踏みこじって、戦場を駆ける」

ふとクルヌイの表情がかわった。

初めて市井でクルヌイに会った時、ただの貴族のぼんくらに見えた。なのに、今自分の前で質問をしてくる少年の聡明さはなんなんだ。

カガミは表情を引き締める。

「彼女は頑張っている。必死で僕の父や国のために頑張っているんだ。自らの身に血化粧をまとって。本当は姫巫になんてなりたくなかったはずなのに」

「姫巫に、なりたくなかった………？」

ようやくカガミは声を取り戻した。

クルヌイは頷く。

「どういう、ことだ」

驚愕の事実を前に、カガミは柄にもなく動揺していた。思わず敬語を忘れるほどに。カガミはクルヌイの細い肩を掴んだ。

「姫巫は……自ら志願し、巫力の強い巫がなるのではないのか」

「常ならばそうだった。けれど、今代は違う。先代が選定したんだよ、ヤナギを。僕はその時までこの王宮にいなかったから人伝てにしか聞き及んでいないけれど、先代姫巫は真名で彼女を縛ったらしい」

「馬鹿なっ。真名如きで人を縛れるわけがない」

吐き捨てるように吼えたカガミに、クルヌイは沈んだ表情を向けた。

「カガミ、姫巫は“神の口”から生まれてきたと云われている。故

に言葉を具現化出来る力を持っているんだ」

「……………」

「あと、ヤナギが姫巫にならざる得なかった理由はもう一つある」

一度、クルヌイは言葉を切った。

そして、彼は呼吸を整え一気に吐露した。

「ヤナギが姫巫になることに反対した付き童が処刑された。もし、姫巫になることを拒めば、もっと多くの者が殺されるとヤナギは思っただろう」

カガミの顔色が見る見るうちに蒼白となっていく。唇も血の気を失い、白く変色している。

どんな時にも余裕を崩さないカガミはなりをひそめている。クルヌイは自分の肩に置かれたカガミの手を優しく握った。

「ほら、姫巫の護衛ついでにヤナギの舞を僕の代わりに見てきてよ。そして、彼女がどんな風に舞っていたか教えてね」

カガミは何も云わずに足早に室を出て行く。頭の中では様々な思いが竜巻の如く渦巻いていた。

上手く考えがまとまらない。

そうこうしているうちに、宴がある舞台に到着した。大勢の人ばかりが出来ている。

こういった大きな催し物の際、台王は王宮を開け放すらしい。

貴族を始めとして農民や商人、貧困層の者まで我が我がと舞台に近づこうと押し合っている。

「姫巫様、早くお姿拝ませて下さいませ」

「救いの神よ！」

「ええい、下級貴族のくせに我が物顔で陣取るんじゃないよ」

「何と……下衆が！」

皆口々に姫巫の名を呼ぶ。

だが、それは“ヤナギ”ではなく“姫巫”を呼ぶ声である。

内心複雑な気持ちでそれを遠巻きに眺めていると、突如一人の少年が走ってきた。彼は怒りに顔を真っ赤にし、カガミを殴ろうとし

た。

しかし、カガミはそれを条件反射的で素早く避ける。

「カガミ！ 貴様……今更来たのか！ さっさと民の整備に当たれ！」

ム口は相当頭に血が上っているようだった。

カガミがいなかった分、余分な労力を使わねばならなかったのだろう。怒声を飛ばすと、彼はすぐに舞台の方へ戻って行った。

「カガミ様……っ。皆が舞台に近づかないよう押さえて下さい」

必死に民の暴走を食い止めようとしているヤサカニが、カガミを見つけて助けを乞うてきた。

カガミは取りあえずヤサカニを助けようと一歩踏み出す。

しかし次の瞬間、動くことが出来なくなってしまった。

民も兵も、皆より高い御輿みこしの上で状勢を見物していた台王も息を止めた。

しゃらりと鈴の音が鳴る。

驚びっくりも鳴くことを止め、ヤナギの登場を待つ。彼女はゆっくりとした動作で舞台上上がった。

白魚の肌は太陽に照らされて今にも反射しそうだ。瑪瑙めうを嵌はめこんだような美しい色の瞳を縁取る睫毛は長い。唇に薄っすら引かれた紅は桜色で、彼女の体で唯一鮮やかだった。

全てを包む漆黒の腰まである髪は一寸の癖もない。

赤い舞台と白い装束の対比がより一層、薄紅の景色を引き立てる。

誰も動けない。

ヤナギのまとう空気は俗世のものとは思えない程に澄んでいる。

戦神と恐れられる姫巫はここには存在しなかった。ただただ清い

乙女がそこにはいた。

「……………姫巫様じゃ」

カガミの横で、杖をついた老人が涙声で呟いた。老人は泣きなが

ら手をすり合わせた。

「ばあさんや、きつと、今代の姫巫様は先代様の後を継いで、この国を守って下さる」

カガミはそれを見て目を細める。

“ 姫巫 ”。

それは高天原国にとっての神そのものなのだと、ようやく認識できた。

可憐な少女は金銀の糸で繊細に作り込まれた扇を顔の前に構え、優美な舞を踊り始めた。

世に喜びが満ちてくる。まるで風や花の化身のような美しさである。

だが、中盤に差し掛かった頃、急に彼女は舞うのをやめた。辺りがざわめく。

「 姫巫や、どうしたのだ 」

と台王が呼びかける。

しかし、ヤナギは黙ったままだ。

彼女の手から扇が滑り落ちた。

ヤナギの手足が小刻みに震え出したのが、カガミにはわかった。段々顔色も白くなっていく。しまいには、その場に座り込んでしまった。

意識する間もなく、カガミの足が動いた。

そうすることが当然であるかの如く、群がった人々を掻き分けて舞台へ上がった。

人々の声は遠い。

まるでヤナギと自分だけ空間が切り離されているように感じる。

「 どうして……？ 」

潤んだ瞳でヤナギはカガミに訊いた。そんな彼女に手を差し伸べる。

ふっと微笑が洩れる。思いのほか優しい気分になった。

「 来い、ヤナギ 」

ヤナギは我慢していた涙をぼろぼろ零しながらカガミの手を取り、立ち上がった。

朽葉色の髪が、瞳が、柔らかな衣のようにヤナギを包んでくれる。意外なほど優しい微笑。

サコの処刑を思い出し、抜け殻同然になった心に明かりが灯る。

カガミは腰帯に差した剣を抜く。何をするかと思えば、ヤナギが取り落とした扇をその剣で拾い上げ、涙で濡れた顔を上手く隠してくれる。

ずっと扇の陰で、彼はヤナギの涙を拭ってくれた。

「一緒に舞ってやるから。泣くな」

ヤナギは言葉に詰まる。

カガミは高らかに剣を掲げた。

初めて見た時と同じだ。彼は凜とした面持ちで舞う。その上、ヤナギが入ってきやすいように大振りな動きをしている。

ヤナギは扇を胸元に当て、すいと彼の剣に合わせた。

扇についた鈴の音と、剣についた玉が擦れる音がした。

夢中で舞った。一人孤独に舞っていた先ほどとは違う感覚。

胸が弾んだ。

カガミの剣舞に遅れを取るまいと必死で舞った。まるで風の中で舞う花になった気分だ。

ヤナギは最後の一足を運び終え、瞼を閉じた。

あつと皆がどよめいた。

何事だろうと目を開け、ヤナギも驚きの声を上げた。

桜吹雪だ。

ただの桜吹雪ではない。風も何も吹いていない中、花が舞っている。そして、桜のほかに灰色の花　拯^{きよこ}_み溟^{めい}の花も混じっていた。

「絶景だな」

ヤナギの横で、カガミが呟いた。

ヤナギは声もなく微笑んだ。世の生全てが春の訪れに歓喜している。戦のない春を喜んでいる。

そうヤナギは感じた。

拍手喝采が巻き起こる。

ヤナギとカガミに、はち切れんばかりの人々の喜びが向けられている。

台王も、ヤサカニも、ムロも。目に入る誰もが手を叩いていた。

「ありがとうございます」

感謝の言葉はするりと唇から滑り落ちた。

カガミはヤナギを見下ろす。

その瞳は際限なく奥深く、ともすれば吸い込まれてしまいそうなほど深い色を湛えていた。

出会った時と変わらない、鮮やかな輝き
薄暗い場所にいる者にとっては恐怖ともなる輝きを宿した、玲瓏^{れいろう}な瞳がそこにはあった。

二章 月水鏡剣へつきみずかがみのみつるぎ

翳^{かげ}は段々陰影を増していき、何かを飲み込んでしまおうと大口を開ける。

夜に咲く真白き月華を見上げ、ム口は挑むようにそれを睨みつけた。

「あげない」

秘めた決意の言葉は誰に向けたものか、彼自身しわからない。さらりと抜かれた剣が、月光を浴びて鈍色に輝く。彼は悲しみのこもった眼差しでそれを見つめ、相貌を歪めた。

「師範、ム口は必ずやり遂げてみせます」
自らを戒^{いまし}めるための呟き。

最近王宮内は騒がしい。何かが起こる前兆である。

乱れに乱れたこの高天原国に、また何かが蠢^{めづ}こうとしている。彼はもうこれ以上、何かが起こることが嫌だった。

かりそめの平和、豊かな大地、知人らの笑顔。これでいいじゃないか、とム口は思う。

たとえかりそめの平和であるとしても、ここには笑顔がある。このかりそめの平和さえなくなってしまうたら、世は混沌と化すだろう。

一時の休息もなく、人々は争い続ける。

やがてかりそめの平和は潰えるだろう。しかし、その時期をわざわざ早める権利は誰にもないはずだと彼は拳を握った。

ム口は静かに市井に降り注ぐ星月の優しげな煌めきに、かの姫巫を重ねた。

自らの幸せや笑顔を犠牲にしてまで国を守ろうとしている、高天原国が懐刀である姫巫、ヤナギ。

ム口の目に彼女はたいそう美しく見えた。潔いまでのその凛とした眼差しは、戦^{おもむ}に赴く者たちの心を慰める。

ヤナギが必死に護ろうとしている国を、おいそれと崩れさせるわけにはいかない。

ふと、一陣の風が吹いた。

生温いそれは、無数の枯葉をさらい、空に向かって舞い上がった。

いくつの季節ときが巡ったのだろう。

木枯らしが乱暴に女の頬を颯なびる。鼻先がつんとする寒さが辺り一帯を包んでいた。

焼けつく喉を鳴らし、ヤナギは戦場にいた。

「引きましょう」

「うん」

牟呂の緊縛した声に答える。

ヤナギは随分伸びた髪をなびかせて、馬に飛び乗った。砂埃にまみれてはいるものの、彼女の清廉さがかげることはない。

今回の戦の舞台は、高天原国たかまのはらこくから南西部にある蜘蛛の廻廊を抜けた先、磨那まな權国かいくであった。

古くより高天原国と親交深い国だったが、此度はんぎ叛旗をひるがえし、滂沱ぼうたの兵を高天原国へと送り込もうとしていると隠密が知らせてくれた。

壊滅状態となった小さな砂丘の上にある国。

いつもの夜明けを迎えるはずだった国は、ヤナギたちの奇襲によって粉々に打ち砕かれた。

朝陽が哀しく灰と化した国を照らし出す。崖上より迎える朝は、まるで傷痕を隠すかのように全てを黄金色に覆い尽くしていた。

罪なき人々を殺し続ける自分は、きつと常世には行けないだろう。だが、それを憐む余裕などヤナギにはない。

次から次へ、戦の狼煙のろしは上がる。

ヤナギは胸元で拳を握る。

年頃の乙女が身に着けるようなものでない防具を身にまとい、切り傷を身体中につけている。「もうこれ以上、高天原国に逆らわないで」

ヤナギの小さな呟きを聞きつけたのは、誰もいなかった。

いつもどおりの討伐軍の凱旋。^{がいせん}

高天原国の紋である蓮と海原を描いた旗が高々と揺れている。

民は彼らを歓迎していた。

台王より選定されし精鋭揃いの討伐軍は、高天原国の民衆の誇りだった。

その最中、その光景を何の感慨もなさげに見やる女がいた。彼女はすっとした鼻筋と小さな唇、少々厄介そうに見えるつり目を持っている。あまり化粧は濃くなく、艶女^{つやめ}ではないのは明白だった。

しかし、平民とは思えぬ雰囲気をかもし出している。

「チズコ」

女の名を気安く呼ぶ声がする。

千鶴子は表情を変えずに声の主に顔を向ける。

左目に眼帯をしたその男は、長く伸ばした黒髪を鬱陶しげに手で払う。

「どうした、ヤサカニ。きみが市井に出てくるなんて珍しい」

ヤサカニと呼ばれたその男は、「まあな」と言いつつ討伐軍を見て目を細める。その隻眼に映っているのは、紛れもなくヤナギだった。

「我らが大将のお帰りだからな」

チズコは噴出した。

「ヤサカニの口からそんな言葉が飛び出そうとはね。月日の流れを感じるよ」

「黙れ」

ヤサカニはチズコを睨みつける。

しかし、彼女はそしらぬ顔で微笑を浮かべる。

「三年、か」

「……………」

「きみとカガミ様がこの国にやって来て三年経つ。そろそろ、行動

を起こす時だろう？」

「なあ、チズコ。お前は一体、何を考えているんだ」

ヤサカニは低い声でチズコを威嚇した。

さあ、とチズコは笑う。

「わたくしが視た未来を崩壊してくれば、どうなるうがいい。たとえ国が滅んだとしても」

暗き水底から浮き出た泡あぶくのような、寒気を感じる声で彼女は言った。

夜の帳とじを落とした如き闇色の髪はどこまでも直線的で、彼女自身の意志の固さを物語っている。

強い光を含んだ双眸は、黒曜石を嵌めこんだかのように濡れており、見る者全てを惹き込む。

一級品の彫刻品も霞ませるほど雅やかな容姿を持つ彼女は、台王だいおおきみが座す謁見の間で今回の戦の報告を行なった。完璧な形での勝利報告に、台王は顔を綻ばせる。

「やはり、そなたを姫巫に、と言った先代の目は正しかったな」
満足げに薄ら笑う台王の顔を無表情に見やり、ヤナギは瞼を閉じて降頭した。

存分に羽を休めるがいい、と台王は労いの言葉を口にして玉座を立ち、退室した。

彼が謁見の間より退室してから、ようやくヤナギは頭を上げた。その場にいたその他の者たちも、彼女にならって顔を上げる。

「姫巫、たいそう疲れているでしょう。しばらくは戦もないし、ゆっくりして下さい」

人懐こい笑顔で、高天原国王位継承第一位に身を置くクルヌイはヤナギに話しかけてきた。

ヤナギは表情を変えずに礼を述べて踵を返す。後ろに控えていたム口も同様に後に続いた。

豪華な観音扉を開き、謁見の間より出る。空気が幾分軽くなった。大股で渡殿を闊歩しながら、彼女は肩で溜め息を吐いた。宮殿内はとても広く、様々な人と擦れ違う。

誰しもヤナギとム口を見るや否や、深く腰を曲げる。ヤナギは立ち止まらずに、目線だけ投げかける。

官や女房、付き童、巫。実に幅広い者たちが彼女に頭を下げる。謁見の間は宮殿の中でも南門に近い場所にあるのだが、ヤナギたちが目指す西門軍　台王の直轄下にはない軍。宮殿の西門に寢所がある　の寢所からは微妙に距離があった。

しんと静まり返った宮殿内。これほど広いこは、台王の威厳を主張するただけの場所に見える。

黒い柱一つ一つに彫り込まれた鳥や女人の絵柄もただ虚しい。天井に連なる玉飾りも意味のないもの。

「馬鹿馬鹿しい。毎回毎回同じような報告を口上すること
が、どれほどつまらぬことか」

ヤナギは軽薄な笑みを浮かべた。

ム口は何も云わない。

西門へと続く渡廊わたろうで楊と牟呂は立ち止まった。

縁側となつてゐるそこに脱ぎ捨てた草鞋わらじをつっかける。

眩しい新緑の陽光が、視覚を刺激する。瑞々しい土の香りが少しだけ心を癒してくれた。

ヤナギ様、とム口が呼びかけてくる。

「……………死んでいった者たちの弔いたづいをする。遺体は全て夕櫃峠せきづへ
運んで」

「わかりました」

命令を受けたム口の行動は素早かった。

すぐさま西門軍の寢所に駆けて行く。

ヤナギはその後ろ姿を見ながら、齒を食い縛った。

寢所の前には夥おびただしい数の麻布に包まれた遺体があった。

今回の戦のために徴兵した民だ。

磨那權国の軍師は切れ者だった。

戦慣れしていない、徴兵された寄せ集めの者たちを次々に捕縛して人質とした。

見捨てたくなかった。だが、あの過酷な状況下で彼らを救い出せず、奇襲という強行突破に踏み切ったのだ。

磨那權国の兵は最後まで降伏しなかった。降伏したら命は取らないというヤナギの言葉を信じる者など誰もいなかった。

『自国の民衆を犠牲にしてまで……あなたは戦に勝ちたいのですか？ 命の灯火が切れる寸前、磨那權国の軍師はそう口にした。

人質がいる状態での奇襲など、彼は予期していなかったのだろう。真っ直ぐな眼は、戦の汚さをまだ知らない、青臭く幼いものだった。

ヤナギは言葉に詰まった。

追い討ちをかけるかのように、軍師は息も絶え絶えの中、嘲笑を洩らした。

『姫巫。あなたは哀しい人形ですね』

思わずヤナギは彼の喉を、手にしていた剣で突き破った。

自らの鼓動の速さに恐怖を覚えた。

絶命した軍師の死に顔は、安らかだった。

ヤナギはふと自分の両手を見た。今は既に血みどろではないにも関わらず、血で汚れている気がした。

（……私は、守る）

何を？

心の奥で、誰かが訊く。

（国を）

何のために？ この国は、命を賭けて守る価値のあ

る国なのか。

（わからない）

誰かは晒わらった。それは楊に向けて、磨那權国の軍師が洩らした嘲笑に似ていた。

馬鹿な娘。だからこそ、愛おしい。意志を持たぬ人形になれば苦悩せずに済むものを。

「黙れ」

「黙れ、と言われてもな。まだ声もかけていない」

ヤナギははつとして前を向いた。

庭に佇んでいたのは、カガミだった。この三年で、朽葉色の髪目をした彼はますます見目麗しくなった。

高天原国台王の寵愛を一身に受け、それに見合う武力も持つ彼は王宮内に溶け込んでいた。外の戦では参加させてもらえていないものの、都の警備などを任されるまでに信を置かれる存在になっている。

ヤナギは眉根を寄せて顔を背ける。

その時、自分が多量の脂汗をかいていることに気がついた。先ほどの声は、真昼に起こったただの幻聴だと自身に言い聞かせる。

そして、その場を離れようとした。だが、それをカガミが阻んだ。彼はヤナギの腕を掴む。

「……………カガミ、私は忙しい。放して」

「戦で死者が出たそうだな」

無遠慮にカガミは口火を切った。

ヤナギは頭に血が上るのを感じた。頬が熱い。

「それが、どうした」

「いや、皆が騒いでいたから気になってな。お前が出向いた戦で死者が出るなんて珍しい、と」

「今回の戦は、徴兵された民衆がいた。戦慣れしていない彼らを敵が狙うのは必然でしょう」

「……………そうだな」

「大きな戦だった。敵も切れ者揃いで、徴兵を庇う暇などなかった。仕方がなかった。死者が出て当然の難を極めた戦でした」

言葉の端々に棘が生じる。

言い訳じみた自分の弁が情けなく感じる。

「もう結構」

低い声色にヤナギの肩が震えた。

カガミは緩やかに目を吊り上げる。

「それを食い止めるのが、姫巫であるお前に課された使命ではないのか」

心臓部を抉られたような鈍い痛みが身体中を駆け巡る。

「わかっている、そのようなこと。そなたに言われるまでもない」

「では問おう。何人の死者を出した」

ヤナギはその答えを持ち得なかった。

何人。

そんな生温い数ではない。何十 いや、何百の死者を出した。

カガミは怒りを滾^{たぎ}らせた形相でヤナギに一矢加えた。

「答えがないということは、お前はそれだけの命を蔑^{ないがし}ろにしたということだ」

「私は」

「国を守りたいのか。台王を守りたいのか」

ヤナギは閉口する。二の句が紡げない。目頭が熱い。

「そこまでにしろ」

声の主はヤナギとカガミの間に割って入った。

「ムロ」

苛立ちを隠せない様子でカガミは妨害者の名を呼んだ。

「今、俺はヤナギと話しているんだ」

「黙れ。武官長である俺に楯突く気が。大体、平兵士如きがヤナギ様に意見するなど言語道断」

カガミはムロを真剣な顔で見た。

「人の命の扱い方の話だ。意見して何が悪い」

「命の扱い方など、ヤナギ様も百も承知だつ。貴様が口出ししなくてもいい」

カガミとムロは睨み合った。両者とも一歩たりとも譲らない。

先に引いたのはカガミだった。彼は目線を地面へ落とすと、一言

呟いた。

「戦は、人々を守るためにするものではないのか」

その言葉に、ヤナギの中の何かが弾けた。

小気味いい音が響いた。

ヤナギは泣きそうになるのを必死で堪え、自分より背丈がある力ガミを睨み上げる。

力ガミは思いきり叩かれた自らの左頬に手を触れ、ヤナギを見つめる。

ヤナギは全速力でその場を駆け出した。

「ヤナギ！」

力ガミの微かに上擦った呼び声にも聞く耳を持たず、彼女は一目散に梶子斎森の方へ去った。
くちなしさいのもり

力ガミはヤナギを追って森に向かった。

ム口は一人取り残され、手持ち無沙汰に周囲を見回す。西門軍の稽古場を見やれば、荷車が所狭しと置かれている。

戦場から持ち帰ることが出来た遺体の数はおよそ三十。

総勢六百で挑んだ戦の犠牲は二百余名。あまりにも多い犠牲だった。

火攻め、水攻め、雷落とし。様々な攻め方をした。

だから、味方の死体も敵の死体も人型を保っているものは非常に少なかった。

「戦場に出向けない者が、いけしゃあしゃあと……」

力ガミの言い様を思い出し、いきり立つ。

だが、彼の言が正論なのは、ム口にもよくわかっていた。わかっているだけに、一番耳を塞ぎたいものでもあった。

「あのお……」

恐る恐る、と言った形容詞が正しいだろう。

小太りの男がム口に声をかけてきた。

「何だ、お前は」

じろりと一瞥^{いちべつ}すると、小男は、自分は商人で門番にも許しを得てここまで入って来たと述べた。

その証拠に、赤い字で宮殿通行許可証と書かれた木簡がその手に握られている。

大方台王にお納め品をどこかの国が託したのかと思い、謁見の間に通そうとすると小男は大慌てで首を横に振った。

「いいえ、台王様にお品を持ってきたわけではござりません。カガミ様へお品をお持ち致しました」

「カガミ宛てだと？」

疑いの眼差しで小男を見ると、小男はいそいそと肩にかけた麻袋の中から、絹で出来た浅葱色の巾着袋を取り出す。

「門番の方にもお見せ致しました。中身を改めてもらっても結構でございます」

門番の検閲で引つかからなかったのであれば、危険物でないことは確かだ。門番には目利きの者が選ばれている。毒薬、爆薬、その他危険物は瞬時に彼らが見破るはずだ。

巾着袋の中にあつたのは、虹色の玉であつた。

掌の大きさのそれは、宝玉ではないようだったが見事なまでの美しさだった。これを造った者の技量が想像できる。素晴らしい才を持った物造りだ。

「ただの玉、か」

「さようでございます。沢良宜^{さわらい}にいるわたくしの知り合いが前にカガミ様に世話になったらしく、どうしてもその玉を渡して欲しいと言われまして」

頭を掻いてそう言う小男に、嘘を吐いている素振りは微塵もない。ようやくム口は了承の頷きを返した。

「わかった、生憎だがカガミは今ここにいない。これは私から彼に渡そう」

「はい、お願い致します。カガミ様には何卒、沢良宜のマクがよろ

しくと言つていたとお伝え下さい」

小男は深くお辞儀をして、足取り軽く南門へと去つて行つた。

ムロは掌に握りしめた玉を再び見つめる。照りつける太陽にそれを翳す。^{かざ}

虹色のそれは華やかなる色合いをしている。

「サワラギ マク ハヤリヤマイ シキヨ」

ムロは光を受けた玉が映す文字を断片的に読み上げる。彼は口角を引き上げた。

「武官長、こんなところで何をしているんですか」

ムロはすぐさま玉を巾着袋に入れ、怪訝そうに自分を見るヤサカ二の方を向いた。

三年の月日が経つても全く変わらない黒髪の長さで左目の眼帯を持つ青年は、射抜くような眼つきでムロを見てくる。

煌びやかに周囲を惹きつける力ガミとは違う種類の雰囲気を持ったヤサカ二がムロは苦手だった。

真つ向から勝負しようとしても、この男は上手くそれを掻いくぐるに違いない。

虹色の玉は、彼らの仲間からの火急の知らせだったのだろう。沢良宜にいたマクという者が、流行病によつて死んだのだ。

「荷車に全ての遺体を乗せ終わりました。皆、あなたの指示を待っています」

「ああ、今行こう」

そう言つて、ムロは鞘から剣を抜いた。

ヤサカ二はさつと顔色を変えて飛び退る。^{すこ}

ムロは巾着袋を宙に投げ、それを斬つた。巾着袋と一緒に中に入つた玉も真つ二つに割れた。

ヤサカ二はその瞬間、息を止めた。砂利と玉がぶつかつて小さな音を立てた。他の兵たちは何事かとこちらを見ている。

ヤサカ二は食い入るように一心に玉を見つめていた。この玉が仲間から届いたものだと言サカ二が気付いているのかは定かでない。

ムロは鞘に剣を収めながらヤサカニに言った。

「ヤナギ様を悲しませるようなことだけはするなよ」

ムロが出来る最大の譲歩だった。

出来るなら、今この場でヤサカニを斬り、カガミを相討ち覚悟で討ち取りたい。

だが、もしそれをしてしまうとヤナギを守ることが出来る者がいなくなってしまう。それだけは避けたかった。

采女であるチズコは精神的に彼女を支えられるだろうが、戦場で彼女を支えることは出来ない。

それに。

「ヤナギ様はお前たちを信じているのだから」

ヤナギは彼らを純粹に信用していた。

いつだったか、ムロが彼らを悪し様に言った時、彼女は哀しい目をした。

『ムロ、そなたは知らないでしょう。私はあの夜　台王の怒りに触れたあの夜、カガミによって助けられた。だからね、私はカガミもヤサカニも信じてる。彼らは悪い人ではない』

言って微笑む彼女の顔はたいそう安らかで、ムロは衝撃を受けたものだ。

ヤナギの無邪気な顔を、彼はその時初めて見た。近頃は、相次ぐ戦によって彼女の純粹さは失われようとしているけれど。それでもあの時の温かな信頼の言葉はヤナギの真実だろうから。

ムロもそれを信じてみようと思った。

黙り込んだヤサカニを置いて、ムロは稽古場にひしめく荷車の方へ足を向けた。

風にさらされていない水面の如き静寂^{しじま}。息を吸い、吐き出すという動作でさえもためらってしまふ格式高い空気。

鳥たちのさえずりがまた、澄んだ森の香りをあおる。

カガミは、やぶの中を掻きわけて走り続けるヤナギを懸命に追った。だが、幼い頃よりこの梔子齋森^{くちなさいのもり}で暮らしてきたヤナギと違って、カガミは森の構造などわからない。ついにヤナギの姿を見失い、途方に暮れて樹木にもたれかかった。酷く息が上がっている。

ヤナギは足が早い。身軽なのだ。風をきって走る彼女の姿は、まるで森の童神のようにも感じられる。

瞑目すると、目蓋^{まぶた}に木々の合間から射し込む木漏れ日が映り込む。遠くの方から、水のせせらぎが聴こえた。

カガミは目を開けると、水音がする方へ歩を進める。進むに連れて木々は密集し、複雑に絡み合っていく。森の奥へ進んでいる証拠だ。あまり人が立ち入らない場所に、樹木は根を張る。獣道のところどころに燈台が見受けられた。現世で惑う魂を導くためにあるのだらう。

(常闇洞泉……)

間違いない、とカガミは小声で呟いた。

チズコから、ちらりと話を聞いたことがある。梔子齋森が神聖さと同時に禍々しさを内包している理由。それは一重に、死者が黄泉路へ下る道。常闇洞泉があるからだ。

この道を行けば、常闇洞泉が姿を現わす。そして、ヤナギはそこにいる。

カガミは確信めいた予感がした。

昼であるはずなのに、夜のように辺りが暗い。深緑がカガミの体に影を落とす。

とうとうと滝の水が泉に流れ込んでいる。悲しい声のような風の

音。滝の後ろ側に、洞穴があるのだろうとすぐに察しがついた。

その岸辺にヤナギはいた。

カガミは息を殺して近づく。だが、すんでのところでヤナギは彼の気配に気付き、身をひるがえそうとした。

カガミはそんな彼女の腕を掴んだ。

「待て、ヤナギ」

「……離して」

ヤナギは俯き、カガミの手を懸命に払おうとする。彼女の目はうつすら濡れていた。

「……夕櫃峠へ死者を弔うのではなかったのか。指揮官である姫巫がないと、ムロたちも困るだろう」

カガミが真つ当な意見を言つと、ヤナギの抵抗は幾分和らいだ。

「戻るぞ。責務は果たせ」

ヤナギの手を解放し、常闇洞泉から視線を逸らした。常闇洞泉は、そこはかとなく死をかもし出している。

ヤナギはぼそりと呟いた。

「こんな森の奥まで追つてきて。ヤサカ二といい、カガミといい、恐怖心はないのか」

カガミは目を見開いた。まさか、このような疑問がヤナギの口から飛び出そうとは露ほども考えていなかったのだ。

「誰がこの森に恐怖を感じるものか。清らかすぎる空気は少々息苦しいと感じるが、恐ろしくなどない」

思ったまま答えると、ヤナギは目を丸くした。信じられない、と言いたげなその瞳はいたいけな少女のものだった。

いくら姫巫と言っても、まだあどけない少女なのだ。

カガミはヤナギに背を向ける。

その背は、ついてこいと無言で言っていた。無性に追いかけたくなる。まるで、追いかけては彼がいなくなってしまう気がして

ヤナギは小走りでカガミの後に続いた。

風が身を切り、頬を刺す。鼻先が冷たくなる。春を迎えたと言っても、まだ寒さが強い。

二人は沈黙したまま、王宮へ戻る獣道を辿っていた。途中、神杵^{しんは}山^{やま}へ続く楠の木を通った時、ヤナギは社殿へ戻りたいという思いに駆られたが、ぐっとそれを堪えた。

死者の嘆きを聞きたくなかった。死者の恨みを聞きたくなかった。今だけでいい。ただ、少しだけ。人でありたいと思った。

「どうした」

随分遠くからカガミの声がした。いつの間にか歩が緩んでいたらしい。

ヤナギは不安定な足元に注意しつつ、カガミのもとへ向かう。そして、口火を切った。

「そなたにも、私は高天原国に縛られた傀儡^{かいらい}に見える？」

「何を」

カガミはヤナギの問いに片眉を上げる。彼の反応は最もだった。しかし、ヤナギの言葉は途切れない。

ずっと内に込めていた、幾年経っても消えない恐怖、不安、悲愴。何故か、カガミに聞いてほしいと思った。

「姫巫、と。戦場で呼ばれる度に感情が抜け落ちてゆく。まるで何かの入れ物にでもなったように」

カガミはヤナギの右肩へ左手を置き、力を込めた。痛みが走る。

ヤナギは彼を直向きに見つめた。カガミの双眸は微かに怒りを含んでいる。それは間違ったことをした子供を叱る親の目に似ていた。「傀儡、入れ物？ 馬鹿なことを。ヤナギ、俺は本当に傀儡となつた者を知っている。真の傀儡は、自分が傀儡かと恐怖することさえしない」

ヤナギは頷く。

「そう。私はまだ成長が止まっていない。だから、完全な意味の傀儡ではない」

木々のざわめきが二人を包む。一陣の風がヤナギとカガミの長い髪をなびかせた。木々の隙間より降り注ぐまるやかな陽射しは足元をちらちらと輝かせる。

「姫巫は皆、儀式が終わると成長しなくなる。でも、私は成長している。それだけが安寧^{あんねい}」

「儀式？」

囁くように訊く彼の顔は固く強張っている。

姫巫の儀式を知らないカガミにヤナギは舌に刻まれた紋様を見せた。

カガミの喉が鳴る。

「舌を、焼かれたのか」

彼は擦れた声で問う。そして、ゆっくりとヤナギの輪郭を指でなぞり、瞳に剣呑^{けんのん}な光を浮かべた。

「酷い^{むご}ことをするのだな、高天原国は」

「舌に紋様を刻むことで、神を降ろす。それが姫巫の伝統。でも

」

ヤナギは一瞬、言うことを躊躇^{ちゅうちう}ったが意を決して、先代姫巫と自分以外は誰も知らない秘密を口にする。

「私に神は降りなかった。きっと、巫力が足りなかったせいだと思う。……嬉しかった。確かに、先代のような強い力は使えないけれど。私はまだ、？人？である」

カガミはヤナギの告白を黙って聞いていた。左手は右肩に乗ったままだ。

「……そなたに、こんな話、するものではないとわかっているのだけれど」

再び零れる涙。自分でも戸惑っている。カガミは高天原国の敵であるかもしれない。大巫にもム口にも忠告された。それでも、彼に受け入れてほしいと思ってしまう。

「怖い。このまま戦場を駆け続ければ、いつか何も感じなくなりそう。いつか、神がこの身に降りてきそう」

「？姫巫？なんてモノ、この世には存在しない」

「え？」

カガミは微笑を洩らした。柔らかなそれは、大丈夫だという言葉よりもヤナギの胸に浸透する。

「在るのは、？ヤナギ？という女子であって、姫巫であることに固執しているのは、ヤナギ自身だ」

懸命にカガミの言葉の真意を考えたがわからず、ヤナギは口を尖らせた。

「……カガミの言葉は、難しすぎて理解できない」

カガミは快活に笑った。

「よく言われる」

ヤナギが頬を膨らませるとカガミは優しく微笑み、頭を撫でてくれる。

「出すぎたことを言ってしまったって、すまなかったな」

ヤナギはゆつたりと首を振って微笑んだ。

それを見て彼は目を細める。たいそう愛しげなものを見る目は全てを惹き込む。

「俺は、お前が笑っていてさえくれれば」

カガミは無意識に言葉を吐いていたらしく、ふと我に返ったのか口をつぐんだ。

そして話を変えた。

「さあ、夕櫃峠へ行こうか。今頃、ムロたちが追悼の準備をしているだろう」

「はい」

カガミはヤナギの歩幅ほはばに合わせてくれた。

微かに触れる彼の手と自分の手を繋ぎたいと思った。

夕陽が辺り一帯を茜色に染める。東門より出て少し行ったところに、夕櫃峠はあった。古来より、夕櫃峠の真下に流れる溪たにへ死者の灰を流せば、死者は輪廻を巡り、再びこの世へ戻ってくると云われ

ている。

ヤナギとカガミが夕櫃峠に到着する頃には、追悼の煙が立ち上っていた。遺体を灰にしているのだ。

峠には武官たちのほかに、追悼の儀を執り行つために大巫や巫、采女、死者の血縁の者たちがいる。

立ち昇る煙には数多の魂が混ざり合っている。

「御魂^{みたま}が」

カガミの呟きに、ヤナギは弾かれたように彼を見やる。

「見えるの？」

彼は曖昧に首を横に振った。

「いや、感じる程度だ」

言葉を濁すカガミにヤナギは首を傾げる。

「ヤナギ様！ 良かった……今ちようど祈りを捧げているところですよ」

ム口はヤナギが来てくれて心底安心したという顔で状況を説明してくれた。どうやらヤナギが来るまでの間、大巫や巫たちが魂鎮めの詞^{のりこと}を行なってくれていたらしい。

追悼の煙が上がっている近くにいた大巫とヤナギの視線が交錯する。大巫はヤナギの横にカガミがいるのを見るやいなや、険しい表情をした。他の巫たちはカガミの姿を見て嬉しそうに頬を染めた。

ヤナギはム口に頭を下げる。

「ム口、心配かけてごめんね」

ム口は慌てた様子で両手を左右に振る。

「いいえ、先ほどの件はカガミが全面的に悪い。ヤナギ様がム口に謝ることなど露ほどもない」

むしろお前が謝れ、といった目を彼はカガミに向ける。それをカガミは綺麗に無視する。

弔いの煙を見上げるカガミの目は寂しそうだった。

『そなたたちの前には、常世とこの世の境目があるだろう。恐れずに、その向こう側へ足を踏み出せ。そなたたちの黄泉路が明るくあ

らんことを』

木綿の衣に身を包み、鏡月池の水で身を清めたヤナギの詞に、美しい魂の火はもつれ合いながら、遙か天へ昇っていく。

それを見守ってから、ヤナギは煙を見つめる者たちに向き直った。「死んでいった者の分まで生きよとは言わない。死者はそなたたちに己の命を託したわけではないのだから。けれど、自らのために、生き長らえよ」

皆一様に目を閉じて、膝について額のところで手を合わせた。

ふと、カガミに目が止まる。彼は齒を食い縛って追悼の煙を見据えていた。左手で腰帯に差した剣の柄を握りしめ、右手は右膝へ。そして静かに顔を伏せる。黄昏国流たそがれこくの追悼だとすぐに察しがついた。彼の隣にいる八榮爾も同じような体勢で祈っている。

（カガミは、何か背負っている。とてつもなく大きなものを）

ヤナギはそう思いながら、祈りをささげるカガミを眺めていた。自分と同じ匂いがする。

追悼の儀式は無事終了した。皆、それぞれの帰路へ着く。

ヤナギはチズコと共に神杷山へ戻った。社殿へ入ると、美味しそうな食事の支度が整っていた。ヤナギはチズコを見やる。

チズコは自分が作ったのだと少々自慢げに言った。握り飯が二つに魚の塩焼き、梅の実を干した物に根野菜や薬草が入ったすまし汁。「帰ってきて早々、追悼の儀式。お疲れさまでした」

「ありがとう、チズコ。それにしてもそなたが膳を作るなんて……一体どうしたの」

ヤナギが疑問に思うのも無理はない。社殿にはチズコの他にも五人の采女がいるのだが、個々に役割がある。チズコの役割は采女の統括と姫巫の身の回りの世話だ。食事は別の采女が請け負っている。ちなみに、ヤナギの寝所に無断で立ち入れるのはチズコだけだ。それだけ、ヤナギはチズコに信を置いている。

チズコは手について頭を下げた。

「此度の戦、付き添えませんでした大変申し訳ありませんでした。食事

はその謝罪の意を込めて作らせて頂きました」

「いいのよ、具合が優れなかったんでしょう。もう大丈夫？」

「はい、おかげさまで」

「それなら、いいの」

チズコが月物だったのは知っている。そんな時に戦場へは行けないだろう。

二人は格子越しに月を見上げながら無言になる。導みちの光は、幾重にも線を伸ばしている。

「美しいですね」

チズコの声にヤナギは頷く。

「……月には未来が映ると聞きます。ヤナギ様はどんな未来あすが欲しいですか」

ヤナギは即答した。

「姫巫が要らない、幸せな世」

そうなったら私も要らなくなるだろうとヤナギは思い、皮肉な己の考えに口許を歪めた。

「わたくしは、絶対にヤナギ様がお一人にならない未来が欲しい」

チズコは真剣な面持ちで言い切った。固い決意が垣間見える彼女は、ヤナギよりも年下とは思えないほどの意志を窺わせた。

「さあさ、食事にしましょう。山菜の茹で物もあるんです。取ってきますから先に米でも召し上がっててください」

ぱんぱんと手を叩いてチズコは立ち上がり、部屋を出た。

口にした米はじわりと甘かった。

三・

「そなたたちに、我が息子の近衛兵となることを命じる」
だいおおきみ

台王の言葉にカガミとヤサカニは頭を下げた。

謁見の間にて、台王の声が響いた。

ムロは物言いたげに腕を組んだ。

各重要階級に位置する者たち総出の寄り合い。皆は袖を口元に寄せ、隣同士で囁き合う。

現職の王子近衛兵のうちの二人を台王は扇で指し、「こやつらは今日までで役から外す」と言い放つ。彼らは寝耳に水な話に飛び上がって仰天した。

カガミとヤサカニは頭を下げたまま沈黙を守り、粛々と場をしのいだ。

王子の近衛兵に他国の者が就くなど、前代未聞だった。しかも、西門兵から近衛兵が選抜されること自体、異常だった。

通常であれば東門兵、もしくは南門兵が命じられる。

西門兵は台王の膝元にいない兵　つまりは大事にされていない兵である。

西門には忌み部屋　拷問部屋　があり、皆近づくことを嫌っている。そんな部屋の少し先に西門兵たちの寝所はある。武官の中には忌み部屋から漂う腐敗臭で不眠に陥る者もいた。
おちい

東門や南門は台王の執務室に近く、日当たりもいい。西門にある簡素な鍛錬場とは違い、東門や南門にあるものは綺麗に整備されている。

そこには台王に気に入られた武官や出自の良い武官が置かれている。他国籍の一般兵たちは西門へ振り分けられ、実力があつたとしても東門止まり。台王や王子の近衛兵という役職は与えられないのが今までの習わしであった。

また、東門兵や南門兵には武官長の役職と同じ意味を持つ、司官

長という役職が置かれている。

ムロが武官長をしているといつても、それは西門兵の長という意味であり、全ての兵を動かす権限は与えられていない。例外的に戦の時のみ、ムロが軍を動かす権限をもらっていた。

かたや司官長は戦へ赴いたことがない。彼ら東門司官長、南門司官長は？武官長？ではない。ただのお飾り役職だ。

そのため、台王や武官たち以外は武官長が軍の最高司令官であると思い違いをしていることもある。

ムロは此度の人事を良しと思わなかった。たしかに、台王が任を解いた者たちは、任に対して怠惰な面もあったかもしれない。

しかし長い間、王子に牙を向くことなく従順に仕えていたのだ。

カガミたちを台王や王子に近づけてはいけない。

そうムロは常より思っていた。彼らに重きを置けば、必ずあとあと痛い目を見るのは必定だ。

二人の雰囲気は、三年前より変化がない。この国に馴染まない異国の雰囲気。

人は何かをやり遂げようとしている時、決して他の色に染まらないものだ。それほどの意志を彼らは持っている。

ムロはこの人事を決定する前の寄り合いで、猛抗議したが、台王はさりとそれをかわした。

ムロは奥歯を強く噛んだ。

「よろしく頼む」

クルヌイはわざわざ立ち上がり、カガミたちの前に進み出て、ひどく嬉しそうに顔を綻ばせて声をかけた。

二人は王子の言葉に笑む。

「こちらこそ、どうぞよろしくお願い致します」

そう言つて礼をしたカガミに倣^{なら}つて、ヤサカニも礼をする。

この場にいた他の近衛兵も戸惑いながらも二人に祝いの言を述べる。

カガミたちはそのどれもに礼を返した。

王子の近衛兵は総勢十名。

どの者も？王子の護衛？を名乗るに相応しい力自慢の大柄な男たちばかりだったので、カガミたちはいささか浮いている。

台王の側近たちや女官、采女たちも口々に喜びの言葉を述べていた。

謁見の間は異様な熱気に包まれていた。場にいるの者たちの中で二人に声をかけなかったのは、ム口と役職御免となった元近衛兵たちだけだった。

ひたとカガミたちを睨み据え、自分の席から動かないでいるム口の横へ、顎ひげをたくわえた東門司官長が漆塗りの杯片手さかずきに腰を下ろした。

「武官長殿、何を憚然としておる。台王と王子の御前であるぞ。それ、酒を呑まんか」

ム口が手をつけていなかった盆に置かれていた杯に、司官長はとくどくと酒を注ぎ足した。

それはあふれて盆の上に零れた。

ム口は何も言わずに席を立った。

「おうおう、せっかく酒を注いでやったというのに。これだから黄昏国の者は好かんだ」

司官長の厭味は耳に入りもしなかった。

ム口は執務室を横切り、庭に出た。庭師がよく整えた庭の砂利の模様は、溪谷の景色をしている。

気が急いた。自分が戻らなければ、西門兵たちは鍛錬をさぼるだらう。

「王子に媚売りよって。地下の汚らわしい国出身の分際で」
忌み部屋の前まで来た時、不穏な声が聞こえた。

ム口は思わず忌み部屋の影に身を隠した。

「口をつつしめ。もはや、貴様はただの一般武官でしかない」
迷いない言い様。

ム口はその声の主をよく知っている。

（ヤサカニ……？）

まだ謁見の間では宴が行なわれているはずだ。騒ぎに乗じて室を抜け出したのだろう。

そつと声のする方を覗き見た。

すると、ヤサカニだけでなく、そこにはカガミの姿もあった。

彼らの前に立ち塞がっているのは飲んだくれの爺だった。宮内でも随分古参者である彼は、皆から煙たがれていた。その爺はつい先程、王子の近衛兵の役目を下ろされた。

大かた腹が立ってカガミたちに罵声を浴びせているのだろう。

ムロが武官長になった時もそうだった。

実力も人望も全て劣るにも関わらず、前武官長はムロに食ってかかってきた。散々叩きのめしてやると、彼は恥辱に耐えかねたのか谷へ身を投げた。安否はいまだわかっていない。

人は皆、そうなのだ。自分より格下だと思っていた者から自分の居場所を取られると、その者を激しく非難する。

爺は、なお喚わめいている。

「何を……。わしは先代姫巫の血縁ぞ！」

「血縁だから、何を誇ることがある」

カガミの冷静な問いかけに、更に爺は怒鳴った。

「血統はこの世で一番重要視されなければならんものじゃ！ それを、あの台王は……いとも容易く蔑ろないがしにしおる」

爺の目は座っていた。彼は手にしていた酒瓶を口に当て、一気に煽る。

酒の臭いがムロのもとまで届く。

「台王の判断は正しいだろう」

ヤサカニが眉根を寄せて爺ににじみ寄る。

「何だどっ」

爺は若干腰を引きながらも果敢に食ってかかった。

「このような真昼間より、酒を飲む貴様などに護衛が務まるものか」
そう言ってヤサカニは素早く爺の酒瓶を取り上げ、爺の腕を後ろ

へ回した。そして、足払いをし転ばせる。

地面にうずくまった彼の背中をヤサカニは蹴った。

「くっ」

「どうした。？地下の汚らしい国？の者に負けるなど。貴様は弱いな」

ぎりぎりとかかとで爺の背中を痛めつけるヤサカニは笑っていたが、目は全く笑っていなかった。

爺の顔が屈辱と痛みに歪む。ム口の脳裏に前武官長の顔が浮かぶ。これ以上は駄目だとム口は瞬間的に判断を下した。ヤサカニと爺の間に躍り出ようとする。

しかし、ム口の行動は不発に終わった。

今まで傍観していたカガミが止めに入ったのだ。

刹那、ム口とカガミの目が交錯した。カガミはム口が立ち聞きしていることに気付いていたのだ。

カガミはヤサカニの肩を引き、爺を立ち上がらせる。

「よせ、ヤサカニ」

「カガミ様、しかし……この者……」

「いい。言わせておけ。どうせ、吠えることしか出来ないのだからカガミはふつと笑った。底冷えする怜悯な笑み。

「爺、残念だったな。お前が宮を牛耳っていた時代は、終わったんだ。これからは、日蔭より世を見るがいい」

「……」

ム口は音を立てないように注意しながらその場を立ち去る。回り道にはなるが、中庭を通って、鍛錬場へ行くことにした。

今はカガミたちと喋る気分ではない。

カガミたちのやり取りを見て、ム口は自分にもああった差別があつたことを思い出した。

高天原国は閉鎖的な国だ。自分たち高天原国人以外に心を開く者など、そう多くない。

台王だってそうだ。

しかし、カガミたちは最高の礼を以て迎え入れられた。それには何かわけがありそうで、ムロは一抹の不安を覚える。

（あいつらは、？禍？だ）

大巫もそう言っていた。ムロもそう思っている。

彼らがいることによって、何かが動いている。

微弱ながら、水面が揺れているような感覚。得体の知れない恐怖が背筋を伝う。

（ムロが止める）

何かあつてからでは遅い。

ムロはヤナギという光に救われた。だから、絶対にヤナギを守り通すことを決めていた。

『どうしたの？』

『ひつく……』

『あら、あなた、サコと一緒に宮へ来た子じゃない。私はヤナギと
いうの。よろしくね』

『ヤ、ナギ様？』

命からがら逃げ込んだ高天原国で見た、最初の笑顔。彼女の微笑
みは純粹で、ムロの心をほぐした。

彼女自身は覚えていないだろう、記憶。

いいのだ。

ヤナギの記憶から自分が消えた理由はサコから聞いている。だからこそ、カガミたちにこれ以上、ヤナギを揺さぶってほしくなかった。

ムロはようやく当初の目的地である鍛錬場に辿り着いた。

「やはりお前たち、鍛錬をさぼっていたな！　これから見回りの任務がない者は、追加で槍突き百回！」

思い思いに羽を伸ばしている武官たちの姿が目に入った瞬間、ムロの怒声が飛んだ。

四・

初夏の香りは国中を清々しく駆け巡り、陽の光は農作物を成長させる。

高天原国の都を行き交う人々は皆、額に浮かぶ汗をぬぐっている。カガミとヤサカニはそんな都の大通りを歩いていた。ところせましと露店が立ち並び、人呼びが店の前で大声を張り上げている。

二人は夏風邪をこじらせた王子に代わって都の見回りをしていた。熱が高いというのに、どうしても視察に行くと駄々をこねた王子に自分たちが代わりに見てくると言った手前、適当にはできない。カガミたちが見てきてくれるなら、と渋々室で横になっておくことを承諾した王子のことは他の護衛が見張っている。

カガミとヤサカニはなるべく目立たないように麻で織られた生地の装束を着込み、袈裟を目深に被っていた。街道へ続く門前にある市場や一般の民が住まう区域を一通り視察し、都の南東にある貧困層の住まう区域へと足を向けた。

水の腐った臭いと大量の蠅が貧困区域には充満していた。夏の日差しにやられた人々は軒下に座り込み、顔を伏せている。ぴくりとも動かない彼らは死んでいるかのようにも見えた。

「相も変わらず、凄惨な状況だな」

カガミは初めてこの区域を訪れた時から変わらない死の臭いに辟易しながら言った。

「ええ、王子に報告申し上げねばなりませんね」

貧困区域の有り様を木簡に書き記しながらヤサカニは答えた。

希望の光が消えた目。昼だというのにいっこうに活気がない区域。骨と皮だけとなって汚れた川の水を飲む子供たち。

全てを静かに見回し、カガミは袈裟をふかぶかと被り直した。

「ヤサカニ、都の中だけでもこんなにも落差が激しい。時は満ちた

な」

「……」

答えないヤサカニを見据え、カガミは嘲笑を洩らす。

「どうした。情でも移ったか」

「そのようなことはないです。俺がどれだけこの国を憎んでいるか」
反論したヤサカニの表情に一片の惑いを感じ、カガミは常々思っていたことを口に出した。

「お前の場合、高天原国を憎んでいるというよりは姫巫への怨恨と見受けられるがな」

ヤサカニはぐつと声を詰まらせる。

畳みかけるようにカガミは言う。

「三年前は訊かなかった理由を訊こう。何故、あの時ヤナギを殺そうとした」

一瞬の間の後、ヤサカニはカガミから視線を剥がした。

「……………彼女が、俺の左目と左耳を奪った姫巫だったからです」
俯き加減でヤサカニは言い切った。両の手の拳は固く握られている。

カガミは目を見開く。

「父上より、お前がその目と耳を失ったのは十二年前のことだと同じ。その時、ヤナギは六つ。まだ、あいつは姫巫ではなかったはずだ」

「いいえ、ヤナギ様です」

強い口調でヤサカニは断言した。静かな川べりで二人は睨み合う。ふと、ヤサカニが瞳を曇らせる。

「彼女自身に聞いたら、違うと彼女は答えました。その目が嘘偽いっているようにはみえませんでした」

「だったら」

「あの、目」

ヤサカニの手が震える。その手で彼は自分の顔を覆った。

「あの空虚な宝玉のような眼。^{まなこ}間違いない」

カガミは腕を組んで訊く。

「先代姫巫ではないのか？」

その問いにヤサカニはゆるりと首を横に振った。

「先代姫巫を模した彫り物を拝見しましたが、あの者ではなかった。まだほんの幼子である女兒が、俺の未来を奪った」

沈黙が下りる。ぼそりとヤサカニは呟く。

「カガミ様の言う通りかもしれませんが。俺は、姫巫に私恨を抱いている」

「……ヤサカニ……」

生臭い風が二人の間を駆けた。

「それも、もしかしたら人違いかもしれない憎しみを」

彼の顔は戸惑いと遣り切れぬ憎悪、そして哀傷に満ちていた。

ヤサカニはそれきり口を開かなかった。

午後の日差しは突き刺すように肌に食い込んでくる。貧困区域を一回りしたカガミたちは再び市場を歩き出す。

二人は露店の一つで握り飯を買い、頬張りながら王宮へ足に向けた。

「ヤナギは」

カガミが口火を切る。

横にいたヤサカニの肩がにわかに強張る。

しかし、カガミは気にせず言葉を続けた。

「ただの少女だ。姫巫だなんだと祀り上げられているが、心根は純朴そのもの。タダビトだ」

ヤサカニは眉根を寄せて顔を歪めた。

「？姫巫？が、人だと。そういうのですか」

声をひそめて言うヤサカニにカガミは頷く。

「ああ。ただ、この国のために道具として使われている哀れな者」

怖い。

ヤナギが洩らした心の声を思い出し、カガミは下唇を強く噛んだ。
「泣いていた」

「え？」

ヤサカニは予想外の言葉に呆ける。

二人とすれ違う人々はあまりの暑さに顔も上げたくないのか下を向き、足を引きずるようにして歩いている。

「このまま戦場を駆け続ければ、いつか何も感じないようになりそうで怖いと、泣いていた」

つい先日、ヤナギから聞いたことをそのまま伝えれば、ヤサカニは瞠目した。

カガミは慎重に言葉を選びながら唇を動かす。

「先代姫巫より真名で縛られ、あいつは姫巫になった」

「そのような、こと」

関係ないです、という声は小さく立ち消えた。

「ヤサカニ」

カガミは立ち止まる。ヤサカニの足も止まった。彼は強すぎる感情を楊に持っている。それはいつか、カガミにとっても黄昏国にとっても、ひいてはヤサカニ自身にとってもよくない事態を呼ぶ気がしてならなかった。

「憎しみを持てばそれだけ相手を意識してしまい、いつしか捻じれた感情を生む」

カガミは憂鬱げにヤサカニを見た。

「あまりヤナギに深入りするな」

都の視察から戻ったヤサカニたちは王子に報告をして部屋を辞す。カガミはその足で鍛錬場へ向かった。彼の腕は確かだ。それは日頃からこつそり鍛錬を積んでいるからだ。ヤサカニは知っていた。

ヤサカニはどちらかといえば知略を武器にしている。だから敢えてカガミの鍛錬につき添わず、書物庫に向かった。

書物庫は寝殿のすぐ脇にあり、クルヌイの室からそう遠くないところにある。そこには国内外問わず貴重な文献や物が置かれており、

学の宝庫である。しかし、近年は知恵より武力を貴し^{たつと}としている台王の意向もあり、貴族や豪族たちはこぞって鍛錬に明け暮れて知識は二の次という風潮が強まっていた。

ヤサカニから言わせてもらえば、知力を上げずに武力だけ上げることが馬鹿馬鹿しいことこの上ないことだ。

戦において、一瞬の判断が生死を分かつ。知識があれば瞬時に生存するにはどうすればいいか判断がつくだろう。だが、なければ策は浮かばず死んでしまう。無駄死にだ。

カガミもそれは重々承知の上であり、夜にはよくヤサカニに文献や軍略の話を持ちかけてくる。そうしたことも頭に入らず、ただ戦う者たちはただの捨て駒だ。

書物庫の戸を開けば、少しだけ湿った匂いがした。ふと、扉の近くに座っていた司書官と目が合う。ヤサカニと司書官はそれぞれ頭を下げた。

司書官は貴重な文献や木簡、物が盗難に合わないように見張りも兼ねて置かれている。

ヤサカニはいつもどおり、軍略や戦に関する項目の文献が並ぶ棚を目指し、奥へと進んでいった。

(……………ヤナギ様。姫巫……………)

カガミの忠告は的を射ていた。

ヤサカニはヤナギを強く意識している。こうしている今でも、浮かぶのはヤナギのことだ。

この十二年。

自らの目を、耳をもいだ者の顔を忘れたことはない。異常なくらいの意識は、カガミの言うように、捻じれを生みかねないことはヤサカニだってわかっている。

(それでも)

姿を追ってしまう。彼女がヤサカニに気づいていなくとも。彼はヤナギを常に目で追っていた。

「あ」

間の抜けた声がした。

ヤサカニは声がした方へ首を回す。

書物庫には先客がいた。

ヤナギが書物と書物の間に挟まっている。膝には分厚い文献を置いていた。椅子があるのだから、それに座ればいいのと思った。

ヤサカニは間の悪い気まずさを感じる。

ちらりと目を配れば彼女が何を読んでいるか察しがついた。ヤナギが読んでいたのは、黄昏国のことが書いてある書物だった。

ヤナギはわざわざ立ち上がって一礼する。

ヤサカニも小さく一礼し、積まれた書物を脇にどけてヤナギの横に腰を下ろす。

ヤサカニは久々にヤナギと口を聞いた。

「黄昏国のことを知りたいのですか」

問えば、即座に彼女は首を縦に振った。

「ええ、黄昏国や地下にある他国のことが知りたくて。……戦で何度か地下の国々へ赴いているけれど、ちゃんとした知識はあまりないから。まあ、どの文献にも書いてあることは一緒だったけど」

そう言つてヤナギは書物のとある一行をヤサカニに示す。そこには蜘蛛の廻廊を出た途端、黄昏国や地下の国々の記憶の一切が消えたという記述があった。

「……黄昏国の空は、淀んでいる」

ヤサカニは自然と話し始めた。何故、自分がヤナギへ黄昏国の話をしているのか、自分自身不思議に思った。

「この国のように虹色に見えたりはしない」

「虹色や青色ではないの？」

心底驚いた瞳で見つめられ、内心困惑する。ヤナギの双眸には美しい光がある。

戸惑いを悟られぬよう、平静を装ってヤサカニは答えた。

「いや、青色をしている時がありますが、高天原国のように澄んだ色ではない。くすんでいます。絶えぬ戦の狼煙がそうさせているの

だと言う者もいるくらいに、哀しい色をしている」

「へえ」

真剣にヤナギが話に聞き入っている様子を見ると、自分の心が和らいでいくのを感じた。

「しかし、だからこそ存在出来るものもある。それが拯溟の花。^{しゅうめい}ヤナギ様は見たことがありませんか？」

ええ、とヤナギは頷いた。

「夢から覚めた時に、散らばっていたことが何度か」

ああ、と八榮爾は納得した。

「黄昏国の者と夢路が同じだと、そういった事象が起こることがある。……拯溟の花は、黄泉路を迷う者たちを導く花として知られています」

「そうね。でも、この国では長くもたないし、育たないわ」

「拯溟の花は、澄み渡りすぎた土地では呼吸することの出来ない花なのです。だから、我々の国だけでしかあの花は生きられない」

「……美しく、気高い花。自分の望まない場所では、潔くその身を投げうつる」

ヤナギは読んでいた書物を床へ置き、両膝を抱える。彼女の物言いに、どこか憧憬が感じられた。

気を取り直してヤサカニは言葉を続けた。

「あとは、そうですね。高天原国と違って大きな建造物はごくわずかです。王の住まいもさほど大きくないし、豪族たちの家も簡素だ」
ヤサカニは黄昏国の王宮を思い描こうとしてみたが目の奥が霞がかり、黄昏国の記憶を手繰ることはできなかった。

「ヤサカニは蜘蛛の廻廊を通してこの国へ来たのでしょうか？」

当たり前のことを訊いてくるヤナギに疑問を覚えながらも、ヤサカニは頷いた。するとヤナギは小首を傾げる。

「何故、そんなに記憶を保有しているの？」

ヤサカニは、そんなことかと微笑を洩らす。

「それは、黄昏国を出奔^{しゅっぽん}する際に自国や他国のことを記した文献を

持参したからです」

ヤサカニは数多くの文献をこちらへ持ってきていた。高天原国に行った者は来た国のことを忘れる。逆もまたしかり。

ヤサカニが十二年前、高天原国から黄昏国へ戻った時は高天原国の地理がすっかり抜け落ちた。

「たしかに蜘蛛の廻廊を抜けると、あちらの国のことは忘れます。だが、こちらに来てから得た情報は消えない。高天原国に来た当初は本当に戸惑いました。あなたが見られていた書物が述べているように、記憶が全て抜け落ちたんです。でも、俺には持参した書物がありましたから」

ヤナギは感心しきつたように両手を握り合わせ、目を丸くした。
「すごい機転。普通ならそこまで頭が回らない」

そう。普通なら、高天原国へ行く者は逃亡者か兵のどちらかだから黄昏国の文献など持っていないから。

しかし、ヤサカニたちの場合は違った。始めから、潜入するつもりだった。だから、そんな用意周到なことができたのだ。

「ありがとう、ヤサカニ。おかげでたくさんの情報を知ることができた。それにしても、そなたとこんなに喋ったのは初めて」

礼を言うヤナギに思わずヤサカニは訊いた。

「あなたは、怖くないのですか」

きょとんとしてヤナギは瞬いた。

戸惑うのは当たり前だ。いきなり、怖くないのかと訊かれて戸惑わない者がいるだろうか。

左目のあった部分が、ちりちりと痛む。幼き少女の残像がちらつく。

「俺は、三年前にあなたを亡き者にしようとした。そんな俺が恐ろしくないのですか」

ヤサカニの問いに、ヤナギは目を吊り上げた。人形のような美しい瞳に一抹の炎が宿る。

その生きた瞳は誰かに似ていて、ヤサカニは息を詰まらせる。思

わず視線を彷徨わせた。

「恐ろしくなんてない」

彼女は真摯に答えた。迷いは微塵も見受けられない。

「その後、一度たりともそなたは私を傷つけようとしなかった」

「それは、機会を見計らっていたからかもしれないよ。今のよう
な」

ヤサカニは緩くヤナギの首筋に手を当てる。彼女はその手をやり
わりと外した。そして、言う。

「殺意を感じない」

そう言われて、はっと我に返った。ヤサカニは素早くヤナギから
離れると、片膝をついて頭を垂れる。

「……申し訳ございません。恐れ多いことを」
「いいえ」

優しい声色。彼女はこうして自分を傷つける者全てを許すのだろ
うか。許すことは、自らの傷を抑え込むことでもある。

それを考えると、心臓に鋭く鈍い痛みが走った。

それに、とヤナギは付け加える。

「あの時殺されていたら、私はその程度の役目だったということ」
「……………」

「では、私はこれで退室します。祈祷の刻限が来るので」

しなやかな動作で書物庫を後にするヤナギの姿が見えなくなるま
ですつと見つめていた。

彼女の姿が見えなくなると同時に、ヤサカニはその場にうずくま
った。

（まるで操り人形のような）

笑わないからくり人形。手足にくくりつけられた糸で好き勝手に
動かされる哀しい人形。

『あの時殺されていたら、私はその程度の役目だったということ
です』

ヤナギは死ぬことを恐れていない。
危うげなヤナギの思想が、ヤサカニは気にかかった。

五・

突きささる視線を全身に感じながら、カガミは真つすぐ前を見据えて西門を指していた。

夕刻。もうすぐ飯時であろう。魚の焼ける香ばしい匂いが辺りに漂っている。

クルヌイ王子の室前で番をしていたカガミに、ようやく交代の声がかかった。カガミは早々にヤサカニと王子の見張りを交代し、西門に戻ってきた。

庭を通っていると、池の周りにいた女官や台王お抱えの女たちから艶やかな目で見られる。

まるで、獲物を狙う女郎蜘蛛。

カガミはひっそりと口角を吊り上げて晒わらった。自分が目立つらしいというのをカガミは心得ていた。皆、毛色の違う動物を愛でる目をしている。カガミは解き放っていたざんばら髪を束ねる。この髪が陽にさらされて金色に見えるのも人の目を集める原因なのだろう、と思った。

（今はいい）

悪意を感じる視線は微々たるものだ。台王が大っぴらにカガミやヤサカニを信じているから、誰も悪意を表向きにできない。

この王宮へ来て三年。もうそろそろ、台王の気まぐれは翻るだろう。その時、今全身に突き刺さっている好意の視線さえ容易く悪意に傾くことをカガミは重々承知していた。

たとえ何年この地に住みつこうとも、この地の者にはなれないのだ。いや、なろうとも思わなかった。

（俺は、黄昏国の者。高天原国の者ではない）

強固な想いは決して折れることはない。

鍛錬場に着いてみると、人の影は一つもなかった。皆、夕飯を食べに表通りにある店や飯所へ行っているのだろう。

ふと、微かに動くものが目に入った。西門兵の屯所のすみに胡坐あぐらをかいているその人物の顔は、苦しげに歪んでいた。夕日が赤く全てを染め上げていても、その人物が青白い顔をしているのは一目瞭然だった。袖を托たくし上げて、しきりに両腕を強く擦る彼の異常な様子を見て、カガミは目を見開く。

「ムロ……お前」

カガミの気配に全く気づかなかったのだろう、ムロは慌てて袖を下ろす。

しかし、時既に遅かった。

カガミはムロの手首を握った。そして、一気に袖を捲り上げた。

「……………」

ムロは無言でカガミを睨み据える。その頬には脂汗が伝っていた。呼吸も荒い。こうしている今にも、ムロは倒れてしまいそうだった。カガミの瞳が冷たくなる。

「呪まじないか」

「黙れ」

鋭い拒絶の言葉を受けてもなお、カガミは言葉を止めなかった。

「常々、お前からは妙な気配を感じていた。まさか、呪いで成長を促進していようとはな」

「くっ」

悔しげにムロは目をそむける。

ムロの両腕には黒い墨で描かれたような模様が入っていた。肩には大輪の禍々しくも見える花が咲き誇っている。墨が入っていない皮膚は壊死えししているのか、赤紫色に変色していた。

「黒き拯溟しゅうめいの花」

呪いだった。黄昏国に古より伝わる己の身を犠牲にした呪いの一種。呪いには様々な種類があるが、黒き拯溟の花柄は成長を促進させて強大な力を付与させるというものだとかガミは記憶していた。

しかし、呪いは禁忌中の禁忌。下手をすれば媒体を死に至らしめるもの。

その呪いの彫り方を知っている者も今や数人程度しかないはずだった。

もともと、戦に子供らが駆り出される際に彫られたといういわくつきのものである。無理な成長促進は大きな負荷になる。

こうして、ムロが生きていることさえ奇跡に近いことであつた。古文書には、子供らは気が狂うか体に走る痛みに耐えきれず一年も経たないうちに命を絶つたと記されていた。

ムロはカガミが呪いのことを知っているのがわかつた刹那、苦虫を潰したような表情を垣間見せて脱力したように顔を伏せた。

「ヤナギは、知っているのか」
「言つな！」

悲鳴に似た怒鳴り声上がる。
全てが朱に染め上がる刻限、大禍刻。おおまがどき 静まり返つた辺りが空恐ろしさを増加させる。

ムロの体が小刻みに震える。

「ヤナギ様は、何も知らない。これは俺の独断でやったこと」
「そこまで姫巫が大事か」

カガミの問いに、ムロは怪訝な顔をしてカガミを見る。その顔は当たり前だろうという表情をしていた。

「お前は黄昏国の民だろう」
思わず口をついた言葉に、ムロの動きが止まつた。

「黄昏国の、民……」
ムロは剣呑けんどんな光を目に宿した。その目は見る者全てを震撼させるものだった。

カガミはわずかばかりたじろいだ。
「その事実のおかげで俺がどれだけ泥水を飲んできたか、貴様にはわかるまい。その不遜な物言いに立ち振る舞い。カガミ、貴様は黄昏国の中でもさぞ温かで幸せな位置に身を置いていたのだろうな」
カガミは困惑した。予想だにしていなかつた物言いに上手く言葉を取り繕つくろえなかつた。

「そのようなことは」

「ないわけがない！ その朽葉色をした髪が艶やかなことで容易に想像がつく！」

返す言葉が見つからなかった。何を言っても、今はムロに届かない。

「……凄惨だった」

ゆっくりと、噛み締めるようにムロは語り出した。

「黄昏国での生活は、常に飢えと渴き、そして死との隣り合わせだった。俺の村は小さな村で、蜘蛛の廻廊の近くにあるがために幾度も戦の舞台になっていた」

情景がまざまざと浮かんでいるのか、ムロはしきりに左肩を右手で強く押さえている。

「物心ついたとほぼ同時に母は黄昏国の兵に殺された」

「黄昏国の兵だと？」

まさか、とカガミは心中で吐き捨てた。

黄昏国の兵が同胞であるはずの民を殺したというのか。信じがたい話に、カガミは耳を塞ぎたい衝動を必死に堪えていた。

ムロは重々しく頷いた。

「娼婦にされたんだ。体の弱かった母は、その屈辱と兵たちの欲望に命を落とした」

ムロは小さく嘆息した。

「……何度目の戦だったろう。俺とサコ ヤナギ様の元付き童だは運悪く高天原国の陣へ迷い込んでしまったんだ。そこで、サブライ元武官長と出会った。彼は俺たちが孤児だと知ると、優しい眼差しと涙をくれた。それが、どれだけ温かったことか。サブライ元武官長は俺とサコを引き取ってくれた。飢えと渴きのない場所へ連れてやると彼は言った。まあ、俺もサコも信じていなかったがな」

ムロは固く祈るように指を組んだ。

「けれど、いつしか彼を師範と呼ぶようになった。そして彼の言ったとおり、俺とサコはこの命を賭けても惜しくない者を見つけた」

一旦、間を置いてム口は安らかな表情を見せた。

「それがヤナギ様」

「……………」

カガミは言葉を紡ぐことができなかった。

「……誰にも文句は言わせない。ヤナギ様の幸せはサコへの弔いの光となり、俺の心の安息となる。この呪いはその誓いの印。誇りだ」
まだ身体中、痛みがあるだろうにム口は果敢にも立ち上がる。二人の間を生温い風が吹き抜ける。

「俺は、黄昏国の民などではない。立派な高天原国の民だ」

燃える瞳を見つめるに耐えられず、カガミは思わず踵を返した。
飯を食べ終えて満足げに屯所へ戻ってくる兵たちと入れ違いに、カガミはその場を去った。

「近頃はとんと？神の腕かいな？の噂、聞かなくなりましたね」

日照りが続いていたため催された雨乞いの儀を済ませ、神しん杷山はやまへ帰ろうとしていたヤナギの耳に、そのひそひそ声は届いた。思わず振り返る。

いたのは二人の兵だった。古ぼけたゆがけをしているところから推測するに、西門兵であろう。

「ああ、？ハルセ？だろう。どうせ、油断を誘っているだけだ」

「地下の国々最後の救い、？神の腕？、でしたっけ。でもここ数年、噂も聞かないのはおかしい話だ」

地下の国々の最後の救い、？神の腕？。

？ハルセ？。

『俺は、ハルセという』

ヤナギは口許を押さえた。

いかに自分が無頓着に戦場にいたか今ならわかる。敵の名すら知らなかったのだ。

ヤナギは動揺しつつも平静を装いその場を去る。

ヤナギがいることに気が付いた兵たちはふかぶかと礼をした。

脈が速くなっていく。

あの時　カガミが自らを？ハルセ？と名乗ったあの時、気が付いていたら。

ヤナギは自分の凡庸さにほとほと嫌気がさした。？神の腕？の手腕は知っている。彼のおかげで戦場にて何度も苦渋を呑んだ。それは先代姫巫も同様である。

「カガミを……カガミを知らない？」

王宮の中央部にある庭園で、燈の灯った池回りを散歩しているクルヌイとヤサカニに、ヤナギは息も絶え絶え尋ねた。

その緊迫感が伝わったのか、ヤサカニは早口で答える。

「カガミ様ですか？　西門の修練場にいると思いますが……」

ありがとう、と礼を言いヤナギは西門へ駆け出した。

砂利が草鞋わらじと足袋の間に入ってしまった、痛いと感じたが、立ち止まる気にはなれなかった。

王宮は広い。どうしてこうも似た建造物が敷地内にあるのかと不満を洩らす者もいるくらい、様々なものが建っている。

急いでいる時に限って西門への近道である通路が見つからなかったりする。ずっと、この宮内にいる者だったら迷わないのかもしれない。だが、年の大半を戦場か神杷山にある社殿で過ごすヤナギにとって、王宮の勝手はいまだにわからなかった。

仕方なしに庭園からぐるりと東門へ出てから西門を目指した。

いざ訓練所に着いてみると、そこは夕飯を済ました兵たちでこつた返していた。カガミがいないか、せわしなく視線を動かしていると屯所のすみに積まれている角材の上に腰を下ろしているム口を見つけた。

一目散に彼へ近付いていくと、相手もそれに気付き、立ち上がった。

た。

「ヤナギ様」

「ムロ、カガミを知らない？」

ムロの言葉を遮って、開口一番ヤナギは訊いた。

ムロはそれに答えず、無言で背を向ける。

「ムロ……？」

様子がおかしいと思い、そっぽを向いたムロの前へ回り込む。

「……知りません」

彼は一言だけ告げると、ひどく思いつめた顔をして屯所の中へ入っていった。

どうにも様子がおかしいムロを気にしつつ、ヤナギは鏡月池の近くまで来ていた。カガミと話さず、このまま社殿へ戻るのもなんとなく気が引けたが、いないものは仕方ない。池の水で手を洗い、口をゆすいでいると、山菜の入った籠を持ったチズコがひょっこり現れた。

「ヤナギ様、どうかされたのですか」

楊は安堵した。彼女ならば何か知っている気がした。

「チズコ、あの、カガミを見なかった？」

「ああ」

心得たようにチズコは頷き、くちなさいのもじ梶子齋森を指差す。

「つい今しがた、梶子齋森へ駆け込んでいかれました」

ようやく彼のいる方向を聞き出せた。ヤナギは胸に手を当てて小さく頭を下げた。走ったせいで頬が蒸気している。

「ありがとう、チズコ」

まったく、森に入るなら体を清めると口を酸っぱくしていつているんですけど、と彼女は眉を撥ねた。

ヤナギは薄暗い森の中へと足を踏み入れた。

ヤナギはカガミの気配を探りながら森の中を歩く。梶子齋森はヤ

ナギの神経をより研ぎ澄ましてくれる。過敏なほどに全ての息吹を感じる。

カガミの気配は森の神聖な中で浮いていた。？強い生命力？や？体温？を感じようと試みれば、一本の糸が道を示してくれる。

どんどん進む。木の根が剥き出しになっているところでは足元に注意を払いながら進んだ。

まだカガミの姿は一向に見当たらない。

（これ以上進んだら……森を抜けてしまう）

ヤナギの読みは当たった。

黒い大地がヤナギの前に姿を現した。ここが宮殿のちょうど反対側に当たる場所だということはわかるが、この場所へ足を運んだのは初めてのことだった。

遙か昔、この地に蜘蛛の廻廊があったという話は聞いたことがある。そのため戦が起こり、都は一時壊滅状態まで陥ったことも教えられた。

ヤナギは頭を押さえて座り込んだ。立ちくらみと共に、まざまざと戦の情景が浮かび上がる。

赤々とした炎。悶え苦しむ人々。咽^{むせ}び泣く女子供。懸命に戦う兵たち。

『いやよ、やめて。もうこれ以上、この国を痛めつけないで！あなた達の国に、あたしたちが何をしたというの！』

悲痛な叫びが脳内に木霊す。姫巫に代々受け継がれる、記憶^{れきし}。

ヤナギはそれを振り切るために頭を左右に振った。そして、立ち上がる。

左右に広がる青々とした竹林は赤い夕陽に照らされて美しく黄金色に照り輝いている。

わずかなカガミの気配を手繰りながら、竹林の藪^{やぶ}へ分け入る。鋭い葉がヤナギの頬や腕に細い赤線を作ったが、それに怯むことなく彼女は先へと進んだ。

やがて、拯^{しゅうみゅう}溟の花が咲き誇る焼けた竹林の一角に出た。驚くべき

ことに、拯溟の花は水々しく艶めいており、枯れているものはない。奥手にある蜘蛛の廻廊より漂う地下の国々の匂いが、拯溟の花を育てているのだろうとヤナギは思った。

見るも無惨に岩戸に覆われた蜘蛛の廻廊は苔むしており、長い時を経て、ただの過去の遺物となったことを窺わせた。

その蜘蛛の廻廊の前に佇む人影を見つけたヤナギは声を上げる。

「カガミ」

名を呼んでも、カガミは目をやるだけで答えない。

この前と逆だとヤナギはふと思う。

ヤナギとカガミの間にある拯溟の花々が、一陣の強風に吹かれて灰色の花弁を散らす。

ヤナギの長い髪も天へ煽られる。彼女は髪を押さえた。

「先ほど、兵たちの話に？ハルセ？という者の話題が上っていた。

……そなたのことでしょう？」

問いただすヤナギにカガミは何も言わない。

「黄昏国の唯一の希望、神の腕」

ふっとカガミは微笑を洩らした。彼にしては儚げな笑みにヤナギは内心ひやりとした。

「お前のことは前々から戦場で見知っていた」

「え？」

ヤナギは吃驚した顔でカガミを見る。

「直接会ってはいない。お前はいつも高見にいたからな」

カガミは後ろにそびえる蜘蛛の廻廊を塞ぐ岩戸へ手を添える。

「高天原国が生んだ戦女神、姫巫の代替わり。俺は先代姫巫と直接剣を合わせているから、お前の力が先代に劣っていることなどすぐに見抜けた。だから好機だと思ったんだ。力なき姫巫の守る高天原国を内から砕こうと」

カガミは目を細める。

「……………俺を殺すか」

彼は問うた。

ヤナギは即座に首を横に振った。しばしの沈黙の後、ヤナギは再び質問した。

「いずれ、私その事実に通り着くことはわかっていたはずですが、なにに何故、名を教えたの」

「さあな」

カガミはヤナギに背中を向ける。彼の淡い色をした髪が揺れた。それは大層寂しげに見えた。

「……………ム口に怒鳴られた」

唐突な言葉にヤナギは首を傾げる。

「自分は黄昏国の民ではない、高天原国の民だとまで言われた」

カガミは振り向き様、哀しげに微笑んだ。

「俺は高天原国に抗うことが民のためだと思っていたんだ。けれど、それは違った。戦はどちらにも強い禍根を残す」

「はい」

「……………黄昏国が崩壊した時のことを、俺は昨日のことのように覚えていてる」

「崩壊」

ヤナギは復唱した。華鷺彌が言わんとしていることは、代々の巫の記憶の中にもあった。

ふとカガミの表情が曇る。

「十五年前、まず始めに旱魃かんばつが起こった。それが飢饉ききんを引き起こした。その時の荒廃具合は目も当てられぬほどだったさ。そして」

言葉が途切れる。そして、カガミは息を吐き出す。

「そして、十二年前。突如津波が黄昏国全土を津波が襲った。全土だぞ。逃げ場なんてなかった。ようやく津波が去ったと思ったら、王宮にどこからともなく火の手が上がった。悲鳴と泣き声だけが聞こえていた」

掠れた声で、なおもカガミは続けた。

「神の逆鱗に触れたのだ、と識者たちは口を揃えて言っていた。当初は姫巫の力によるものだと思っていたが、よもやこれほどの気象

を操ることなど不可能だと皆結論づけた」

カガミは何も言わないヤナギに目をやる。カガミの目は深い哀傷を浮かべていた。ヤナギの胸が引きちぎれるかの如く痛みを訴える。「……笑いたいなら、笑え。黄昏国が亡国同然になったのは、姫巫との戦が理由ではない。神のせいだ」

「そなたは、怖いのか？」

震える声でヤナギは尋ねた。

「何？」

カガミの片眉が上がる。突拍子もない言葉に驚いているのだろう。ヤナギは恐る恐る思ったことを口にする。

「そなたの心が惑っている。穏やかな日常を壊す権利は誰にもないのではないか。黄昏国は神事によって滅びたのだから、人事によって高天原国を沈めるはまた、神の怒りを買うのではないか。そう、思っているのではないのか」

カガミの中に芽生えているかもしれない怯えを暴く。

カガミは、ふと晒^{ひら}う。

「そうだ、と言えば何か変わるのか」

変わるはずがない、とカガミは一刀両断した。

当たり前だ。本心を明かして高天原国と黄昏国が戦をしなくてよくなるならば、誰も傷ついていないはずだ。

皆、苦しんでいる。

「カガミ、黄昏国が滅びたのは……」

ヤナギは全て知っている。姫巫の記憶は代々受け継がれていく。

黄昏国は姫巫によって滅ばされたのだ。

早魃、飢饉、津波。先代は神に愛されていた。神は先代を愛で、先代の頼みならばと森羅万象を操った。

しかし、それを詳細に伝えることはヤナギにはできない。？姫巫？という縛りが声を閉ざす。

『わたくしの亡き後、高天原国を守れ』

先代から真名で縛られてから早幾年。これほど真実を告げられな

いことに悔しいと思ったことはない。

ヤナギの頬を涙が伝った。

カガミは拯漚の花を掻き分けてヤナギの前に立つ。彼はヤナギの頬を親指の腹で拭った。

「全く、お前はすぐ泣く」

声を押し殺して泣くヤナギをカガミは自分の胸元へ引き寄せた。温かな腕の中に包まれると、酷く安心感を覚える。

睫毛から一滴の涙が零れ落ちた。

夕暮れはいつの間にか夜にすり変わっていた。

「送ります」

「いや、大丈夫だ」

「いいえ、せめて北門まで送ります」

かたくなに言い張るヤナギについてカガミが折れた。

ヤナギは梶子齋森をカガミ一人で帰らせたくなかった。

心が弱っている時に森へ立ち入れば、惑う。常闇洞泉は大きな口を開けて人々を引き寄せる。神杷山へ続く神域へ立ち入ってしまった森を守っている主神が黙おもさねつてはいないだろう。

常人にとって、梶子齋森はあまり好ましい森ではないのだ。神聖過ぎる。修行を積んだ巫でさえ惑う時もある。

それなのに、カガミやヤサカニは気安くこの森へ踏み込んできた。恐れなど抱かずに。

今まで何事もなかったことの方が奇跡だった。

「お前は」

夜らしく鬼火が森を彩る中を無言で歩いていたカガミが、先を行くヤナギに言う。

「俺が高天原国を滅亡させようともくろんでいることに気づいていたはずだ。何故、それを台王たちに言わないんだ」

「わかりません」

素直に答えた。

何故かなど、ヤナギ自身にもわからない。でもどうしても、カガミの死を見たくないと思ってしまう。

ヤナギの後ろを着いてきていたカガミだったが、剥き出しの木の根を飛び越えてヤナギの前に着地した。細い糸のような繊細な髪が宙に舞い、月明りに仄かに照らされる。

彼は手を差し出した。

「……今にも転びそうだ」

ヤナギはそつと手を伸ばした。それをカガミは力強く、しかし優しく握りしめる。まるで、消えて壊れることを恐れるかのように。自分の手を引くカガミの背を見ると、ヤナギの心は柔らかくなった。

そんな二人を鬼火が導いていた。

「ここまででいい。ありがとう」

鏡月池の前に着き、ようやくカガミはヤナギの手を解放した。少しだけ汗ばんだ右手を左手で包み、ヤナギは頷いた。

手をひらひらと振り、踵を返そうとするカガミだったが、ふと池の方を見た。橘の木で囲まれてはいるものの、池が淡く発光しているはすぐにわかった。

橘の木の隙間より池を覗き見るカガミにヤナギも倣う。

「……………剣？」

水面下に剣の姿があった。白く耀くその刃は月を思わせる。

ヤナギは思わず後ずさった。

剣が、まるで主に巡り合ったかのように、高い音で啼いた。

ヤナギはぐつと表情を引き締めて橘の木の間より中へ滑り込んだ。そして池に手を入れる。小さな漣が起き、薄く湯気が立つ。

お止め。

制止の声がヤナギの全身を駆け巡り冷や汗がこめかみを伝ったが、

彼女は勢いよく剣を引き抜いた。

「ヤナギ、それは……？」

カガミは驚いた様子でヤナギと剣を交互に見ている。

ヤナギはひたと自分が握っている剣を見た。柄に刻まれた花と竹の絵。端には見事な玉が嵌め込まれている。その青い玉がまた啼いた。ヤナギはすぐさま池へまた手を入れて鞘を引き抜く。そして、黒々とした鞘にその剣を収めた。

「これは、つきみずかがみのみつね月水鏡剣」

ぐいとヤナギは剣をカガミに押しつけた。

「もし、これから先。行く手を阻む……どうしても斬れないものがあつたらそれで斬って」

カガミは手渡された剣を慎重に吟味し、何も問題ないと判断したのである。

「俺に斬れないものはないが、とても美しい剣だ。ありがたく頂戴しよう」

と快活に笑い放った。

彼の表情と一転し、ヤナギの面持ちは暗かった。

西門の屯所前で待ち構えていたム口はカガミの前に仁王立った。ようやくの帰還に苛立ち募る。

呪いによる体の不調もさっぱり治まっていた。

「ヤナギ様にあまり近づくな」

チズコからヤナギがカガミを追って梶子齋森へ入ったことを聞き及び、いても立ってもいられずに夕飯を素早く掻き込んで、カガミの帰りを今か今かと待っていた。

「指図される覚えはない」

「俗世の者がおいそれと近寄っていいお方ではないんだつ。お前は気さく過ぎる」

ム口は憤る。その言葉にカガミは皮肉げに笑った。

「ヤナギはそれで幸せなのか」

「何だと」

からかうでもなく、カガミは真剣な面差しを見せる。

「お前は、姫巫としてのヤナギを守りたいのか」

「そんなことはっ」

「だが、お前の言を聞いていると、そうとしか捉えられない。神聖な存在だから近寄るな、と」

「それは……っ」

違う、と言い切れなかった。

カガミはム口到手厳しく言う。

「あいつが心を許している数少ない者の一人であるお前がそんな考えだと知ったら、さぞ悲しむだろうな。姫巫、姫巫と。絶る者たちとお前も一緒なのか」

「言葉が過ぎるぞ！」

ム口は叫んだ。もうこれ以上追い込んで欲しくなかった。

カガミは拳を握り、下を向くム口にすれ違いざまに言う。

「今、ヤナギは幸せなのか」

「……え？」

「戦の間隔がどんどん狭まっている。国を守るために戦へ赴き、怨^え詛^{んそ}の血潮を体中に受け。そんな最中で、あいつは幸せなのか」

「それは」

そのようなこと、考えたこともなかった。

先刻の戸惑いはどこに行ったのやら、カガミはいつもの余裕を取り戻していた。彼の瞳に揺らぎは見当たらない。

「ヤナギのことを守りたいのなら、ヤナギがお前の希望ならば、全力を賭してヤナギの想いを考えるんだな」

「……っ。貴様に説教される覚えはないわ！」

屯所内に戻ろうとするカガミの胸ぐらを掴んだ。必死に言い返そうと言葉を練ったが、良い切り返しが出てこない。

胸ぐらを掴まれても平然とした面持ちでカガミは言葉を紡ぐ。

「最近、とんとあいつは笑っていない」

今度こそ本当にム口は絶句した。

カガミは乱雑にム口の手を払い、左腕に抱えていた剣を抱え直すと屯所の妻戸を開けた。

三章 幽明

微かな灯火が今、掲げられようとしている。

わずかな希望の光が暗鬱なる大地を黄金色に染め上げる日を、ヤサカニは待ち望んできた。

己の左目左耳が失われてから早幾年。

ヤサカニは冴え渡る高天原国の空を見上げ、嘆息する。

祖国である黄昏国ではついぞ見ることの出来ない蒼天。それは美しすぎてやるせない気分させる。

「戦はまた、全てを無に還すだろう」

人知れず彼は呟いた。

戦いの向こう側にあると信じてきた未来。それは非常に曖昧で、頼りないものでもある。

ヤサカニの心は揺れていた。

かの忌まわしき姫巫は言った。

「私を殺して」と。

殺してしまえば良かったものを、と今更ながらヤサカニは後悔していた。

たとえ力ガミから怒りを受けたとしても、殺されたとしても、そうすることが最善だったように思えてならない。

彼女は死を望んでいた。最も神に近く、世を意のままに操ることが可能であるはずの彼女は、暗い暗い深淵の海に一人佇んでいるようだった。

いつそのこと、殺してやった方が姫巫のためだったのだろうか。

近頃、ヤサカニはよく考える。

今となつてはもう彼女を手にかけることは難しいだろう。何も彼女のことを知らないままであったなら殺せただろうが、彼女のことを知りすぎた今、刃に躊躇いが生まれるのは間違いなかった。

姫巫はこうも言った。姫巫などいない方が幸せなのだ、と。

「幸せ、か」

憎悪と憤怒の中で生きてきたヤサカニには、まだわからない平和という幸せ。

それは目に見えなくとも、確実に凍りついた心を和^{やわ}すものだと言父は常々言っていた。

ヤサカニも、心の安寧を望んでいる。

いつか穏やかな世で、皆と笑い合いたいと思っている。

だが、？皆？とは誰のことだろう、と一抹の疑問が胸に過ぎる。

その問いは解いてはいけない。彼にもそれはわかつていた。

いつまでもこの高天原国での生活は続かない。終焉はやって来るのだ。

ヤサカニは瞑目し、風の音に耳を澄ました。

どこからか子供達の笑い声がする。

後に、躊躇ってでも彼女を殺しておくべきであったと彼が悔やむことになるうとは、誰が予測できたであろうか。

海が見える。

虚の果てにある暗き海。そこには生命の息吹は感じられず、ただ
儼かな静寂が横たわっている。

ヤナギは飛び起きた。

こめかみに大粒の汗が伝う。それを拭って、彼女は膝を抱えた。
麻で織られた薄い掛け布を握りしめる。

体が小刻みに震える。

このところ、夜毎魘される回数が増えていた。

原因はわかっている。

(つきみずかがみのみつるぎ
月水鏡剣を手放したからだ)

頭に直接響いてくる声たちは、どれもがヤナギを咎め立てするものである。

どうしてあの剣を、あやつにやった。

そなたに姫巫である資格はない。

何のためにお前が在ると思っている。

ヤナギは胸を押さえながら唇を弓形に歪めた。

「後悔など、してないわ……」

袂りとるような痛みが脳に走る。

木戸を叩く小さな音がした。ヤナギは霞む目で木戸の方を見やる。
しずしずと戸が開いた。

「ヤナギ様、気が乱れておいです」

「……チズコ」

チズコは神妙な面持ちでヤナギの肩を押した。

「取りあえず、目を閉じて下さい」

言われたとおりにヤナギは瞑目した。闇が心地よい。

聴こえるはチズコの息づかいと自然の囁き、それだけ。

神経が緩まる。チズコが言霊を発して空気を和やわしたのだ。

ヤナギの前髪をチズコが掻き上げる。彼女の口より細い溜め息が洩れた。そして、静かに采女うねめの部屋へ戻って行く。

人のぬくもりが遠ざかる。

完全にチズコの気配が室近くより消え去ると同時に、のそりとヤナギは起き上がる。

「……………海が……………」

呼んでいる。手招きしている。

その海に行かなければならない。？あの場所？は自分を待っている。

ヤナギは両の掌を合わせ、視線を手と手の間の一点に集中させた。髪が浮き上がる。ふっと体内の循環が止まる。大気にヤナギの姿が溶け出す。

忽然と、ヤナギは寢室より姿をくらました。

ヤナギは記憶の中に鮮烈な印象を残している海を捜し求め、梔子くちなしの森さいのもりを徘徊していた。

やがて、とうとうと流れる水音が近くから聞こえてきた。人形の目さながらの感情がない瞳で、ヤナギは目の前に広がる常闇洞泉とこやみどうせんを見つめる。泉には数多の蓮が咲き乱れている。

ヤナギは誰かに引つ張られているかのように泉の中へ体を滑らせた。腰の辺りまである水がヤナギの体に反発して波立つ。

ぬかるむ水底みなぞこを気に止めるでもなく、彼女は滝壺の方へ歩いていく。

「……………」

決死の形相でヤナギに向かって叫んだのはカガミであった。

ヤナギの鼓膜や網膜はふやけてしまったのか、上手く彼を認識できない。ヤナギは止めていた足を再び動かし、常闇洞泉の滝裏へ入って行った。

自分の呼び声はヤナギに届かない。

まさか、と思った。つい先ほど見た悪夢と同じ光景に戦慄を覚える。

カガミは嫌な夢を見た。ヤナギが真つ暗い穴に包まれ、自我を喪失する夢を。常ならば夢など気にも止めないのだが、不気味なほどに生々しさを感じて梶子齋森へ踏みいった。

すると、このざまだ。

カガミは黒き泉を注視した。惑う者を誘う常闇洞泉は大きく口を開いている。

カガミは舌打ちし、勢いよく水の中に入った。

じんとした冷たさが体の芯を震わせる。だが、立ち止まっている暇はなかった。ヤナギは常闇洞泉の向こう側へ行こうとしている。

滝の隙間からわずかにヤナギの後ろ姿が垣間見える。

「待てと言っているだろう！ 止まれ、ヤナギ！」

懸命に叫ぶが、ヤナギは振り返りもしない。

滝壺の裏側へ辿り着いた。一気に岸に上がり、水を吸って重量を増した衣類の端を絞る。

光はない。

洞窟内に響くのは、カガミの荒い呼吸音と滝の落ちる轟音のみだ。少しだけ奥へ進むことをためらったカガミだったが、拳をぐつと握って走り出した。

鍾乳洞内部は長い時を経て両脇に水晶を形成しており、うっすらと発光している。

「ヤナギっ」

名を呼ぶ。何度も、何度も。

かりそめの名を。

全力で追いかけて、洞窟を抜けた数歩先でヤナギの肩を掴んだ。
そして、驚きに言葉を失った。

ヤナギの肩越しに見えた景色は深い闇と暗い海だった。浮世離れたその風景に息が詰まる。

風の啼き声がする。海の唸り声がする。

沈黙し、じっと佇んでいたヤナギが手を伸ばした。すると、どこからともなく薄い白に色づいた、たくさんの手が現れた。それはヤナギに向かって一直線に襲いかかってきた。

「くそっ」

カガミは、白い手たちがヤナギに襲いかかるのを見て、彼女の手を反射的に引いた。ヤナギはカガミに倒れかかる。

はっと、ヤナギの両目に光が戻る。我に返ったのだろう。

ヤナギは恐々と面を上げた。

「カ、ガミ。ここは」

「答えている暇はない。早々に立ち去るぞ」

身を翻して来た道に戻ろうとする二人に、なおも白い手は追いついてくる。ヤナギは小さく悲鳴を上げる。

カガミの眼が怒りを灯した。

「還れ」

魔を破る矢のとき一声によって、白い手はゆるゆると力を失い、次第に海へ消えていった。

ヤナギの鼻先に水滴が落ちた。

二人は無言で洞窟に戻る。その途中で、ヤナギはようやくここが常闇洞泉の中だと気がついた。

段々と状況が鮮明になってきた。自分は夢遊病のごとく、ここまで来たのだ。自身の行動に恐れが湧いた。

それと同時に、このような忌み場所とも言える場所へわざわざ足を運んだカガミに疑問を持った。

ヤナギの手を握り、先に行くカガミが声を発する。

「二度と、ここへは近づくな」

「……何故？」

「常闇洞泉は、危険だ」

立ち止まったカガミはヤナギの方に向き直り、神妙に眉根を寄せ
る。

「ヤナギ、お前も見ただろう。間違いない。あれは亜空間だ。大気
も次元も何もかも捻じ曲がっていた。……紛れもない、あれこそ真
の神域、常世だ」

言い捨てると彼は前を向く。真っ直ぐに、浮世に向かつて。

滝は轟音を立てて水面へ落ちる。飛沫は無数の泡を生み出し、辺
りの空気を冷やす。

カガミは躊躇いもせず泉の中に飛び込んだ。瞬く間に彼の全身が
濡れていく。

ヤナギは躊躇っていた。行きは本能のままこの滝を抜けたのだ。
理性があると、どうしても人は躊躇いを覚えてしまう。

カガミは振り向きざまに、強い力でヤナギの腕を引いた。均衡を
崩してヤナギは足を滑らせる。水に落ちると思って目を瞑ったが、
それは杞憂に終わった。

一瞬の間に、ヤナギはカガミの腕に包まれていた。彼はヤナギを
抱き上げていたのだ。

自分のものでない体温と鼓動に、当惑する。

「何を……！」

恥ずかしさに足をばたつかせるヤナギと打って変わって、カガミ
は澄まし顔でヤナギを見下ろす。

「濡れるのが嫌なんだろう」

頬が熱い。ヤナギは顔を両手で覆う。

「恥ずかしい」

「何も恥ずかしくなどないだろう」

カガミは大腿で泉に分け入る。カガミが動く度に水が撥ねてヤナ

ギの装束の裾を濡らした。

常闇洞泉は意外にも大きい。

到底、数歩では岸边に辿り着けなかった。

「……どうして私がここににいるのがわかったのですか？」

もうすぐ岸边に着くという時、ヤナギはカガミへ言葉を投げた。

彼は足を止める。

カガミはヤナギを抱え直す。

泉を取り囲むあまたの鬼火がカガミの顔を照らし出した。下から仰ぐように見た彼の顔は美しかった。

「夢を、見た。お前がこの洞泉の中を抜ける夢を。それがあまりに鮮明だったから、まさかとは思ったが一応ここへ来てみた」

先見だ。^{さきみ}

カガミは占手の血を引いているのだろうか。だが、そんなこと訊いたこともない。

「不思議な人」

首を傾げて、ヤナギは呟いた。

カガミが現れてから、何故か心が揺れる。不快な揺れではなく、感情の揺れのような。

「……響くは始まりと終わりを告げる、宿運^{とき}が関^かの声」

ざわり、と肌が粟^{あわた}立った。頭の芯がくらくらする。

ヤナギの異変に気づいているのか気づいていないのかはわからないが、カガミは微笑んだ。

「古代史に残る、有名な一節だ。決して報われぬことのない焦がれんばかりの想いを宿した者が詠んだ歌」

カガミの顔がヤナギの目と鼻の先に迫る。視線を剥がせない。

カガミの長い睫毛が伏せられてヤナギの頬に一つ、口づけが落とされる。

ゆつくりとカガミは唇を外した。

「俺たちの間にあるは、宿命のみだな」

少し寂しげにカガミは呟く。

「あ……」

口づけに驚いて、ヤナギは二の句を繋げなかった。一閃の記憶が脳裏を掠める。

何か、大切なことを思い出しそうになる。だが、どこから思い出しているかないという声も聞こえる。

「ヤナギ、お前は」

カガミが言いかけたことは、草木を掻き分ける大きな音によって立ち消えた。

カガミの腕に力がこもる。真夜中に梶子齋森へ来る者は少ない。緊張が走る。

「ヤナギ様！ ヤナギ様！ お返事を……！」

血相を変えて目の前に躍り出たのは、チズコだった。突如姿を消したヤナギを探して彼女は梶子齋森を駆けずり回っていたのだ。

カガミは安堵の溜め息を吐き、足早に岸に上がる。

ヤナギは慌ててカガミの腕から滑りおりる。

「チズコ、ごめんなさい。勝手に抜け出してしまって」

「あ、ああ……」

チズコは半ば泣き出しそうな顔をして、ヤナギの装束の裾に顔を埋めた。

「夢でああなたが何者かに攫さらわれるところを見ました」

彼女もまた、カガミと同じように不吉な夢を見たのだった。

チズコの乱れようにヤナギは慌てふためき、カガミは苦笑した。

「さすが占手の血を引く娘だな」

賞賛の言葉を贈るカガミに向かって、チズコは深々と頭を下げた。
「カガミ様。貴方様がヤナギ様を救って下さったんですね。本当に、本当にありがとうございます。本来ならば、それはわたくしの役目だったにも関わらず、貴方様はその役目を担ってくれた。ヤナギ様に対する常世かみの誘いを退けてくれた。何とお礼を申し上げたらいいか」

「よせ、礼など要らない。取り敢えず、寢所にヤナギを連れて行っ

てやってくれ。俺は一人で帰れるから」

「はい。では、お氣をつけて」

再び深く礼をしてチズコはヤナギの手を引く。

カガミを一人で帰したくはなかったが、ヤナギに見つからぬようにこっそり涙を拭うチズコに向かつて、「カガミを送ってから帰りたい」という我が儘は言えなかった。

ヤナギは振り返り、カガミに小さく「ありがとう」と呟いた。

ヤナギとチズコは手を繋いで神しんはやま杷山へ戻る。

二人の姿が見えなくなるまで待つてから、カガミは横にある木の裏をひよいと覗き込んだ。

そこにはヤサカニと仏頂面をしたム口が座り込んでいた。

「……お気づきだったのですか」

ヤサカニのぼつの悪そうな顔を見てカガミは頷いた。

「気づいていたならば、さっさと声をかければいいものを」

そう言い、忌々しげにム口は舌打ちした。

「すべて、見ていたのか」

慎重にカガミは訊いた。どこからどこまで彼らが見聞きしていたのか、正確なことが知りたかった。

「はい」

ヤサカニは歯切れ悪く答え、話し始めた。

「常闇洞泉に魂が流れ込むのを見ていたら、突然ヤナギ様が現れたので動揺してしまって。反射的に木の陰に隠れました。そうしたら、間髪いれずカガミが来られて、ヤナギ様と一緒に中へお入りになつてしまったので。お二人とも常闇洞泉に入ってしまったら出てこなかった。だから、急いでム口を呼んできて突入しようとしていたら

」

「俺たちが出てきたというわけか」

言葉を引き継いだカガミに向かってヤサカニは、あいまいに笑む。

「出て行く瞬間を逃してしまいました」

ヤサカニは頭を掻いた。カガミは、そうか、とだけ言う。

「……ヤナギ様を泣かせて、驚かせて、助ける」

ム口はカガミを睨んだ。

「お前が一番わからないし、不愉快だ」

殴り殺さんばかりの目をカガミに向けるム口を、カガミは一蹴した。

「子供じみた嫉妬だな」

「馬鹿なことを！」

ム口はむきになって喰ってかかった。

ヤサカニはそんなカガミのからかいに肩を疎^{すく}める。

三人は帰り道、ずっと軽く言い合いをしていた。しかし、常闇洞泉の奥に何があったかはついぞ話題にのぼらなかった。

玉のような兵たちの汗が飛び散る。

西門兵は朝夕二回、武官長であるム口の指揮のもと修練を行なう。怠る者は誰であれ、それなりの追加訓練を受けさせられるので誰もが一心不乱に槍や剣を振っていた。

日頃の訓練時の団結具合が実際の戦での的確に動けるかに直結する。西門兵たちは肉体的な訓練以外にも戦略や軍略も学んでいる。

それはム口の強い意向だった。彼が武官長となってから、着々と西門兵は力をつけてきた。戦での武功は西門兵に注がれる。

ム口は兵たちの力不足によってヤナギを傷つけたくなかった。

ム口は剣を打ち合う兵たち油断なくを見ていた。

「武官長」

ふいに、寄りかかっていた木材の横手より、門番の男が顔を覗かせた。

「どうした」

「いえ、いつもの商人の男が武官長に、と」

男は馴れた調子で小さな皮袋をム口へ差し出す。

「そうか。ありがとう」

ム口は男が去ると、いったん訓練場より離れて忌み部屋の裏側に足を運んだ。そして、門番の男より渡された玉を太陽の光に透かし見る。彼は皮肉げに笑った。

「終いだ」

格子越しにも、外が人で賑わっているのがわかった。

「やけに外が騒がしいね。ヤサカニ、ちょっと様子を見てきて」

クルヌイの頼みにヤサカニはすぐさま頷き、外へ出る。

「一体何があつたんだろ」

「大方、武官同士のいざこざを皆が見物しているのでしょう」

「はは、そうですね。有り得る話だ」

部屋に残った王子の近衛兵たちは談笑する。

「……………」

カガミの胸に、嫌な予感が過る。

しばらくして、大きな音を立て八榮爾が戸を開く。顔が真っ青だった。

「どうだった」

問うクルヌイに、ヤサカニは絞り出すような声で言った。

「沢良宜（むら）の東方にある邑（むら）の男が引つ立てられてきていました。その男は先ほど兵が目を離れた隙に自害を図り、絶命したようです」

ヤサカニの言葉にクルヌイは顔をしかめる。

「それはまた物騒な。その男、何をしたの」

ヤサカニの唇はかさついていた。

「男は、黄昏国（たそがれこく）の者で……高天原国の内情を密かに探り、内から破くことを画策していたとのことです」

どよめきが起きる。

素早くカガミとヤサカニは視線を交わす。ヤサカニは頷く。

カガミたちの仲間が捕まったのだ。

カガミは目を細め、眉根を寄せた。

おかしい。

もとよりこうなるかもしれないことは予想していた。だが、何の前触れもなしというのがカガミは気にかかった。

「可哀想に」

クルヌイは沈痛な面持ちで言った。

「まだ何も咎（とが）はしておらぬのに。策を練ったというだけでこれほど大げさになるとは」

誰も頷かなかった。

「詳細は」

西門にある寢所に向かいながら、カガミはヤサカニに聞いた。

「は。沢良宜の邑に潜入していたサクサが妻を娶っていたらしく、その妻に計画を吐露してしまったようです。彼は先ほど何も吐かずに自害したと聞き及んでいます」

計画が露見した理由はあえないものだった。潜入した邑の女に惚れて結婚した男が、女に寢所で計画を漏らしてしまったから。具合の悪いことに、女は邑の長の娘だったという。

「そのような事態を防ぐために二人一組として送り込んだというのに、マクは何をしていたんだ。大体、その報告が届いていないんだ」
「それは私にもさっぱりわかりません。マクの訃報を知らせる密書は届いてない……」

あ、とヤサカニは言葉を止めた。カガミは怪訝げにヤサカニの顔を見る。

「どうした。何か思い当たる節でもあるのか」

「……数ヶ月前、ム口武官長が私の目前で玉を割られたことがありました。その後は密書がきちんと届いていたので多分ム口武官長はそれが何か知らずに牽制してきたのかと思い、頭の片隅にとどめて置いたのですが」

「何だかつ、ム口が？」

その時、一人の少年が二人の前に現れた。

カガミとヤサカニ相手に気配を消せる者などたかがしれている。

二人は厳しい眼差しで少年を見た。

少年　ム口は唇を動かす。

「マクはやはり病で死んだ」

はっとカガミは息を呑んだ。

「バシヨウは危険を察して、カガミたちだけでもすぐさま黄昏国へ帰還するよう玉に込めた」

ヤサカニも目を見開いた。

ム口はおもむろに麻袋を突き出し、それを下に向けた。ばらばらと幾つかの玉が零れ落ちる。

「黄昏国に伝わる古代文字。それを俺が読めたことが運のつきだったな」

カガミたちは何かしらの動きがあった時、高天原国の者に悟られぬよう玉に古代文字で密書を込めてやりとりする取り決めを交わしていた。

「報告が来ないと思っていたら、やはり握りつぶされていたか」

重要な知らせは全てム口が握り潰していたのだ。カガミは唇の片端を上げた。

「さすが、この国の礎を守る者だ。だが、それならどうして俺たちを捕らえない。台王や王子の危機が迫っているやもしれんぞ」
カガミの挑発にム口は憂鬱げな顔をして、何も言わずに去ろうとする。

ヤサカニがム口の喉元に短剣を突きつける。

「答えろっ」

ム口は冷めた目線をヤサカニへ送る。

「隻眼の男など、赤子のようなもの」

ム口は素早くヤサカニの右ひざを蹴った。激痛に襲われたヤサカニはうずくまる。

ム口は何も言わずに去る。その後ろ姿は近寄りがたさを感じさせた。

カガミは目を細めた。

ヤサカニは蹴られた右ひざをかばいながら立ち上がる。

「あいつ……何か策を練っているのでしょうか」

「いや」

ム口の中にあるためらいをカガミは見抜いていた。

「ム口の中に、迷いが生じている。あいつは俺たちのことを誰にも教えないはずだ」

ヤナギを傷つけない限り、と最後に小さくつけ加えた。ム口が行

動の全てはヤナギを起因としている。

「カガミ様、お言葉ですが。それは考えにくいかと」

ヤサカニの反論に、カガミは片眉を上げる。

「何故だ？」

「ムロは高天原国の武官長。私だったら、もしもこのような事態になればすぐにでも首謀者を引っ立てます」

「……………鍵はヤナギが握っている」

カガミは断定した。

「ヤナギが俺たちを信じたからこそ、ムロは手出しをしてこれなかった。ヤナギのおかげで三年も命拾いしたな」

「本当に、あなたは飄々《ひょうひょう》とおっしゃる」

青ざめてヤサカニは天を仰ぐ。夕闇に紛れて満月が顔を出す。

「明日から拷問が始まります。我々の名を同胞が口にすれば、我々は磔の刑にされて確実に黄昏国は滅ぼされてしまう」

「ヤサカニ。何を今更」

カガミは不敵に笑った。

「こうなるかも知れぬことは、この国へ辿り着いた当初から予期していただろう」

押し黙るヤサカニにカガミは背を向けた。

見上げた空にはいつの間にか満天の星が広がっている。それにカガミは手を伸ばし、拳を握った。

目を背けなくなる光景、とはこのような光景のことを言うのだらう。

地獄だった。

阿鼻叫喚の叫びが上がる。

ぞくぞくと、カガミの同胞たちが忌み部屋へと引っ立てられてきた。一つの綻びは、全てを壊す。おのおのの村に台王は兵を派遣し、出自の怪しい者を厳しく洗い出した。その中でも今回の騒動に関わ

りがある可能性が非常に濃厚な者たちは有無を言わず都へと連行された。

内部崩壊を企む者たちの存在に台王はたいそう立腹しており、早く首謀者の名を吐かせて火にくべろと言って聞かなかった。

それを涙を浮かべて諫めるのはクルヌイだけで、他の者は台王の意向に賛同していた。

こうして、拷問が始まった。

東門兵は太い棍棒で男の背中をあらん力で殴打した。男は小さなうめき声を上げて血を吐く。

背中には無数の傷と血が滲んでおり、肉が見えていた。

「言えつ。首謀者の名を言えば、貴様たちは黄昏国に送還してやると台王が仰っていたぞ。意識がなくなる前に、さっさと吐くんだ」

「は……。そう言つて、わたし達を皆殺しにするのだろう」

なお抗おうとする男に、東門兵はさらに一発を加える。

「バシヨウ！ やめろ、やめてくれえつ」

「あたしが代わるから！ お願い、バシヨウが死んじまう……」

忌み部屋のすみに縛られた他の罪人たちが声を枯らして泣き叫ぶ。拷問の役目を授かった総勢五名の兵たちはそれを面白がつて笑う。

東門兵や南門兵らは、忌み部屋にいる者を人と見ていなかった。

カガミは忌み部屋の入り口付近で、じっとそれを見ていた。ちらりと横目でヤサカニを見やると、彼は手足を竦ませている。

カガミとヤサカニの二人も拷問の役目を授かっていた。クルヌイはそのような穢れた役目を二人に課すことには反対だと拒否したが、台王と側近は強引にそれを取り決めた。高天原国を裏切れば明日は我が身だと思い知らせたかったのだらう。

「ほら、お前らもぼうつと突っ立ってないで、叩け」

兵たちがカガミたちに棍棒を渡す。

「……あ……俺は……」

ヤサカニは身を震わせて棍棒を取り落とした。そして、戸口を開けると走り去った。

「ちつ。やはり黄昏国出身の者は駄目だな。血が腐っている」
言いながら、兵たちはバシヨウを打ち続ける。悲痛な叫び声が響く。

兵たちの目は尋常のものでなかった。狂気の瞳。それをカガミは腕を組み、壁にもたれかかって冷めた目で見つめていた。

「ムロ武官長も、このありがたい役目を辞退されたと聞いた。それに触発されたかは知らんが、西門兵は誰もが頑なに役目を拒否したらしいじゃないか。首謀者の名を吐かせた者には、たと褒美を与える」と台王が仰せであるのに」

一人の兵は笑いながら入り口に佇んだままのカガミに声をかけた。
「カガミ、おまえもまさか、棒立ちのままいる気か」

そう言われ、床に這いつくばって必死に息をしている男の目の前にカガミは立った。

顔を赤黒く腫らしたバシヨウの^{すが}縋る目がカガミとかち合う。

カガミは顔色を変えずに彼を打つ。

「言え」

冷淡に命令し、更に打つ。

嘲笑が上がる。東門兵や南門兵たちは黄昏国の者同士が対峙するのを面白がっているのだ。

バシヨウは息も絶え絶えにカガミを見据え、言った。

「……われらは、誓って、同志を……売りませぬ」
再び嘲笑が起こる。

「馬鹿め！ 貴様らの仲間は今頃我先に逃げ出しているだろうに！
そのような者をかばうなど、さすがは黄昏国の者だな」

そう言うと、兵たちはバシヨウを取り囲み、いっせいに打ち据えた。

「……………」

拷問は何時間にも及んだ。

それでも彼はカガミとヤサカ二の名を吐かなかった。

「明日はその太ったおまえの番だからな」

そう言い残して兵たちは忌み部屋を出ていく。一人ずつ折檻^{せつかん}することによって、恐怖を植えつけようとしているのだ。
カガミたちが忌み部屋から去る際、バシヨウの目から一筋の涙が伝った。

ヤナギは一ヶ月の間、沢良宜さわらぎの豊穰祭へ駆り出されていた。神聖な儀式を執り行つたために、姫巫は戦以外にもよく駆り出される。祭のために、姫巫の補助として巫数人と采女うねめも駆り出された。

豊作を願う儀式は一ヶ月かけて無事に終わった。

ようやく戻ってきた街中には、不穏な噂が充満していた。黄昏国たそがれこくの者たちが捕らえられたという噂だ。

（もしかして、カガミたちが……？）

ヤナギは急ぎ王宮へ馬を走らせた。側に控えていたチズコも慌てて馬を急がせる。

台王への報告もほどほどに、ヤナギは忌み部屋の近くまで行く。カガミたちが捕らえられているわけでないことはわかったが、気がかりなことに変わりなかった。

「ヤナギ様、これ以上はお近づきになりませんよう」

そう言つて、忌み部屋の見張り兵たちはヤナギを部屋へと近づかせようとしない。どんなに懇願しても追い返されてしまう。

「何故？」

切迫した声で訊くヤナギを、兵たちも困憊こんべいした様子で諫めるいさ。

「穢けがれが移つてしまいます。血の穢れは最も強く、残りやすうございます。戦場で受ける穢れは仕方ないにしても、自らすすんで穢れを受けに行つてはいけません」

なおも、引き下がろうとしないヤナギの肩をチズコが押さえた。不承不承、社殿へ戻ろうとしたちょうどその時、クルヌイとカガミが通りかかった。都の視察帰りなのだろう。簡素な衣服を身につけている。

ヤナギはふかぶかと礼をするカガミに詰め寄つた。クルヌイもチズコも、その様子に驚いたようだった。

「誰も息絶えたりしていないでしょうね」

忌み部屋。その部屋に入れられた者が生きて部屋から出られる可能性はほぼない。

それでも、聞かずにはいられなかった。

一ヶ月ぶりに会ったカガミは少しやつれていた。うつすらと目元が暗い。

「……ああ。だが」

「カガミ、それ以上は言ってはいけない」

クルヌイはヤナギの質問に答えようとするカガミを制した。

ヤナギはクルヌイを睨めつける。

「クルヌイ王子。私はこの国の姫巫です。たとえ王子であっても、私に隠し事をするなど許されませんよ」

普段とは打って変わって強い口調でヤナギは言う。クルヌイもカガミも生唾を呑む。しかし、王子は頑として何も教えなかった。

嫌なものを察知したのだろう、チズコはヤナギの袖をひっぱり社殿へ帰らせようとする。

しかし、ヤナギはそのまま皆の制止を振り切って忌み部屋へ向かい出した。

鼓動が速まる。

妻戸に手をかけ、一気に開け放つ。

「いけない、姫巫！ 今中では拷問が行われて……！」
クルヌイの声が遠い。

ヤナギの目に飛び込んできたのは一人の女だった。

その女はだらしなく男にしながらかっている。彼女は虫の息だった。

「ひ、姫巫様……！？」

戸口横にいた数人の兵たちが慌てた様子でどよめく。

ヤナギは懐に入れていた短剣を握りしめ、思いきり兵に向かって振り下ろした。悲鳴が上がる。

兵の耳のすぐ横に短剣を突き立てた。ヤナギは言い様の無い怒り

に齒軋りする。

「高天原国の恥めつ。……今すぐ出ていけ！」

這うように我先にと兵たちは忌み部屋から逃げ出ていった。

「ヤナギ様！」

「ヤナギっ？」

「近寄らないで！」

異変に気づいて忌み部屋に入ってこようとするチズコやカガミたちを一喝する。

ヤナギは巫力を使って忌み部屋の周囲に結界を張った。

女の様子はすさまじかった。衣服は破れ、艶めかしい肌があらわになっている。何度も何度も凌辱りやうじゆくされたと一目でわかる。抵抗した際につけられたのか、額から鼻先にかけて切り傷があった。傷は浅くもなく、深くもない。しかし、確実に跡が残る傷だった。兵たちはそれを楽しんでつけたのかと思うと怒りに身が引きちぎれそうになる。

女が閉じていた瞼を開けた。その目は焦点が合っていない。彼女は細い指で男の頬をなぞった。安堵の笑みを浮かべる。

「ハ……ルセ……さま」

「喋るなっ」

男 ヤサカニは女を仰向けに寝かせて、必死に薬草を胸元につけている。

「くそつ。血が止まらない」

「ヤサカニ……。その、人は」

「……………出て行ってください」

震える声でヤサカニは言った。

「でも…………」

「出ていけ！ 穢れが貴女にまで移ってしまう」

こんな時にヤナギの身を案じてくれるヤサカニに胸がしめつけられる。

忌み部屋の奥に目を転じれば、縄で縛られた男たちが声を押し殺

していない。彼らは一様にヤナギを睨んでいた。

ヤナギは少しだけたじろいだが踏みとどまり、ヤサカニが持ってきたと見られる薬草箱を漁る。目当てのものはすぐに見つかった。ヤサカニが女に押し当てているものとよく似た形状をした薬草。

ヤナギはヤサカニの横に座ると、血が流れ出ている女の腹に薬草をあてがった。

「血止めの薬草はこちらよ」

「ヤナギ様……」

救いの神を見る目でヤサカニはヤナギを見た。ヤナギは頷くと、女の状態を見る。

「……肋骨が折れている。添え木を」

「こちらに」

ヤサカニのものではない声に振り仰ぐと、そこにはチズコがいた。ヤナギは驚きつつも添え木を受け取る。

「そなたには私の力、効かなかったの？」

ヤナギは女に応急処置を施しながらチズコに訊いた。

チズコはにつこりと笑った。

「わたくしも、こう見えて巫修行は積んだのです。術の抜け道も知っております」

自分の術が破られたことに少々むっとし、ヤナギは「そう」とだけ呟いた。

手早く処置をすませ、女を端にあった藁の上に寝かせる。女の青ざめた顔色に幾分か色が戻った。

ほっと息を吐き、立ち上がるうとするヤナギをヤサカニの手が止めた。彼の右目は潤み、揺れている。

「二人とも、すまない」

か細く吐き出された言葉にヤナギは思わずヤサカニを抱きしめた。彼の体は冷たい。今にも凍えて消えてしまいそうな彼が、幼子のように感じた。

「大丈夫、大丈夫よ、ヤサカニ」

そう言つて、ヤナギはヤサカ二の頭を撫でる。

ヤサカ二は顔を伏せる。ヤナギの肩にヤサカ二の熱い涙が滲む。
ようやく落ち着いたヤサカ二はヤナギに非礼を詫び、立ち上がった。

ヤナギとチズコの知識と力で女は一命を取り留めた。

ほつとして忌み部屋を出るヤナギに怒りの形相をしたカガミが近寄つてきて、彼女の手を取った。

「ヤナギに楔を。鏡月池のきようげついけ一帯の人払いを」

「ではわたくしが連れて行きます」

申し出たチズコにカガミは首を横に振る。

「いや、俺が行く。お前も忌み部屋に入つたから血の穢れが染みついている。さあ、早く」

半ば引きずられるように、ヤナギはカガミと共に鏡月池へ向かった。

そして、カガミは池に着くなりすぐに用意してあつた木綿の衣を手渡してくる。

「早く身を清めるんだ」

切迫した表情で自分を見るカガミにヤナギは戸惑つた。このぐらの血、戦場では常に浴びているのだ。それを彼が知らないとは思えない。

「平気よ、あれくらいの血」

「平気なものか！」

カガミは怒鳴つた。その声にヤナギは身をすくませる。

「……血は呪詛の種となる。いいから、さつさと洗い清めろ」

ヤナギはしぶしぶ橘の木の隙間より体を滑り込ませた。池のふちで素早く衣に着替える。

カガミは離れたところで鏡月池に背を向けていた。

「……そなたはどうして、こんなによくしてくれるの」
「さあな」

カガミが何を考えてヤナギに近づいているのか、さっぱりわから

ない。だが、一つだけ言わなければいけないことがある。

「ねえ、カガミ」

ヤナギは鏡月池に身を沈ませながら、カガミへ声をかけた。

「なんだ」

「あの人たち、助けてあげて」

「ヤナギ、それは……」

カガミは声を詰まらせた。やはり、あの者たちはカガミの仲間なのだ。

ヤナギは確信した。

「仲間なんでしょう？」

返答はない。

ヤナギは背を向けたままのカガミを橋の木々の合間より見据えた。「見捨てては駄目。皆でこの国へ来たのなら、皆で黄昏国へ帰って」

「しかし」

カガミは口ごもった。

ヤナギにはわかっていた。

カガミは頭が切れる者だ。彼は無謀なことをしない。このままでは、仲間を見捨てて自分とヤサカニだけで密かに黄昏国へ帰ろうとする。仲間を見捨てても己の志を遂げようとする。

カガミの背が少しだけ小さく見える。彼は色々なものを背負っているのだ。その重圧が彼を苦しめている。

ヤナギに乘しかかる宿命と同種の重圧。それは決して抗えないものなのだろう。

「お願い」

ヤナギは肯定も否定もしないカガミに頼んだ。

遠くで鳥の鳴く声が聴こえる。沈んでいく夕陽が楊の肌を赤く照らす。

「……………わかった」

微かに耳に届いた了承の言葉に、ヤナギは目を閉じた。

その日の夜。日が沈み、夕食が済んで各々部屋へ戻る。

カガミとヤサカニは忌み部屋での一件もあり、クルヌイの計らいで休暇をもらっていた。

カガミは水浴びを済ませて部屋に戻ると開口一番、ヤサカニへきつく言い放つ。

「余計なことをしてくれたな、ヤサカニ」

ヤサカニは頭を深々と下げた。

「……まさかヤナギ様が来ようとは露とも知らず」

「放っておけば良かったんだ」

カガミは窓辺近くにある燈台に明々と灯る火に切れ木をくべる。

炎は激しく燃え盛る。

「カガミ様、それはあんまりです。ルイは呪詛の使い手です。このようなところで命を落とさせるなど、もったいない」

ヤサカニの言葉に苛立ちを覚える。ルイが黄昏国でも稀有な呪詛を扱える者なのはカガミだって知っている。

「ヤサカニ、あいつらは何故あのような状況に陥っていると思っている」

「それは……」

「俺たちの名を兵に明かさないからだ」

ヤサカニは目を見開き、息を呑んだ。

「お前が行なったことは、俺たちが首謀者だと宮中の者に触れ回るような行為だ。そのような情け、俺だったら間違ひなく迷惑だ。守ろうとしている者に自ら名乗りを上げられるなど、たまったもんじやない」

カガミは冷たい目でヤサカニを見た。ヤサカニは口許を手で押さえ、顔面蒼白となる。

「……っ。申し訳ありません」

彼は情け深すぎるのだ。その情が時として悪い方へ作用することもある。

ルイを凌辱した兵たちは、いったんヤナギやカガミたちに謝ってきたものの、彼らの目にはあきらかに不審の色合いが見てとれた。きつと、噂は広まる。それが台王へ伝われば自分たちは断罪される。

「ヤサカニ、決行するぞ」

決意を胸に秘め、カガミは口にした。

「……え？」

唐突なカガミの物言いにヤサカニは呆けた声を洩らす。

「高天原国を出る」

簡潔にカガミは言った。

「騒ぎを起こす。……心配するな、皆で脱出する」

仲間を切り捨て脱出するのだと解釈して表情を曇らせたヤサカニのために、最後の言葉をつけ加える。

「はい」

ヤサカニは少し齒切れ悪く答えた。

カガミは窓の外に覗く月を挑み見た。空高くある半月はカガミたちを嘲笑っているかのように見える。

朽葉色の双眸を細める。

「黄昏国の復興は、誰にも邪魔させない」

神にだってな、と呟いてカガミは嗤った。

四・

夜陰に紛れて影が二つ動いた。

高天原国たかまのはらこくの都をおおう夜は静かだ。厳かな静けさは、眠れぬ者を更に眠れなくさせる。

ヤナギは神杷山しんばやまにある社殿の渡殿で欄干に身を預けていた。空を見れば、星々がところ狭しと輝き誇っている。

今日は朔の夜。太陰が太陽に隠れる日。

ヤナギは顔を伏せた。

「ヤナギ様……？」

自分の名を呼ぶ声に顔を上げる。

驚いた顔をしたチズコが近寄ってきた。まさか、このような夜深けにヤナギが起きていようとは思わなかったのだろう。チズコの手には短刀と勾玉が握られている。どうやら、侵入者が来たと思ったようだった。

笑みが零れる。

「侵入者はいない」

そう言うと、あからさまにチズコは肩を落とした。

「まったく、夜中に渡殿で星見なんて……心臓に悪いのでやめてください」

チズコは文句を垂れながらもヤナギの横に腰を下ろす。

渡殿からは齋庭が眺望できる。

池に泳ぐ魚が跳ねた。水面には満天の星が映っており、幻想的な雰囲気をもし出している。

「見て、チズコ」

ヤナギは池に映り込む星空を指差した。

「星が動いている。……全ては今日、明るみになる」

弾けたようにチズコがヤナギを見た。チズコの表情は、暗がりの中でも強ばっているのが見てとれる。

渡殿の端^{つま}に置かれた燈台の灯が風に揺らめく。

ヤナギは更に言葉を重ねた。

「わかつていたの、こうなること」

さわさわと木がそよぐ。

「気づいていたの、こうなること」

チズコは何も言わない。

ヤナギは痛々しく微笑んだ。

「それでも、あの人たちを信じたいと思った」

言葉の意味に勘づいたチズコは、鬼気迫る表情でヤナギの小袖を掴んだ。

「いけません……行つてはなりませんっ。あなたは今宵、絶対に神杷山を離れては……」

チズコが言い終わる前に、ヤナギはするりと身をかわした。

「今から起こることは、姫巫であるヤナギー人が計画したもの。そなたや他の采女たちは無関係。ねえ、チズコ」

ヤナギの真白い装束が風にはためく。無数の鬼火たちが、ヤナギの行く道を示すかのように神杷山を下る山道に列をなしている。

「赦してほしい」

そう言い残し、ヤナギは山を駆け降りた。

それと同時に、悲鳴のようなチズコの声が辺りに木霊した。

闇はとても暗く、深かった。

庭の要所要所に備え付けられている灯かりでさえ、全てを照らし出すことはできない。

だが、星の弱々しい光を受けて、忌み部屋の前で番をしていた者たちが倒れているのがわかる。

カガミとヤサカニは息を殺して忌み部屋の中に入り込んだ。

忌み部屋にいた者たちは目を白黒させる。

「力……ガミさま……ヤサ……力二様……」

「出国する。高天原国の内情は掴んだ。……あとは、戦に入るだけだ」

カガミはそう口にする。

「皆、己の足で走れるか」

カガミが訊くと、皆すぐに頷く。それを確認してから、カガミは部屋から駆け出した。

忌み部屋に入れられていた仲間を助けたカガミとヤサカニだったが、それは自殺行為に等しかった。

松明^{たいまつ}の炎が遠くから近づいてくる。

カガミたちは近くの叢^{むく}に身をひそめた。

兵たちは開け放された忌み部屋に入って行く。

「なんてことだ、あのならず者たちがいないぞ！」

「くそが、誰かが手引きしたのか……っ」

「おい、お前。襲ってきた奴の顔を見ていないのか」

「へ、へい。いきなり後ろからやられたもので。見ていやせん」

どうやら、顔は見られていなかったようだ。

囚人が脱走したのがわかり、兵たちは殺気立っている。今、迂闊^{うかつ}に動けば捕らえられるかもしれない。

「とりあえず、ムロ武官長を呼んでこい。あの人ならきっと、奴らを見つけ出せる」

「はっ」

カガミのこめかみに冷や汗が伝った。深手を負った者を四人も抱えている。分が悪い。ひとたび見つかってしまえば、無傷で御殿を抜けることは不可能に近い。

「カガミ様、ここは俺が囨^{おとじ}となつて……」

ヤサカニの案に、カガミは首を横に振った。

「いや、そうするとお前が捕らえられる可能性が高い。囨は使わない」

「では、わたくしが……。元より、ハルセ様へ捧げた身でございませうゆえ」

顔に大きな傷を負ったルイが申し出る。しかし、それにもカガミは首を縦に振らなかった。

「馬鹿をいうな。国に親を残して来たんだろう」

「ですが」

「何かいい案を捻り出す。だから、気を逸^せくな」

こうして小声で話している間にも、兵たちの数は増してきている。乱闘を起こさず、一人も欠けることなく、ここから脱出できる案を必死で模索するが、気が焦^こってうまい案が出てこない。

（強行突破しか道はないのかっ）

一人の兵士がカガミたちのひそんでいる叢へ足を伸ばした。思わず、拳を握る。

ちようどその時、わつと大きなどよめきが起こった。叢に足を進めていた兵士も慌てた様子で踵を返す。

危機一髪とはこのことだろう。カガミは急いでその場を移動した。何があつたかはわからないが、無駄な戦闘を回避できたのだ。ありがたいことだった。

急ぎ、溪谷へ続く東門前に向かう。木々の隙間より真つ赤な炎が見えた。カガミは驚き、目を見張る。誰かが宮殿に火を放ったのだ。何とも運がいい、とカガミは口角を吊り上げた。この騒ぎのおかげでカガミたちの脱走は幾分か楽になる。

「カガミ様！ あれを……っ」

ふいに仲間の一人が声を上げた。

それにつられて仲間が指差す方向を見た。渡殿が見える。逃げ惑う人々の中で、彼女だけが凜とした佇まいで立っていた。

「……………っ」

少女の唇が動く。それに合わせて忌み部屋からも炎が上がった。真象^{しんしょう}の力。紛れもない、神の力。

「ヤナギ」

カガミの眩きに、ヤナギがこちらを見た気がした。

戦に備えて兵たちへ稽古をつけているところにチズコがやって来た時、ムロは内心、動揺した。

チズコは、夜深けが訪れたら社殿へ来るようにと言い残してその場を去った。

約束の刻限となり、ムロは重い足取りで鏡月池きょうげついけで禊みそぎを行ない、簡素な装束の上からゆがけを着た。いつなんどき、非常事態が起きるとも限らない。

なので、本来ならば戦を連想させるものを神杷山に持ち込んではいけない決まりがあるのだが、武官だけは特別に武装を許可されていた。

木々がムロを拒むかの如く、鬱蒼うつそうと生い茂っている。

ムロは右腕をさすり、薄く笑った。

「……俺を拒むか」

三年前、初めてこの梶子齋森くちなさいのもりへ踏み入った時を感じた疎外感。そしてこの前、ヤサカニに半ば強引に連れて来られた時にも感じた拒絶。

その理由はただ一つ。ムロに宿った呪いのせいだった。

（かまわない。たとえ、神に忌まれようと。人々に忌まれようと）

鬼火さえもムロを神杷山へ導こうとしない。

（ヤナギ様さえ、救えるならば）

ムロは勘を頼りに神杷山への道を進んだ。神杷山の入り口に当たる楠には太いしめ縄がある。常は閉まっているその神域を今夜、チズコは開放してくれていた。それを見付け出すことくらい、鬼火の案内などなくても容易いことだった。

ほどなくして、しめ縄が巻かれた巨大な楠の木のもとへ辿り着いた。ムロは老木に触れて目を閉じた。

結界のゆるむ音がする。

再び目を開けると、夢幻さながらの景色が広がっていた。四季など、この神杷山にとっては関係ないものである。椿に橘、もみじに桜。本来なら並び立たない植物が主張し合っている。夜半過ぎであるというのに、神杷山は淡く照り輝いていた。自ら発光しているのか、とムロは圧巻の眺めを双眸に刻み込んだ。山と言っても小さな山だ。数刻もしないうちにムロは頂上へ辿り着いた。

星々を映す池にかかる天弓てんきゅうの橋を渡り、社殿へ近づく。美しく砂利をならした斎庭に面する廊に、一つの影が見える。

「……チズコ……？」

風に掻き消されそうな声で呟く。一つの影が動いた。

一つの影　チズコは、廊で顔をおおってすすり泣いている。訳がわからず、ムロは困惑気味にチズコへ尋ねる。

「どうした？」

答えは返ってこない。

よりいっそう、チズコのすすり泣きがひどくなった。

「具合でも悪いのか？」

心配になってきて、ムロは廊に近寄った。すると、弾けるようにチズコが飛びすさった。彼女の顔からみるうちに血の気が引いていく。

「ムロ……あなたは必ずヤナギ様の頼みを聞いて。お願いだから」

チズコがムロに頼ったことなど、ほとんどない。その彼女が薄暗い中でもわかるくらい腫れた目をして懇願している。

自然、ムロの顔が引きしまった。

「何かあったのか」

チズコは視線を落とす。彼女は下唇を力いっぱい噛みしめた。

「……わたくしでは役不足。宿運を担う資格もない。でも　ムロ、あんたなら……」

言葉を切ってチズコが頭を上げる。彼女の目とムロの目が交錯くわくした。

「あんたなら、きつと。ヤナギ様の御心も高天原国も救えるから」
意趣がわからず、聞き返そうとした矢先、チズコが都の方を指差す。

「ほら、定めが回り出した」

ム口の顔が強張る。

「まさか……っ」

「ム口、カガミ様たちは今夜逃走するつもりだ。それを助けるために、ヤナギ様も山を降りられた」

ム口はヤナギと行き違いになった己を呪った。もしかしたら、止められたかもしれないのだ。悔やまずにはいられない。

「くそっ！」

黒く長い髪を振り乱し、来た道をム口は引き返した。

「ヤナギ様」

チズコは眩き、涙をぬぐう。その双眸は危険な色を含んで輝いた。

梶子齋森は常人の立ち入らない森である。それはすなわち、太古のままの姿で自然が存在しているということだ。

ヤナギは飛ぶように森の中をひた走った。剥き出しになっている木の根に何度もつまずきながらも宮殿へ急いだ。

ようやく北門へ辿り着く。いったん立ち止まり、乱れた呼吸を整えてから、一気に忌み部屋のある西門へ駆け出した。

しかし、そんなヤナギの腕を誰かが掴んだ。はっとしてヤナギは振り向いた。

ム口だ。彼は眉根に皺を寄せ、険しい表情を象っている。

肩で息をしているところを見るかぎり、よほど急いで来たことが見てとれる。

「あいつらを助ける気ですか？」

「……離せっ。いくらそなたでも邪魔立ては許さない」

必死なヤナギの様子にム口は微かに動揺を見せた。その隙をつい

て、ヤナギはムロの手から逃げる。

「ヤナギ様つ。ムロは……ムロは、あいつらが逃げ出そうが捕まろうがどちらでも構わない。ただ、あなたが皆に忌まれることはあつてほしくないのです」

ムロの顔が泣きそうに歪む。

ヤナギは目をそらした。

「私が助けなければ彼らは深手を負つてしまう。はたまた捕まってしまうかもしれない。それでは、意味がない」

「意味が、ない？」

「ムロ、そなたは覚えている？　いつか、そなたは私に訊いたでしょう。『戦の焰^{ほむ}は、いつになれば鎮火するのか』と。私は答えた。

『姫巫を継ぐ者がこの世から消えた時』と」

「……………あいつらが、？姫巫？を滅ぼせる者だと？」

ムロの声が震えている。

ヤナギは深く頷いた。

「『救つて。神などいららないの。姫巫の呪から私を解放して』と。何度も何度も、私は願つてきた。……………ごめんなさい、ムロ」

自然と涙があふれてくる。呆然と佇むムロを置いてヤナギは西門へ走り出した。

走りながら、ヤナギは唇を動かした。

『渡殿の端にある燈台が風に揺られて倒れて炎を床にともす』
じつとりと汗が背中を伝う。神経が研ぎ澄まされていく。

『それは次第に燃え広がって御殿を包む』

胸の奥に痛みが走った。清浄さを必要とする真象の力はヤナギの体を圧迫する。気を抜けば、力は暴発する。

（長くはもたない。炎があまり燃え広がらないよう抑制しておけるうちに……どうか、早く脱出して）

ヤナギは中庭を横切り、忌み部屋が見える板の間に上がった。ふと、木々の合間より力ガミの姿が見えた。驚いた顔をしている彼を一瞥し、顔をそむけた。

五・

目がくらんだ。

清められていない御殿内で姫巫ひめみこの力を使う愚かさは重々承知の上のことだったが、さすがに巫力を使いすぎた。

ついに御殿を燃やす炎の支配権はヤナギの手から離れた。自在に勢力を伸ばしていく猛る炎。ヤナギのいる場所も段々と煙に巻かれていく。

呼吸が苦しくなる。

そんなヤナギを何かが包み込んだ。

目を見張り、霞む視界にそのものの正体を映す。それはヤナギを炎や煙から守るように抱き込んだ。

「ヤナギ様、お気をたしかに」

ヤナギは信じられなかった。ヤサカニが自分を守ろうとしている。どうして、と問う暇など今はない。ヤナギはヤサカニの腕を強引に払った。ぼやけた思考を覚醒させるためにゆるく頭を振る。

「情けなどいらぬ。早く逃げなさい」

「そんなわけには……」

なおも差し伸べてくるヤサカニの手を、ヤナギは拒否する。その間にも炎の被害は広がっていく。

ヤサカニは頑ななヤナギの様子を傍らかたわで見えていたが、やがて深く息を吸い込んだ。

「シユマ」

彼はそう口にした。

ヤナギは眉を寄せた。

「俺の真名です。姫巫は真名で人を縛れると聞きました。さあ、俺を縛るといい」

かっとなヤナギの頬に朱が差す。

ヤサカニは覚悟を決めた様子でヤナギに頭を垂れている。その姿は先代姫巫に皆がかしずいていたさまに酷似していた。

「私は……っ。私は、人を縛ったことなどない！」

真名など口にすることさえおぞましく、背筋に悪寒が走る。

ヤサカニは聞き分けのない子供に言うようにヤナギに目線を合わせてきた。

「ヤナギ様、縛られた人間は主の言うことを絶対に反故にできない。主を守るためなら実力以上の力をも発揮出来ると聞いた。それならこの火の海だつて無傷で抜けられるかもしれない」

「嫌よ、絶対に嫌」

拒絶しなければならぬ、とヤナギの心が叫ぶ。自身が先代姫巫に真名で縛られているからこそわかる。傀儡ほどつらいものはない。柱の軋む音がする。それと同時に、後ろから鋭い殺気を感じた。

「姫巫、覚悟！」

剣を振りかざした兵は、まっすぐにヤナギの方へ向かってきた。

ヤナギは応戦しようと懷に隠し持っていた小刀を握るが、それを使うよりヤサカニの動きが俊敏だった。彼は足下に落ちていた木片を手に取り、兵の剣をはばむ。

「何をする！」

ヤサカニの怒号に怯むことなく、兵士はヤサカニにかばわれ座り込んでいるヤナギに冷たい視線を送った。

「やはり、裏切ったな。どうせ、高天原国の懷刀という地位にあきあきしていたのだろう」

紅い布を腰に巻いているところを見るかぎり、南門兵なのは間違いない。西門は蒼、南門は緋、東門は翠と色で分けられている。

兵の後ろから幾人かの兵がやって来て、ヤナギたちの様子を見て目を細めた。その瞳には疑心がなみなみとあふれている。

「貴様が地下の国々の者に同情していたことは知っていたが、まさか結託していようとはな」

「違う！ お前たちは何か勘違いをしている」

兵たちの弁を必死に否定するヤサカニだったが、そのさまはまるでそれが事実だと告げているように聞こえた。

「今更弁解など誰が聞くものか。覚悟！」

ヤナギは何とか壁を支えにして立ち上がったが、己の体と精神の限界を感じた。

ヤナギの目の前で、ヤサカニは木片を手に戦っている。何故、彼が自分のためにここまでしてくれるかわからなかった。

（私を……姫巫を憎んでいたのではなかったの？）

疑問が胸に浮かんでは消える。

兵の強固な剣がついにヤサカニが使っていた木片を折った。ヤサカニは片手をつき、素早くヤナギを小脇に抱えて兵たちの剣から逃れようと後ずさる。しかし炎の壁にはばまれ、もう下がれないところまで追い詰められてしまった。ヤサカニのこめかみに汗が伝うのをヤナギは見た。

ヤナギは力を使おうと唇を震わせてみるが、出るのはか細く洩れる息だけだった。

もはやこれまでとヤナギもヤサカニも覚悟を決めた瞬間、ヤナギたちの前に白い装束の女が立ちはだかった。

ヤナギの顔が恐怖に満ちる。

「チズコ！ 何を……早く逃げなさい！」

女　チズコはちらりとヤナギを見、すぐに兵たちの方へ向き直る。か細い彼女から今は多大な闘志を感じる。

「わたくしはヤナギ様の采女。どうして貴女を置いて逃げられましようか」

そう言っただけでチズコは果敢にも小刀を手に兵たちの前に進み出た。

「お願い、やめて……お願い……」

ヤナギの瞳から涙が零れた。いくら巫の修行を積んだチズコであっても、容赦なく攻撃されれば言霊を編むことができない。彼女は重い一太刀をどうにか受け止め、苦痛に顔を歪ませた。多勢に無勢とはこのことだ。

刃と刃がぶつかるかん高い音が何度か響いた。

驚きたじろいでいた兵たちもようやく平静を取り戻したのか、チズコの手首を叩いて小刀を払った。それに氣をとられてチズコの注意力が微かにぶれる。

「チズコ、後ろだっ」

ヤサカニの注意は一步遅かった。

ヤナギの視界が赤一色と化す。

チズコの背を切り裂いた兵が悪鬼に見えた。悪鬼は舌なめずりしながら笑った。

ヤナギの喉がひくつく。

チズコは倒れ伏した。

「チズコ っ！」

もう二度と見たくなかった。できるならば、絶対に視界に映しなくなかった。

大切なひとが殺される瞬間。

ヤナギは自分がチズコの名を絶叫していることを自覚していなかった。ただ、サコを喪った時と同じ無力感に囚われていた。双眸から色彩が消える。

「うつ」

「がつ」

次々に兵たちが倒れた。兵たちは転げ回って悶え苦しみ、やがて動かなくなった。

すかさずヤサカニは彼らに近寄り、首筋に手を添えて脈拍をとる。

「……死んでいます。チズコの、呪いです」

チズコは自分の血に呪いをかけていたのだ。事前に巫力を編んでいたのだろう。身を犠牲にした、呪い。

ヤナギは呆然としたまま、チズコのそばまで這い寄る。

チズコはうつすらと目を開け、淡く微笑んだ。そして、ヤナギに向かつて血に濡れた手を伸ばす。その手を取った刹那、彼女は息絶えた。

「いや、いや」

言葉がうまく発音できない。

ヤナギの絶叫を聞き及んだのだろう。兵たちが集まり出す。それはいずれも緋の布を身につけていた。

ヤサカニは瞬きもせずにチズコを見つめるヤナギの肩に手をかけ、自分の方へ無理矢理顔を向かせる。

「ヤナギ様、兵たちが集まってきた。さあ、早く」

もう、サコがいなくなってからずっとヤナギを守ってきたチズコはいない。

返事をしないヤナギにヤサカニは語気を強めて言った。

「俺を真名で縛れ！ チズコを無駄死にさせる気かつ」

ヤサカニはヤナギに自分を縛れと命じる。ヤナギは、涙ながらに唇を動かした。

「シユマ」

と。縛りの言葉はヤナギの心をえぐる。遠く、先代の嗤^{わら}う声が聞こえた。

その瞬間、ヤサカニの目の色が変わった。

しばしの間、身動き一つしなかったム口であったが、人々の大声や足音に意識を覚醒させる。

彼は、瞑目して胸の前で拳を握った。

「ヤナギ様の、願い」

「ム口武官長、ちょうどいいところに……っ。忌み部屋に入れている者たちが脱走しました！」

駆け寄ってくる西門兵の声が遠い。

ム口は、決意を固めて双眸を開けた。彼は集まってくる西門兵らをすり抜け、カガミたちが逃げ出すつもりであろう渓谷に続く東門へと駆け出した。

火の海はしぶきをあげて御殿を包み込んでいる。その光景に息を呑みながら、いったん南門前を通って東門前へ急ぐ。

途中、皆ム口の名を呼んだが目もくれなかった。ようやく東門へ辿り着く。

東門は不開の門という別称も持っている。あかすそれほど守りは強固で厚かった。死者の弔いをするために石櫃峠せきつとつげへ行く時だけが東門の開錠が許される時。その他では決して開かない門。

いつもは静寂に沈んでいる東門は数多の兵で蒸せ返っていた。その中央に目をやれば、幾人かが取り囲まれているのが見てとれる。

カガミたちだ、と牟呂は即座に判断を下した。

ム口は背負っていた槍を構え、一気に集団へなだれ込んだ。

予期せぬム口の参戦に兵たちは一人、また一人と崩れ落ちる。したたる血で目が霞む。ム口は乱雑に腕で血を拭くと、また槍を振るう。

そのさまは風のように、のちにそれを讃えた歌が詠まれたほどだった。かはね

屍と怪我人で鉄の臭いが辺りに立ち込める。

「ム口……」

目を丸くして自分を見てくるカガミをム口は睨みつけた。

「誤解するな。これは、ヤナギ様のためであって牟呂の意味ではない」

「ム口武官長……っ。あなたが、裏切るか……」

「姫巫様がどれほどお嘆きになることが」

息も絶え絶えの兵たちの咎め立てにムロは敏感に反応した。

「黙れ！ 台王の袖に隠れて蜜をすすする愚官共に言われる筋合いはないわ！」

ムロにはわかっていた。東門前にいる者たちは誰しも兵の役割をきちんと果たしている者ではなかった。鍛錬を怠り、遊びに興じるそんな者たちばかりだった。だからこそ、大人数であるにも関わらず、ムロ一人にここまで圧倒されたのだ。

ムロはなおも群がってくる兵たちを打ち倒しながら、カガミたちの方を見やる。今なら兵たちの注意がカガミたちからそがれている。ムロの合図に気づいたカガミは皆を連れて不開の門戸かんぬきの門を外す。それを見届けて、ムロは一気に兵たちを薙ぎ払った。

つかの間の静寂。

カガミたちが逃げるのを見ていたムロに、カガミは「来い」と声をかけた。

ムロは目をみはった。

カガミは皆を先に門より脱出させ、ムロが来るのを待っている。

彼は余計なことは一切言わずに佇んでいる。

ほんの数秒。その間にさまざまなことがムロの脳裏をかすめていった。

『救つて、神などいららないの。姫巫の呪から私を解放して』と。そう私は願っていた。

あれこそヤナギの魂の叫びだと、カガミならその願いを叶えられるのだと、自身に言い聞かせてムロは首を縦に振った。そして、腰に差していた高天原国の護り手の証である宝剣を、そつと積み上がった屍の横に置いた。

「わかった、行こう」

ムロの言葉とほぼ同時に追っ手が矢を放った。それをムロとカガ

ミはかわし、仲間とともに峡谷の道を駆けた。

ム口には彼らがどこへ行こうとしているのか大方見当がついていた。

蜘蛛の廻廊だ。

峡谷を抜けたあと、山を一つ抜けると蜘蛛の廻廊がある。そこにある廻廊は特殊で、一見御神体の奉られた祠にしか見えない。

三日かけて蜘蛛の廻廊まで辿り着いた一行は、誰一人欠けずにここまで辿り着いたことを喜びあつた。

誰もヤサカニの話をしないところを見る限り、話題を出さない方がいいと思つたム口は少し皆から距離を置いた岩の上で糍ほしを食いちぎつた。

近くを流れる小川から汲んだ水でのを潤す。

自分たちがここにいと追つ手に気づかせないように、この三日間いっさい火を焚いていない。

高天原国の追つ手や闇者あんじゃは甘すぎる。ム口が追つ手の役目をもらつたら、きつと二日でこの手負い集団など引つ捕らえただろう。

怪我人を抱えている者たちが街道に出るわけがないのだ。それならば、山道を隠れながら進むと容易に考えられるはずだ。

（まあ、そこまで頭の回る者がいなかったのを幸いと思うか）

そう思いながら水をあおるように飲み干すム口の横にカガミが腰かけた。

彼は黙つたまま、高天原国の都を眺める。それにならつてム口も都を眺望した。

「お前は、一体何者なんだ」

ム口は最大の疑問をカガミへぶつける。この数日で、他の者たちがカガミへ示す態度は、打倒高天原国の？同志？という一言でくくれないことにム口は気づいていた。皆、カガミを様づけで呼んでいる。思えば、ヤサカニもカガミを様づけで呼んでいたなと思つた。

カガミは皮肉げに笑んだ。

「……我が名はハルセ。黄昏国が王位継承権第一位を有する者」

そう言い切った彼の雰囲気は、誰も寄せつけないものがあつた。
明け初める空が彼の横顔を照らす。
ムロは言葉を失った。

四章 知幾其神乎

微睡みの中、男は彷徨っていた。

自分が自分である意味を必死に探していた。

心などなくなってしまうばいいものを。

半ば投げ遣りに、彼はそう吐いた。

答える声はない。

それはそうだろう。この夢の中には彼しかいないのだから。

『ハルセ』

『第一王子』

『救いの王子』

『？神の腕？』
かいな

己を呼ぶどの声も胸に響かない。言霊は耳を滑り、希薄な空氣に
しかならない。

真に自分を必要としている者など、最初からどこにもいないのだ
と改めて感じる。

いや、正確に云うならば、かつてはいた。

？ハルセ？という人間を必要だと、慕ってくれていた者が。

『兄上』

今だ脳裏に焼きついていて幼い舌足らずなその声を思い出す度、
胸の芯がじんとする。

火傷にも似たその熱さは、おさまることを知らずに心を侵蝕して
いく。

もう、戻ることはない日々。取り戻せない過去の幸せ。

これでいいのだ、と男は自嘲的に笑った。

心の片隅にぞんざいに放った記憶は化膿し、生々しい痛みを彼に
刻み続ける。

たすけて。

伸ばされた小さな手を、掴む手はなかった。

蜘蛛の廻廊。それは高天原国と他の国々を繋ぐ唯一の洞窟である。中は大蛇が這った跡のようにうねっている。

カガミたちは蜘蛛の廻廊を隠している祠を力いっばい横に押した。踏ん張る足もとの地面がえぐれる。額に汗が浮かんだ。少しずつ、祠が軋む音を立てながら動き出した。やがて、蜘蛛の廻廊の入り口が現れた。それは人の泣き声に似た風の音を吐き出している。生ぬるい風がカガミの頬を撫でる。

「入るぞ」

カガミはそう言つて真つ先に蜘蛛の廻廊へ入つて行つた。あとにムロ、バシヨウらと続く。

湿気を含んだ洞窟内は自ら発光している植物たちによつてほのかに明るい。三年前、この蜘蛛の廻廊を訪れた時のことを臆げながら思い出す。高天原国内にいた時はさっぱり忘れていた風景だ。

たかまのはらこく

「……いきなり記憶がよみがえってくるだろう。忌々しいことだ」
カガミの横を仏頂面で歩きながらムロは口を開いた。彼は顔にかかる髪を鬱陶しげに払う。

「蜘蛛の廻廊は何度通つても心を苛立たせる」

「……そうか。お前は戦で何度も蜘蛛の廻廊を通つたんだな」

カガミの言葉にムロは頷く。彼はちらりとカガミを横目見た。

「お前は、三年前が初めてだったのか？」

「ああ。各国を高天原国から守るために遠征は行なっていたが、実際に高天原国へ足を踏み入れたのは初めてだった」

「……意外だな」

ムロは目を丸くした。いつもは大人びて見える切れ長の目が少年の色を垣間見せる。

そんなムロにカガミは苦笑する。

「黄昏国は今や亡国寸前。高天原国へ攻め込むほどの余力は残っていない」
「なるほど」

ふと、ム口は後ろを振り向いた。つられてカガミも振り返る。

「……ム口、休憩を取ろう」

「ああ」

二人の後ろで、バシヨウたちが息も絶え絶えに座り込んでいた。

洞窟内で火を起すわけにはいかない。狭い空間で火を焚けば、空気が薄まってしまう。

幸いなことに蜘蛛の廻廊内は微風が吹いているだけで寒さはない。カガミたちは洞窟内でも少し開けた場所で休むことにした。おのおの常備食を頬張ったり、好きなことをしている。

岩肌を伝う水を調べたマチは、飲んでも全く問題ないとカガミに報告する。マチは自然界のありとあらゆるものに精通している。彼が言うなら間違いない。

カガミは少し離れたところからぐるりと仲間たちに目をやった。こうしてあらためて見てみると、そうそうたる者たちが生き残ったなと思わずにいられない。

ム口、ルイ、バシヨウ、マチ、そしてユウラク。

この中でただ一人女であるルイは、自ら志願して今回の任務を引き受けた。彼女は己の血や持ち物を使った毒使いである。昔は数多いたという毒使いは減少傾向にあるため、ルイはたいへん貴重な存在だった。自分自身で染めたのだらう、黒と薄茶色のまだらになった髪は短い。それは少々跳ねており、本人の奔放な性格を如実に物語っている。彼女は蜜色をした瞳を輝かせて意気揚々と喋り、皆の中心で豪快に笑う。額に残った裂傷が痛々しい。

黙々と弓の手入れをしているバシヨウは、黄昏国一の弓使いである。遠く揺らぐ炎でさえ打ち抜くと言われる彼の腕前はカガミも認

めている。常人外れた視力を持つバシヨウを早見にやった戦は、必ず先に仕かけることができた。そんな彼の左目は今、包帯で覆われている。視力が戻らないのだ。連日の拷問で目を中心に殴られたせいだった。バシヨウは栗毛の柔らかい肩まである髪を垂らしている。たしかようやく齢十五を超えたばかりだと記憶している。成長過程にある小柄な体つき。まだ幼さの残る面差しは何も語らない。

マチは緊迫感のない笑顔で竹筒に入れた湧き水を飲んでいいる。ルイの話に合わせながら、坊主頭の彼は身ぶりてぶりで調子を取る。もとは鎮守ちんじゅの森に住まう民であったマチを今回の作戦にひきいたのはヤサカニだった。森の民は多くの叡知えいちを有しており、それは役立つはずだとヤサカニは言った。はたして、彼の言ったとおりマチは力ガミたちに道を示してくれた。蜘蛛の廻廊内で迷う力ガミたちをマチは導いた。彼には森羅万象を読み取る力があつた。俗世に馴染んでいないからこそその力だ。屈強な大男のマチは剛腕の持ち主でもある。接近戦で彼に敵う者はあまりないだろう。忌み部屋へマチが入れた時も、最も大がかりな兵を編成してようやく捕らえたらしいことを兵たちがぼやいているのを力ガミは耳みみにしていた。

仲間の中で最年長のユウラクはゆつたりと胡座あぐらをかいて酒をあおっている。何故酒を持っているのかというのは愚問だろう。彼は酔拳の使い手だと聞き及ぶ。ユウラクに関しては力ガミでさえあまり情報を持ち得ない。わかっているのは、力ガミに武術を教えてくれた者の師であることぐらいだ。ユウラクは骨と皮だけと形容できるくらいに痩せており猫背で、口ひげをたくわえているため老人に見られがちだが、まだ三十八なのだと前にルイから聞かされた時は仰天したものだ。

「……馬鹿なっ」

「あら、あんた黄昏国出身のくせに知らないの？」

何やらム口とルイが言い争いをしている。

「どうしたんだ？」

すみの方にある小さな岩に腰かけていたバシヨウに訊くと、彼は

困ったように首をかしげる。

「ルイの奴がムロにつつかかったようです」

すい、とルイがカガミたちの方に目を向けた。彼女は腕を組んで胸を張る。

「あら、つつかかったなんて人聞きの悪い。ただ、何も知らない高天原国の武官長様に知識を分けてあげていただけよ。高天原国以外は地上にあるんだってね」

ああ、とカガミはようやく合点がいった。ルイは黄昏国やその他の国々で云われていることをそのままムロへ伝えたのだ。

高天原国は天上にあるまやかしの国だと。

それが、高天原国　いや、ヤナギに心酔しているムロの逆鱗に触れるのは至極当然である。

「たわけが……っ」

ムロの双眸に危険な色が灯る。彼は背負っている槍に手をかける。ルイは鼻を鳴らした。

「ルイ、よせ。ムロ、お前もだ。そう易々と挑発に乗ってどうする」

カガミの諫言に両者は黙り込んだ。二人は互いに睨み合い、やがて顔を背けた。

「カガミ、休憩はもう十分だろう……。ここにいる奴らと違って俺にはゆつくりしている暇はない」

「あたしらを侮辱する気？　小生意気な坊やだこと。あんたみたいな子供が武官長になれるなんて、高天原国も兵力不足だね」

「やかましいわっ」

どうやら、ムロとルイはそりが合わないらしい。彼らは言い合いながら先へ先へ進んで行く。道筋を知っているのはマチだけである。マチはムロとルイが間違った方角へ行かないように慌てて後を追う。カガミは嘆息した。

「やれやれ、これだから血気盛んな若いもんは」

そう言って、ひよっこりとユウラクがカガミの右横に並ぶ。ユウラクは柔和な顔を綻ばせて左端を歩くバショウに目をやる。その視

線を受けてバシヨウは戸惑ったのか瞬きをした。

「そなたは冷静だな」

「いえ。わたしは、あまり喋らないだけです」

カガミはそんなバシヨウの様子に目を細める。

「ヤサカニのことを気にしているんだろう」

バシヨウが息を呑むのがわかった。

ユウラクの表情も曇る。

ここ数日、高天原国の都から逃げ出して以来、誰もが頑なにヤサカニの話題を避けていた。

ヤサカニはヤナギが炎の中に倒れ込んだのを見た瞬間、剣も何もかもその場になぐり捨てて彼女のもとへ駆けて行ったのだ。

『いけない、ヤサカニ様！』

バシヨウが手を伸ばしたが、ヤサカニには届かなかった。

あの時、ヤサカニを連れ戻しに行く時間は彼らには残されていないかった。

ヤサカニの行動は許されることではない。しかし、誰も彼のことを責めなかった。それはひとえに、彼の人望が厚かったからに他ならない。ヤサカニを悪く言う者など黄昏国軍にはいない。彼がひねり出した策のどれもが黄昏国軍を守ってきた。常に最善な布陣を敷き、地の利を活かした戦い方を考え出すヤサカニに一目置いている者は少なくなかった。

バシヨウは特にヤサカニから可愛がられていたから、気を揉むのは仕方ないことだった。頭が回り腕も立つバシヨウを一般兵から見いだしたのはヤサカニだった。バシヨウを見つけた時にヤサカニは意気揚々とカガミに言った。

『バシヨウは絶対に俺のあとを継ぎます　いえ、俺などすぐに超えてしまうに違いない』

ヤサカニがそこまで手放しで誉め称えたのは後にも先にもバシヨウ一人だった。

カガミは立ち止まって俯いてしまったバシヨウの頭を軽く叩く。

「大丈夫だ、ヤサカニは無事帰ってくる。きつと」

「カガミ様。………はい」

小さく蚊の鳴くような声でバシヨウが返事をする。少しだけバシヨウの顔が明るくなる。

カガミは彼から目をそらした。同様にユウラクも視線を前に向けた。

カガミは見てしまった。ユウラクもきつと、見てしまったに違いない。

ヤサカニのあの瞳。

命を賭けて誰かを守ろうとする者だけが見せる、瞳の色。

（だから忠告してやったのに。お前が聞き分けないからだ）

心の中でヤサカニに毒づく。

ヤサカニは戻ってこない。高天原国がム口を喪ったように、カガミたち黄昏国もヤサカニを喪ったのだ。

一ヶ月かけてろくに眠りもせずに歩き続けた先に広がっていたのは、南卯国なんぼこくであつた。西の大国でヤサカニの生まれ故郷でもある。

そこからの道中がまた長かった。仲間たちが負った傷も癒える頃

三ヶ月かけて、ようやく黄昏国に到着する。

「これは……」

ム口は、あまりの様子に絶句した。

ム口が言葉をなくすのも無理はない。

都だというのに王宮がない。それどころか、何もなし。ただ焼けただ大地が広がっている。自然の囁きさえ息を潜め、渴いた砂を含んだ風が頬をかすめる。

緑のない大地。澱んだ空。疲弊した人々。

ム口は愕然とした顔でそれらを見つめていた。

「荒廃が進んでいる」

顎ひげを撫でながら、険しい口調でマチは呟いた。

マチの呟きに一同は頷く。

もう後戻りは出来なかった。これ以上、黄昏国を腐らせないためにも。必ず高天原国との戦の火蓋を切って落とす。そうカガミは重く心に刻んだ。

「ああ、ようやく………！ お帰りなさいませ！」

「ああ、こんなに汚れてしまつて………すぐに着替えをお持ち致します」

カガミたちの帰りを女官たちが慌ただしく出迎えてくれた。地下へ潜っていた大勢の家臣たちは顔を合わす度に傳かすく。

戦火を逃れるために黄昏国のとつた苦肉の策が、この地下だった。地下に居住地を造るのには膨大な人と時間を要したが、何とか完成したようだ。土を削り、石で固めて間を粘土で埋める。官吏たちは国を守るために必死でこの居住地を造り上げた。もともとヤサカニが考案したものだったが、ほぼ完成しているのにはカガミも驚きを隠せなかった。

「カガミ様、見てくださいます。皆で力を合わせて造りあげたのでございます。カガミ様とヤサカニ様が帰還された暁あかつきには成果をご報告しようと思ひ、懸命に土堀りに励みました。……ヤサカニ様は、ご一緒ではないのですか？」

真つ直ぐな官吏に対してカガミは返事に窮した。

「ヤサカニ様はある事情で高天原国に残つておられる。しかし、おまえたちの努力をヤサカニ様は喜んでくれるはずだ」

カガミの代わりにバショウが答えてくれた。

ム口は冷ややかな眼差しでそのやり取りを聞いていた。

カガミたちは広間に通された。そこには大勢の官吏や下働きたちが集まつていた。皆、カガミたちの帰還を祝して酒をあおっている。ざつくばらんな雰囲気は久方ぶりだとカガミは笑みをこぼす。

高天原国では形式ばった宴が多かったのだなおさら懐かしく感じた。

「お帰りなさいませ、カガミ様」

誰も？カガミ？と呼んでいた。

「……？ハルセ？と誰も呼ばないのは何故だ」

ム口の疑問にカガミは答える。

「？ハルセ？では国を救えない」

ハルセは王子の名。高天原国から国々を救う兵の名は、カガミ。

カガミは口許を歪めた。

「王子であつたが故に、諦めなければならなかった大切なものがあつた」

そう、かけがえのないものをカガミは？ハルセ？であつたがために諦めた。

「もう後悔などしたくない」

一語一句を噛みしめるように言うカガミを、ム口は強い光を宿した瞳で見据える。

「俺がお前たちについて来たのは、ヤナギ様のため」

彼はそう言い切った。

「ヤナギ様を縛っている高天原国を滅ぼせるのはお前だけだとは俺は判断した。だから俺は、お前に 高天原国を滅ぼす者、カガミに力を貸そう」

「ム口……」

計り知れない痛みを内包して、ム口は力強く頷く。高天原国を裏切ると決断した時、どれだけム口が苦しかったかをカガミに知る術はない。

いつ何時も誇りを失わない気高き眼光がカガミを後押しした。

カガミは拳を握りしめ、広間の中央部に進み出た。空気が一本の線を張ったように研ぎ澄まされる。

華鷲彌は中央に揺れる松明の炎の前にヤナギから渡された月水鏡つきみずかがみのみ

剣をかざした。そしてその剣をうしろ髪に当てて勢いよく断髪し、その髪を火にくべる。

臣下たちが、あつと声を洩らす。広間のすみに控えていたムロもバショウモルイも、誰もが固唾を呑んでカガミの髪が灰と化す様を見守っていた。上座にいた父王さえ椅子から立ち上がってよろめく断髪の儀。黄昏国でそれは悲願成就の意味合いを持ち、志折れれば自らの死を以って贖^{あがな}うという意味が込められている。

「高天原国の存在におびえ、うずくまる。そのような生ぬるい日々はもう終わりだ」

明朗な声が広間に木霊す。

「高天原国の内情は掴めた。我らが同胞の死を、無駄にするなよ」
その言葉に皆は深く頭を垂れて、腹の底より大音声^{だいおんじょう}の返事を上げた。

こうして、黄昏国は高天原国に反旗を翻した。

厚い雲間から覗く微かな陽光が黄昏国を照らし出す。決して大きいとは言えない国。遙か昔、高天原国と勢力を二分した国だと史実は伝えるが、今やその面影はない。

実りの秋だというのに資源乏しく、人々は絶え間ないひもじさに膝を抱えている有り様だった。

高天原国から襲撃があるかもしれないと、地下にある黄昏国王の御所は、ここ数日慌ただしかった。

しかし、術者 高天原国で言うところの巫 は、巫力を有する者が蜘蛛の廻廊を渡る気配は感じないと断言した。攻める暇もないのだらう、とム口は鼻を鳴らした。

高天原国の総括とも言える武官長だった彼にはわかる。近年、高天原国は敵ばかりを増やしている。そんな中、大切な武器である巫たちをおいそれと他国へやることは自殺行為である。それこそ今が好機と攻め込まれてしまうに違いない。

巫巫であるヤナギもまだ回復していないだろう。

ム口はあれほどの真象の力を使うヤナギなど、戦場であつても見たことがなかった。猛る炎は意思を持って御殿を包んでいた。並大抵の巫力では操れないはずだ。

ム口は地上へ続く石段を登り、青空市場におもむく。

青空市場は日々の暮らしが苦しい人々が少ない食料や衣類を交換したり、分け与えたりする場所だ。月に一回、国庫からも食物を出しているらしかった。助け合い暮らす黄昏国の民。だが、そうは言っても黄昏国の都より離れた地にあるム口の村では決して見ることもなかった光景だった。

豊かさは王の膝もとより広がる。遠い僻地へきちにある村よりも都の方が潤っているのは当たり前だ。

行き交う人々の間を縫うように歩き、軒を連ねる市場の端にあった大きな石に腰かけた。どっと冷や汗が出る。頭を中心に鋭い痛みが走った。激痛に顔を歪め、膝を抱える。

「大丈夫けえ？」

行商人風の男がム口の肩を叩く。心配そうに顔を覗いてくる男からム口は視線をそらし、手を振る。

「ただの立ちくらみだ。気にするな」

「だけんど、おめえさん……えらく顔色が悪いど。土気色じゃ。目もぎらついとるし」

ム口は、あらためて男に目を向けた。男が手に持っている荷物から、すり潰した薬草独特の臭いが漂ってくる。

「薬師か」

ム口の言葉に男は大きく頷いた。

「んだ。どれ、薬草を煎じてやるべ」

「いや、いい。気持ちだけで十分だ」

「無理は禁物じゃ。心配しねえでも、金なんてとりやせん。ただ、黄昏国が豊かになった時に生きとつてくれたらいいけえ」

男の笑顔にム口は面食らった。

「……お前は、無償で薬草を与えているのか？」

「そうじゃ。わしは人の笑顔をみたい一心で薬師をしとる。だけん、おめえさんも」

ム口は薬草が詰まった麻袋に手を伸ばす男の腕を取った。そして、力なく首を横に振る。

「せっかく煎じてもらっても、無駄になる。俺のこの頭痛は」

地上に広がる市場の雑踏の中。

ム口の唇が動く。男の瞳孔が開いた。

ム口はふらつく足を奮い立たせてその場から去る。男はそれ以上、何も言ってこなかった。

カガミは高天原国潜入中にヤサカニが作成した地図と、バシヨウたちが作成した地図を照らし合わせて高天原国の盲点を探していた。「カガミ様、やはりここはこの前使った蜘蛛の廻廊かいろうを使うのが一番かと思います」

ルイの意見にバシヨウが渋い顔をする。

「あの廻廊を使うのは賛成しかねる」

「でも、あまり目立たないように入国しないと。ただでさえ兵力が削がれたらたまらないでしょう？」

反論するルイにバシヨウは言葉を返す。

「行きのようなことがまた起こらないとも言えない。帰りは運が良かったかもしれない」

皆、その可能性に閉口した。

三年前、カガミたちがあの蜘蛛の廻廊に入ってからしばらく進んだ時のことだ。急に激流がカガミたちを襲った。油断していたわけではないが、逃げ道などない洞窟内。死に物狂いで逃げる他なかった。その際、多くの仲間が死んだ。逃げおおせることができたのは、今この場にいるバシヨウたちだけだった。

『高天原国へ続く一本道。……カガミ様、途中で森羅万象の悲しみと怒りを感じます。激しく、深い』

マチがそう言っていたにも関わらずカガミは弛たゆまず進めと指示を出した。結果、出さなくて良かった犠牲を出してしまったのだ。

カガミは早く高天原国へ行かなければと気が急いていた。だが、それを言い訳にしなくなかった。今も夢に見る。悪夢のようなあの出来事を。

（森羅万象……神の力、か）

カガミは短く切った自分の後ろ髪をもてあそんだ。

（いつそ、神などいなくなってしまうばいいものを）

心の深部にある思いを浮かべた。

ふと、側近や女官たちが観音扉のところで何やら騒いでいるのが

目に入った。何事かと思えば、側近たちを押し退けてム口が姿を現す。

「何を話し合っているんだ」

ム口は威風堂々と協議の間へ入ってきた。板で覆われた床は彼が歩く度に鳴る。ム口は無遠慮にカガミの横に腰を下ろした。

慌てて女官たちが駆けてきた。彼女たちは平伏して謝罪の言葉を口にする。

「たいへん申し訳ございません。大切な話し合いだとお止めたのですが、聞き入れてもらいませんでした」

「かまいません。ム口にも意見を聞きたいと思っていたところだったから、ちょうど良かった。あなたがたは下がっていて下され」

「は、はい」

ユウラクの優しい言い方に女官たちはあからさまに安堵の表情を見せた。彼女たちは深く一礼をし、場を下がった。

「高天原国を攻め落としたいのならば、はやみもん駿嶮門を攻め落として南門から御殿へ入れ」

ム口は開口一番に言った。何の話し合いをしているのか、彼は広げられた高天原国の地図を見てすぐに理解してくれたらしい。

「要は真正面から行けということか」

ユウラクは面白そうに顎ひげをさする。

ム口は指先でぐるりと都を囲んだ。

「北にあるくちなさいのもり梶子齋森は守りが手薄だ。難点おもさねは森の主神がいること。

敵意を持って森へ立ち入ればただじゃ済まない。東にはお前たちが逃げ出した不開あかすの門がある。今回の件で警護が更に強化されていることは必定。西から攻め込むのはやめておいた方が身のためだ」

「何で西は駄目なのよ」

食ってかかってくるルイをム口は軽くないです。

「俺が育てた兵たちだ。並大抵の武力では太刀打ちできない。できる限り、戦闘は回避した方がいいだろう」

ルイは不服そうに顔を歪めたが、カガミはム口の考えに同調を覚

えた。西門兵は強い。いくらカガミでも、多勢に無勢であれば命を落とすかもしれないほどの実力を西門兵たちは持っている。

「しかし、高天原国は圧倒的に力と数が勝っている。正面からぶつかれば、弾き返されるんじゃないか？」

カガミの言葉にムロは口を一文字に引き結ぶ。

「……ヤサカニ様を……」

ヤサカニの名を出したバシヨウに皆の視線がいつぺんに集まる。

「ヤサカニ様を頼ってはいかがでしょうか。あの方ならば、何か良い策を練ってくれるかと。高天原国にすることですし、きっと、入り込むための手引きをしてくれるはずです」

バシヨウの瞳が揺れる。本人も危険な賭けだと気づいているのだ。
「駄目だ」

ばつさりとバシヨウの考えを否定したのは、カガミでもムロでもない。マチだった。

マチが否定するとは思っていなかったのか、バシヨウは怪訝な顔をする。

マチは目を瞑った。

「ヤサカニの心は今、稲穂の如くたおやかに揺れ動いている。忌み部屋で姫巫にすがり泣いたヤサカニを見た瞬間、わたしには彼の心が痛いほど伝わった。ヤサカニは迷っている。迷いある者を仲間に引き入れると、必ず内部の分裂を生む」

「……ああ、そのとおりだ。二重間者となる可能性も捨て切れない」
ムロがマチに同意を示す。

バシヨウが悲しげに目を伏せ、膝の上に置いた両手をかたく握りしめたのを、カガミは見逃さなかった。

「迷い霧晴れば、ヤサカニもこちらへ戻ってくる。そう落ち込むな」

カガミは穏やかにバシヨウへ言葉を紡いだ。バシヨウは小さく、はい、と返事をした。

「ところで、どの蜘蛛の廻廊を使うかなんですが……」

ルイは後ろから黄昏国周辺の地図を取り出して皆に提示した。

「この際、精鋭部隊を全ての廻廊へ分散させるというのはどうでしょうか」

皆、ルイの作戦に興味を持った。

彼女の言いたいことはこうだった。一つの蜘蛛の廻廊に兵を集中させると、いつぞやのように全滅寸前まで追い込まれる確率が高くなる。ならば、兵を分散させた方が良い。ルイはそう考えたようだった。この方法であればほぼ同時刻に蜘蛛の廻廊を守る衛兵を叩けるので帰りが楽だ。そのかわり、これを実行するためにはどの部隊にも必ず最低一人、腕の立つ者がいることが必須条件となる。

蜘蛛の廻廊は全部で五つ。カガミたちの使った、衛兵がついていない廻廊を除くと四つである。昔はもつとあったというが、戦火や歳月によって風化してしまったらしい。

四つであれば、カガミたちが別々に行動すれば何とかなるとの結論に達した。

「あとは、敵に不幸が起ることを祈るばかりじゃ」

笑顔で言うユウラクにカガミたちは苦笑を洩らした。

「やけに楽しそうだな」

暗鬱げな声が広間に響いた。皆の視線が声の主へ向く。

初老に近い年齢の男は、豪華な装束を身にまとい、カガミたちがいる場所まで近寄ってきた。カガミに似た容貌をしている彼は、朽葉色のうつろな瞳にカガミたちを映す。

カガミとム口を除く全員が素早く身を伏す。

「……誰だ？」

ム口は小声でカガミに耳打ちした。

「俺の父だ」

言葉少なに答えを呈す。ム口の目が丸くなる。

大方、作戦内容を聞こうとふらりと立ち寄ったのだろう。

カガミの父親　黄昏国王の目が、ひたとム口に止まる。ム口の肩が微かに震えた。

黄昏国王の瞳に驚きが走る。

「マコ」

「何故、母の名を……」

戦慄せんりつを覚えた表情で、ムロが呟く。

「そなた、マコの息子か？」

ムロは強張った顔で深く頷く。

黄昏国王の表情が和らいだ。

「無事で何よりだ……」

黄昏国王が一步ムロに近づく。ムロはそれに合わせて半歩下がった。

ムロの顔色が白くなっていく。こめかみには冷や汗が伝っている。異様なムロの様子にカガミは声をかけようとしたが、それは黄昏国王がムロを抱きしめたことにより阻まれた。

場にいる者全てが凍りついた。

王の目に涙が光っている。

「マコには、そなたは死んだと聞いていた。きっと、今までつらい思いをしたことだろう。許してくれとは言わない。恨んでいてくれて構わない。ただ……そなたが生きていてくれてよかった」

深い愛情を感じる言葉。カガミには向けられたことのない温かさ。カガミは思わず声をなくした。

ムロも思いもよらない展開に呆けている。

「……父上、ムロを知っているのですか」

波立つ心を無理矢理押さえつけて尋ねた。

黄昏国王はようやくムロを解放すると、彼に穏やかな笑みを向けた。ムロは顔をそらす。

「ムロと言うのか。マコはいい名をつけたな」

黄昏国王はあらためてカガミに向き直った。

「カガミ、ムロはそなたの異母弟だ」

「嘘をつくな！」

耳をつんざくような悲痛な叫びが上がった。

ムロは、ふらふらと後退して壁にもたれかかる。肩で息をしながら力強い視線を黄昏国王とカガミへ向ける。

「嘘ではない」

静かに、しかし威厳ある口調で黄昏国王は言い切った。

「……そんな……。では何故、母さんは……兵たちの娼婦に……」

ムロが衝撃に打ちひしがれているのは一目瞭然だった。彼は力なく座り込んだ。ムロの顔は有り得ないほどに青白くなっている。

カガミはムロを立ち上げようと肩を持つとすると、弾かれた。

「触るな！……………っ」

言った瞬間、ムロの体が傾いた。^{かし}そのまま、彼は動くことをやめた。

「ムロ　おい、しっかりしろ」

呼びかけても返事はない。カガミはムロの体を強く揺さぶる。反応は返ってこない。

異常を察したバシヨウたちは頭を上げて急ぎムロを取り囲んだ。

ムロの口もとに指を当てたマチは扉の前に控えていた女官たちへ指示を飛ばす。

「まだ息はある！　早く医師と薬師を！」

「ムロ、ムロ。しっかりしろ。目を開けておくれ」

黄昏国王が涙目でムロを抱きしめる。

カガミは床に散るムロの長い髪を見ながら、しばし呆然としていた。

広い部屋の中央に置かれた寝台の上、ムロは多くの人々に囲まれていた。

カガミはもちろん、バショウやルイたちも集まっている。皆一様に心配そうにムロの顔を眺めていた。

医師や薬師がかかるがわるムロの体や目、口内を診ている。

協議の間で昏倒したムロは、丸一日経った現在も目を覚まさない。

「……ヤナギ様……」

うなされながら、ムロはかの姫巫の名を呼ぶ。カガミの右眉がはねる。

「状況は？」

カガミの問いに、医師や薬師たちは顔を見合わせて首を横に振った。

「昨日もお伝えしたとおり、ムロ様が倒れた原因はわかりません。

ですが、だんだん脈拍も弱くなってきたおり、命の危険が大きいことは確かにございます」

医師の一人がそう言うと、カガミはじっとムロを見た。

カガミはムロの手足におぞましい紋様が浮き出ているのに気づき、瞳孔を開いた。黒と藍を混ぜ合わせた不吉な色合いは、ムロの首もとにまで達している。

（呪い^{まじな}が進行している……）

直感的にそう思う。成長を促進する呪いの代償は大きい。それが今、彼を襲っている。

「王子　これはわしの私見なんじゃけど」

薬師の一人が緊張した面持ちで口を開いた。

「ムロ様は、疫病や疲労によって倒れたのではなく……祟^{たた}られているかもしれん」

「祟りだとっ？ 滅多なことを口にするんじゃない」

「バシヨウ」

強い口調で言い募るバシヨウを手で制し、カガミは薬師に笑んだ。
「興味深い意見だ。話を聞こう」

薬師はぼつりぼつりと話し始めた。青空市場でム口と会った際、彼自身がそう口にしていたこと。ム口の体が、呪いをはね除けようと拒絶反応を起こしていること。

「……もともと、呪いとは人を神に供物くもつとして差し出すためにあるものじゃけえ。わしらじゃあム口様の容態を良くも悪くもできはせん」

「助ける方法はない、と。そういうことか？」

カガミの疑問に、薬師の顔が歪む。その表情は、知りうることを言うか言うつまいか迷っている者のものだった。

薬師は深く長い息をつき、頭を垂れた。

「もしかすると、もしかするとム口様を助けられるかもしれない者をわしは知ってる。必ず治る、と断言はできんけど。……黄昏国の最果て、善灯村ぜんとうむらに住んどって、呪いや薬草に精通しとる奴がおるき」

場にいた医師や薬師らがいつせいにその薬師を見た。

「名を、サブライと」

ざわり、とカガミの肌が粟立った。その名をカガミは何度も聞いたことがある。

”激昂げっこうの大蛇おろち”。高天原国たかまのはらの元武官長。ム口の育て親。

脳内を様々なことが駆け巡る。

一人の医師がカガミの前に進み出て、薬師と同様に頭を垂れた。

「カガミ様。サブライはこの都にも名が通るほどの名医でございます。ありとあらゆる道に通じており、奇病も和らげる薬を煎じることができるとか。ただ、昔、高天原国で武官だったと聞いております。そのため、あまり皆彼のもとへ近寄らないらしいですが」

カガミは視線をム口に向けた。

何者にも屈しないム口の瞳は固く閉ざされている。苦しげに浅い

呼吸を繰り返す異母弟。

「……早馬を出し、サプライをここへ連れて参ります」

ルイは早口にそう言い、踵を返した。しかし、そんな彼女の肩をカガミは引き戻して首を横に振った。

カガミはム口の掛布を剥ぎ取った。そして、ム口の片腕を自らの肩に担ぎ上げる。

呆然とするバショウたちを尻目にカガミは扉に手をかけた。

「呼んでいる暇はない。国一番の駿馬の準備をしろ。そのサプライとやらのム口を見せに行く」

黄昏国は広大な領土を有している。亡国寸前と囁かれて久しいが、今はまだ圧倒的な存在感を以って諸国を寄せつけない。

長き戦を傍観し続ける識者たちは言う。高天原国に対抗し得るは黄昏国だけだと。

カガミは馬上より、明け染める荒野を眺めた。手綱を引き、馬の速度を落とす。自分の前に乗せたム口は浅い呼吸を繰り返している。いつもなら一つに結っている彼の長い髪が風に揺れる。

決して澄み渡ることのない、灰色が混じった空。高天原国との戦が熾烈さを増すにつれて黄昏国の空は灰色になっていったのだと昔師より教えてもらったことがあった。

カガミはふところより地図を取り出した。黄昏国の中でも最果てにある善灯村。東の大国である炎來国との境目にある村。

地図上では、この辺りのはずだと目を凝らして村の存在を探す。国と国との境目にある村は戦の火の粉を浴びやすいため、人目にかめようにひっそりと息を殺している場合が多い。

「……あれか……」

鬱蒼と生い茂る森の向こう側から細い煙がいくつか立ち昇っている。朝餉の支度をしているのだろう。

カガミは馬から降りると、手綱を握って自ら先導を切った。馬は

足元がおぼついていない。いくら黄昏国一の駿馬だと言っても一昼夜駆け続けられそうなる。

「よく耐えてくれた。村に着いたら十分な休息を取らせよう」

カガミはそう言つて馬のたてがみを撫でる。馬は「わかった」とでも答えるように一声啼いた。

意外にも広い村だというのは馬や荷車が通るための道が森の中にあることから推測できた。水のおいがする。

かさついた喉が水を欲する。出奔した時に持ってきた水はほとんど全てム口に飲ませた。ム口の命は風前の灯だ。カガミは、彼を差し置いて水を飲むことなどできなかった。

数刻ののち、村の入り口へ辿り着いた。のどかな風景は殺伐としたこの国の状態に似つかわしくない。ゆつくりと善灯村の中を歩く。簡素な造りの木でできた家々はどれも葦あしや藁わらで入り口を隠している。女たちは家の前で火を焚いて朝餉の支度をしていた。粟あわやヒエを煮込んだにおいはカガミの腹をよじった。

ふと、一人の女と目が合った。彼女は早朝の訪問者に警戒を示し、眉根を寄せた。

「こんな朝早くから、この村に何のようだい」

「サブライという者を捜している」

女は馬にかつがれたム口を見ると、合点がいったのか一人頷く。

「ああ、その子をサブライに診せにきたのか。すまないね、近頃よく炎來国の奴らが来るもんだから気が張っちゃっててねえ」

さつとカガミの目の色が変わった。

「炎來国の奴らが……どうしてこの村に？」

問うと、女は首を捻った。

「わかんないけど、いつもサブライのところに行ってるみたいだよ」

「そうか、ありがとう」

足早に立ち去ろうとするカガミに向かって女は声をかけた。

「サブライの家はこのまま真つすぐ行ったらある社殿を右に曲がつ

たところにある水辺のほとりだよ！ 他家とはちよつと離れてるからすぐわかるはずさ」

親切に教えてくれた女に対してカガミは一礼した。

女の言ったとおり歩いていくと、サブライは既に起きているらしく、家の前では火が焚かれている。しかし、サブライはそこにいなかった。火に煽られている器の中には水しか入っていない。

入り口に垂れているムシロが揺れた。その隙間より、浅黒い肌をした屈強な男が姿を現した。顔に刻まれた大小さまざまな裂傷だけが白く浮いている。数々の激戦を潜り抜けてきた兵に相応しく、広い肩幅と巨大な体つきをしている。

サブライはカガミを見て固まった。そして、馬に背負われているム口を見ると表情を和らげた。

「こうも立て続けに客人が来る日など、久しぶりだ」

サブライは食事の用意をしようと一言して一旦家の中に戻り、しばらくするとムシロからひよっこり顔を覗かせてあたかくカガミたちを家の中へ迎え入れてくれた。馬は家のすぐ脇に流れる川べりに繋ぎ、たくさんの穀物と水を与えてくれた。カガミには雑穀と木の実を潰して煮詰めたものをよそってくれた。それを口にした瞬間、身が震える。張り詰めていた糸が切れて、どつと疲れが体中を回った。

「ハルセ王子……で間違いないか」

名乗っていなかったにも関わらず、サブライはカガミの正体を当てて見せた。カガミは飯を食べる手を休めて頷く。

「よく、知っているな」

「わしは、もともと高天原国の武官だ。王子の顔は一度戦場で拝見したことがある。……たしか、王子の初陣の時だったと記憶している」

カガミは息を呑んだ。ぴんと張り詰めた空気が流れる。

「……まあ、昔のことはいい。今はム口のことだな」

そう言つて、サブライは荒く肩を震わせて呼吸するム口のそばに寄った。ム口の睫毛が微かに動く。呪の紋様は彼の右頬まで侵蝕し

ている。

「ム口を助けられるか」

「こればかりはわからない」

「あなたは名医だと都の者から聴いた。なんとかならないのか」

身を乗り出すカガミの肩をサブライは押し戻す。

「ム口は今、戦っている。己を乗っ取るうとしている神
地祇ちぎとな」

衝撃がカガミを襲った。呼吸することも忘れた。

？地祇？とム口は戦っている。そうサブライは言った。

言葉をなくしたカガミにサブライは非情にも告げる。

「この子はそれを覚悟の上で呪を受けた。……王子、ム口に呪を刻んだのはわしだ」

カガミは思わずサブライの胸倉を掴んだ。

「ふざけるな。禁忌きんきの術を 何故」

視界が霞んだ。動揺に肌が粟立つ。

サブライはいたって静かな瞳でカガミを見据えた。その目はム口によく似ていて、カガミは視線を逸らす。

「あなたが動揺しているのはわしがム口に禁忌の術を施したからか
それとも」

「言うな！」

カガミの声が上擦る。カガミは耳を塞いでうずくまった。

「？地祇？が関わっているからか」

弾かれたようにカガミはサブライを振り仰いだ。

つり上がったサブライの眼からは何の感情も窺えない。

「伝承がある。神々はこの世を造った際に己の血脈しむくを受け継ぐ一族
たちも造った。

中でも巨大な神の血脈 天を支配する天神あまつかみの一族は？神の
目？、地を支配する地祇ちぎの一族は？神の腕？、海を支配する海若かいじやくの
一族は？神の口？と呼ばれた。神の血脈を受け継ぐ一族たちにはそ
れぞれの呼び名どおりさまざまな能力を有していた。彼らは長き年

月を経て血を薄めた。

しかし、まれに神が与えた太古の力を持って生まれてくる者もいる。その者たちは神の申し子と呼ばれる。

……ム口が地祇の一族の正統な血を引いているのは会った時からわかっていた。申し子ではないものの、地祇を体に宿す資格があり、素質があつた。だからこそ、わしも賭けたのだ。大切なものを守りたいのだとひたむきな目で訴えてきたム口なら、と」

サブライは空を見つめて言葉を重ねる。

「わしは伝承を語る一族の末裔。母よりいつも聞かされていた。古くより、ヒトに宿る神の力は混沌とする世を統治するために使われてきた。常に歴史の覇者は？神の腕？だった、と母はいつも言っていた」

真摯な瞳でサブライはカガミを見つめる。

その視線が更にカガミを追い詰めた。手が小刻みに震える。

カガミは、すつくと立ち上がった。

「俺は………神など信用しない。神は、人間を青草としか見ていないのだから」

頑ななカガミに向かってサブライは厳しい表情を送った。

「何を恐れることがある。地祇は王子の守り神。そうだろう、？神の腕？……いや、？地祇？の申し子よ」

ムシロをぞんざいに払いのけてカガミは外へ飛び出した。

残されたサブライはム口の額に手を置いた。

四・

父譲りの朽葉色をした髪を頭のでっぺんで一つに結わく。

ハルセは王宮の庭で目付役とともに剣の稽古をしていた。彼の確実な剣さばきは天賦てんぷの才と誉めそやされ、鮮やかな身のこなしは神の申し子に相応しいと噂されている。

端麗な相貌はあまり多くの感情を見せない。それが都中の女たちの心を射止めた。冷たい美しさはまるで繊細な輝きを宿す宝玉だと、女たちはうっとり声を揃えて言う。

「剣の稽古はこれまでです」

「ああ。ありがとう」

ハルセは淡々と礼を述べると剣を鞘に納める。ハルセに剣術を教える目付役の男は、ふっと微笑を洩らした。

「王子も大変ですね。次は老師より、史実の教えを受けるんですけど」
「つけ」

ねぎらいの言葉をかける男にハルセは眉ひとつ動かさずに頷いた。
「ああ。それが終われば、軍師から軍略の教えを請うことになっている」

「……あまり無理をされないよう」

男に背を向け、まだ八つになったばかりの王子は呟いた。

「大丈夫だ。高天原国たかまのはらを打倒するためならばこの身一つ、火にくべることも厭いといはしない」

幼子に似つかわしくない口調と言葉に男は声を詰まらせる。ハルセは男を一瞥いちべつする。

「俺は、この地上唯一の希望なのだから」

極めて冷淡に言い放った。

打倒高天原国。

それがハルセの全てと言えた。

生まれ落ちた際に占者たちから、地祇^{ちぎ}の血脈を受け継ぐ？神の腕？という称号を貰い受けた時、ハルセの行く末は決まったも同然だった。

高天原国に苦しめられている地上唯一の希望。何度もそう囁かれてきた。また、彼の持つて生まれた武才に周囲の評価はたかまつていく一方だった。

ハルセは当然のごとく父王や官たちの期待に一心に応える。

ハルセ王子は国の傀儡^{くわい}だ！ その瞳には何の希望も映っていない！

心ない言葉を浴びたことは一度や二度のことではない。たしかに、とハルセはその言葉を肯定していた。自分は傀儡かと恐怖する心も嘆く心も浮かんでこない。

ハルセには高天原国を滅ぼすことだけが心の拠り所だったのだ。目標に向かってまい進すれば、周囲はハルセを認めてくれる。自分の存在理由ができる。

高天原国を憎んでいたわけではない。ただ、幼い彼は？神の腕？と呼ばれることで自らの居場所を保っていた。

父はハルセを腫れ物を触るかのように扱う。母はどこかよそよそしい。だが、そんな彼らもハルセの優れた能力を目の当たりにすれば笑顔になる。

ハルセはいつしか己の感情を殺し、文武を極めることに心血を注ぐようになった。

（何も感じない。何も見えてこない。黄昏^{たそがれ}国の未来　高天原国の滅亡　。その先に、何があるというんだ）

虚ろな両目に映るのは、これまた虚ろな灰色の空だった。

深く大きな闇が広がっていた。

一寸の光も射さないそこに、ハルセは佇んでいた。

いつもと変わらない夢だとハルセは無感情にその場に座り込んだ。

寒い、と呟く。その声は闇に紛れて消え失せる。

ハルセは両膝に額を乗せて目を瞑った。夢の中で目を瞑るというもおかしな話だが、目を開いていても閉じていても映る景色は変わらないのだから構わないだろうと思った。

『申し子よ』

ふいに、敵かな声が頭上より降り注いだ。

驚愕して目を丸くし、ハルセは瞬時に身構える。

辺りを見回しても誰もいる気配はない。だが、たしかに声が聞こえたのだ。ハルセの喉が鳴る。

声は低く笑い声を洩らした。

『ようやく捜し当てた。愛しき申し子、何を恐れることがある。わらわの大切な寄りしろとなる子供』

心底愛おしむような声音で言葉を紡いでいるにも関わらず、その声にはハルセは警戒を解くことができなかった。

「貴様は、何者だ」

返ってくる答えに見当はついていなかったが、訊かずにはいらなかった。

くつくつと声は笑みを深くする。声はハルセの心奥まで響き、背筋を凍らせる。

『そちは聡い子じゃ。だが、わらわは地祇ではない。海若じゃ』
「！」

予想外の返答にハルセは困惑を隠せなかった。海若と言えば？神の口？を操る姫巫ひめみこを加護する神だ。

暗がりから細く白い手が何本も伸びてくる。ハルセは後ずさった。
「来るな……っ。俺は地祇の申し子だ。俺に手を出せばかの神だつて黙っていない」

『……申し子よ、そちは何も知らぬ無垢な赤子じゃな』

幾本もの白い腕はハルセの首に手をかけた。圧迫感はない。ただ、手をかけているだけ。氷のように冷たいそれに触れられた瞬間、嫌悪が体中を駆け巡った。

「触るな」

強い口調で言うと、白い手はゆるゆるとハルセから距離を持った。
声　海若は歌うように言を紡ぐ。

『可哀想に。選ぶ道があることすら知らされておらぬのじゃな』

海若に惑わされては駄目だとハルセは身を固くした。神は残酷だ。
気を緩めれば魂を引きずられてしまう可能性だってある。

『？申し子？とは』

白い手は四方に散らばり、ハルセの逃げ場をなくす。

『ただの神をおろす器のこと。わらわたちが自在に力をふるうため
の寄りしろに過ぎない。神の加護など、ないのじゃ』

「そんな、馬鹿なことが……」

『神はヒトなど愛さない。わらわが姫巫に力を貸しているのも、た
だの気まぐれ　暇つぶし』

ぴしゃりと海若はハルセに声を投げた。

『それにね、そちは一神だけのものではない。わらわのための器で
もある』

「何を言っている。俺はれっきとした黄昏国が王子。黄昏国は古く
より地祇の一族が治めてきた土地だ。海若の血脈など入り込んでい
るはずがないっ」

宙に浮かぶ白い手がハルセの方へ寄ってきて、頬を撫で上げる。

『そちの母君は、わらわの国である高天原国出身じゃ。しかも、あ
やつは姫巫の娘。色濃くわらわの血脈を受け継いでおるわ』

初めて聴く驚愕の真実に、ハルセの額からは多量の汗が噴き出る。
母の出身地など気にしたこともなかった。

白い手がハルセの体を抱きしめる。それを払いのけるにはハルセ
が受けた衝撃は大きすぎた。

『申し子よ、そちは地祇の恩恵もわらわの恩恵も受けられる稀なる
器。そして、その何も映さない傀儡の瞳はわらわが降り立つに相応
しい。さあ、その体を明け渡せ。さすれば、もう何も考えなくてよ
い。ただまどろみの中でそちの望む世を夢見ていればよいのじゃ』

「何も考えなくていい、と？」

『ああ。わらわにはわかる。そちの感情がこそげ落ちている様が。そのような状態で浮世を生きるのは辛かるう』

白い手は無抵抗のハルセを締めつける。骨が軋む音がする。

その時、暗闇に金色の光が射した。白い手がそれに反応してハルセから離れた。稲穂のごとく美しい光は暗闇を瞬く間に照らし出す。

『海若よ、私の領土に勝手に入り込むな』

身の凍るような冷たい声が光のかなたより聞こえてくる。

『……………はて、わらわは申し子に惹かれてここに来ただけのこと。この空間は黄昏国の領土でないはず。そちこそ、わらわの邪魔をするなど、無粋な奴じゃな』

『この御子は、黄昏国の青草だ。私の青草に手出しは許さん』

緊迫した空気の中、ハルセは俯き、笑みを零した。

『何がおかしい、申し子よ』

地祇の声に、ハルセの笑みはますます濃くなる。

ハルセは光が射し込んでくる方に真つすぐに目を向けて皮肉げに顔を歪めた。

「お前たちはただ、人々が争い合つて死んでゆくさまを眺めているだけ。救つてなどくれない」

『我らはもともと青草たちを救おうという気持ちなど持ち合わせていない』

硬質な声音で地祇が言った。

ハルセは双眸を細める。

「そのくせ、気まぐれに力を与えては世を混沌とさせる。しまいに、自ら申し子の体に乗っ取り好き勝手に力を揮^{ふる}おうとする」

神々は何も言わなかった。それが肯定だと受け取ったハルセの瞳に、鋭利な光が宿る。刃の切っ先を思わせる光を宿した両目は、先程までのハルセと今のハルセを別人に見せる。

ハルセの根本より、何かがにじみ出す。

海若や地祇が戸惑っているのが感じ取れる。空間が歪む。

怒りや憎悪を超越した熱い感情がハルセからあふれ出した。唇を震わせて、彼は言った。

「そなたたちの力など、借りない」

言霊。森羅万象の力を借りて人が行使する力。

一瞬のうちに空間は崩れ去った。目覚める間際、海のおいと稲穂のおいが鼻孔をくすぐった。

ハルセは夢から醒めると、視線をずらして格子ごしに外を見た。

明け方の薄い水色をした空に、拯溟の花が舞っていた。

抜け殻だったハルセは、その時初めて確固たる己の意思を持って起き上がった。

昔の記憶は今も胸に重くのしかかっている。

朝露に濡れた青い稲が顔をのぞかせる太陽によって煌めいている。カガミは感慨深く溜め息を吐いた。久方ぶりに聞いた神々の名に動揺を抑えられず、サブライの家を飛び出したカガミは闇雲に走った末、田園が広がる一角に辿り着いた。

小路の脇にあつた大きな石に腰かけ、たわいない朝の風景を眺め見る。

（あまり過去に浸るのはよくないな）

過去を思い出せばその時感じた想いに引き込まれてしまう。

カガミの後ろにある背の高い草むらが揺れる音で我に返った。息を殺してそちらを見ていると、現われたのは、サブライだった。

「やれ、随分搜してみれば……あまり遠くへ行つてなかったのだな」
彼は落着いた口調でそう言うと、カガミが座っている石の隣にある木に体を凭もたれかけた。

「取り乱してしまい、すまなかった」

謝罪の言を口にするカガミに、サブライは緩く首を振って「気にするな」と答える。

「王子、もしよければ家に戻って少し話をしないか」

サプライの突然の申し出に少し驚きながらもカガミは静かに頷いた。

五・

朝の光は善灯村全体を橙に染める。朝餉^{あさけ}を食べ終わった子供たちは元氣よく森へ駆けていく。大人だけでなく、子供たちもまた村のために食料や水の採取をおこなっているのだ。

ハルセとサブライは言葉少なに家路を辿った。

「サブライ様、おはよう」

「この前は弟の熱を下げてくれてありがとう」

道すがら、屈託ない笑顔で子供たちはサブライに声をかける。大人たちは高天原国^{たかまのほろこく}の武官長であった彼を恐れているのか遠巻きに一礼するだけだったが、子供たちはそのようなことなど齒牙にもかけず、サブライの腕へ足にまわりついてきた。サブライは柔和な表情で子供たちの頭を撫でる。

「また何かあったらすぐに言いなさい」

大地にしつかりと根ざした大樹のような優しい眼差しは慈愛に満ちている。

子供たちは手を振って森へ向かっていく。

「随分と懐かれているな」

「ああ。わしの薬湯が人々の役に立つのは嬉しいことだ」

「……あなたの人柄もある。？激昂の大蛇^{おろち}？殿」

ハルセの皮肉にサブライは口の端を上げた。

「おや、あんた無事にサブライに会えたんだね。良かった良かった」
サブライの家へ着く直前、一人の女が気安く声をかけてきた。力ガミにサブライの居場所を教えてくれた女だ。

「先ほどは助かった。ありがとう」

女に向かって力ガミが笑って見せると、女は顔を赤くした。

「いいよ、そんなくらい。それにしたってサブライ。炎來国^{えんらいこく}の奴ら……
…どうにかしてくれないかい」

「うむ。迷惑をかけているのならすまぬな」

「迷惑つてほどじゃないけど、みんな怖がつてるよ。またこの村が戦禍に巻き込まれるかもって」

サブライは髭を撫でた。俯き加減の彼の表情は読み取れない。

「ま、早くあいつらが来ないようにはしておくれよ」

そう言つと女はサブライの肩を叩き、その場を去つた。

カガミとサブライが家に帰ると、ム口は幾分か落ち着いて眠つていた。唸ることもなく、眉間に皺も刻んでいない。サブライはム口の横に腰を下ろすと、脇にあつた器を手に取り、それをム口の口へと薬湯を流し込んだ。ム口は無意識下で薬湯を飲む。

「穢れに効能がある薬湯を煎じた。神に抗うのには清浄さも必要だからな。……わたしにできるのはこれぐらいだ」

しばらくの間、カガミもサブライも何も話そうとしなかった。ただ、子供たちの笑い声や鳥たちの歌声に耳を傾けていた。

「わしのところに炎來国の使者が何度も足を運んでいる」

石の器に何種類かの薬草を入れてすり潰していた手を止め、ぽつりとサブライは口火を切つた。

聞けば、サブライは炎來国に拳兵を促されていた。炎來国は黄昏国と合流して高天原国にきばを？^むこうとしていたが、きっかけが掴めずにいたのだ。

黄昏国と炎來国はもともと壊滅的に仲が悪い。黄昏国の支配下にくだるのを炎來国王はよしとしなかったらしい。

「なるほど、それであなさに白羽の矢が立つたわけか」

戦場を駆ける兵の中でサブライの名を知らない者はあまりいない。戦場での地位が上にあればあるほど、サブライの名は重きを持つ。

彼の出陣した戦はどれも高天原国側が勝利をおさめていた。

そんな彼が高天原国を離れ、黄昏国で細々と暮らしている。

炎來国の者も、サブライの名を聞いた瞬間に？激昂の大蛇？であるサブライを思い浮かべたらしく、もともとは？高天原国の武官長・

嵯武禮？と同一人物かを探るためにこの村に来たと正々堂々本人に告げたという。

サブライを味方につければ、黄昏国と同等の交渉ができると炎來国は踏んだのだ。黄昏国が腕の立つ兵に困窮しているのを知っている隣国だからこそ考えることのできる策略。

「あなたが炎來国と手を組むのなら、俺はかの国と同盟を結ぼう」
「王子……」

「恥ずかしながら、我が国は傾いている。武に長けた者のほとんどは他国に流れ出てしまった。だから、より強き者が加担してくれるのなら、同盟だって組んでみせる。サブライ、俺はこの戦に全てを捧げる所存だ。王子の地位だっていらぬ。ただ、絶対に負けるわけにはいかない」

サブライは黙って聞いていたが、やがて一つ溜め息をついた。

サブライは激昂の大蛇の名に相応しい、威厳ある瞳でカガミを見た。

「それほどまで、戦に勝ちたいのならば、神をその身に降ろせ。神を制すには同等の力がある神が必要となる」

「神は、人に手を貸したりしない。自らの傀儡を望んでいるだけ」

「申し子であれば、強い気力と想いがあれば体に乗っ取られたりしないものだ」

カガミはサブライの言葉に了承しかねた。人の手で最後を飾りたという矜持もある。

だがそれ以上に、幼い頃の出来事が神の介入を拒む。

「わしが参戦したところで、勝敗は見えている。高天原国には海若ちりあくたがついているのだ。神の前では人など塵芥と同じ」

「それでも！」

カガミの語気が荒くなる。

「それでも、勝たなければならぬんだ！
海若かいじゃくに縛られ続けて苦しんでいる者のために！」

カガミの脳裏にヤナギの泣き顔が浮かんだ。声を上げずに涙を流

す姫巫は、いつも心で助けを呼んでいた。はつと我に返り、カガミは口を閉ざす。

（俺は 何を）

求めているのは黄昏国の復興である。間違っても敵国の大将である姫巫の解放ではない。

カガミは軽く首を振る。

「何も持ち得ない手で守れるものなど、たかが知れている」

深い声色が響く。

「王子、貴殿ならわかるはず。身分や金、全てをかなぐり捨てたところで何も守れないことを。わしは、サコやム口を守りきるだけのものを持っていなかった。だが、王子は違う。貴殿が望めば地祇は必ず応えてくれるだろう。その力はいくら望んでいる者がいようと貴殿しか持ちえないもの。みすみす拒絶されるは、愚行かと」

サブライの言葉の端々から感じ取れたのは、悔みと羨望だった。

「……神降ろしの代償は？」

「そなたの未来。神の力に体が耐えられなければ死ぬ。よしんば耐えられたとしても、神を長く体内にとどめた者は体の老化が止まる老いるという未来を神は奪う。永劫、生き続ける苦節が訪れる」

答えを聞いたカガミは何も言わなかった。

神だけが知っている、この戦の行く末を。

これから先、数多の魂が関わることとなる始まりの宿命を。

想いの濁流は宿命の本流へ雪崩れ込む。

高天原国、黄昏国。古代史に残る二大国の最大にして最後の戦が始まるうとしていた。

五章 曙光射す

曙光あけぼのがやってくる。

兆しは日に日にはつきりと見えてくる。

「嗚呼、わかつていたよ」

己の憎悪や憤怒のために、ちはやぶる神へ傾倒した母を見つめて彼女は育った。

その母が生きている間中危惧していたことが現実になりつつあるのだと、彼女には察しがついた。

神の申し子達がこの浮世に降り立った。

自分や母のような代役者とは違う。

非常に強い光。

黎明れいめいの刻。

彼女は血塗られた唇を舌なめずりする。その動作は緩慢かんまんでいて、妖艶だ。

「神の力、か」

ふふ、と嗤う彼女はどこまでも浮世離れしており、不気味であった。

「申し子が神の力を受け継いだ時、人の世はどうなるのだろうね」

申し子 神を受け入れるに相応くぐうしい器。

それがかの神が渴望してやまぬものであるなど、見え透いたことだ。

彼女 姫巫はたおやかな御髪みくしを右側に寄せて、檜の木でこしらえた座椅子に腰を下ろした。

彼女は頬杖をつき、社殿の格子越しに見える天を眺めた。

蒼く滲むそれは、まるで涙の如く透き通っている。

姫巫が母から姫巫の座を譲り受けてより、早数百年が経とうとしていた。

「誰がおいそれと、ここまで守ってきた世を壊させようか」

空に向かつて投げた彼女の言葉は、強い意志を含んでいた。

力強い眼光は、はつきりと叛旗の色を浮かべている。

「戦、反抗、大いに結構。それが人なのだから」

だからこそ、と姫巫は口を一文字に引き結ぶ。

彼女の両手に力が入る。

「わたくしは抗いましょうぞ。守るべきもののためなら、手段は厭わない」

ねえ、。

彼女は地上に生まれ落ちたばかりの、一人の赤ん坊の名を呼んだ。

カガミたちの脱走劇から五日後、今代姫巫が重用していた采女^{うねめ}チズコの葬儀が行なわれた。

その時、立ち昇る煙を前に不覚にもヤサカニは少しだけ泣いてしまった。幼少時代、ともに高天原国^{たかまのはら}の邑^{むら}で過ごした記憶は喪った左目と左耳に生々しく刻んでいる。チズコが重傷を負ったヤサカニを担いで近隣の邑へ助けを求めなければ、自分は死んでいたに違いない。

（なのに、俺はチズコを助けられなかった）

彼女は最期までヤサカニの窮地を救ってくれたのに。

悔やみきれぬ想いがそのまま涙となつて目頭に浮かんだ。

葬儀が終わるとその足で梶子齋森^{くちなさいのもり}へ向かった。梶子齋森の入り口である北門前には女官たちが群れをなしている。彼女たちは森に向かつて一様に祈りをささげている。姫巫の回復を願っているのだ。

「失礼」

女官たちはヤサカニの声に気色ばんだ。ある者は横の者を小突き、ある者は髪を手ぐしで整える。

ヤサカニはそんな彼女たちに留意せず、橘の木で覆われた鏡月池^{きょうげついけ}へ近寄る。薄く湯気立つ池の水を掬いあげて口をゆすぐ。そのあと、丁寧に手を洗った。せめてこれくらいの清めはしろと口をすっぱくして言っていたチズコが思い出され、胸が痛んだ。

神杷山^{しんはやま}の入り口は、何度も通ううちに把握できた。黄昏国^{たそがれこく}の民である自分を神杷山の主神は拒むだろうと思っていたヤサカニは、初めて姫巫の社殿へ続くこの楠の木に触れた時、ある程度の覚悟をしていた。しかし、主神は沈黙を貫いた。ヤサカニが山を登ることを容認したのだ。それが果たして何故かは人の身空ではわかりかねる。「お待ち申しあげておりました、ヤサカニ殿」

「ああ。……采女殿、姫巫の……ヤナギ様のご容態は？」

采女たちは力なく俯く。何も変わっていないのだ。

ヤサカニは社殿の奥間へ通された。代々姫巫が住まう部屋は簡素で、余分なものが何一つない。ただ、橘の枝とゆずりはだけが中央に置かれている。

采女たちは、ヤサカニ様も安静になさってくださいませ、と気遣わしげに言って部屋を出ていく。

ヤサカニは寝台に寝そべっているヤナギの顔を覗き込む。彼女の傍らに置いてあった桶の水に浸した木綿布を固く絞り、ヤナギの額に乗せた。

微かに睫毛を震わせながら眠り続けるヤナギを見て、ヤサカニは溜め息を吐いた。

真象の力をふるい、炎を操った姫巫ははまだ深い眠りから醒めない。ヤサカニは火傷を負った自らの左肩に手をやる。少し血が滲んでいたため、上衣を脱ぎ捨て巻いていた布を剥^はいだ。赤黒く変色した肌はいまだじくじくと痛むが、ヤナギの痛みに比べればと自らを奮い立たせていた。

しずしずと扉が開かれる。采女たちはヤサカニが上半身を露わにしているのを見て、さっと頬に朱をさしたが、すぐに立ち直って用件を述べた。

「ヤサカニ様のお傷に当てる布と塗り薬をお持ち致しました。どうぞ、お使いになって下さいませ」

「すまないな」

いいえ、と軽く頭を下げて采女たちは退室した。彼女たちはよく気が回る。これも采女筆頭を務めていたチズコ^{たまもの}の教育の賜物^{たまもの}なのだろう。采女たちの動きに無駄は一切ない。

ヤサカニは壺に入った塗り薬を手に取り、患部に塗布する。少しだけ痛みが和らいた。濃厚な薬草の匂いが鼻孔に迫る。それを封じ込めるように手早く布をきつく巻きつけた。

火の手が一番大きかった場所にいたことをかんがみれば、ヤサカ

二はだいぶ軽傷と言える。火柱からヤナギを守る際に左肩を痛めた以外に大きな外傷はなかった。

（ヤナギ様の傷も、内側でなく俺のように外側であれば）

いまだ目覚めないヤナギを問診した医師は云った。外傷はほぼない、あるとすれば心に刻まれた傷だろう、と。

ヤサカニは脇においた桶に自らの顔を映した。揺れる水面に映る右目は淡く青みがかっている。もとは赤茶色だった瞳が変色した理由はただ一つ。

真名を縛られたからである。

真名縛りは姫巫だけが行なえる秘術であり、それを施行された者は体のどこか一か所の色が変わるといふ。ヤサカニの場合、赤茶だった瞳の色が青茶になっただけなので、さほど気になる変化ではなかった。

しかし、とヤサカニはヤナギを見つめた。ヤナギはヤサカニの瞳を見るたびに、自分が真名縛りをしたのだと心を痛めるのだろう。それをヤサカニは危惧していた。ヤサカニ自身が真名を教え、縛れと懇願したのだ。ヤナギが気に病む必要はない。

あの状況下で、何もせずに火の海を脱出できたとは到底思えない。真名を縛られたことにより、ヤサカニはヤナギを守るために己の限界点を越えた能力を発揮できたのだ。

ヤサカニはヤナギが自分の真名を口にした時のことを思い出して胸を震わせる。

『シユマ』

甘く、脳髓を侵蝕していくような声。この方を守り抜きたいと思わせるほどに心地よい響きだった。

真名を呼ばれること自体、滅多にないことだ。大半の者は家族以外に真名を明かさず生涯を終える。

まさか、自分が敵である姫巫に名を明かそうとはな、とヤサカニは苦笑した。

あの瞬間　火の渦の中でヤナギが倒れ込んだ瞬間、ヤサカニは

呼吸を忘れた。今もあまりその時の行動を思い出せない。とにかく助けなければと体が動いた。

カガミの背後からヤサカニは呆然とヤナギが真象の力を振るうさまを見ていた。すると、急にヤナギが胸元を押さえてうずくまったのだ。

反射的にヤサカニの体はカガミの横を横切っていた。

『いけない、ヤサカニ様！』

バショウが手を伸ばしてきたが、ヤサカニには届かなかった。剣も荷物も何もかもなげうつて、ヤサカニはヤナギのもとへ駆けた。ヤサカニがヤナギの傍らに膝まづくと同時に炎の勢いが更に強まった。ああ、もう自分は引き返せないとその時ヤサカニは覚悟を決めたのだ。

「……………何故、だろう。今だつてこんなに憎いのに」

一人ごちてヤナギの頬にかかる髪をすくい、己の口元に当てる。

黒く艶のある髪からは部屋に焚きしめられた香の匂いがした。

「笑つか、チズコ。幼いあの日、姫巫など絶対に殺すと言ってお前と訣別したのに」

格子から洩れる夕刻の赤みを帯びた光がヤサカニの繊細な造りをした相貌を照らす。あまり表情を和らげることのないヤサカニが、ふと痛みを含んだ微笑を浮かべる。

「俺は自ら姫巫を選び取った」

高天原国の上空には、薄い雲が立ち込めていた。風情ある宮だと他国の使者たちから称される王宮は、今や目も当てられない状態だった。

西門にある忌み部屋は跡形もなく焼け焦げ、台王の寝所にかかる格子も黒い炭となっている。

十日前に起きた黄昏国の者たちの脱走劇は、すぐに人々の耳に伝わった。

『ああ、きつとこれは凶事の前触れ。神が怒っておられるのじゃ。

台王の治世では国が潤わんと』

『そうかもしれないね。黄昏国の奴らもこんな中途半端な火事じゃなくて、宮殿ごと全部燃やしてしまえばよかったのに』

『ムロ武官長が黄昏国に加担するとなると、この国も終わりかもな』
市井からはそのような声も上がる。

今年は日照りが続いていたため、穀物の実りが芳しくなかった。

しかし、台王は民に例年と変わらぬ税を納めさせた。守れない者は容赦なく引つ立てられて打ち据えられ、罵倒される。しまいには殺された者もいる。そのような現状に人々からは今回の件は台王のせいだとのたまう声が少なくない。

慌てたのは台王や側近たちだ。呪詛のような噂を断ち切ろうと躍起になるが、広まってしまったものは取り返せない。

『大体、他国を制圧して何がしたいんだか』

『美姫の集団でも作りたいんじゃないの。台王様は好色だから』

綻びは宮中にも広がる。

反逆罪だと台王は憤然とし、家臣たちに噂を聞いたならその者を御前に引つ立てよと命をだすが、その家臣たちさえ台王を嘲っているのだからどうしようもない。

耐えようのない怒りの矛先を、逃亡した黄昏国の者たちに台王が向けるのに、そうそう時間はかからなかった。

寝殿の奥にある楽屋で日がな酒に楽に興じていた台王は、集った者たちに目を向けた。

『ヤサカニを……ヤサカニをここへ！』

皆、互いに目を合わす。台王はヤサカニを処断しようとしているのだ、と台王の様子から容易く見破れた。

「し……しかし、ヤサカニ殿は深手を負っておいでで……。その上、寝ずに姫巫様の介抱までされておられて……」

一人の采女が震える足で進み出て、口を濁す。それが更に台王の怒りを煽った。

台王が持つていた杯を女官に叩きつける。杯に入っていた発酵酒が零れて采女の衣服を濡らした。

「貴様は高天原国の民であろう！ わしの言うことが聞けないのだしたら、奴婢ぬひの身分に落としても良いのだぞ！」

意見した采女は今にも泣きだしそうな面持ちで席を辞した。

台王の傍にはべっっている美姬たちもその様子に声を失っている。

「台王様、さきほどの采女は都でも有力な貴族の娘でございます。その物言いはいかなものかと！」

非難の声を上げたのは、理知的な顔をした台王付きの近衛兵だった。近衛兵は精悍な表情で台王を睨み据える。

「……………そちはこれより、西門兵に格下げじゃ」

稲妻が走ったごとく、楽屋は静まり返った。

近衛兵は慇懃いんぎんに頭を垂れて台王の近衛兵である証の虹色をした玉が詰め込まれた剣を床に置き、「とんだ御無礼を致しました」とだけ口にして退出していった。こそこそと側近が台王に耳打ちする。

「あの者は、近衛兵の中でも腕利きの者でございましょう。身分も高く、教養も高い。どうぞ、ご恩情を」

「黙れ。誰であろうとわしに口出しは許さぬ。そなたらも、腹の中では笑っておるのだろ。わしを」

酷薄に笑う台王に意見出来る者はいなかった。

台王はくつくつと喉を鳴らすと、隣にいる美姬へ「酒を」と促す。場の雰囲気きふきに圧されていた美姬は慌てて杯に酒を注ぐ。それを煽り、台王は不穩ふえんげに舌舐めずりする。

「……………知らぬから、笑えるのだ。知らぬから、狂わずいれるのだ」
小さく呟いた台王の言葉を拾った者は数名いたが、誰もその真意を測り知ることなどできなかった。

その日は雨だった。

謁見の間には武官や文官、女官たちがひしめいている。皆、これから始まるヤサカニへの詮議せんぎを傍聴しに来ているのだ。

ヤサカニは死を覚悟した。彼は深く頭を下げたまま微動だにせず、ただひたすら正面上座にいる台王の言葉を待った。

「ヤサカニ」

「はっ」

台王の呼びかけにヤサカニはすぐさま返事をする。

「ム口とカガミの裏切り……そちも知っておるだろう。あまつ、あいつらはこの宮に火をつけた」

謁見の間の空気が凍った。皆の視線を一身に背負い、ヤサカニは伏し目がちに口を開く。

「存じ上げております」

言った瞬間、ヤサカニの右頬を何かがかすった。杯だ。その中から少量の酒が零れ落ちる。

ゆるゆると双眸を台王に向けると、彼の顔は真っ赤に蒸気していた。興奮しているのは一目瞭然だった。

台王の怒りは正当なものだった。宮殿の半分はヤナギが起こした炎によって焼け落ちてしまった上、捕虜にまで逃げられてしまったのだ。なお、火の件がヤナギの仕業だとは誰も気がついていないようだった。

台王たちはヤナギが床に就いている原因を、心の病だと思ってい

るらしかった。
ヤサカニは手をついて頭を垂れる。陳謝の言葉は更に台王の琴線に触れてしまふだろうと判断し、あえて口にしなかった。

台王は自分を殺すだろうとヤサカニは考えていた。

たとえここで殺されたとして、ヤサカニに未練はなかった。黄昏
国王より頼まれたカガミの護衛は無事勤め上げたし、それに、ヤナ
ギを窮地から救えた。

後悔がないと言ったら嘘になるが、この戦乱の世の散り際として
は上出来だと思った。

「お待ちください、父上」

部屋のみで黙って聞いていたクルヌイが立ち上がり、台王のそ
ばに寄る。

「この者はたしかにカガミと共に高天原国^{たかみけ}へやって来ました。そし
て、共に黄昏国へ帰ろうとしていたかもしれません。だが……」

クルヌイは優しい瞳をヤサカニに向ける。その目は深い慈愛が
内包されていた。まるで、必ず救うから安心しろとでも言うように
「この者は、混乱した兵たちに姫巫が殺されようとしていたところ
を必死に阻止したというではないですか」

「しかし、クルヌイ王子。それは処刑を免れようとしただけやも」
側近の意見にクルヌイは目を細めた。

「あなたは、姫巫に真名を明かしてまで、自分の身を守ろうとしま
すか？」

クルヌイの問いに人々はざわめく。台王も目を見張り、クルヌイ
に注目する。

ざわめきが収まるのを待つて、クルヌイは静かに唇を開いた。

「その場にいた者たちが口々に教えてくださいました。『ヤサカニ
は姫巫に真名を教え、それを姫巫が口にした』と。さて、この場に
いる者たちの中に、傀儡となつてでも姫巫を守ろうとする者がいる
のですか」

場は水を打ったように静まり返った。

「証拠はあるのか。姫巫の真名縛りを受けた証拠は」

ヤサカニは台王の問いに自らの右目を指差した。

「我が右目の虹彩^{にじさい}はもとも地下の国に住まう者特有の、赤茶でござ
いました。しかし、今は青みがかっております」

ふむ、と幾人かがヤサカニの瞳を覗き込んでくる。ここぞとばかりに女官たちも間近でヤサカニの顔を観察してきた。台王も、しげしげとヤサカニの瞳の変化を見受けると、手に持っていた扇を開いて煽いだ。

「……………今回だけはそちを赦そう。姫巫を救ってくれた件もある。そのかわり、次はないと思え。さらし首だと心得ろ」

「は。ご恩情ありがたく頂戴いたします」

「ああ、父上　ありがとうございます。良かったね、ヤサカニ」
まるで我がことのように手放して喜ぶクルヌイにヤサカニはあいまいな笑みを返し、頭を垂れた。クルヌイの助け船がなかったら、ヤサカニはきつと処刑されていたはずである。クルヌイは高天原国王子であるにもかかわらず、出会った当初からヤサカニや力ガミに好意的に接してくれていた。頭が上がらない。

「さあ、詮議は終いじや。皆、解散」

台王が手を打ち鳴らすと皆すぐさま席を立つ。中には不服げにヤサカニを睨みつける者もいたが、ヤサカニをよく知る女官や護衛官、武官たちは笑顔を見せてくれた。

「ヤサカニ、これから何か用事はある？」

「いえ、特には」

本当はヤナギの様子を見に行きたいと思っていたが、クルヌイ王子にそれを率直に言うほどヤサカニは馬鹿ではない。

クルヌイは満足げに頷いた。

「じゃあ、わたしの部屋へ行こう。他国からの献上品の中でおいしい菓子があつたんだ。一緒に食べよう。よいですね、父上」

念を押すように台王の方を見るクルヌイを、台王はうつとうしげに手で払った。

「よし、じゃあ行こう。ほら、早く早く」

さつさと謁見の間より退室したいのかクルヌイはヤサカニの背を押す。

クルヌイの部屋へ着いた途端、ヤサカニは待ち構えていたらしい

クルヌイの護衛兵たちから囲まれた。彼らは皆、顔をくしゃくしゃにしてヤサカニの肩を何度も叩いた。

「あんたが殺されるんじゃないかってみんな気が気じゃなかった」

「最初は黄昏国の奴だし、警戒してたけど……お前はいつも職務に誠実だったからさ。処刑されることになったら反論しようって決めてたんだぜ」

「カガミのことは残念だが、ヤサカニは姫巫様を守ったんだ。誰かが悪し様に言ってきたても堂々としてるよ」

口ぐちに護衛官たちは言った。思いやりに富んだ言葉たちがヤサカニの胸を熱くした。

彼らはヤサカニのことを微塵も疑っていない。その事実になんて少しだけ罪悪感がうずいた。

クルヌイは苦笑して、部屋の戸口前に控える女官に合図を送る。それに応えて女官はすぐさま部屋より出て、菓子を持ってきた。

「さあ、ヤサカニ。さぞかし緊張しただろう。これでも食べて気分を休ませるといい。……大丈夫、皆の分もあるから。今日は特別だ。酒も持ってきてさよう。ヤサカニが無事に戻った祝いだよ」

クルヌイの粋な計らいに護衛官たちは浮足立った。

居心地悪そうに部屋のすみに移動したヤサカニは、女官から差し出された菓子を一つ手に取る。うぐいす色の皮にかじりつくと、ほのかに桜の芳香が漂う。桜が練り込まれているのだろうか。甘く、それでいて少しだけ塩辛い。

張り詰めていた気が緩まる。ふと他の者たちに目をやると、既に宴会が始まっていた。酒の飲み比べをしている。

「ヤサカニ、お前もまじれよ」

「あ、ああ」

護衛官たちに引つ張られて強引に中央へと引き立てられる。困惑してクルヌイを見ると、王子は柔らかな表情をして自らも杯を手にとった。そして、ヤサカニの隣に座って杯を高々と掲げた。

「わたしたちの仲間の釈放に」

「はいっ」

クルヌイの言葉を皮切りにして皆酒を飲み始めた。王子も味わうように酒を飲んでいる。ヤサカニは周囲の者たちに次から次へ杯に酒をつがれて辟易する。それでももらった酒を残すというのは礼儀に反すると、一気に酒をあおる。そのヤサカニの様子に護衛官たちはいつそう盛り上がって自分たちも飲むぞと、それこそ浴びるように酒を酌み交わす。

終いには泥酔して眠りこける者も出る始末だった。

元来、酒に強いヤサカニはそうでもなかったが、他の者たちは気分が悪いのかクルヌイに一言告げて部屋を出て行く。

「やれやれ、気分が悪くなるまで飲まずとも良いのにね」

上機嫌でクルヌイは立ち上がる。彼は格子近くによって、杯を傾ける。王子はあまり速度を上げずに飲んでいたので悪酔いしていないようだった。

「眠っている者たちは私が責任を持って屯所までかついでいきます」
律儀に言うヤサカニにクルヌイは首を横に振った。

「眠らせておいていい。僕は君に、訊きたいことがある」

「はい、なんなりと」

クルヌイはヤサカニから視線を外し、雨が降りしきる庭を眺める。格子ごしの庭は雨のせいで色あせて見える。

「……………カガミは、黄昏国へ帰ったんだね」

クルヌイの呟きを聞いて、ヤサカニは心臓が破裂するかと思う程に動揺した。

しかし、クルヌイはそれを咎める様子もなく、じつと外の景色を見ている。

「……………？神の腕？と呼ばれる黄昏国の王子、ハルセ」

ヤサカニは背筋に冷たいものが走るのを感じた。

「貴殿は、全て知っておおせか」

クルヌイは微笑んだ。

「いいんだ。僕は、全てわかっていて君たちをこの王宮へ入れたん

だから」

何故、とヤサカニは訊いた。何故だろうね、とクルヌイは受け答えた。

「多分、このままでは世が終わってしまうと思ったから、かな」

ああ、雨は美しいねと格子の外を見ているクルヌイの表情をヤサカニが窺い知ることはいできない。

信じられないクルヌイの命令にヤサカニは己の耳を疑った。クルヌイはいつもと変わらず笑みを湛えた顔でヤサカニの前に立っている。

ヤサカニと同じく王子の室にいた護衛兵たちの動きも止まる。

「クルヌイ王子、それは……台王が許さないのでは」

「大丈夫、僕がうまく取り繕っておくから」

室内は異様な雰囲気にも包まれていた。

クルヌイは都の視察を行なって戻ってきたばかりのヤサカニを、すぐさま室に呼び出した。急いで室に向かってみると、ヤサカニだけでなく他の護衛兵たちも呼ばれていたらしく、皆困惑した表情でクルヌイの言葉を待っていた。

クルヌイはヤサカニが来た瞬間、外を見ていた目を室内に向けて言い放った。

ヤサカニに自分の護衛と姫巫の護衛とを兼任させる、と。

護衛兵たちの動揺は凄まじかった。王子の護衛が他の者の護衛を兼任するなど今までに前例がない上、姫巫の護衛は誰も就いたことがない。

姫巫は戦女神。自分たちを遙かにしのぐ力を持つ者を守る必要などどこにもない、というのが皆一致の見解だったのだ。

「王子、姫巫に護衛など要りません。あのお方は我々以上の力を持たれています。それに武力はないかもしれませんが、そのかわり巫力を持つ采女が近くに控えているではありませんか」

「そうです、クルヌイ様」

反対意見を言う護衛兵たちを一瞥し、クルヌイは溜め息を吐いた。「じゃあ何故、姫巫は兵たちに殺されそうになった。何故、采女の一人が死んだ」

しん、と場が静まり返る。クルヌイから発せられたとは思えない冷たく硬質な声に護衛兵たちは目を丸くする。

「武力が巫力に負けるように、巫力だって多くの武力に囲まれれば……負ける」

ヤサカニはチズコの最期を思い出し、眉根を寄せた。息も吐けぬ戦いの最中、巫力を使うのは至難の技だ。だから、戦場においても巫巫以外の巫たちは後方で術を練るのだ。前線に出れば、否応なしに剣に圧される。

「ヤサカニ、これは命令だ。背くことは許さないよ」
クルヌイの迫力を前にして、ヤサカニは頷くしかなかった。

赤、黒、白。

原色がヤナギの脳裏に浮かんでは消えてゆく。体が無意識のうちに目覚めようとするのを精神が拒絶する。それが何度続いたかは定かでないが、今や何もかもがあやふやなまま夢にまどろんでいる。

『ヤナギ様』

呼ばれてもなんの縛りも持たないかりそめの名。誰かが何度もそれを呼ぶ。心配そうに、悲しげに、時には怒りを含んで。何度も何度も。

だが、その声はチズコではない。サコでもない。

（私が心を許した人は、皆死んでゆくのだ）

それならいつそ。

ふと瞼を薄く開けば、何の変哲もない天井が視界に映った。

上体を起こす。どこも痛くない。腕や足に傷を負っていないか確かめてみるが、傷一つついていなかった。幾日眠っていたかは定かでないが、空腹は感じない。寝台の隣に備えつけられている卓の上に白湯と水があるところを見るに、誰かが定期的にヤナギへそれらを流し込んでくれていたのだろう。

ヤナギは牢の中で目覚めることを覚悟していた。しかし、ここは

社殿である。あれほど大きな火事を起こした自分に台王が怒りを感じないはずがない。投獄されてしかるべきことをした自分がここに
いることに首を傾げる。

「ヤナギ様」

低い声が寢室の入り口から聴こえた。ヤナギは声の主を見た瞬間、
血相を変えて素早く寢台から跳ね起きた。寢着であることも忘れて
声の主の胸倉を掴んだ。

「何故……何故、私を放って逃げなかった！」

目頭が熱くなる。たとえようのない感情がないまぜになって声の
主に牙を？く。喉の奥から何かが込み上げてくる。

彼 ヤサカニの右目は静かにヤナギを見据えていた。赤茶色だ
ったはずの鋭い彼の瞳はヤナギが真名を縛ったために青みを帯びて
いる。

「そなたを逃がすために力を揮^{ふる}つたのに。何故　！」

久々に怒鳴り声を上げてしまった自分にヤナギは当惑する。それ
でも感情は収まらない。行き場のない気持ちはやがて一筋の涙とな
ってヤナギの頬を伝う。はっとしてヤサカニから手を離す。強引に
頬を伝う涙を拭った。それはとめどなく流れ落ちる。

ヤサカニはそんなヤナギの様子を黙して見守っていた。ようやく
ヤナギが泣き止むと彼は困ったように微笑んだ。

「何故でしょうね。正直、その問いの明確な答えを俺は持っていま
せん。憎しみが消えたわけでもない。ただ、あなたの孤独と俺の孤
独は似ています」

ヤナギは予想だにしていなかった答えに虚をつかれた。

ヤサカニはヤナギの頭を撫でる。冷たさを感じさせる外見には似
合わず、ヤサカニの手は温かった。

「チズコは……やはり、死んだの？」

「はい」

「……何故、火事を起こした私は牢に押し込まれていないの？」

「それは、あなたが炎を起こすところを誰も見ていなかったからです。

逆にあなたを傷つけようとした兵たちの方が牢にいます」

ヤナギの疑問にヤサカニは丁寧に答えてくれた。前に書庫であった時も丁寧に黄昏国のことを教えてくれたことを思い出す。

「カガミたちは……」

「安心してください。いや、安心しろというのは間違っているかもしれません。脱走しました」

その言葉にヤナギは安堵する。多くの犠牲を払ったのだ。これで逃げ出せなかったということになれば、ヤナギのやったことは意味を持たないものになる。

よくよく考えてみると、大それたことをしでかしたものだと思う。その犠牲となったのが、チズコ。

ヤナギは自嘲の笑みを象った。

「私に関わると、皆ろくなことがない」

呟いた声にヤサカニが敏感に反応した。彼はヤナギの背中を押して寝台に座らせた。そして彼は片膝をついて真摯な瞳でヤナギを見つめる。

「今の言葉は取り消してください」

「え……？」

思いのほか強い視線にヤナギは目を泳がせた。

「今の言葉は、あなた自身に失礼だ」

ヤナギは息を呑んだ。

「あなたには価値がある。巫女だけが持ち得る力、あなた自身の努力、そして皆を助けようとする精神」

ヤサカニはそこまで言っただけで彼は目を細める。

「あなたほど利他的な人物を俺は知りません。その人格が、あの偏屈なチズコさえ動かした。もう少しご自分の価値というものにお気づきになられた方がいい」

「それは、ほめているのか貶しているの」

問えば、ヤサカニは少しだけ笑った。彼は答えなかった。

「ねえ、ヤサカニ。少し不思議に思ったのだけれど、何故そなたが

「ここにいるの」

社殿内に立ち入ることを許されているのは、采女や巫だけである。それだけ神聖視されている場所なのだ。社殿に　しかもヤナギの寝所に男が立ち入るのは異例だ。

ヤサカニは心得たように頷いた。

「クルヌイ王子からの命令です。姫巫の護衛も務めるようにと」

ヤナギは驚いて肩をいからせた。

「私に護衛なんて」

「ヤナギ様がまた何かとんでもないことをしないように見張れという意味もあると思います」

からかうような口調で言うヤサカニにヤナギは頬を膨らませた。

ヤサカニは優しい手つきでヤナギの肩を押し、寝台へ寝かせる。その動作はチズコに酷似しており、ヤナギの心がつきりと血を流した。

「ヤナギ様、眠ってください。今少し、朝は遠い」

格子の外は闇だった。室の四隅に煌々と明かりと放つ燈台が、ヤナギに今が朝方だと勘違いさせたらしい。

ヤサカニの大きな手がヤナギの目を覆う。ヤナギは従順に瞼を閉じた。しかし、睡魔は一向に襲ってこない。なので取り敢えず目を瞑っただけしているとヤサカニが話しかけてきた。

「ヤナギ様、眠れないのでしたら何か話しましょうか」

「うん。ヤサカニがいいのなら」

遠慮がちにヤナギは答える。少しの間を置いて、ヤサカニは喋り出した。低く、穏やかな声は耳に心地よい。

「西の大国である南卯国なんぼこくに、森羅万象や小さき神々の声や姿を見ることのできる少年がいました。

その少年の家系は代々国の王に仕える家系でした。少年の力を知った王や家族はそれはそれは喜び、少年を大切に慈しみました。

しかし戦禍せんかはその南卯国にも迫り、少年たち一家は地上の大国黄昏国へ移り住むことになったのです。

少年の父や兄は黄昏国の王宮に仕えました。天上にあるという高天原国を倒すのだと父や兄は少年に何度も語りました。

少年も国のためになりたいと学問や剣術を学び始めます。そんな少年を小さき神々は心配そうに見守っていました。時にはその力で突風を巻き起こして少年を助けようとしてくれていました」

ヤナギはヤサカニの語る話に聞き入っていた。ヤサカニは瞳を伏せ、自らの左目にした眼帯へ手を当てる。

「ですが、高天原国と拮抗していた黄昏国さえも姫巫の力の前に敗れてしまいました。少年の家族は年老いた父を除き、皆死んでしまいました。父と少年は、生き残ったごくわずかな村人たちとともに蜘蛛の廻廊を抜けて、命からがら高天原国のある村へ逃げ込みました。逃げ込んだ村の人々は初めこそ戸惑っていたものの、少年たちを助けようと手を差し伸べてくれたのです。少年の父は泣いていました。『ありがとう』と。

少年は村の子供たちと仲良くなり、毎日のように野山を駆け回っていました。そして、その仲間のうちに少年と同じく神々が見える少女がいたのです。少女は神々の声は聞こえないのですが、そのかわりに強い先見の力を持っていました。村の占手である者の娘である少女は少年にいつも先見の内容をこっそり教えてくれていました。そんなある日、少年も嫌な夢を見たのです。村が真っ赤な炎に焼かれる夢。それを少女に言くと、少女も同じ夢を見たというではありませんか。二人は大人たちにそのことを伝えましたが、誰も取り合ってくれません。少年の父さえも、今まで息子が先見の力を発揮したことはないため取り合わなかったのです。

そして……ことは起こりました。少年たちが野山で遊んでいると、村の方角から煙が上がっているのを仲間の一人が見つめました。少年たちは急いで村へ駆けだしします。

近づくにつれて、村が真っ赤な炎に巻かれていることが浮き彫りになってきました。

少年は必死に小さき神々たちに助けを求めます。しかし、神々の力を遥かに凌ぐものが炎を操っているため、手出しできないと彼らは悲しげに言いました。

その時でした。少年の左耳がいきなり音をなくしたのです。少年の後ろからついてきていた少女の悲鳴が聞こえました。平衡感覚がなくなり、少年は膝をついて左耳にそつと手をやりました。そこにあるべき耳は地面に切り落とされていました。

彼の周囲に小さき神々たちが集まってきて必死に何か伝えようとしていましたが、少年にはその声が届きません。

熱い風が吹きました。すると、小さき神々は塵となって掻き消えました。いいえ、消えたものではありませんでした。少年はあまりの痛みに何が起こったかわかりませんでした。

ごろりと少年の左目が彼の手の中に転がり落ちました。

少年は声も出せず、その凶行に及んだ人物を見ました。

炎の隙間より、黒い髪をした幼い少女と目が合いました。少女の目はがらんと、何も映していない空虚な瞳でした。少女を見れたのは一瞬でした。すぐに猛る炎が少年と少女の間を塞ぎました。

少年はいつの間にか意識を手放しました。

次に目を醒ました時、少年は所有していた？神の目？と？神の耳？ 左目と左耳をなくしていました。それから先、彼は神の姿を見ることも、会話することもできなくなりました」

ヤサカニはなおもヤナギの脛の上に手を置いている。彼が今どんな表情でいるのか心配になったヤナギはその手を外そうと自らの手を添えるが、ヤサカニはヤナギの脛から手を外そうとしない。

ヤナギは手に温かい水滴が落ちてくるのを感じた。

「ヤサカニ……今のは、そなたの……」

過去なのか、と訊く資格が自分にはないと思い至り、ヤナギは口をつぐむ。

数年前、出会った頃にヤナギはヤサカニに殺されそうになったことを思い出した。彼はその炎の中で見た少女をヤナギを思っている

のだ。だが、ヤナギにはその村に行った記憶もなかった。

少なからず、ヤナギは困惑していた。ヤサカニもまた、神の力を持つていた者だったのだ。今は違うにしても一度はその力を持っていたという事実、どう言えはいいかわからなかった。また、神の力を一瞬にしてもぎ取った少女が誰なのかも気になった。

「……………これは、ただの物語です。神の愛しみを少しだけ注がれた少年の物語。もう、誰も知る者のいない物語」

そつとヤサカニはヤナギの瞼から手を離れた。ヤナギは勢いよく目を開けてヤサカニを見る。白目の部分が血走っている。

「私は、忘れない」

ヤナギは言つてヤサカニの眼帯に触れる。そして、前かがみになつてゐるために顔にまわりついてゐる彼の黒髪を梳いた。

「絶対に」

忘れられていくことへの恐怖。自らの苦しみを他者に話せない哀しみ。決して悟られたくない心の柔らかい部分。

ヤサカニの心はヤナギの心そのものだ。

ヤナギは再び目頭が熱くなるのを感じた。

黙っていたヤサカニの唇が微かに開く。彼の唇は震えている。

ヤサカニはヤナギの手を強く握りしめ、祈るようにその手を自らの額に寄せた。

四・

藪の中をヤナギは進んだ。梶子斎森を抜けた竹林道。その脇道を行った先に、遙か昔使用されていた蜘蛛の廻廊が存在する。

前にカガミと話をした時から、そこにある廻廊がまだ息をしていることはわかっていた。

心身が回復するとすぐにヤナギはこっそり高天原国を抜け出す準備を始めた。采女や大巫に気取られないよう細心の注意を払い、しばらく巫修行のため神杷山にこもる。誰も入ってくるなと前もって念を押した。彼女たちもチズコを亡くした衝撃にヤナギが精神を傷していることに気づいていたからか、反対されなかった。

大巫には「今は戦などしようと思つていらつしやらないはずです。どうぞ、ゆつくりお過ごし下さい」とまで言われた。

ヤナギの言葉の不審に気づいたのはヤサカニただ一人だった。彼は真正面からヤナギに問うた。どこへ行くつもりなのか、と。それに答えずはぐらかしながら、この場所までやって来た。ヤサカニは粘り強く、一向に諦める気配がない。彼に根負けしたヤナギはとうとう本来の目的を口にせざるを得なくなった。

「サコのところへ行くの」

ヤサカニは首を傾げた。

「サコ殿のところ……ですか」

こくりとヤナギは頷く。

「サコの遺体は黄昏国の最果てにある村にいるサブライのもとへ運ばれたとムロが言っていたから。一度行ってみたいと思っていた」

「しかし、何故この場所へ……」

ヤサカニは口ごもり、眉根を寄せた。彼の戸惑いはもつともだ。

拯^{しゅう}溟^{めい}の花が咲き誇^{こほ}つてはいるものの、肝心の蜘蛛の廻廊は苔むした岩戸に覆われている。そこへ人が入れる隙間はなかった。

「ここはその昔、黄昏国の最果てに続く道だった」

ヤナギは岩戸を撫でながら、呟いた。

「そなたの言いたいことはよくわかる。たしかに、昔は廻廊であつたこれも長い年月の間に虚ろな洞窟となり果てている。……でも、姫巫の力は真象の力。私が言の葉を紡げば、道が拓ける。もともとあつた道を繋ぐだけ」

意識を集中させて、ヤナギは唇に真象の力を乗せる。清浄な空氣が充滿しているこの地区で力を放つのは容易い。

岩戸が轟音を上げて開く。蜘蛛の廻廊が啼く。廻廊の中に向かつて風が吸い込まれて行く。無事に道が拓けたことに安堵し、ヤナギは廻廊へ一步踏み出した。

「ヤナギ様、お待ち下さい」

「駄目つ。ヤサカニ、お願いだから触れないでっ」

ヤナギの制止は一步遅かった。ヤサカニはヤナギの左手首を掴んでしまった。

しまった、とヤナギは反射的に首を竦ませる。チズコでさえ、真象の力を使った直後のヤナギに触れようとはしなかった。真象の力には念がこもっている。ヤサカニはヤナギに触れることで、ヤナギが真象の力を揮う度に感じている魂の叫びを、呪いを、恨みを聞いてしまった。

しかし、それでも彼はひるんだ表情を垣間見せることなく、ヤナギの手を引いた。

「洞窟内は暗い。俺が先導します」

ヤナギは胸が詰まる思いでヤサカニの背を見つめた。彼は何も言わない。今だつて怨詛えんその声が聞こえているだろうに、ただ黙々とヤサカニは歩いている。生ぬるい慰めの言葉を吐かない彼の心遣いがヤナギには嬉しかった。

あまり口数の多くないヤサカニだったが、蜘蛛の廻廊の途中途中でヤナギの知らない国の話をしてくれたり、知識を分けてくれたりした。蜘蛛の廻廊に入ってしまったらしくしてから黄昏国の地理的記憶が

戻ったようで、これから行く土地の話も教えてくれた。ヤナギが行こうとしていた村は善灯村と言う黄昏国と炎來国の狭間にある村で、そこは度々戦禍に巻き込まれるらしい。

「サブライ元武官長は、我々の中でも有名でした。とても腕の立つ方だった。俺の策も何度読まれたことか」

「ヤサカニはサブライと戦で会ったことがあるの？」

「ええ。彼は？激昂の大蛇？の名を冠すに相応しい武人でした。何故、武官長の座を下りて黄昏国にいるかは存じ上げませんが」

むしろ、サブライが黄昏国に身を寄せているなど初耳です、とヤサカニは不服そうに言った。

ヤナギは、戦から帰還する度に柔和な笑顔でヤナギを抱き上げてくれたサブライを脳裏に思い起こす。サブライは強く、そして優しくかった。

「サブライは収賄の罪に問われたの」

ヤナギの言葉をヤサカニは一笑にふした。

「あの方に限ってそのような馬鹿な真似などされますまい」

「そう、誰も彼が収賄などするはずがないと信じなかったらしい。

でも、彼はそれを認めて都を出て行った。その後いくつかの村を点々として、黄昏国へ腰を据えたとム口から聞いた」

意表を突く答えにヤサカニは振り向きざま、大きく肩を竦めて見せた。彼が手に持っている松明の炎がその動作によって大きく揺れた。た。

「とても信じられません。戦で見かけただけの俺にでも、彼が己を律して実直に生きていることがわかったのに」

「そう、ね。そうせざるを得ない、理由があった」

その理由が何かはヤナギもおぼろげにしか覚えていないが、幼心に痛みを感じたことは覚えている。

「……そうせざるを得ない、理由」

復唱し、ヤナギの横を歩くヤサカニは物思いに耽っているのか一文字に口を引きしめる。

蜘蛛の廻廊は一本道だった。ヤナギもヤサカニも、ここまで入り組んでいない簡素な廻廊を通ったのは初めてで若干拍子抜けした。何かあった時のためにとヤナギは武装までしてきたのだ。

廻廊を抜けてすぐ目の前に善灯村は見えた。夕刻なので、夕餉の準備支度のために煙がそこかしこから上がっている。森の奥にひっそりと隠されていた蜘蛛の廻廊から村まではほんの数刻で辿り着いた。

村人は奇異な目でヤナギたちを見たが、彼らの視線はもっぱら隻眼のヤサカニに集まっていた。ヤサカニは慣れた様子でその視線を黙殺する。

ヤサカニはヤナギから離れて、きょとんとした顔で遠巻き彼を見ていた少年にサブライの居場所を訊いた。少年は目を丸くしたものの、親切にクルヌイの住処を教えてくれた。ヤサカニは微笑を湛え、厚く礼を言った。それを見た年頃の若い女たちは黄色い声を上げた。たとえ片目がなくても彼の端麗さは比類なきものだ。彼の主である力ガミが華やかで涼やかな美麗さなら、ヤサカニはしつとりとしたほの暗い美麗さだった。黒に染め上げた髪がまた、彼の美しさを引き立てる。

神はこの麗しき容貌を目にして、神の力を注いだのではなからうかと、ヤナギは真剣に考えた。

ヤサカニはヤナギのもとへ戻ってきて小さく溜め息を洩らす。

「このような扱いには慣れていません。何かが欠けた者に対する処遇は、高天原国の方が寛大です。……俺のこの左目左耳を初めて見た時、台王は『そちは神に愛でられたのだ』と言ってくれました。この黄昏国で？神に見捨てられた？と散々なじられてきた身としては、随分驚きました」

「……………」

押し黙るヤナギに顔を向け、ヤサカニは目を細めて笑った。彼の

笑顔は冷たい雪がじわりと溶けた時の温かさを思い起こさせる。

「あなたがそんな顔しなくてもいい」

「そんな顔って……」

「眉根が寄っています」

知らず知らず、厳しい顔をしていた自分に動揺する。ヤサカニの思考はヤナギに似ているため、共鳴してしまう。

ヤナギたちはサブライの家へ到着した。クルヌイは軒先で薪割りをしていた。ヤナギとヤサカニが声をかける機会を窺っているいると、クルヌイは二人に向かって快活に笑った。武人の面影を色濃く残すクルヌイはヤナギの記憶よりも少しだけ痩せていた。

「お久しぶりです、クルヌイ。高天原国の巫だったヤナギです」

「ああ、久方ぶりだなヤナギ殿。随分大きくなった。……貴殿は……」

クルヌイはヤナギに向けていた優しい眼差しを一転させてヤサカニを見る。ヤサカニは緊迫した空気に臆することなく一礼した。

「戦場で何度か会い見えたこと^{まみ}があります。黄昏国の指揮官をしていたヤサカニです」

「？眼帯の氷獅子^{こおりし}？か。貴殿も戦場で会った時にはまだほんの子供であつたというのに、今や立派な大人だな」

「？激昂の大蛇？殿は、戦場でお会いした時より随分痩せておいでですね。もう武人を棄てたのですか？」

見えない火花が散っている気がしてヤナギは冷や汗をかく。鋭い大蛇の睨みに冷徹な視線で相対する獅子に挟まれたヤナギは所在なさげに二人を交互に見た。

軽く挨拶を交わし終えた三人は、家の中へと入った。クルヌイは蜘蛛の廻廊を歩き通したヤナギたちに夕餉をよそってくれる。雑談の中で、サブライが今薬師のようなことをしているとヤナギは知ることができた。薬の調合は昔から得意だったのだとサブライは得意げに言った。

「それにしても、よくわしがここにいるとおわかりになったな」

「ムロに……聞いていたので」

ほお、とサブライは嬉しそうに表情を崩した。

「ムロが武官長になったのは彼が便りをくれたので存じている。ムロは役立っているだろうか」

「は、はい」

ヤナギの声がつわずる。ヤナギとヤサカニの目が合った。

ムロが高天原国を出て行ったことをサブライは知らないのだ。

サブライは二人の様子に片眉を上げた。

「……ムロが、何かしたのか？」

どこまでも真つすぐなサブライの視線にヤサカニは、ぐつと顎を引いて答えた。

「ムロ武官長は、黄昏国の者とともに高天原国を出奔された。現在どこで何をしているのかは俺たちにもわかりかねます」

ヤサカニの言葉にサブライは声を詰まらせる。彼は難しい顔をして顎に手を当てた。

「まさか、あのムロに限ってヤナギ殿を裏切るはずが」

「私が、言っただんです。カガミたち黄昏国の人を助けたいと。だからムロは」

必死に自分を止めようとしたムロに対して浴びせた言葉を思い出して、ヤナギは俯く。あの時、ムロは鈍器で頭を殴られたような顔をしていた。あの時の言葉は、ヤナギを懸命に守ろうとしてくれていた彼に対して言っているいいものではなかった。むしろ、絶対に秘めておかなくてはならない言葉だった。

「そうか。しかし、それもまたムロ自身が決めた道。わしがとやかく言うことでもない」

「自身が、決めた道。ですか」

ヤサカニは歯切れ悪く呟く。そんなヤサカニへ目をやってからサブライは瞑目した。

「どの未来を選び取ったとしても、後悔や苦悩は生じるもの。だが、自身が選んだ道ならば、最後まで進むことができると思っ

いる」

サブライの厳かな言にヤサカニは何か考え込むように下を向いた。彼の瞳は憂いを帯びている。カガミを裏切ってしまった自分を責めているのだろうか、とヤナギは胸を痛めた。

サブライの家より北上し、小さな森を抜けたところには一面の葦原があった。そこにはいくつもの岩がある。一番手前の岩をよく見てみると、表面に何か文字が彫られているのがわかった。ヤサカニはその文字を指の腹でなぞる。そして、その横にあった岩に刻まれた文字もなぞった。

「この文字は黄昏国のものです。『エイコ、ここに眠る』『マカ、ここに安らかに眠る』。……どうやら、ここにある岩全て墓石ですね」

サブライにサコの墓参りに来たのだと告げたヤナギたちは、サコは葦原にて眠っていると教えられた。

実際、葦原に着いてみると、多くの岩がそこにはあった。

「たしか、サブライは黒い岩と言っていた」

ヤナギは一しきり周囲を見回した。背の高い葦の草原の中で、ただ一つの岩を探すのは容易でない。

二人は黒い岩を四方八方探し回り、ようやく目当ての岩を見つけた。岩に丹念に彫られた文字を見て、ヤサカニは額に滲んだ汗をぬぐう。

「『サコ、安らかな夢を』。これだ」

ヤナギは、そつとその岩に触れた。冷たいはずの岩がほのかに暖かく感じる。こみ上げてくる涙は歯止めが効かず、ヤナギの両目から流れ出た。

「サコ……そなたに会いたかった。遅くなってごめん」

かなり前に、ムロからサコの遺体がここに運ばれていることは聞いていた。むろん、首から上は梶子斎森に埋葬されているものの、

せめて胴体は故郷である黄昏国に還してやろうと王宮にいる黄昏国出身者たちが働きかけた努力の賜物だった。その働きかけがなければ、胴体は無惨に焼かれていただろう。

サコの墓石は葦原の最果て　海の見渡せる崖上にあつた。霞みがかつた乳白色の空と紺碧の海。その二つの色合いはどこまでも混ざり合うことなく彼方へと続いている。

ヤナギは泣きじゃくつた。それを止めるでもなく、ヤサカニはその隣で黙祷を捧げていた。

サコの墓参りに行つた翌朝、まだ明け方の早い時間。ヤナギはサブライに揺り起こされた。

目をこすつてぼんやりと瞬く。部屋のすみでヤサカニが手早く浅黄色の腰帯を締めているのが視界に入った。

「……サブライ、どうしたの。まだ早い」

「重症の患者が来た。ヤナギ殿たちには悪いが、すぐにここを發つてほしい」

「ええ、わかつた」

ヤナギは慌てて衝立の後ろにまわつて装束を着替える。手ぐしで髪を梳いてからさつさとサブライの前に顔を出した。

「……ずいぶん急かすんですね。その患者はやはり病なのですか」

ヤサカニは心配そうにサブライに訊いた。サブライは首を横に振る。

「そうではない。だが、貴殿らと顔を合わせぬ方がいいとわしが勝手に判断を下した」

一瞬間を置いてサブライは言つた。

「ム口だ」

そう言われた二人は息を詰まらせた。

真つ青になつて口を押さえるヤナギの肩をサブライは優しく叩く。「大丈夫だ、大事ない。必ずム口なら乗り越えられる」

しかし、とサブライはヤサカニの方を向いて苦笑を洩らした。

「貴殿の主には恐れ入る。ム口を診せに黄昏国の都から単身乗り込んできた」

「カガミ様がっ？」

思わずヤサカニは前のめりになる。彼の顔に喜色が浮かんだ。

「ああ。二人とも、あまり話ができてなくて残念だが　来れる時でいい、また顔を見せに来てくれ。わしは高天原国には出入りしたくてもできないからな」

サブライはヤナギたちの背を押した。二人はサブライに深く頭を下げて裏戸より抜け出した。サブライとカガミの声が家の中から聞こえてきたのを見計らって、ヤナギたちは物音立てずにそこから離れた。

ヤナギは手に顔を埋める。

「良かった……。生きていてくれて、良かった……」

「はい」

「本当に、ほっとした……」

「……はい」

ヤナギが顔を上げてヤサカニに微笑むと、彼もおずおずと微笑み返してくれた。

二人はまだ村人たちが朝餉の準備に追われている中、歩いて行く。

「これからどうしますか」

ヤサカニの問いにヤナギは腕を組んで唸った。

「もう少しこの村を色々見てみたいけれど、宿がない。　まあ、

いざとなれば野宿でも」

ヤナギが放った最後の言葉をヤサカニは聞いていなかった。彼は近くにいた若者に話しかけている。最初は嫌そうな顔をしていた若者だったが、次第に笑顔となり、隣にいた妻らしき女に何やら言っている。女はヤサカニを見て頬を染めて控え目に頷いた。それを見た若者は大きく頷いてヤサカニと握手している。

ヤサカニが何をしているかさっぱりわからないヤナギだったが、

彼がこちらを振り向いて手招きした瞬間、全てを悟った。ヤサカニは宿の交渉をしていたのだ。

彼のあまりの迅速さに、ヤナギは脱帽した。

五・

ヤサカニの機転により若者の家に泊めてもらえることになったヤナギは、明朝まだ暗い中散策に出かけた。前もってヤサカニには散策へ行くことを告げた。ヤサカニは力ガミたちに鉢合わせることを危惧して、一人で行きたいと言うヤナギに、サブライの家の付近には近づかないことと村の中心地には出向かないことを条件に散策を許可してくれた。

ヤナギは若者の家を出ると、真つすぐに水辺のほとりにある社殿へ向かう。サブライの家に行く途中にある場所ではあるが、総じて社殿というのは清浄な空気で満ちている。その中で清めを行なえば、ヤナギの巫力も満ち満ちるだろう。

巫力には限界がある。ヤサカニには言っていなかったが、ヤナギはここに来るまでに力をほとんど使い切っていた。

帰り道を拓くため真象の力を揮うには、いささか巫力が不足していた。

社殿の周囲には拯溟じやうめいの花が咲き誇っていた。それを数本手折ると、ヤナギは社殿内へと足を踏み入れた。

しんと静まり返った社殿の中は、あまり手入をされていないのか埃ほこりをかぶっている。それでも儀式の間には瑞々しいゆずりはが飾られており、燭台もあった。

ヤナギは火打ち石で火を起こすと燭台へ炎を灯した。

しばらくゆずりはを片手に祈祷をしていた。清浄な空気はヤナギの体内を駆け巡り、穢けがれを取り去る。

大きく息を吸い込み、吐き出した。

ヤナギは自分の掌を見つめた。確かな手ごたえを感じる。無事に力は満ちたと安堵の溜め息を洩らす。

ふと、脇に置いていた拯溟の花の香りが鼻孔をくすぐった。拯溟

の花には強い鎮静効果がある。

臉が次第に重くなる。懐かしく、温かな香りに包まれて、ヤナギは眠ってしまった。

噓^むせ返るほどの拯溟の花の香り。その香りは村全体を覆っていた。黄昏国の中でも、ここまで拯溟が咲いている場所も珍しい。

あまり人の手が介入していない水辺や野などに集団で咲く美しい花。花の由来に似つかわしい気高く凜と咲く薄灰色の花の香りは、カガミの心を安らかにしてくれる。

カガミはまだ目覚める気配のないサブライを尻目に家を出た。外はまだ薄っすらと太陽が照らすばかりで誰も起床している気配はなかった。彼はゆっくりと朝靄^{あさもや}の中、足を踏み出した。

散策したかったというよりは、拯溟の花の香りに誘われたと言った方がいだろう。

サブライの家を出て右手にある水辺沿いに拯溟の花がまばらに咲いている。それを見てカガミはようやく、自分が何故昨夜ぐっすり眠ることができるのか理解できた。不眠に悩む兵たちは拯溟の花を乾燥させたものを香袋に入れて持ち歩いている。それは拯溟の香りが安眠効果を持つからに他ならない。カガミの眠りは常に浅い。しかし、昨夜は夢を見ないくらい深く眠っていた。

(……俺も、拯溟の花を香袋に入れてみようか)

そう思いめぐらせながら、水辺を歩く。しばらく行くと、小さな社殿があった。拯溟の花々はそれを覆い隠すように密集している。

社殿を見た瞬間にカガミの脳裏に浮かんだのは、神杵山^{しんはやま}の頂^{いただき}にある社殿にいるだろうヤナギのことだった。

気を引かれて社殿の戸に手をかけた。あまり出入りされていないのか、立てつけの悪い戸はにぶい音を立てる。

内部は外に比べて格段ひんやりと立っていた。少しだけ汗ばんでいたカガミの肌もその冷氣に乾く。

奥へと進む。途中、何度か蜘蛛の巣が髪に絡まってしまい、それを取り払うのに随分時間を食った。

最奥には観音扉があった。儀式を執り行つ間だとすぐにわかる。カガミは躊躇いもなくそれを開け放った。

カガミは我が目を疑った。

祈祷によく使われるゆずりはが床に置かれている。その横にはまだ芳醇な香りを漂わせる拯溟の花が散らばっていた。そして、間の中央には長い黒髪をした乙女が寝そべっていた。

乙女は入り口の方に顔を向けているため、カガミはその顔をよくよく見ることができる。

抜けるような白さを持つ肌、長い睫毛に薄紅色の唇。世の美しいものを集めて造ったような乙女は、カガミのよく知る者だった。

カガミは思わず後ずさる。その際、床が大きく軋んだ。

まずい、と思ってカガミは踵を返す。

「……カガミ……？」

ああ、とカガミはその場に縫いつけられてしまったように動くことをやめる。

何年も離れていたわけではない。だが、もう二度とこうして会うことはないと思っていた。

高天原国で会い見え、言葉を交わす間柄になったことさえ、カガミにとっては誤算だったのだ。彼女が泣きながら台王の御殿から逃げようとしたあの夜に出会ったことから間違いだった。絶対に、近づいてはならなかったのに。

カガミは少女に向き直る。

少女は上体を起こし、しどろもどろで慌てている。どうやら起きがけで頭がまだ働いていないようだった。

カガミは彼女に手を伸ばし、そつと頭を撫でてやった。

「これは悪い夢だ。拯溟の花が見せた幻に過ぎない」

自らにも言い聞かせる。これは夢なのだ、と。まさか、善灯村にヤナギがいるはずがない。

ヤナギの手がカガミの腕を掴んだ。彼女はすつくと立ち上がる。

「……離せ」

少しでも拒絶の言葉を吐くが、ヤナギは頑なに首を横に振る。

「嫌」

まるで幼子のように駄々をこねるヤナギにカガミは内心驚いた。

いつも年齢以上の落ち着きと思慮深さを保っていたヤナギが、今はただの少女になっている。

ヤナギは、おずおずとカガミに抱きついた。

天地がひっくり返ったかとカガミは動揺した。まさか、ヤナギがこのような行動に出るなどカガミも予測できなかった。

無碍に突き放すこともできず、かと言って抱きしめ返すわけにもいかず、カガミの両腕は宙をさ迷う。

「お願い、今だけでいいから」

いつか、遠い昔に聞いたことのある言葉。か細いそれは、カガミが必死で守ろうとしている決意を弱くする。

ヤナギの口より嗚咽が漏れ出る。

カガミはたまらず目を閉じてヤナギの背に腕を回すと、きつく抱きしめた。

落ち着きを取り戻したヤナギは慌ててカガミから距離をとった。

寝起きで思考が朦朧としていたとはいえ、とんでもないことをしでかした自分に顔が火照る。

「ごめんなさい。その、動揺してしまって」

「いや、気にするな」

気まずい沈黙が流れる。

カガミは所在なさに腕を組んで格子近くにある柱に寄りかかっている。

ヤナギは床に散らばっていた拯溟の花とゆずりはを丁寧に乗ね合わせて部屋の中央にある台の上に置いた。燭台に灯した炎は少し力

を弱めている。ヤナギは近くにあった細枝を火にくべる。すると、炎は再び煌々と爆^はぜ出した。

「どうして、この村に？」

「……サコの墓参りに来ました」

ヤナギは少し声を詰まらせながら答えた。

ヤナギがこの村に来た本当の理由はヤサカニにも明かしていない。サコの墓参りに行きたかったのは少なからず理由の一つだったが、真の目的は違った。

その目的はもうすぐ、遂^{すいこう}行する。

「お前だけで？」

「いいえ、ヤサカニも一緒に」

カガミが目丸くする。

「そうか。ヤサカニは、息災にしているか？」

「ええ。そなたは、ム口と一緒にしよう？」

逆に問えば、カガミは「なんだ、知っていたのか」と苦笑して頷いた。

ヤナギはカガミたちが来る直前までサブライのところにいたことを明かす。それにはカガミも感心した様子だった。微塵も気がつかなくなったらしい。

「ム口の容態はどうなの」

「一進一退といったところだな。サブライも手をこまねいている」

「そう……。カガミ、ム口はあの時、深手を負ったの？ それで、重体に……」

ヤナギは、ぎゅっと拳を握りしめる。ム口は手放しでヤナギに全幅の信頼を寄せてくれていた。そんな彼の笑顔を思い出して哀しみを覚えた。

カガミは首を横に振った。

「違う。あの時に深手を負ったわけじゃない。……極度の精神損傷、と言ったところだな。悪い、何と表現すればちゃんと伝えられるかわからない」

カガミは親指の爪を強く噛みしめた。ヤナギに上手く伝えることのできない歯痒さをもどかしく思っているに違いない。

ヤナギはそんなカガミを見つめると、視線を下に落とした。

こうして普通に会話できていること自体が不思議だった。ヤナギとカガミは敵同士なのだ。

カガミは地下の国々を指揮する者。

今この場で無防備な彼を真象の力を使って殺してしまえばいい。

なのに、できない。

思考の渦はヤナギを呑み込み、呼吸を苦しくさせる。

カガミはヤナギを横目見ると、溜め息を吐いた。

「お前はいつも悩んでばかりだ」

カガミはそう呟いて腰に手を当てた。堂々としたその姿からは、一片の迷いさえ垣間見ることができない。

「俺は高天原国へ攻め込む。そして、黄昏国に安寧^{あんねい}を取り戻す」
きっぱりとカガミは言い切った。彼はヤナギに厳しい表情を見せる。

「ヤナギ、悩むなどとは言わない。だが、意思を持て。激動の世、確固たる意思のない者はそのうねりに飲み込まれてしまうぞ。お前は人形じゃない、ただそこにあるだけの飾りじゃないのだから」

「何故……」

自分でも気づかないうちに声が洩れていた。

「何故、そなたはそんなにも強い。巨大な力を前にして、恐れることもなく挑もうとできるの」

知れたことを、とカガミは口角を上げた。

「恐れもこの身のうちに宿っている。だが、それを上回るほどに守りたいものがあるだけ」

音を立ててヤナギの中の何かが決壊していく。

「私には、そんなもの……ない」

ヤナギは自分が酷く頼りなく曖昧な者だとあらためてわかった。

サコやチズコを守りたいと思っていた気持ちも嘘ではない。だが、カガミのその強い意思の前にヤナギの脆弱な意思は霞んでしまう。心のどこかが凍りついていた。そこにヤナギにとって何か大切なものが隠されている。

昔から、それは感じていた。ヤナギ自身が本当に大切なものは、自分にさえわからないよう巧妙に隠されている気がしていた。

カガミといると心が揺さぶられる。その揺さぶりは次第に振り幅を大きくして、いつもヤナギを困惑させるのだ。

「お前は俺と似ている」

はっとしてヤナギはカガミを見つめる。優しい朽葉色をした瞳は憐憫を含んでいた。

「昔、俺も今のお前と同じように何もなかった。けれど」

カガミは一旦言葉を切った。カガミは苦渋に満ちた表情をして続きを口にした。

「俺の前に妹姫が現れた。妹は天真爛漫そのもので、俺の凝り固まった心を温めてくれた。妹姫がいたから、俺は……」

「妹姫が、そなたの守りたいものなの？」

カガミは笑って頷いた。

「俺にとって妹は唯一大切な者だから。妹との約束　黄昏国の復興は果たさなければならぬ」

カガミはヤナギが束ねた拯溟の花を一本手に取り、慈しむような顔でそれを見る。

「姫はこの花が一番好きだったんだ」

「そう」

ヤナギは鋭い棘が胸に突き刺さるのを感じた。カガミのこんなにも愛しげな顔は見たことがなかった。

カガミの妹。どんな人物なのだろうかと興味を持った。

「妹姫はどんな方なの」

その瞬間、カガミの形相が変わった。

「もう、いない」

ヤナギは、しまったと青ざめた。

しかし、カガミは「気にするな」と優しく微笑んだ。そして、ヤナギの手に拯漚の花を握らせた。彼の手は温かい。

「その花はきつと、お前を導いてくれる標しるしとなる。きつとお前なら最良の道を選ぶ。だから、逃げるな」

カガミはヤナギの両頬に手を添えた。自然、背丈のあるカガミをヤナギが見上げる形となる。

「死ぬな」

ヤナギは目を丸くした。カガミはヤナギが自害しようと思つてゐることを当てた。

「サコの墓参りをし、ヤサカニへ先に帰るよう告げて自害する。それくらいお前のその思い詰めた顔を見ればすぐわかった」

「だって……私のせいでサコも、チズコも……」

鮮烈な二人の最期の光景を思い出してヤナギは双眸を潤ませた。

「私が死ねば、高天原国は守り神を喪う。そうすれば黄昏国だって復興できるでしょう。何故、止めるの？」

「……俺は、お前に死んでほしくはない」

カガミはヤナギの両頬を包んだまま言葉を発した。彼はそつとヤナギの額に口づけを落とし、そのまま力強く抱きしめた。

「せめて、お前が生きていてくれれば、それだけでいい」

懇願にも似た呟きはヤナギを混乱させる。脳内は痺れる。それは呪縛よりも、深く強いカガミの言葉と鼓動。

ヤナギはおずおずとカガミの装束を握った。

ヤサカニは散策から戻ってきたヤナギの表情が晴れ晴れとしてゐるのに気がつき、幾分か安心した。

この善灯村へ行くと言つた時、彼女は胡乱うろんな目をしてゐた。なので、そんなヤナギを一人で行かせられないと判断したヤサカニは自身もこの村まで着いてきたのだ。

「ヤサカニ、遅くなってごめんなさい。私は高天原国へ帰る」

「はい、かしこまりました」

二人は泊めてくれた若者とその妻に礼を言くと、昼前に村を出た。善灯村を出て蜘蛛の廻廊の入り口付近まで来た時にヤナギが告白した内容にヤサカニは目を剥くこととなった。

「村の社殿で、カガミにあった」

「カガミ様と会ったのですか？」

あれほど注意しろと言ったのに、ヤナギはカガミと出会ってしまったという。しかも、ヤサカニも同行していることを教えたと言ナギは言った。

ヤサカニは頭痛を覚える。

ヤナギはカガミが自分自身を害すると思っていない。だが、ヤサカニは彼の性格をよく知っている。目的に辿り着くためならば、彼はどんなに非道なことでもやってみせる。今回、カガミがヤナギを殺さなかったのは奇跡にも似た事象だった。

「私ね、本当はここへ自害しに来たの」

ぼつりとヤナギはとんでもないことを呟いた。ヤサカニはぎょつとしてヤナギの手を取る。ヤナギはそんなヤサカニには目もくれず、黄昏国の上に広がる空を仰ぐ。

「ヤナギ様、それは……」

「でも、やめた」

ヤナギは笑った。空に向かって笑う彼女が、手に持った拯溟の花とあいまって花の化身の如く見える。

彼女は空からヤサカニへと視線を移す。ヤサカニの青茶色をした瞳を真つすぐに見据え、「シユマ」と口に出す。

途端、ヤサカニの肩が一気に軽くなる。真名の縛りが解けたと気づくのに幾ばくも時間はかからなかった。

「本当は、心にあるしがらみをなくしてしまえば真名縛りなんて簡単に解放できる。そんなことにも私は気がつかなかった」

ヤナギは何度もヤサカニに施した真名縛りを解こうとして失敗し

ていた。なのに彼女は今、いとも容易くそれを解いた。

「カガミのもとへ帰りなさい。そなたがカガミたちを　黄昏国を案じていることに気がついていた。真名縛りも解けたから、これで何も心配することはない」

ヤサカニはただ茫然と笑顔を絶やさないヤナギを凝視していた。

ヤナギやクルヌイツきの護衛官であるヤサカニは高天原国内部の機密情報もたくさん掴んでいた。それを手土産にして母国へ帰ることは可能だ。いや、むしろ歓迎されるだろう。

「俺がいなければ、誰がヤナギ様をお守りするのですか」

洩れ出た本音。夢げに微笑んだヤナギの表情がヤサカニの後ろ髪を引く。彼女は何も言わずに蜘蛛の廻廊の前に立ち、高天原国への道を拓く。そして、廻廊内へと滑り込む。その肩の線は、消えそうなくらい細かった。

ヤサカニは唇を一文字に引き結んでその後に続いた。

波のおと　嵐のおとも

しずまりて

日かげ　のどけき

大海の原

六章 宿悪

宿縁が二人を結んでいる。

ヤサカニは悲運を背負う彼らを想った。

『ヤサカニ』

屈託なく自分の名を呼ぶ二人。

嬉々としてぶつかろうとしているわけではない。

このまま、均衡状態を保ってくればいいのに、と彼らしくもないことを考えてしまった。

わかっている。

かりそめの平和は、かえって傷口を膿むのだ。

それならばいっそ、一思いに刺してしまった方がいいのかもしれない。

……だが。

ヤサカニは迷っていた。

ヤナギは言った。

カガミのもとへ帰りなさい、と。

彼女は真名の縛りさえも解いた。ヤナギはヤサカニがカガミたちがいる黄昏国を案じていることに気づいていたのだ。

聡い娘だ、とヤサカニは内心舌を巻かずにはいらなかった。

全てを無に返すことが出来る姫巫が、わざわざ後押ししてくれているのだ。

高天原国内部の機密情報もたくさん掴んだ。それを手土産にして母国へ帰ることは可能だ。いや、むしろ歓迎されるだろう。

『俺がいなければ、誰がヤナギ様をお守りするのですか』

ぽつりと洩れた本音に、儚げに微笑んだヤナギの表情がヤサカニの後ろ髪を引く。

彼女は何も答えなかった。

悪はどちらだ、と問う。
わからない、と答える。

善悪では計れない戦の重み。

昔のヤサカニだつたら、即答しただろう。

悪いのは全て、黄昏国を 他国を屠^{ほふ}った姫巫だ、と。
はたしてそうなのか。

今や、もうそれさえ答えられない。

高天原国には異様な暗雲が垂れ込めていた。たかまのほらごく

ヤナギとヤサカニが秘密裏に黄昏国の善灯村より帰還してしばらくののち、ヤナギは神杷山しんぱさんにある社殿へ人が立ち入るのを禁じた。

采女たちでさえもヤナギの傍に寄ることを禁じられ、北門前にある巫たちの寝所で寝起きしている。

ヤナギとヤサカニが修行のために二ヶ月間都を空けていた際に何かあったに違いないと大巫や台王は、ヤサカニより事情を聞き出そうとしたが、彼は終始沈黙を守った。

皆、ヤナギたちが修行していたと疑いもしていない。

彼らは滅多に巫の修行場である梶子斎森へ入らない。死の臭いに満ちている森が恐ろしいのだ。

姫巫は大巫や巫も知らない森の奥部に通じる道を知っている。なので、大巫たちも修行していたというヤナギの言葉を信じているようだった。

もし、ヤナギたちがいない間に高天原国に変事があっていたら、修行をするというのは嘘だと判明しただろう。何か異変があれば、大巫や巫はヤナギに念を飛ばす。しかし、高天原国にヤナギがいない場合、彼女たちの念は届かない。

ヤナギは社殿の廊へ出て、欄干らんかんにしなだれかかった。

神杷山の風景はいつもと変わらない。

狂い咲きする四季を無視した木々に花。血色をした紅葉てんきゆうが天弓の橋の下にある池へ舞い散る。

一枚の葉は、鏡のように平らだった池の面に漣なみを立てる。

都中、地下の国々の動きが急に活発化しているとの噂で持ち切りで、人々には不安が蔓延している。

高天原国の結束は薄い。打倒高天原国という一つの目標を見据え

て迫る地下の国々に比べて、この国の人々が見ている先はばらばらである。

「　　っ」

突然、ぴんと張り詰めた空気がヤナギを包んだ。ヤナギは耳をそばだてて隙なく辺りを見渡す。

神杷山に続く楠くすの木を誰かが触ったのだ。

ヤナギは意識を集中させて楠の木に目を向ける。神木に触れたのが誰かは、その者がまとう気ですぐわかった。クルヌイ王子だ。

「何故、クルヌイ王子が……………」

訝しく思いながらも、神杷山へと続く道を閉じる結界を緩めた。仮にも一国の王子がわざわざ出向いてくれたのだ。おいそれと追いつ返すことはできない。

少しして、クルヌイは齋庭さいにわに姿を見せた。ヤナギは庭にある朱塗り橋の脇にある長椅子へ王子を案内する。

彼は乱れた息を落ちつけると、神杷山の美しさや庭の造形を褒め干切った。

「久方ぶりに来たけれど、やはり神の遊山場と言われるだけある。この世の至高と呼ぶに相応しい」

「ありがとうございます。して、クルヌイ王子。何故ここへ？」

「うん。君を誘いに来たんだ。姫巫、用事がないなら一緒に都を回ろう」

「私は……………」

クルヌイはヤナギの戸惑いに気づいているのかいないのか、淡い微笑を浮かべる。

「大丈夫、君が来てくれるなら供はつけない」

暗に王子がヤサカニをつけないと言っているのを察したヤナギは、目を見開いた。

クルヌイは何も知らないように見えて、案外鋭い。人の機微をよく読む。ヤナギはそんなクルヌイが苦手だった。

「何せ、姫巫はこの国きつての軍神だからね」

クルヌイは片目を瞑っておどけて見せる。場の空気を和ませようと心を砕いてくれているのは一目瞭然である。

「ですが……」

「どうしても、君に今の都を見てほしいんだ」

有無を言わせないクルヌイの瞳にヤナギは折れた。

「わかりました」

都には、かつてほどの活気がなかった。

貧困地区からはもちろん、裕福な者たちが住まう地区でも笑い声が聞こえない。不穏な空気が人々の明るさを奪い去ってしまったようだ。

「人の声がしないね」

「はい。自然の音も、おかしい」

「この兆候は、宮殿に火の手が上がる少し前からあった。でも、ここまで早く軋みが来るとは思わなかったよ」

「……………」

唄いながら流れていた川の水は澱んだ声で泣いている。

今の季節には黄金色した瑞々しい葉をつけるはずの木々はくすんだ葉をつけている。

鳥たちは無言のまま空を舞う。

ヤナギとクルヌイは貧困街の角にある見張り台にかけられた縄梯子なわはしをよじ上った。見張り台は老朽化しており、今は別の場所に新たな見張り台が建設されている。なので、その上には兵の姿はなかった。

見晴らしの良い見張り台からは、都の様子がよく見える。

遠目からでも人々の眼に光がないのが見て取れる。皆、前かがみで歩いている。いつもなら大勢の人でにぎわって砂埃が立つ市も閑散としていた。

気の持ちようかもしれないが、景色も若干くすんで見える。

「ひどい有り様だ。こうならぬよう前々から視察していたのに、僕

ではどうにも役不足だったらしい」

クルヌイは独白のように呟き、眉をひそめた。

「……最近、父上は部屋にこもってるんだ。何かに怯えているように寝台の上で丸まっていると父上の護衛兵から伝え聞いた。時々、狂ったように祈ってもいるらしい」

「台王が……」

クルヌイは悲しげにヤナギを見た。

「君も台王も、何か啓示けいじを受けたんだろ。そうでないと、二人がほぼ同時に表舞台から姿をくらます理由が見つからない」

渴いた喉が潤いを欲す。ヤナギは唾を呑み込んだ。

「僕は、知ってるよ」

木枯らしが吹き荒ぶ。乾いた風は舞い上がり、高い蒼穹へと掻き消える。

「ごめんね、ヤナギ。辛かったろ。こんな、死国の守り神に祀りまつ上げられて」

「王子……何故……」

血の気が引いた。

代々、姫巫と台王にしか聞かされない話。それをどうやらクルヌイは知っているようだった。彼の瞳が全て知っているのだとヤナギに訴えかけてくる。

「僕は都から離れた山奥で育った。そこに住まう人々は、昔からの古き言い伝えや教えをたくさん持っていたんだ。彼らは僕に様々なことを教えてくれた。この国　高天原国は……」

「もうそれ以上言わないで！」

皆まで云おうとするクルヌイの声を遮り、ヤナギは後ずさった。力なく首を横に振る。

「それを知っているところで、何になるというの。万策はもう尽き果てている。もう、何もかも手遅れ」

「姫巫」

心配そうに呼びかけるクルヌイの声に惑わされないようにヤナギ

は耳を塞いだ。

「そなたは全てを呪う声を聞いたことがないでしょう。死を、滅亡を渴望する声を聞いたことがないでしょう。私は、姫巫になってから、それらをずっと聞き続けてきた。でも、それと同等に生を望む声も聞こえてくる。？姫巫？に縋る人々の声も聞こえてくる。……

……伝承は、私たちを救ってくれない」

クルヌイは何も言い返してこなかった。ヤナギは棒立ちのままのクルヌイを置き去りにして一気に縄梯子を下ると、社殿へと逃げ帰った。

光の中にムロはいた。一面の金色の光は、淡く波打っている。

『我の力を望むか』

硬質な声がムロの鼓膜を震わせる。

「ああ」

淀みなくムロは前を向いたまま答えた。

やがて光はムロの真正面に集束してきた。

『そちは我の選びし申し子ではない。が、我の血脈に連なる者だ。

今まで呪いの苦痛も乗り越えてきた並外れた精神力は称賛に値する』

ふん、とムロは挑むように光を睨みつける。

「あれぐらいの苦痛、どうともないわ」

光が一樣にさんざめく。四方八方白いこの空間は、常人ならば発狂してしまうほどに無機質だ。

『良からう。そちに我の力の一部を貸そう。そのかわり』

いつそう光が眩しさを増す。

『我と呪いの誓約を交わせば、そちは現の死を享受できぬぞ』

「かまわない」

その話を、ムロはサプライに呪いを彫ってもらう際聞いていた。

遙か昔、拯湊しゅつみょうの呪いを彫られた子供たちは呪いによる苦痛に狂死するか、自害を選んだ。どうにか生き永らえた子供も、こうして神と誓約する段階で死を選んだ。よしんば受け入れたとしても、強大な神の力に体が耐えられずに引き裂かれるという。

ムロは黄昏国王族の血を受け継いでいることにこの時ばかりは感謝せざるを得なかった。

『……良からう。そちに我、地祇ぢぎの加護を与えよう』

ほのかに呪いが刻まれている部分が熱を持つ。

心臓が大きく一鳴りし、動くことをやめた。

ム口は不思議な気持ちで自分の掌を見つめる。湧き上がってきたのは、確かな力だった。

『さあ、誓約は交わした。私の血脈を受け継ぐ者よ、どことなりとも行くといい』

空間は急速にム口から遠ざかって行く。いや、ム口が遠ざかっていくのかもしれない。

ずっと涙が頬を伝った。

ム口は視界に映り込むカガミとサブライの顔を見て、盛大に顔をしかめた。

「何で師範とカガミが一緒にいる。ここは一体どこだ。常世か」

開口一番、不機嫌極まりないという表情で言い放ったム口を前にし、カガミとサブライは顔を見合わせて肩を竦めた。

ム口は自分が倒れてから先の経緯をカガミから聞き、ようやく合点が行った。

「それは……カガミ、すまない。迷惑をかけた。サブライ師範も、申し訳ございません」

頭を下げるム口に、カガミとクルヌイは笑顔で赦しをくれた。

「ム口、受け入れたのか？」

サブライの言わんとしていることを察し、ム口は強い瞳で以って答えた。

「はい」

「そうか……そうか」

サブライの顔が崩れる。サブライが泣きそうな顔をしているのか嬉しそうな顔をしているのかは、髭が彼の口許を隠しているため定かでない。だが、ム口に後悔は微塵もなかった。呪いは首元まで広がったままだったが、苦しくもないし痛みもない。地祇が苦痛を取り去ってくれたのだろうかと思に至る。

「師範、ム口は自分が最良と思った道に行くまで。恐れも、戸惑いもない」

言い切ったム口に対してカガミが膝を打った。

「さすがだな」

彼もまた、迷いが晴れたような顔をしていた。

「さてと。ムロも回復したことだし、都に帰る。サブライ、世話になった」

カガミは立ち上がり、サブライへと手を差し出した。その手をサブライは力強く握り返し、腰を上げる。

「……わしは黄昏国にも炎來国とも手を組まない。だが、この戦の行く末を必ず見守ることを約束しよう」

「ああ。しかとその目で見るがいい。黄昏国の復古を」

こうしてムロたちはサブライの家を後にした。

「カガミ、サコの……姉として慕っていた者の墓参りだけさせてくれないか」

「構わない」

二人は二頭の馬を連れて葦原へと向かった。一頭はカガミが乗ってきた馬で、もう一頭はサブライからもらった馬だ。サブライとともに戦場を駆けた栗毛の馬は、ムロに大人しく従っている。

金色の葦原は、何もかも覆い尽くす勢いで地表に根を張っていた。

ムロはここに来たのは初めてではなかった。サコの遺体　骨だけだが　をこの善灯村へ運んだのは、他の誰でもないムロだった。せめて首から下はサブライの傍で安置させてやりたかったのだ。罪人たちの遺体を収容している部屋を管理している兵の一人と仲良くなり、拝み倒してサコの遺体を取り返した。

そして、この見晴らしの良い葦原の最果てに彼女の墓を立てたのだ。

ムロはサコの墓前で彼女の冥福を祈り、摘んできたしろつめ草を供えた。

「……………サコは、ヤナギ様の付き童わいわをしていた」

後ろに控えているカガミに聞こえるか聞こえないくらい小さな声でムロは呟いた。

「付き童？」

「巫の世話をする童のことだ。姫巫に仕える采女のような者だな。サコはヤナギ様とたいそう仲が良かった。サコと俺は、ヤナギ様と同じ日に宮殿へ来たんだ。あのお方は俺たちにとてもよくしてくれた。よく、泣いていたら慰めてくれて。……カガミ、ヤナギ様は無事だろうか」

葦原が東風にしなる。

淡い色合いの空は、落ちてきそうなくらい低く感じる。

「これは、黙っておこうと思っていたんだが」

神妙にカガミは切り出した。

「ヤナギと会った」

ムロは高く結い上げた黒髪をなびかせてカガミを振り返った。ムロの芥子の実色をした目に驚色が宿る。

「ヤサカニとともにサコの墓参りに来たと言っていた。束の間しか話せなかったから、あれだが」

カガミは口を濁して視線をさ迷わせる。

ムロの唇が微かに震える。

「ヤナギ様は、どこも怪我などされていなかったか」

「ああ。少し痩せていたが、見た限りはどこも怪我していなかった。そうか、とムロは俯く。

「……………ムロ、ヤナギのところへ戻りたいなら戻れ」

カガミは優しさからそう言っているのではないことくらい、ムロにもわかった。彼はヤナギのことを思ってムロが揺らぐことを危惧しているのだ。

ムロは波立つ心を平常に戻し、決然とした面持ちでカガミを見据えた。

「何を馬鹿なことを」

カガミは風にあおられる朽葉色の前髪を鬱陶しげに払いながら、
「いっそ、馬鹿正直に生きれたらいいのにな」と呟いた。

カガミとムロが黄昏国の都へ帰った後はたいへん慌ただしかった。高天原国との決戦に備えて兵たちは士気を高め、軍師たちは地図を広げて軍略を練る。

日々はあつという間に過ぎ去り、季節は秋となった。

カガミは鎧を着込むと、大きく息を吸い込んだ。カガミの周囲にいるムロやバシヨウたちもおのおのの戦装束に着替えを済ませている。

「ついに、この時がやって来たのですね。高天原国との決戦の時が」
バシヨウは緊張した声でそう言った。彼の緊張をほぐさんとしてユウラクがおどけて見せる。

「なあに、いざとなったら逃げ帰って形成を立て直せばいい」

「ユウラク様、此度の戦はそう甘いものでは……」

「おうおう、バシヨウはわしがおまえのために軽口を叩いているのもわからないのか」

「そう、だったのですか。申し訳ありません。つい」

バシヨウとユウラクが会話している横で、ルイは何も言わずに黙々と槍と剣を磨くムロを遠巻きに眺めていた。そして、彼女は意を決したのか拳を握りしめて、つかつかとムロの前に仁王立つ。鷹揚なルイの態度にムロは不快感を露わにして睨み上げた。

「……ご武運を、指揮官様」

精一杯の皮肉を込めたルイの物言いに、ムロは切れ長の双眸を細めて口角を持ち上げた。

「お前もな、副指揮官」

ムロが黄昏国王族の者だと知った当初、ルイは今後どう接すればいいか随分と思い悩んでいた。しかし、今回の戦でいつも任されていた指揮官 先陣を取り仕切る者 の座をムロに奪われたことで、何かが吹っ切れたらしい。ムロが王子だと知る前の尊大な態度でルイは彼に接していた。

ムロは己の正体に戸惑いながらも、カガミが指揮官に任じると拒絶することなくその役割を受けた。

黄昏国王は何度もムロを一目見ようと兵たちの訓練場に足を運んでいたが、ムロは訓練の邪魔だと言って王を遠ざけていた。カガミはそれを横目見て、ほとほと王のムロに対する執着に感心していたのだ。カガミに対して黄昏国王がそれほどまでに興味を示したことはついぞなかったのだ。

「カガミ様、最終確認の時間です」

マチが声をかけてきた。彼は筋肉隆々な体つきに見合ったゆがけをかけている。腰に差している剣が抜かれることは、ほばない。マチは鎧こてに仕込んだ暗器で相手を倒す。

「わかった。行くぞ」

カガミの号令に皆つき従った。

三・

険しい皺を刻んだ顔で、大巫はヤサカニの前に現れた。おおみこ

クルヌイの護衛を務めていたヤサカニは彼女の登場に若干身構える。

大巫は巫たちを育てる母のような役目を持つ者だ。彼女はとても位が高く、滅多なことでは表に出てこないことで有名である。

『わたくしの御心は高天原国が国つ神のもの。みだりやたらに殿方から姿を見られとうございませぬ』

台王が宴に顔を見せよと言った時、大巫はその誘いを決然と断つたらしい。

そんな大巫が庭に出ていたヤサカニたちのもとへ来たのだ。身構えるなど言う方が無理な話である。

「お久しぶりでございます、王子」

「久しぶりです、大巫。あなたがこうして顔を見せるなんて珍しいですね」

「……本日は、その護衛に用がありまして参りました。少しの間でよろしいので、彼をお借りしてもよろしいですか」

有無を言わせぬ迫力で大巫はクルヌイを見る。

大巫の後ろに控えていた数人の巫たちが前に進み出た。

「ヤサカニ様、ご安心を。クルヌイ王子の護衛はわたくしたちが責を負います」

「なので、どうか大巫様とお話を」

「私たちは巫の中でも特に巫力が高いのでございます。王子の身に何かあることはございません」

矢継ぎ早に言い募る巫たちに、ヤサカニとクルヌイは顔を見合わせる。クルヌイは優しい眼差しを巫たちに向けて頷いた。

「君たちが優秀なのはよく知っている。わかりました。大巫、ヤサ

カニとゆっくりお話しされて下さい。僕は彼女たちと庭を回つていきますから」

「ありがとうございます。それではヤサカニ。来るがいい」

大巫は豪華な装束を翻すと、見事な裾捌きすそさばで足早に庭を横切る。

ヤサカニはクルヌイと巫に頭を下げると、急ぎ大巫を追った。

大巫は北門にある鏡月池まで来て、

「ここら一帯の人払いは既に済ませております」と足を止めた。

「大巫様が俺に何か御用でしょうか」

大巫は何も読み取れない表情でヤサカニを上から下まで眺め見る。
「お前、まだ姫巫と接触できていないのですか」

「……はい」

ヤサカニはヤナギが誰と会つのも拒否してからも、何度も神杷山しんはやまへ足を運んでいた。しかし、結果は緩まず、中に入ることも不可能な状態だった。この一月半、毎日のように通い詰めるヤサカニをヤナギが受け入れる気配は全くない。

「采女も内側へ入れずにいる故、結果を緩めることのできるのは姫巫か、もしくは山の主神おもさねのみ。わたくし自身、神杷山へ立ち入れぬ状態。ですが、ついこの間、クルヌイ王子が姫巫を神杷山より連れ出して都を散策したとか。………その際、王子は何事か姫巫に言つたようです。姫巫の気が下位の巫さえも気がつくほどに乱れている。お前、王子より何か聞き及んだことは」

「ないです」

大巫は盛大に嘆息した。

「……ヤサカニ、わたくしはお前とカガミがここへ来た当初より常に見張り続けてきた」

大巫の告白にヤサカニは顔を引きしめる。

「そして、最近になつてもお前の行動をつぶさに観察しておりまして。結論として、お前は信用するに足る男だと私は判断した。だから、教えておこうと思います」

眉根を寄せるヤサカニに対し、大巫は遠い目をして神杷山がある方角を向いた。

「あの子は六歳の時、自分が何者かも覚えていない状態でこの都へ連行されて来た。当初、何も喋らず口にしない彼女を先代姫巫はたいそう満足げに傍に置いていた。先代以外は、果たしてヤナギ様がどこから来たのか知らない。得体がしれないと思ったわたくしは何度も先代に、ヤナギ様が巫となることへの異議を申し立てたものです。……彼女は孤独です。自分の出自も、信賴する者も、全て高天原国に奪われている。ヤサカニ、お前も感じていたはずでしょう。ヤナギ様の脆さと自我のなさ。それらは全て、確固たる記憶を持つていないことを起因としています」

「記憶を持つていない？」

「そう。わたくしたちがこうして自分の感情で物を言えるのは、過去の記憶や経験をもとにしているから。ですが、それらをあの子は喪失している。だから、あんなにも高天原国に縛りつけられている。撥ね退ける意志さえあやふや。抛り所だったサコもチズコも奪われ、手足をもがれた悲しき小鳥」

孤独。

それは唯一、ヤサカニとヤナギを繋いでいる共通の想い。

ヤサカニは確かにヤナギの孤独を感じていた。？姫巫？と？神の耳目を喪った者？という理解されないものを抱えているからだと言サカニは思っていた。しかし、ヤナギの本当の孤独は、記憶を持ち得ない苦しみだったのかもしれない。ヤナギ本人はその事実に気がついてもないだろう。喪っている状態から始まっているのだから。

ヤサカニは眼帯をつけた左目を強く押した。闇の空洞が熱い。黒髪で覆っている左耳があった部分が、ざわめく。

記憶がある。自分には記憶があった。その記憶のおかげで今日まで這うように生きて来られた。憎悪でも悲哀でも、記憶があるからこそ胸に滾らせることのできる強い想い。

「……………ヤナギ様のところへ行ってきます」

「姫巫は誰も神杷山へ人を入れない。先ほどお前も接触できていないと言っていたではないですか」

「何としても会います」

ヤサカニの涼しい面差しの下に隠した激しい感情を見透かした大巫は、自らの懷に手を入れて小刀を取り出した。

「姫巫に頼らず山の入り口を開ける方法はただ一つ。主神の許可を得ること。主神は何よりも姫巫の意志を大切にしている故、簡単に結界を解いてはくれないでしょう。……この小刀には、わたくしの巫力が込めてある。何かあったらそれを使いなさい」

しっかとヤサカニの手に小刀を握らせる大巫は少しだけ笑っていた。

「お前に託します」
たく

大巫がヤナギを心から案じているのを感じ取ったヤサカニは、大きく頷いて見せた。

鏡月池にて手と口内を洗ったヤサカニは、くちなしさいのもり 梶子齋森へ足を向けた。いつも立ち入っているはずの森であるのに、常時とは違う気配がする。風がざわめいている。絡み合う密な木々の隙間より射す太陽の光がヤサカニの足許をちらちらと照らした。

森のところに垂れ込める深い闇の合間から鬼火が見え隠れする。

ヤサカニは弛むたゆことなく神杷山の入り口部分に当たる楠の木まで歩き続けた。毎日のように来ているのだ。迷うことはなかった。

太いしめ縄が巻かれた神木は、悠然とヤサカニを見下ろしている。ヤサカニはそれに手を触れた。結界が緩んだ時特有の、自分の体が空気に溶け込むような感じはない。

「……………」

おめおめと引き下がるわけにはいかなかった。ヤサカニは自らの意識を集中させてなおも楠の木に触れ続ける。自分がいかにヤナギ

に会いたいと思っっているか、この結界が緩むまで絶対に諦めないと思っっているかを強く心に描く。

自分の思いがヤナギに伝わっても構わなかった。

がさり、と藪やぶを掻き分ける音がした。

ヤサカニは右に広がる藪を見やる。

白い蛇がいた。ちろちろと真つ赤な舌を出し、その蛇はヤサカニを見ていた。

両者一歩もその場から動こうとしなかった。

『汝なんじ、はよう立ち去れ。今なら見逃してやろう』

ヤサカニの脳に直接声が届く。

「……………主神か」

白き体を持つ動物へ、山の神は気まぐれに降りることがある。実体を持たない神は動物に乗り移って神域に侵入した人間を怖がらせ、時には殺して自身の域一帯を守る。

白い蛇は湿った落ち葉の上を這い、ヤサカニの足許でとぐるを巻いた。

『さよう。姫巫が眠りについていた間は、汝のことを通してやっていたが……姫巫が意識を取り戻したならば話は別。我は姫巫の心を優先させる』

「恐れながら主神よ。私は、どうしてもヤナギ様に会いたいのだ」
ヤサカニの強い口調を受けて、蛇は声を上げてヤサカニへ飛びかかった。間一髪、白蛇の攻撃をかわしたヤサカニはある程度の距離をとって身構える。

『汝も他の者と同じだ。姫巫に高天原国を救え、と。この死国を救えと言いに来たのだらう』

「死国……？」

白蛇は空に向かって奇声を上げる。晴れ渡っていた空に、どこからともなく黒雲が立ち込め出した。雨雲だ。

すぐに雨が降り始めた。その雨に当たると、白蛇は見る見るうちに体積を膨張させる。ぬめりがある白い鱗を持った小さき蛇は、今

やサカニの数倍はあるであろう大きさになっていた。それはまさしく、大蛇であつた。

赤い舌と赤い目はヤサカニを今にも殺さんばかりに波打っている。『我は代々神杷山に住まう姫巫を愛し、守り続けるもの。姫巫がこの山にいる限り、高天原国国つ神にも手出しはさせぬぞ』

ヤサカニの言葉が今の主神に届くとは思ひ難い。神は実に気まぐれで、一方的で荒々しい。一度、暴れ出したら手がつけられないものだ。

（覚悟の上だ）

ヤサカニは、腰帯に差していた双剣を構える。

白い大蛇はちろちろと舌を出す。すると、空から雷がヤサカニ目にかけて牙を剥いた。ヤサカニは雷を後退することで避け、とぐろを巻く大蛇に向かつて走り出した。

桶をひっくり返したように激しい横なぶりの雨に、眼帯が外れる。しかし、頓着している暇はなかった。右目に入って来る雨粒を払うために瞬きすれば、その隙を突いて主神は攻撃してくるに違いないと判断したヤサカニは、刹那でも目を閉じなかった。

『汝……天神の……』

ヤサカニの空虚な眼孔を見た主神が気を削いだ。

ヤサカニは、なりふり構わず剣を振り上げて大蛇の懷に飛び込んだ。硬質な大蛇の鱗は剣を通さない。

「くそっ」

すぐにヤサカニは大巫よりもらった小刀を抜くと、深々と大蛇の腹へと突き刺した。醜い音と共に大蛇の腹の中に決り込まれていく小刀を手放し、素早くその傷口から一氣に剣で薙ぎ払う。渾身の力を込めたその一閃は、大蛇を真つ二つに切り裂いた。

絶叫が轟いた。

ヤサカニの体に生温かい肉片が落ちてくる。血と雨に濡れた黒髪を掻き上げ、ヤサカニは大蛇の屍を踏み越えて楠の木へ近寄った。神聖な梔子斎森に血の穢れが充満する。しかし、それは降り頻る

雨が流してくれる。

白い大蛇の鱗は見事なまでに赤く染まっており、上等の反物のようだった。

大蛇の血が木々の根元にある川より森を抜けて遠くへ運ばれたと思われる頃、ようやく雨は小降りとなった。すぐに雲は引いて行く。その様を見守っていたヤサカニは、己が手を下した神の亡殻へ黙禱を捧げる。大蛇はやがて収縮していき、小さな白蛇に戻った。その屍は湿った土に還って行く。

ヤサカニは目を開けると、眼帯が落ちていないか辺りを見回す。しかし、眼帯らしきものはなかった。激しい雨によって流れてしまったに違いない。

嘆息する。

あの眼帯は、黄昏国から高天原国へ来る際にヤサカニたちの無事を祈って幼子たちが贈ってくれたものだった。

黄昏国とヤサカニを繋ぐただ一つの装飾品。それは予期せぬ形でこの手を離れた。

『何故、姫巫に謁見したいのだ』
なにゆえ

この世に存在するためのより寄り代を喪った主神は、大気に混ざり合っている。その姿を見ることは不可能だ。

「……あの方を一人きりにしないため」

ヤサカニは血濡れた手で、少し躊躇いがちに楠の木へ触れた。

『私の寄り代を汝は殺した。そうまでして姫巫に会いたいか』

「はい」

『よからう』

楠の木に触れていた掌が熱を持つ。結界が緩む気配がする。

ヤサカニは目を瞑った。

次に目を開けた先に広がっていたのは、豪奢に山の頂への小路を彩る花々だった。

四・

光がこそげ落ちた部屋の中にヤナギはいた。

格子から漏れ出す陽光だけがその部屋に明かりを灯す。通常ならば、燭台に火を明々と灯しているのだが、今のヤナギはそんな気分になれなかった。

じつと寝台の横で膝を抱え、小さく丸まったまま、彼女は何日も過すごしていた。喉が渴いたり腹が減った時だけ室を出て、白湯を口にする。げっそりとこけた頬くまと隈をこしらえた目が異様にぎらつく。
「サコ……チズコ……。……ムロっ」

ヤナギは今この国にいない者の名を連ね、目を瞑った。瞼の裏に焼きついて消えない三人の笑顔、泣き顔、最後に見た顔。

社殿はヤナギしかいないことによって、静寂しじまの中にあつた。世から切り取られた神杷山の頂で、ヤナギは独りだった。

砂利を踏みしめる小さな音がした。

まさか、とヤナギは全身を硬くする。結界を緩めた覚えはない。この山を守る主神おもてがねが無条件に人を神杷山へ入れるとも考えがたい。
(きつと、主神が力比べに負けたのだ)

現実には有り得ないことだが、可能性としてはそれしかない。

ヤナギは立ち上がると、久しぶりに真象の力を揮ふるった。

『この室の扉は強固な岩となり、決して人力では動かせぬ』

たちまち、室の出入り口が強固な岩と化す。侵入者がここへ来ても、人の力でその岩は動かせない。

床板が侵入者の足取りとともに鳴る。足音は社殿の最奥にあるヤナギの室前で止まった。

「ヤナギ様」

低い声がヤナギの名を呼んだ。

「……………ヤサカニ？」

「はい、ご無沙汰しております。……少し来ない間に、ヤナギ様の部屋の扉は岩戸となつたのですね」

「違う、これは侵入者を追い返すために……」

「そうですね。ならば、これはすぐさま解いて頂きたい。俺はあなたを害する気は毛頭ございません。ただ、ヤナギ様に会いたかったです」

「でも……」

ヤナギは自らの力でできた岩戸に触れる。冷たい感触が脳髓まで駆け昇ってくる。

「どうかお願い致します。あなたに会いたいがために主神と対峙したのです。一目でもいい。お姿を見たい」

王子と都の様子を見に行かれた時、俺はヤナギ様に会えなかったですし、と溜め息まじりにヤサカニは呟いた。

やはり、ヤサカニは主神と戦つたのだ。そして、勝利した。

神と人。ヤサカニは果敢にも神に挑んだ。ヤナギに会いたい一心で彼は危うい橋を渡つたのだ。

ヤナギは岩をもとの観音扉に戻す。

扉はゆっくりと開き、黒髪の青年がヤナギの目前に佇んでいた。

彼の姿を見た瞬間、ヤナギは口を手で押さえた。どこもかしこもずぶ濡れの青年は、青白い顔をしている。せめてヤナギを安心させようと思つたのか、青年は、すっかり色をなくした唇で弧を描いた。どんな時でも決して外そうとしない眼帯はつけておらず、落ちくぼんだ左の眼孔が剥き出しとなってヤナギの目に飛び込んできた。髪がしたたか濡れているため、前髪で目を隠すこともできないのだ。装束もひどかった。もとは萌黄色だったのがかるうじて見て取れるが、布地のほとんどが赤黒い血で埋まっている。

怖いとは感じなかった。ただ、何が何だかわからずヤナギは混乱して声を発することができなかった。

「……すみません。せめて着替えて来れば良かったのでしようが、今を逃すとまた結界が閉じてしまうと思つたので、このまま来

てしまいました」

申し訳なさそうに手で左目を隠しながらヤサカニは微笑んだ。

「そんなことに驚いているわけではない。ヤサカニ……この、血は」
触ろうとするヤナギの手を鋭くヤサカニが掴んだ。彼はとても厳しい顔をしている。

「触れてはいけない。寄り代の血だと言っても、神が流したものに変わりないのですから」

「ああ、そなたという人は」

ヤナギは呆れた顔でヤサカニを見た。彼はそんな視線を軽く受け流して水がしたたる己の髪を腕で拭う。

ヤナギはヤサカニの手を振りほどくと、寝台の下にある木箱を開けた。その中から木綿の布地を乱雑に掴んで、ヤサカニに差し出した。

「拭いて」

「いえ、ヤナギ様の持ち物を汚すわけには参りません」

「いいから。そのままにしておいたら、風邪を引いてしまう。着替えがあれば良かったのだけれど、あいにくここには男物の装束がない」

拒むヤサカニを無視して、ヤナギは強引に彼の頭に木綿の布地をかぶせ、水に濡れた髪を拭う。

「わ、わかりました。自分でやりますから……。ヤナギ様はお座りになられていて下さい」

珍しく動揺を顔に出してヤサカニはヤナギの手を払いのけた。

ヤナギはヤサカニの言に従い、寝台へ腰を下ろした。室の入口で丹念に体を拭いているヤサカニを見つめる。細身な体つきではあるが、武の心得がある者らしい、しなやかな筋肉を持っているのは体の線から見て取れた。均整がとれた上体と下肢。ヤサカニは腰帯に携えた二つの剣を同時に扱うのだと、昔ムロがばやいていた。双剣を扱うのには骨が折れる。二つの武器は剣と盾の役割を果たすが、それ故、甘い太刀筋になりやすい。決定打となる攻撃を放ちにくい

のだ。よく見ると、ヤサカニの剣の柄つかにも返り血が付着していた。

「……その双剣で主神の寄り代を殺したの？」

「はい。随分と手間取りました。……途中、主神は雨をも降らせて見せた。そのおかげでずぶ濡れです。まあ、神杷山には降らせなかったと見受けましたが」

「そうなの。ここには全く雨が降ったりはしなかった」

ヤナギは驚いてそう口にした。

神杷山はあまり天気が変化しない。穏やかな春のような気候が四季を問わず流れている。

ヤナギは膝を立てて、膝小僧の上に顎あごを乗せた。

「主神が雨を……。この山の主神は、もともと水神なの。高天原国つ神とはあまり仲が良くないらしいけれど」

「神も人間のように好き嫌いがあるのですね」

「好き嫌い、という生半可なものではない。いきなり稲光が落ちたり、天候が変化したりする時は、必ず神々のいざこざが関わっている」

ヤサカニは身繕みつくろいを終えて、一礼したあと部屋の中心部に置かれた祭壇に飾られたゆずりはで全身を軽く叩く。それは儀礼的なものであったが、姫巫と会う際に不浄な気を払う行為であった。

「そんなこと 私の御代となつてから行なう者などいない」

ヤナギの呟きにヤサカニは無表情でゆずりはを祭壇に置く。

「俺は、あなたに仕えろと決めましたから。儀礼に則って行動します」

不意打ちを食らったヤナギは口を開けてヤサカニを凝視した。彼は固い決意を孕んだ右目で射るようにヤナギを見つめ返す。その目は青茶色ではなく赤茶色。ヤサカニ本来の色をした瞳。それは真名の縛りが解けたのを証明している。

「……真名の縛りを解いたのは、一重にそなたを自由にしたかったから。そなたには感謝している。姫巫を憎んでいるにも関わらずに私に仕えてくれようとする心意気は嬉しい。けれど……カガミたち

のもとに戻った方がそなたにとっては幸せだと思

「お傍にいます」

ヤナギの言葉を遮ってヤサカニは言った。

「……」

「ヤナギ様が真名の縛りを解こうが、関係ありません。俺は、俺の意思であなたに最期まで仕えたいと思う」

ヤサカニはヤナギの足許にひざまず跪き、ヤナギの右手を取って甲に自分の額を寄せる。

ヤナギは胸の奥に去来するものが抑えきれず、口許を押さえる。しだいにそれは喉元に、眼の裏側へ込み上げてきた。

言葉が出なかった。涙も出ない。ただ、うねりが体中を駆け巡り、温かくヤナギを包み込む。

気づけば、ヤナギはヤサカニの腕かいなの中にいた。心音がする。ヤナギのものより少しだけゆっくりしたヤサカニの鼓動は、彼がここにあるのだと実感させてくれる。サコやチズコのように、動かないものでなく 生きている。

「孤独が支配するあなたと共にいたい」

ヤサカニの腕に力がこもる。それに応えてヤナギも彼の背中に回した腕に力をこめた。

「うん……うん……」

ヤナギはようやく一人ではなくなった。

ヤナギが神杷山を下りて最初に行なったことは、采女たちへの謝罪だった。ヤナギのわがままによって彼女たちは巫たちの住まう離れで肩身の狭い思いをしていたのだから。

「本当に、ごめんなさい。そなたたちが本当に心配してくれていたのはわかっていたの。けれど、私……本当にごめんなさい」

ヤナギの真剣な謝罪に、采女たちはさしも気に障った様子もなく笑顔を見せた。

「ふふ、いいんです。わたくしただって一人になりたいこともありますし。それに、こうして姫巫様がお姿を見せてくれただけで十分です」

「そうですよ。私たちだって姫巫様の御心に気がつけなかったのだもの。こちらこそ、申し訳ございません」

ヤナギは采女たちの度量の大きさに感服せざるを得なかった。

そして、采女たちにまた自分の世話を頼んだあとにヤナギが向かった先は、台王のところだった。遅れて謁見の間に姿を現した台王は、黄味がかった白目をしており、顔も黄土色をしていた。

ヤナギはヤサカニを連れて台王、並びに側近や近衛兵たちに謝罪と、今後の動向を伝えた。今後のことを考えたのは実質ヤサカニだったのだが、自分はまだ信を得られていないと彼は言い張り、今回ヤナギが台王たちに代弁することにした。

「今後の動きとして、今この都を私が空けるわけにはいかないと思われます。武官長であつたムロもないこの状況下、むやみやたらに地下の国へ出向いたとして、兵たちの統率が計れず敗走する可能性が非常に高い」

不穏なことを断言したヤナギに、側近たちは飛び上がって今の言葉を取り消すよう求めてきた。

ヤナギはそんな彼らに向かって侮蔑の眼差しを送った。

「？真象の力？は使っておりません。どうぞご安心を」

ヤナギの冷やかな視線に、台王とクルヌイ王子以外は若干たじろぎながら　時折目を剥きながら話を聞いていた。

全てを話し終え、謁見の間から出て行こうとするヤナギとヤサカニをクルヌイが止めた。

「その動向を考えたのは、姫巫？それとも、そこにいる従者？」

ヤナギは王子に見つからないようにヤサカニへ目を配った。ヤサ

カニは小さく頷く。

「私にございますが、何か問題でも」

「いいや、ただ気になっただけ。そこにいるヤサカニは黄昏国では

相当名の通った軍師だったらしいから」

ざわめきが大きくなった。ヤナギは舌打ちし、逃げるように謁見の間を去った。

クルヌイは静かな眼差しで、ヤナギたちを見送っていた。

ヤサカニは驚くべき迅速さで、ムロがいなくなつた西門軍をまとめ上げた。それと同時に、何と彼は南門軍と東門軍までも手懐けてしまつたのだ。これにはヤナギも驚いた。今まで西門軍と他の軍が合同で稽古や作戦、また言葉を交わすことなど皆無だったのに、ほんの十日前後で高天原国軍は一丸となつて鍛錬を行なっていた。

「こんなこと造作もない」

ヤサカニは、ただ驚くばかりのヤナギに向かって不敵に笑つた。

「司官長をほんのちよつと懐柔してしまえば、後は簡単でした。今は国の一大事。どうか、貴殿のお力添えが欲しいのです。きつと今回都を守れた暁には台王よりたと褒美がもらえるはずでございます。わたくしがきつと、貴殿の軍を最も強い軍に育ててお見せします」。そう言つたら、奴ら目の色を変えました。クルヌイ王子が謁見の間で俺が軍師をしていたと吹聴してくれたことも追い風となつた。ああ、ヤナギ様にも見せてやりたかつた。本当に、地位と保身しか脳にない者たちを転がすのは容易いことです」

「ヤサカニ……そなたは本当に……」

思わずヤナギも笑みを洩らす。

ヤサカニは長い前髪を掻き上げた。右側にいたヤナギには見えな
いが、彼は左目に眼帯をつけていない。眼帯をなくしたと言つたヤ
サカニにヤナギは新しい眼帯を用意したが、もういいのだと彼はそ
れを受け取ろうとしなかつた。

『醜い、と嘲笑されてもいい。全てを喪つたわけでないのに、悲嘆
に暮れて欠けたものを隠すことはもうやめることにしました』

随分思い切つたことをしたヤサカニに対して、御殿内の人々の反
応は総じて好ましいものが多かつた。

それには様々な理由があつた。

美意識の高い者たちは、ヤサカ二の顔貌がずば抜けて優れていることもあって、彼の欠けた部分を、完璧でないからこそその美しさだと熱狂し、神も彼の美しさに嫉妬したのだと愛でた。

武に秀でた者たちは、ヤサカ二の剣の腕や弓の腕に心底感服し、心酔している者が多かった。頭の切れる者たちも彼の導き出す軍略の数々に舌を巻き、師事を仰いでいた。

カガミがいる時は、影のように息をひそめることを第一にしていたのだらう。ヤサカ二は、思う存分自らの存在を解き放っていた。

彼は闇を壊す太陽でなく、闇に添う優しき太陰。高天原国を守るうとしてくれる、全ての罪を赦そうとしてくれる、優しき光。

ヤサカ二は軍を整えながら日に日に国軍全体の統率をはかっていた。兵たちがヤサカ二を見る目は、ム口を見ていた西門軍に酷似している。誰しも、ヤサカ二が指揮官となることを望んでいた。

やがて、間者たちが黄昏国に決起の動きありとの情報を仕入れて来た。もう、ヤナギたちに残されている時間は少なかった。

「ヤナギ様には最後の最後で動いて頂きます。あなたはこの国の懐刀。先陣を切る必要はございません」

「でも、地下の国々はきつと、？神の腕？とム口を指揮官とする。あの人たちの相手は生半可な兵では務まらない」

「信じて下さい」

多くを語らないヤサカ二は、ヤナギをひたと見据えた。その視線があまりに痛くて、ヤナギは押し黙った。

五・

突然、戦の狼煙のろしは上がった。

地上へ続く蜘蛛の廻廊全てを一気に叩いた地下の国々は、驚くべき速さで都へ上がった。来た。

「怯むことはない。お前たちはこうなることを前提として、訓練を重ねたのだ。俺の指示に従えっ」

揺れる兵たちをヤサカニは大音声で以って落ち着かせた。

「まず、必ず地下の者たちは都へ真正面から攻め込んでくる。だから、第一の守りは駿嶮門はやみもん前に布く。そして、そこが突破されたら迷いなく御殿の南門を守れ」

「しかし、ヤサカニ殿。もしかすると、奴らは西門から攻めてくるかもしれません」

「それは万が一にも有り得ない。ムロが、自ら指揮下に置いていた軍がいる門から攻略しようと考えとは思えない。彼らがこの国を去った時、西門兵たちと他の門兵の武力の差は歴然としていた。だが、今は違う。ここにいるのは高天原国軍だ。宮内で変に指揮系統を分けられた階級制の軍ではない。お前たちは、力ある守り手だ」

兵たちはおの顔を見合わせ、唇を一字に引き結ぶ。その顔は決意を持って凜としている。

「都が落ちたとて、宮殿が落ちなければなんとかなる。いや、なんとかしてみせる。あちらは遠路遙々来ているんだ。兵糧も少ないはず。長期戦に持ち込めば、こちら側の勝算が上がる。持ちこたえろ。お前たちなら、絶対に成し遂げられると信じている」

ヤサカニの鼓舞は兵たちの心を見事に捕らえていた。彼らは大きく拳を振り上げて勝利を誓う。それを見て、ヤサカニはほっとしたように口許を緩めた。

「では、皆自分の定位置についてくれ」

武具の擦り合う音を立て、意気揚々と兵たちは持ち場に散って行

く。

ヤサカニは切り傷にまみれた自らの掌を空へとかざす。皮膚の薄い部分が、夕陽に照らし出されて赤く透けている。命の赤は、確実にヤサカニの体内を巡っている。

（勝つ）

その意志を心に浮かべる。

何のために勝利を掴みたいのだと問われれば、ヤサカニは迷いなく答えられる。

ヤナギ様の居場所を守るため。

それだけがヤサカニを突き動かしていた。まだ、ヤナギは幸せを知らない。彼女が心の底から幸せを感じられるようになるまで、絶対に守ってみせる、とヤサカニは自らに誓う。自分自身、？幸せ？とは何かわかっていないが、この戦に敗れば考えることさえできなくなる。ヤナギもヤサカニも、まだ何も掴めていない。

（……絶対に、勝つ）

夕陽を掴むように拳を握った。

王宮内で巫たちと共に後方から援護をしていたヤナギの耳に飛び込んできた戦の趨勢すうせいは、非常に厳しいものだった。大きく穴の開いたゆがけをつけた兵は、転がり込むように巫たちがいる離れに駆けてきた。

「駿嶮門が突破された。地下の蛮族どもが王宮目がけて来ている。

俺たちも南門まで後退してきたから、巫殿たちもより一層、強固な術を練ってくれ！」

「状況は思わしくないの？ ヤサカニは？」

ヤナギの問いに兵は、「はっ」と頭を下げて答えた。蒼の腰帯を巻いているところを見ると、彼は西門兵に違いなかった。

「ヤサカニ様はただ今最前線におられます。あのお方は敵方の動きを全て読んだ的確に攻撃の指示を出しておいですが、敵方へ攻撃

を仕掛ける度に何か奇妙な壁に弾き返されてしまつのです」

「奇妙な壁？」

「はい。どう表現したらいいか、某にはわかりかねますが。何か…圧倒的な気を感じます。敵方の主軸はム口武 いえ、裏切り者です。？神の腕？は我々の前に姿を見せておりません。前線は混戦しております。正直に申し上げますと、苦戦を強いられております。それでは、某も戦場に戻ります」

兵は口早に言うのと、来た道を引き返した。

開け放たれた戸の外からは絶えず轟音や剣の音がしており、激しい攻防が繰り広げられていることがわかる。

巫たちは王宮へ敵を入れないよう、必死に巫力を練り、精度を上げて戦場へと飛ばす。それは見えぬ糸となり敵を縛るが、何故かその効力が格段に弱い。

額に玉のような汗を浮かべた大巫は手に持っていた橘の枝を床に叩きつける。大巫の乱暴な行ないにヤナギや巫は、ぎょつとして巫力を練るのをやめた。

「……わたくしたちの術は効かない」

きつぱりと大巫は言い切った。そして、一つの部屋にすし詰め状態でいた巫たちを見渡す。

「敵方には神がついております。それも、辺境の地にいる小さき神々でない、大きな力を持った神が味方している。神力を前にして、わたくしたちが心血を削って術を放ったところで跳ね返されてしまいます」

「ならば大巫様、私たちはどうすればよろしいのでしょうか。剣を持つて戦おうにも、私たちは護身程度しか剣術を習っておりません」
真つ青な顔で巫の一人が言った。それに呼応して他の者たちも騒ぎ出す。

「……そうよ、わたしたちにも神がついているではないですか」

はた、と巫がヤナギを見た。その目は血走っている。

巫たちはヤナギの装束の裾に縋りつく。

「姫巫様、あんな敵など貴女のお力で薙いで下さい」

「戦場では常に圧倒的な力を揮^{ふる}っていらっしゃったではありませんか。どうか」

「私の力も効かない」

巫たちの言葉をヤナギは皆まで聞かずに振り払った。ヤナギの表情は強張っていた。

先ほどから何度も真象の力を揮っているのに、一向に戦の流れが変わらない。何か、姫巫の力を越えた何かがヤナギを阻んでいるのだ。

（まさか……神降ろし？）

ヤナギは奥歯を噛みしめる。黄昏国を守護する神　地祇^{ちぎ}。地祇を何者かが身に宿しているのかもしれないと思い至る。

ヤナギの中に受け継がれている姫巫の記憶の中に、神降ろしの記憶がある。神降ろしは人でなくなってしまう代わりに、神を身に降ろすことを赦される。ヤナギのように神に力を借りて力を揮うのではなく、自ら神の力を揮うのだ。行使する方法によって、力には雲泥の差が生まれる。

巫たちのヤナギに対する罵声も、叩く行為も、ヤナギには止められなかった。国を守る姫巫が無力と知った巫たちの絶望は深い。それを退けることはできなかった。

巫たちを止めたのは大巫だった。彼女はヤナギを連れて、室内より出る。

「そなたはクルヌイ王子と台王のもとへお行きなさい。そして、いざとなつたらお二人を敵へ差し出すのです」

「大巫様……そのようなことをおっしゃられるなんて！」

ヤナギは目に驚きの色を宿して大巫を非難した。

大巫は勾玉の連なる首飾りを外し、ヤナギの手にしっかりと握らせる。

「そなたが生き残れば、この国はいつか再興できる。神の加護はひそかに受け継がれて行くでしょう。わたくしは、そう思っています」

「ち……違う。私が生き残ったところで、この国は再興などできません。大巫様、この国は――」

言おうとしていたことは喉もとから掻き消えた。ヤナギは自分の喉を押さえて表情を歪めた。姫巫には守らなければならぬ秘密がある。秘密を言おうとすれば、呼吸することが難しくなる。

それがわかっていても、ヤナギは大巫に真実を伝えたかった。ヤナギに多くのことを教えてくれた偉大なる巫は、ヤナギに全てを託して死する覚悟だと感じ取ったからだ。

「わたくしの力など、微々たるものかもしれないけれど。わたくしは最期の刻限^{とき}まで戦います。ヤナギ様、さあ、行きなさい」

大巫の目には涙が光っていた。彼女は突き放すようにヤナギの肩を押す。

ヤナギはその場から離れることができなかった。

「大……みこ……様。貴女ほどの力を持った巫を、敵もみすみす殺しはしない。約束して下さい。敵が離れに攻め込んできた際には敵方にくだってでも生き延びると」

ヤナギの言葉に大巫は、ただ微笑を見せるだけだった。

「台王や王子は寝所の奥の間にあります。早く行きなさい」

ヤナギは大巫を降り返りつつも、台王やクルヌイ王子がいるもとへ走った。

履物を脱ぎ、謁見の間を横切つて小走りに寝所へ急ぐ。

すれ違う宮人たちは慌てふためいており、ヤナギに気を止める者は誰一人いなかった。

「どいてくれ！ わしゃまだ死にとくない！」

「あたしだってそうだわっ」

「こんな国、もっと早く捨てれば良かった」

我先にと荷物をまとめた者たちが御殿から出て行こうと押し合っている。

ヤナギは悔しかった。

大巫たちへ兵たちが命を賭けて国を守ろうとしているというのに、今まで台王の傍で蝶よ花よと何も考えず、扇で隠した口許に笑みを浮かべていた者たちが逃げ出そうとしている。その様はとても無様だった。

「……姫巫？」

寢所続く廊の途中でヤナギはクルヌイと鉢合わせた。

「クルヌイ王子、ちょうどそなたたちのいる間へ行こうとしていたのです。台王は……」

クルヌイは首を振る。

「台王は床から動こうとしない。奥間にも行ってくれなくて、困っていたところだ」

「すぐそこまで敵が迫っております。お逃げになって下さい」

「この事態を招いたのは、高天原国を守るべき立場にある台王や僕のせい。今更逃げることなどできないよ。……よしんば逃げたとして、どこに僕たちを匿ってくれるところがあるだろうか」

王子は落ち着いた様子で腕を組んだ。少々苛立っているようにも見える。

「それは……っ」

返答に窮するヤナギの耳に人々の悲鳴が聞こえた。

「敵が入り込んだぞーっ」

「都全域に火が放たれた！ もうおしまいだ……っ」

クルヌイはヤナギの手を取り、素早く駆け出した。溢れ返っている宮人の合間を縫うようにして彼は寢所の奥間へと続く扉を開いた。クルヌイは間の飾り棚を押した。棚があつた部分には観音扉があつた。彼はそれ開け放った。そこは隠し部屋のようにで広さがあり、最奥には御簾が垂らしてある上座が存在した。部屋の四隅には燈台があり、真つ暗な室を儚く照らしている。

「クルヌイ王子……ここにお隠れになるのですね」

「いいや、ここに隠れるのはヤナギ、君だよ」

驚愕がヤナギの顔に走る。ヤナギは自分の手を掴んだままにいる

クルヌイの手を振りほどいた。

クルヌイは俗世から切り離されたように清い微笑みを浮かべた。

「君は、死ななくていい。贖うのは、わたしや父上だけでいい」

彼はそう言い残し、隠し部屋から出て行った。すぐに扉を飾り棚で塞ぐ音がした。ヤナギは力任せに観音扉の取っ手を引いたが、扉は微動だにしなかった。

『扉は御簾になり、私を通す』

真象の力を使ってみたが、戸には何の反応もない。清浄な気が薄い本殿内では、力も発揮できないのだ。

ヤナギは無駄だとわかっていてもなお、戸を叩き続けた。

「クルヌイ王子……どうか、戸を開けて下さい。私は護ってもらっ価値などない。それは、貴方にもわかつているはずです」

ヤナギの目頭に涙が滲んだ。扉を叩き続けるヤナギの拳が痺れてくる。

どれほどの時間が経っただろうか。外界と部屋の内部は完璧に隔てられている。何の音もしない。

ヤナギは扉の前に座り込んでいた。

ことり、と北側にある燈台が揺れた。ヤナギは双眸をそちらへ向ける。

燈台の揺れは静まらない。

ヤナギは暗がりの中、燈台の下をじっと見据えた。影に隠れていた部分がぼんやりと浮かび上がってくる。

「隠し通路……？」

ヤナギは一人呟き、懷に忍ばせた小刀の柄を握りしめる。

この室は、何か変事があった際に台王が身を隠す場所。だが、もしもこの部屋が見つかった時のために、宮殿を造った者は隠し通路も一緒に造ったのだらう。北側にある燈台の下には小さな木戸がある。それが不自然に振動しているのだ。立てつけが悪いのか、長く使われていなかったためかはわかり兼ねる。

何者かは木戸を強引に外して中へ入ってきた。

燈台の微かな灯かりは侵入者の顔をヤナギに教えてくれない。その者は体全てを室へ引き入れると、立ち上がった。倒れそうになる燈台をその者が支えた時、ようやく姿形が露わとなる。

肩で息をし、こめかみより伝う血を手の甲で拭う男は、高天原国軍の証である蓮と海原を描いた額当てをしていた。

「ヤサカニ！」

ヤナギは勢いよく立ち上がり、ヤサカニのもとへと駆け寄った。

ヤサカニは、胸に手を当てて息を吐いた。彼の鎧には血が飛び散っている。鎧にも膝当てにも、余すところなく深い傷が刻まれており、蒼の外套はところどころ焼けている。

ヤサカニは壁に身を委ね、ずるずると腰を落とした。彼は苦しげに浅い呼吸を繰り返し、瞑目する。

「良かった……間に合った」

「どうしてここが……」

「ここへ来る前、巫たちの部屋に行ったのです。そこで……大巫より、この部屋のことを聞きました。安全に行く抜け道まで教えてくれました」

「……無理をしてこんなところまで……。無謀にもほどがある」

ヤナギの声が震える。長い黒髪が顔にかかった。

ヤサカニは低くぐもった声で笑った。

「必死にここまで後退してきたんだ。少しくらい、褒めて下さい」

言いつつ、ヤサカニは腕に刺さった太い針を抜き取る。血飛沫ちしぶきが上がった。

「ヤサカニ、無理やり引き抜いては駄目！ 手当を……」

「……しつ。こちらへ」

ヤサカニは重傷の身で立ち上がり、ヤナギを抱き込むようにして御簾の裏側へ移動した。

扉の外から大きな音がする。

ヤナギは息を止める。

「………隠し通路に逃げたとしても、追手は必ず来る。俺が

敵を斬ります。その間にヤナギ様は脱出を」

「その怪我では無理よ」

「無理と言われようと何だろうと、やって見せる。……来ます」

ヤナギとヤサカニは御簾の後ろでじつと扉の方を注視していた。

やがて、扉が開く。

扉の向こうから光が射す。外界から遮断されていた部屋の中に現の音が流れ込んでくる。

御簾を何者かが足蹴にして揺らす。

ヤサカニはヤナギをきつく抱きしめて息を殺し、逆光を受けて佇む人物を睨み据えた。

男は非常に鷹揚な仕草で動く。ようやく露となったその人物の顔を把握した瞬間、ヤサカニは愕然とした。

「カガミ様……」

二人の前に佇んでいたのは、カガミであつた。ヤナギの喉が引き攣る。

カガミは何事か口にしようとしたが、背後から奇声を上げた人物の登場により押し黙った。

カガミの後ろから現れたのは、台王だつた。手にはム口が高天原国を出る際に置いていった国の秘宝、八雲大蛇大剣やくもおろちのおあつるきを握っている。

？神の腕？は台王の後ろを冷めた目で見やる。そこにはたくさんの屍があつた。地下の国々の兵たちも、高天原国の兵たちも、どちらのものともわからない屍の山。

ヤナギは屍の発する嘆きに吐き気を覚える。

台王は血走った目でカガミを見る。病的な黄土色の肌に飛び出た目。台王は狂っていた。

己を守ろうとしない刃は、理性ある者よりも強い。剣の腕はそれほど高くない台王が地下の国々の兵を倒せた勝因はそこだ。

台王はカガミの前に立ちはだかつた。

「姫巫は渡さぬ。この国神は渡さぬぞっ」

台王の叫びにカガミは怒鳴り返した。

「そいつは高天原国のものではない！」

激情を表に出し、周囲の空気を一瞬で冷やすほどの威圧感を醸し出してカガミは台王へ刃を向けた。

台王はがむしゃらに剣を振るう。カガミは台王を段々と壁際に押しやって行く。最初から勝負はついていた。カガミの剣は人を斬るためのもの。対する台王の剣は儀式のためのもの。

カガミの猛烈な一撃に台王は剣を取り落とす。躊躇することなくカガミは台王の首を刎^はねた。

それは同じように首切りで死んだサコの死に様とは似ても似つかないほど、醜い死に様だった。

「……………」

カガミは無言で刃を己の外套で拭くと、ヤナギとヤサカ二へ目を向ける。

台王とカガミが戦っている隙に脱出しようとしていたヤナギたちだったが、抜け目なくこちらに気を配っていたカガミのおかげで逃げられなかった。

カガミは情け容赦なく、月水鏡剣をひたとヤナギへ向ける。

「憶えているか、ヤナギ いや、キョウカ。昔、同じように

俺がお前に剣を向けた日のことを」

ヤナギは嘔吐感を覚えて、口を押さえる。

何かが体の中を蠢いているのがわかる。

何故、ヤナギの真名をカガミが知り得るのがわからない。

しかし、心の奥ではその答えを知っている自分がいる。

己の記憶のあやふやな部分が振動し、嘔吐感は募る。

そんなヤナギに、カガミは優しく微笑んだ。彼が楊に見せた表情の中で最も、安らかなるものだった。

「……響くは始まりと終わりを告げる、宿運^{とき}が関^との声」

瞬間、怒涛の如く抜け落ちた記憶はヤナギを襲った。

七章 焰へほむら」の追想

嫌だ、嫌だ、嫌だ。

幼子のように抵抗した。

思い出したくない、思い出したくない、思い出したくない。

精神が、赤く燃える煉獄の焰に包まれるのを感じた。

駄目だ、と本能的に思った。

必死にもがき、足掻く。

この記憶だけは封印しておかねばならない、と心奥にいる幼き頃の自分が忠告してくる。

ヤナギは、悲鳴を上げた。

しっかりとヤナギを抱きしめているヤサカニの腕に強さが増す。

「ヤナギ様、お気を確かに。ヤサカニがおります。必ず、あなたをお守り致します」

彼はヤナギ以上に必死な形相をして、呼びかけてくれる。

「ヤ、サカニ……？」

ヤサカニの呼び声もあり、ヤナギは記憶の焰から逃げおおせそうになる。

しかし、その時、ヤナギの視界に剣の切っ先が見える。

瞳孔が開く。

そのもとを辿れば、紛い者ではないカガミがいた。

カガミは口を歪ませる。

その薄い唇から零れ落ちた名は、記憶の焰を煽る疾風となった。

「キヨウカ」

怒涛の如く、抜け落ちていた記憶は、ヤナギを襲った。

ヤナギは白い空間にいた。何もない場所。

ふと、花弁がヤナギの膝もとに落ちてきた。上を見上げると、辺りは全て灰色の花で覆われている。

「……じゅうみょう 拯溟の花……」

花々は段々空間を占める密度を濃くしていき、ヤナギを圧迫する。芳醇な香りを胸いっぱい吸い込んだ刹那、息苦しさはなくなった。かわりに、ヤナギの前にはただ広い野原が広がっていた。

兄上、兄上。

拯溟の花が吹雪く中、少女は慕うように兄を呼ぶ。

少年は後ろ一つに束ねた髪を揺らして、少女の方を振り返った。

少女は兄の懷に勢いよく飛び込んだ。

「おかえりなさい、兄上。今回の戦はどうだった？ 怪我しなかった？」

「ああ、勝ったよ。姫巫の軍勢は一旦引いた。怪我もない」

「そう！ 良かった」

ほっとした少女は花が綻ぶように笑う。兄はそんな妹を見て優しい眼差しを送った。

「キョウカ……必ず、この国を復古しよう。その時は」

少年は言葉を切ってキョウカを抱き上げる。

「お前を、この世で一番幸せな姫にしてやるから」

兄の瞳に映る柔らかい色が心地良くて、キョウカはにっこりと頷いた。

「キョウカは、兄上と一緒にいるだけで幸せ」

「参ったな」

兄ははにかんだ表情を見せる。

キヨウ力は幸せだった。国の復興だとか王族の威信だとか、そんなもの幼いキヨウ力にとって見れば興味を持たないものであり、日々指南役から教わる黄昏国と高天原国の確執でさえどうでも良かった。ただ、兄とこうして共にいられるだけで、幸せだった。

キヨウ力よりも七つ年上の兄は幾度も戦へ赴いている。毎回擦り傷や打ち身をこしらえて帰還するのだから、キヨウ力は気が気ではなかった。いや、生きて帰ってくるだけでもいい。敵国との戦いは熾烈を極めている。荷車で物言わぬ死人となった兵たちを囲い、その家族や友人が泣いているのをキヨウ力は何度も見たことがある。（兄上は戦が怖くないのかしら）

キヨウ力は幼いながら、懸命に思いを巡らせた。

敵国には神の加護を受けた術者がいると指南役は言っていた。

姫巫。かの国の術者の名。女の身でありながら戦場を駆ける彼女は、戦女神そのものだと言指南役は苦虫を潰したような顔をして呟いていた。

その姫巫と兄は戦っている。兄だけではない。地上の国々は皆、断固として敵国へ下ろうとしなかった。

姫巫は奇怪な術を操るらしい。その術のせいで黄昏国の優秀な兵たちが散った。

「ほら、ぼつととするな。もうすぐ夕餉ゆづげの時間だろう」

兄に手を引かれ、キヨウ力は足取り軽く王宮へ歩き出した。

拯溟の花がいつせいに風に吹かれて花弁を舞い散らす。二人の姿が掻き消えた。

再び、拯溟の花が視界一面に広がり、新たな記憶をヤナギの前に示す。

キヨウ力は目いっぱい開いた瞳に零れんばかりの涙を湛えて母を見た。

母は沈痛な面持ちでキヨウ力から視線を外す。父もまた、頂垂れている。

救いを求めて謁見の間にいる者たちを見回すが、誰もキヨウ力と目を合わせようとしない。あれほど毎日軽口を叩き合っていた指南役も、いつもキヨウ力を可愛がつてくれていた目付役も。側近も、身の周りを世話してくれる女官も。誰もキヨウ力を助けない。

「嫌……」

涙を零さないよう口をへの字に曲げてキヨウ力は父母に反抗した。

「キヨウ力、赦して頂戴」

母がか細い手でキヨウ力の頬に触れようとする。それをキヨウ力は撥ね退けた。

「嫌と言ったら嫌！ 絶対に嫌！」

「キヨウ力……っ」

「母上は勝手だわ。私を犠牲にして自分たちだけ助かるうとしている！」

「おお、何ということ……」

おいおいと母は泣き出した。気丈な母が泣いているところを見たことがなかったキヨウ力は驚きに言葉を忘れる。

父は泣き崩れる母の肩を優しく叩き、キヨウ力を見据えた。

「高天原国の姫巫が、お前と引き換えに黄昏国を滅ぼさないでおいでやると言った。この提案を呑まねば、この国は滅亡してしまう。」

これは国を賭けた取り引きなんだ」

「いいえ、父上。姫巫は私を手に入れたところで引き下がるような者ではないわ。姫巫が関わる戦に赴いた兵たちが言っていた。命乞いしても姫巫は躊躇いなく殺すのだと。そんな非情な人が、父上との約束を守るわけがない。きっと、また攻めてくる」

「……聡い娘だ。まだ六つだということが信じられん。だから、本当のことを教えよう」

キヨウ力は父を強い力で睨み上げる。周囲にいた人々は固唾を呑んで王の言葉を待っている。

「……………お前は、姫巫の孫に当たる」

「え？」

全く考えていなかった言葉にキヨウ力は呆然とした。

「我の後は　お前の母は、高天原国が姫巫の娘。その母の子であるお前は、姫巫の孫に当たる。姫巫は代々その血脈しむに連なる娘が継承するのがならわしだという。だから、お前を引き換えに

「なりません！　ここをお通しするわけには……………」

「黙れ」

扉の向こうから押し問答が聞こえてきた。扉はすぐに開け放たれた。

「……………父上、何をなさっているのですか」

いつせいに皆の視線が謁見の間の入り口に向く。言葉を紡がないでいるキヨウ力もまた、声の主を見やった。

兄は朽葉色の双眸を部屋全体に素早く走らせる。彼の後ろには幾人もの護衛兵がおり、必死に兄を中へ入れまいと外套や肩を引つ張っている。

「ハルセ様、いけません。王にはハルセ様を入れるときつく言われております故」

「どうか、お引き取りを」

護衛の手を振り払い、ハルセはキヨウ力たちのいる中央部へ近づいてくる。

父は母の肩から手を離し、キヨウ力の肩に手を乗せた。ぐっと力を込められ、骨が悲鳴を上げる。

「わかったか、キヨウ力。これはお前に託された使命だ」

険しい顔をして父はキヨウ力を覗き込んだ。今まで父の恐ろしい表情を見たことがなかったキヨウ力は縮こまる。

「その手を離せ」

ぱんつと小気味いい音と共に父の手がキヨウ力から滑り落ちる。

兄が弾^{はじ}いてくれたのだ。兄　ハルセはキヨウ力を守るように掻き抱き、父やその場にいる人々を睨みつける。

「先の姫巫からの提案の件ですか」

「そうだ」

「あれは、受けない方が良いと再三申し上げたではありませんかっ」
ハルセは声を荒げた。

父は壁際に控えていた兵たちに目を配る。兵たちはすぐにハルセとキヨウ力を取り囲んだ。嬉々としている者はいなかった。兵たちは俯き加減にキヨウ力たちの周りを固める。

ハルセは舌打ちし、絶対に離さないというようにキヨウ力をより一層強く抱きしめる。

「　キヨウ力のことは、忘れる」

「何を言っているのですか！　貴方はこの国の王だろうっ。姫巫には絶対に屈しないと息巻いていた気迫はどこへ行ったんだっ」

ハルセの叫びは悲鳴に近かった。

「これより先、キヨウ力はこの国の者ではない。姫巫を継ぐ、我らの敵となる娘よ」

「馬鹿な……」

掠れた声でハルセは父を見る。その目には父に対する失望があった。

キヨウ力は身を硬くした。父に聞かされた真実がキヨウ力の頭の中で渦巻いている。

父は、？神の腕^{かいな}？と占者たちに運命づけられたハルセの身代わりとして、自分を差し出すのだとキヨウ力は気づいていた。

今は姫巫の機嫌を取って滅亡を防ぐためにキヨウ力を差し出す。そして、ゆくゆく万が一キヨウ力が姫巫になっても、ハルセがいるならば勝利できる。そういう思惑なのだ。

所詮、自分は捨て駒。

キヨウ力の目から一粒の涙が落ちた。

「……………俺が行く」

短く、ハルセは言った。

父は怪訝げにハルセを見た。

「俺が、キヨウ力の代わりに高天原国へ行く。間者だって何でもや
つてのけるから……父上、どうかキヨウ力はここに。こいつはまだ
小さい」

「許せ、ハルセ。黄昏国のため、必要な犠牲なのだ」

ハルセは言葉を失った。

「……お前たち、キヨウ力を連れて行け」

能面のように感情の見えない顔で父は兵たちに号令を飛ばした。

兵たちは迅速にハルセとキヨウ力を引き離しにかかる。

キヨウ力はハルセと離れたくなくて必死に兄の装束を握りしめて
いたが、大人の力に子供が勝てるわけもなく、兵に引きずられて謁
見の間から遠ざかる。

「兄上！ 兄上！ 兄上！ ！」

唯一の味方であるハルセを、キヨウ力は声が涸れるまで叫んだ。
手を伸ばす。しかし、その手は届かない。キヨウ力は半狂乱で泣き
叫んだ。

謁見の間で、ハルセが兵たちに抑えつけられながらもキヨウ力に
手を伸ばしているのが目に入る。

「キヨウ力！ くそっ、離せ……お願いだ、離してくれえっ」

絶叫が宮内に木霊した。

キヨウ力は一人、自室にこもっていた。入り口には兵が控えてい
るため、外に出ることもできない。キヨウ力は赤く腫れた目をこす
った。二日三晩、泣き通してわかったのは絶対に姫巫のもとへ行か
なくてはならないこと。キヨウ力がこの役目を拒めば、間違えなく
国は滅ぶかその寸前の状態まで陥る。

キヨウ力は膝を立てて、顔をうずめた。

（兄上と敵同士になるなんて嫌だ）

涸れることを知らない涙は再びキヨウ力の頬を濡らす。

ふと、大きな物音がした。戸の向こうからだ。だが、開かない戸に興味はないとばかりにキヨウ力は泣き続ける。

「……………キヨウ力」

聞きなれた大好きな声色がキヨウ力の耳をくすぐった。キヨウ力は恐る恐る伏せていた顔を上げる。戸を開けたのは、ハルセだった。「兄上、どうして？ 兵がいたのに……………」

部屋の外を覗くと、二人の兵が血を流して倒れていた。きゅっとキヨウ力は悲鳴を上げる。鼓動が速まる。致死量の血液は絶え間なく兵たちから流れ出ていた。

キヨウ力はその時初めて、今のハルセはいつものハルセと違うことに気がついた。穏やかさも、優しさも、いたわりもない。あるのは深い悲しみを宿した心。キヨウ力はハルセから後ずさった。

「もう、お前を守れない」

ハルセは、凪いだ剣をひたとキヨウ力へ向ける。彼は夜空に孤独に咲く月の如く、儚い笑みを浮かべた。

「願わくば、もう二度と今生でまみえることがないように」

兄の声が震えている。

「さよならだ、キヨウ力」

視界は朱色に転じ、体を生温い何かが伝う。生温いものに手を当ててみると、それはがキヨウ力の体より流れ出た血だとわかった。すぐに睡魔がキヨウ力を襲った。

「……………響くは始まりと終わりを告げる、宿運が関の声……………」

古代史に残る有名な一節を諳んじるハルセを遠く感じる。ばたばたと大きな足音を立ててたくさんの人がキヨウ力の部屋へ入ってきた。

「ハルセ、何をしておる！ 医者を……………誰か、早く医者連れてまいれ！」

まどろみの中、キヨウ力はハルセに手を伸ばす。伸ばされた小さな手を、掴む手はなかった。

ヤナギは、無言で己の過去を眺め見ていた。

拯湊しよしよみづうの花は、たおやかに舞う。

ヤナギの目から一筋の涙が流れる。

少女が目を開いた時、目の前にいたのは一人の男だった。精悍な顔つきをした三十過ぎの男は、少女の目覚めに酷く狼狽したようで、周囲の者たちに少女が目覚めたことを告げ、何を言えいいのか、としきりに訊いている。

周囲の者たちは笑いさざめき合い、

「？激昂の大蛇？ともあるう者がそんなに慌ててどうするのですか」「サブライ殿、取り敢えず、姫巫様のもとへお連れした方がよろしいのでは？」

と、言葉を返す。

サブライという名の男は、少女にぎこちなく笑顔を見せた。深い傷をこしらえた男の面に、少女は俯く。

自分が誰なのか、思い出せない。

「では、今からお前を姫巫様のところへお連れする。立てるか？」

氣遣わしげにサブライは少女に手を差し伸べる。少女は、自分に差し伸べられた手をじっと見ていたが、そつと小さな手を重ねた。

サブライと少女は、黙したまま渡り廊を歩いた。サブライは、何度か少女の方を向いて、何事か喋ろうとしていたが、少女は頑なに男を見ようとしなかった。

（私は、誰。ここは、どこ。怖い、怖い）

少女は、下唇を噛みしめて溢れおちそうになる涙を必死に堪える。男と少女は、大きな一室に入った。繋いでいた手をサブライは解

き、片膝をついて頭を垂れる。

少女は笑いもせずに棒のように立っていた。

隣にいたサブライが頭を垂れると怒鳴って初めて、呼吸することを思い出した。

上座にいる美しい女は、優雅な動作で立ち上がる。白粉を叩いた顔は、一片の曇りもなく、唇に引かれた紅は、彼女の真つ黒な長い御髪と対比している。

息を呑む美しさは、少女の胸に宿っていた恐怖を煽った。

「ようやく来てくれた。わたくしはそなたを待っていた」

女は言い、少女の前に腰を落とした。

「わたくしは、姫巫と呼ばれる者。そなたは」

「私は、私は……わかりません。何も、わからない」

少女の目に涙が浮かび、それは頬を伝った。思い出せない、自らの名。そして、過去。

姫巫は、口を弓形に歪めて笑った。真白い歯が垣間見える。

「ああ、可哀想に。何も覚えていないのだね。……そなたは、ヤナギ。ヤナギという」

「私の名は、ヤナギ？」

「ヤナギ……良い名です」

呟く姫巫が、ヤナギには恐ろしくてたまらない。早く場を立ち去りたかった。

「戦場で倒れているところを、サブライが見つけたのです。そなたは、これからこの高天原国の宮殿で、巫となるために修行を積み、拾ってやった恩を返しなさい」

ヤナギは、ただ俯いた。

姫巫は、装束を少しだけ持ち上げ、その場を離れる。彼女はヤナギの右側へ歩を進めた。

「して、サブライ。この娘は？」

姫巫に問われ、ヤナギの左にいたサブライは、床に額を擦り付け、そうな勢いで頭を低くする。

「はつ。先の戦で親を亡くした子らでございます」

「……………そうか。名は？」

「はい、サコと申します。こちらの男児は、ムロと」

ヤナギとは違う、はきはきした声でサコという娘は姫巫に答える。ヤナギは、サコたちが右隣にいることに気がつかなかった。それくらい、彼女たちが気配を消していたのか、ヤナギが混乱し過ぎて気づかなかったかは、定かでない。

サコは雀斑そばかすの浮いた浅黒い肌をしており、挑むような眼差しを姫巫に向けている。サコの横にいるムロは、首を縮ませて事の成り行きを見守っていた。

姫巫は口の端を上げると、腰に手を当てて身を屈めた。サコと姫巫が顔を突き合わす。

「年は？」

「六つにございます」

「よろしい」

姫巫は身を翻して、座椅子に戻った。彼女は扇を開き、緩慢な動作でそれをサブライに向ける。

「中々どうして、肝の据わった娘じゃないか。ヤナギとちょうど同じ年なことだし……………お前、ヤナギの付き童わらわとなるが良い」

たいそう満足げに姫巫は笑んだ。

サブライは、

「ありがたいお言葉、もったいのうございます」

と幾分ほっとした声色で言った。

ヤナギとサコの視線が交錯する。

サコは、慎ましく微笑んだ。その微笑は、恐怖が大半を占めていたヤナギの心に、温かな風を起こしてくれた。

高天原国の巫として離れに暮らし出して数ヶ月過ぎても、失った記憶は、ヤナギを苛み続けた。

毎夜、知らない場所の夢を見る。夢の中で自分は、去って行く背中を泣き叫んで追いかけるのだ。

毎回、あと一歩のところまで、花吹雪が巻き起こり、背中の上に手が届かない。

涙を流して跳ね起きることは、日常茶飯事だった。

ヤナギは、下級巫達が使う共同部屋で寝食しているのだが、他の巫達はヤナギが毎晩うなされているため、『ヤナギが五月蠅くてかないませぬ。部屋を別にして下さいまし』と大巫に嘆願していた。

彼女たちが怒るのも無理もない、とヤナギは思う。

巫修行は骨の折れるものだ。疲れて床に就き、泥のように眠りたい時に、他の者がうなされているがために眠れないのでは、苛立ちもするだろう。

ヤナギは布団の中で丸くなって、睫毛についた滴を弾く。

「ヤナギ様、ヤナギ様」

小さな声がヤナギを呼んだ。はっとして引き戸の方を見やると、そこには松明を手にしたサコが立っていた。

サコは、巫であるヤナギの付き童として身の回りの世話をしてくれている。明るく真面目な彼女とは、ヤナギは気兼ねなく話すことができた。他の者は、どうもヤナギに近付いてくる真意が掴めず、距離を置いてしまう。

ヤナギは、ひしめく巫たちを起こさぬよう注意を払いながら、彼女のもとへ向かった。

「サコ、そなたこんな夜深けに」

「しっ」

サコは人差し指を唇に当て、ヤナギの手を引く。

「ちょっと、夜に抜け出したのが知れたら、大巫様からお叱りを受けるわよ。巫である私よりも、そなたの方が厳しい叱責を」

「わかってます。でも、私……どうしてもヤナギ様に見せたいものがあるんです」

そう言って、サコはヤナギを先導する。いけない、と頭ではわか

っているのに、強く拒否できなかった。サコの目は輝いている。ヤナギの失ってしまった感情が、彼女にはあった。

二人は履物をつっかけ、姫巫の社殿があるという神しん杷山はやまに続く森くちなさいのもり 梶子齋森の入口まで辿り着く。

神聖な森への入口を示す、鳥居をくぐり抜け、サコは橘の木で囲まれた池のそばでようやく足を止めた。

汚れた身を浄化させる作用のある神の池、鏡月池からは薄く湯気が立っている。

「ほらほら、見て！」

肌寒さに身を縮めたヤナギに、サコは手招きする。

「私は見ない。早く離れに戻りましょう」

ヤナギは言ったが、それを無視してサコは池の中を覗き込んでいる。手にした松明が、彼女の嬉々とした表情を照らす。

気になった挙げ句、少しだけならと自分に言い聞かせて、ヤナギは橘の木を掻き分け、池を覗いた。

「わあ」

思わず感嘆の声が出た。

池の面おもてに映っていたのは、満天の星を宿した空だった。真ん中には白く丸い月が浮かんでいる。

風が吹く度、漣立って空は揺れた。しかし、しばらくすると、また夜空を映し出す。

ヤナギは何も言わず、サコの隣にしゃがんで、それを見ていた。

「私、眠れない時これを見に来るんです」

ぽつりとサコが口にした。

「あなたが夢にうなされてるって噂に聞いて。いても立ってもいられなくて」

「それで、ここに連れて来てくれたの？」

「はい。寝所を覗いて見て、ぐっすりお休みになられていたら、そのまま失礼しようと思っていたのですが、ひどくうなされていたか

ら。迷惑は承知でお誘い致しました」

照れたように、サコは頭を掻いた。

「気分転換も必要かな、と」

「サコ……」

自分のことなど、誰も気にかけていないと思っていた。何もわからず、寄る辺のなき場所に一人、放り込まれたと嘆いた。しかし、それは違った。

少なくともサコは、ヤナギのことを案じてくれている。

ヤナギは泣きそうになりながら、微笑んで見せた。

「ありがとう」

サコがヤナギに顔を向け、笑った。飾り気のない、純粹な笑顔。八重歯の覗く彼女の口許は、みずみずしい生命の強さを感じさせる。サコは立ち上がり、空を仰ぐと、両手を広げた。

「月も星も、ヤナギ様が笑ってくれるんなら何でもあげたくなるな

あ

「まあ、サコったら……」

二人は、顔を見合わせて笑い合った。

『 が笑ってくれるなら、月も星も、花も。俺の与えられるものならば全て、与えたいくなる』

心をざわめかせる、誰かの声がする。

「こたびの戦には連れて行きましようね。そなたがたくさんのことを学び、立派な巫になれるように」

あくる日、姫巫に追従することとなったヤナギは、年配の巫たちとともに高天原国の都より少し離れた邑を訪れていた。その集落へ姫巫が出向いた理由は、いたって単純だった。黄昏国の者を匿っているから。

姫巫は苛烈に邑を攻め立てた。事前に、邑へは視察に行くだけ伝えていたらしい。丸腰の相手であるにも関わらず、高天原国が懐刀は容赦なかった。

「ああ……」

ヤナギは目の前で巻き起こる悲劇に、ただただ呆然と佇んでいた。他の巫たちのように術を練ることもできない。炎に炙られて行く邑には、悲鳴と泣き声、怒号が響く。

姫巫は口にした事象を全て具現化させる。彼女は逃げ惑う人々を尻目に、ヤナギへ微笑んだ。

「ごらん、これがわたくしの力。人知を超えし、神力」

ヤナギは燃え盛る炎と逃げ惑う人々をじっと見つめていた。

（姫巫様は、恐ろしくないのだろうか）

散り散りになっていく人の命は、決して甦ることのないものだ。それを彼女はいとも容易く散らして行く。決して、安らかな眠りは訪れないだろう。人の怨念は強いものだ。ヤナギは赤い唇で真象の力を揮う姫巫を案じた。

『嗚呼　　わたくしの後裔』

その時、ヤナギは生温い風を受けて目を瞑った。まるで抱き込むように、風はヤナギを包む。

ふっと、何かがヤナギの中に入り込んでくる。

「だ、誰……。何、これ……」

『まさか、こんなにも無防備にいるとは 愚かしい。しかし、それすら……愛しい』

混乱する。

姿はないのに、声がする。脳内に直接響く霞みがあったその声は、哄笑した。

「海若^{かいじゃく}つ。そなた、何を っ」

慌てたように姫巫がヤナギの手首を掴んで、呪いの詞を口にする。体中が焼け付く。ヤナギは悲鳴を上げた。

姫巫の頬を、尖った風が切る。彼女はそれに怯むことなく詞を続ける。ヤナギの中に入り込んだものは、その詞に動じず、ヤナギの意識を奪おうと牙を剥く。

「ヤナギ様？」

サコには一体何が起こっているのか、わからないようだった。幼い少女は、ヤナギと姫巫の顔を交互に見やり、おろおろしている。

『キヨウカ 。 わたくしに支配権を渡せ』

キヨウカ。その名を聞いた途端、ヤナギの抵抗する力が弱まった。ヤナギの本当の名。

何故、声の主は自分の真名を知っているのだろう。疑問がヤナギの心全てを満たす。

一瞬の隙を、海若は見逃さなかった。

かの神は、ヤナギの体の支配権を取った。

姫巫の手が強い力によって弾かれた。姫巫は月鏡剣を構え、ヤナギの首筋に据える。

ヤナギは口を弓形に歪めた。幼い子供が見せる表情ではない、嘲りの微笑。

『姫巫よ、わらわも少し、遊びたいのじゃ』

ヤナギの口より洩れ出た声は、彼女のものと違った。

姫巫の瞳に怒りが浮かぶ。

「馬鹿な……っ。まだ、その幼子はそなたの器として選ばれておらぬっ」

『この者は申し子。そちも知っているだろう。生まれながらにして、わらわの器として選ばれた娘じゃ。兄の方は逃がしたが……この娘だけは決して逃がしはせぬぞ』

言い終え、ヤナギの体を借りた海若は人差し指で民家を差す。すると、民家が跡形もなく消失した。

姫巫もサコも、絶句した。

後方に控えている巫たちは、それを姫巫がやったと勘違いしているらしく、拍手が巻き起こる。

ヤナギは笑みを深くした。

『おお、姫巫や。そちに力を貸している時よりも強靱な力を操れる。やはり、申し子とは稀有な存在じゃ。……む』

ぴくりとヤナギは耳をそば立てる。そして、ゆったりとした動作で邑の中を歩き出した。慌てた様子で姫巫とサコもその後が続いた。火柱の向こう側に、一人の少年が立っていた。整った面差しをした少年は、自分の邑が燃えている様子を脱力した顔で眺めている。ヤナギは、少年に向かって手を伸ばす。

少年の耳が切り落とされる。彼は、その場に膝をつき、耳を押さえる。ヤナギは、にんまりと嗤った。

ヤナギの唇が動く。熱い風が周囲に吹き荒れる。ごろり、と少年の目玉が彼の掌に転げ落ちた。

少年は、思考が止まったような眼差しで、ヤナギを見た。猛る炎が、ヤナギと少年を遮った。

「海若！ そなた……遊びが過ぎるぞ！」

あまりに凄惨過ぎるその行為に、姫巫は止めに入る。

「わたくしに戻れ」と姫巫は言う。

海若の体が傾ぐ。神は胸を押さえて荒い呼吸を繰り返し、姫巫を睨んだ。

『どうやら、まだこの娘はわらわを受け入れる力が備わっていないらしい……。良い、時を待って……。再び、わらわは申し子を貰い受けようぞ』

ヤナギの体力が限界に達した。熱い空気がヤナギから抜け出し、姫巫の中へ宿る。

姫巫は、自らの手を握りしめ、緩める。

どさつという音とともに、サコは地面に腰を打ちつけた。魚さながら、口を開いたり閉じたりしている。腰を抜かしたのだ。

「……………サコ、このことに関して全てを秘めることができるか」

「……………はい」

唾を呑み込んで、サコは頷いた。

姫巫は海若の力によつて、より悲惨さを増した邑を見回し、苦笑を洩らす。

「場所を移そうか」

そう言つて、姫巫は腰を抜かしたサコの手を取り、颯爽とその場を立ち去つた。

天幕内には、姫巫とサコの二人しかいない。姫巫が人払いをかけたためだ。意識を喪つたままのヤナギは、別の天幕で眠っている。彼女は、夜毎悲鳴を上げる。

「サコ、そなたはたしか、ヤナギの付き童をしていたね」

「ええ」

「たいそう、ヤナギと仲が良いとか」

「は、はい。ヤナギ様はとても優しい方です。だから、私は、あの方になつとお仕えしたいと思つております」

頬を紅潮させ、サコは言つた。その顔に、言葉に、嘘は一切なかった。

「ならば、頼みがある」と姫巫の瞳が真剣さを帯びる。

「……………人柱となつてくれないか」

突然の頼みに、サコの動きが止まる。

姫巫は視線を落とした。

「先程、海若 ヤナギに乗り移ったものが言っていたのを覚えて
いるか。時を待つ、と。かの神は、ヤナギの肉体が強くなり、自分
を受け入れることのできる時節が来たら、必ず、ヤナギの体を器に
し、自分の意のままに操る気だ」

「そんなこと、できるわけが」

できるわけがない、と言い切れなかった。サコは見てしまった。
ヤナギの中に滑り込んだ何かは、ヤナギの意識を退けて民家を塵と
化し、少年の耳と目を抉って見せた。背筋に寒気が走る。

「海若の思惑どおりにしてしまうと、全ての国は滅びてしまうだろ
う。それはとても不味いことだ。……何、人柱となると言っても、
そなたが死ぬわけではない。ただ、いつもヤナギのことを守る意思
を持っていればいいだけ」

「意思？」

ああ、と姫巫は天幕の天井を見やる。

「あいにく、わたくしは常にヤナギのことを念頭に置いて行動はで
きないのでね。そなたに頼みたい」

サコは戸惑い気味に視線を彷徨わせ、小さく頷く。姫巫は目を細
めた。

「ありがとう。……しかし、もしもそなたが、わたくしとの約束を
破り、意思を弱めたりしてヤナギが海若に乗っ取られるようなこと
があれば どうなるか、わかるね」

怜悯な姫巫の眼差しを受けてサコは肩を震わせたが、気丈にも「
はい」と齒切れよく返事をした。

姫巫は膝を打って腰を上げた。

「それでは、わたくしはヤナギの記憶を塗り替えてくる。……決し
て、今日のことはヤナギにも言わぬように。この戦場に來た記憶か
ら抹消するから」

「かしこまりました」

サコは平伏した。

ヤナギは声をなくし、口許を両手で覆った。

「そんな……サコが……」

拯溟の花は揺らめき、何もない空間に舞う。一人だったヤナギの前に影ができる。それは人型となり、幼い少女の姿となった。彼女は何も言わずにヤナギを抱きしめた。

ヤナギは少女をきつく抱きしめた。涙が溢れる。

「サコ……そなたは、ずっと、私を……」

サコはずっと　そう、死んでもなおヤナギを守っていたのだ。

彼女にヤナギを守る意思がある限り、ヤナギは海若に支配されない。そして、ヤサカニの耳目を奪ったのはヤナギだった。全ての真実は刃となってヤナギの心に深く突き刺さる。

場の空気が歪む。サコは、ヤナギから身を離れた。ヤナギとサコの前に、先代姫巫が姿を見せる。

『わたくしは後悔なぞしておらぬ』

姫巫は、死の目前に見せた老婆の姿でなく、若々しい娘の姿をしていた。彼女は絹のように滑らかな黒髪を肩に零し、強い意志の射した双眸をヤナギへ向ける。

『そなたを姫巫に据えたことにも、危険だとわかっていながら海若という神に力を貸していたことも。そうしなければ、いけなかった。何故だか、そなたは知っているはず』

「……高天原国が、本来なら既に滅びた国だから」

ヤナギの言に、姫巫は目を伏せた。ヤナギは、拳を握りしめ、なおも言い募る。

「神に縋らなければ、この国は均衡を崩し、滅びてしまうからよつ。本当は、蜘蛛の廻廊だって亜空間にある高天原国と、地上の国々を繋ぐ一種の黄泉路……。姫巫様、もう止めましょう。こんな愚か

な 縋るような生き方は……」

ヤナギは俯き、齒を食い縛った。目の奥が熱く、今にも涙が零れ落ちそうだ。憎悪と怨念と、妄執。負の感情がヤナギを取り巻く。

「高天原国は、死国。ふふっ、そうかもしれない。だが、守れ。ヤナギ、そなたにはわかるはずだ。どれだけわたくしたち、歴代の姫巫がこの国を愛し」

「愛してなんかない」

姫巫の言葉をヤナギは遮った。

「先代や、先々代が愛していたのは、自分たちを守ってくれる、力を与えて他国を圧倒してくれる神 海若。この高天原国を愛していたのではない！」

「ヤナギ……そなた……」

怒鳴るヤナギを、姫巫もサコも呆然と見ていた。

「嘔吐き」

ヤナギは姫巫を潤んだ瞳で睨みつけた。

「皆、嘔吐きだ」

瞬間、サコが怯んだ。ヤナギの憎悪や悲哀に圧されたのだろう。守りが緩んだ。

姫巫はサコに手を伸ばす。

「いけない！ サコ、手を緩めるな！」

姫巫の叫びは一足遅かった。

場の空気が歪み、ぴしりと音がすると同時に熱い風が吹き込み、暗い海が流れ込んでくる。数多の白き手がヤナギを深海へ誘う。ヤナギの内側へ、海若が滑り込んだ。

四・

甲高い金属音が響いた。

ヤサカ二とカガミの剣がぶつかり合い、その度に高い音を立てて鳴る。

大剣を操るカガミと、二つの中剣を操るヤサカ二とは根本的に特性が違う。ヤサカ二は小回りが利く点でカガミに勝っているが、一太刀の重さはカガミが勝っている。

ヤサカ二は二本の得物を構え、腰を落とす。

体中が悲痛な叫びを上げていた。こめかみより流れ出でる血は止まる気配もない。段々、体温が冷えてくる。

「貴方がヤナギ様の兄……？ 御冗談を」

カガミは何も答えない。

ヤサカ二は倒れるわけにはいかなかった。

ちら、と後ろへ目を配る。カガミに斬られた御簾の脇に、一人の少女が倒れ込んでいる。少女 ヤナギをカガミへ渡すわけにはいかない。ヤサカ二は彼女のことを絶対に守ると決めたのだ。

たとえ、かつての主に叛こうとも。

血潮が熱く滾る感覚は、ただ憎しみに駆られて生きてきたヤサカ二にとって初めての経験だった。

誰かを守るために自分は剣を持っている。そう思えば、不思議とカガミに対して臆する気持ちは霧散する。

ヤサカ二は長い間、カガミと戦場をともしにしていたため、カガミの実力が並大抵のものでないことは十分理解している。

だからといって、ヤサカ二が彼に剣で劣るかと言えばそうでもない。カガミの剣の師は、ヤサカ二の父なのだ。父の剣筋のくせとカガミのくせは良く似ている。打ち込んできたあと、半歩下がって鋭く薙ぐ。そのくせは今も健在だった。

しかし、くせが分かっていると言っても、怪我を負ったヤサカ二

は分が悪い。

カガミの剣捌きは澁みなくヤサカニを追い詰めて行く。

戦場でルイの毒針にやられた左腕がじくじくと痛む。それでも、ヤサカニは苦悶の表情などおくびにも出さず戦っていた。

一方的な戦いになっていないのは、一重にカガミが生身の人間であつたからだ。

ヤサカニは戦場で見たム口の異様とも言える雰囲気を使い出し、身震いする。

何者も近寄ることを許さない空気を纏つた少年が手をかざすと、途端に稲光が高天原国軍へと落ちた。木造の家屋に雷が落ちたことで火の手が上がり、それは生きているかの如くヤサカニたちを包んだ。

前線にいた者で命があるのは、ヤサカニを含めてほんの数人だつた。

せめて、宮だけは守らねばと思つて奮戦したが、圧倒的な力の前に、人間であるヤサカニたちは無力だつた。

ム口が神の力を使っているのは間違ひなかつた。

幼い頃、ヤサカニにあつた力と少しだけ空気が似ていた。最も、自分にあつた力は非常に微々たるものであつたが。

ヤサカニは、ひゅつと息を吸い込んでカガミに突撃した。

カガミはそれを難なく流す。黄昏国の王子は、容赦なく剣をふるう。その様は鬼神のようだつた。

疲労や怪我があつたせいで負けた、というのは言い訳にもならない。

ヤサカニは双剣で一閃を受け止め、後ろへ飛んだ。

焰が轟音を上げて二人のいる部屋の前まで迫っている。早く片をつけなければ、ヤサカニもカガミも、そしてヤナギも死んでしまう。一瞬の油断も見せないカガミの態度を崩すためには何が一番有効か、ヤサカニは血の気が引いていく頭で必死に思索した。

そんなヤサカニをカガミは酷く冷淡な眼差しで見つめる。

「お前の目と耳をもいだのは、キョウカだ。それでも、庇うのか」
ヤサカニは迷いなく頷く。

「俺は最初から、彼女がそうだと知っていました。今更、何を躊躇うことがありましようか」

刹那、カガミの双眸が揺らいだ。

ヤサカニは、ヤナギが自分の左目と左耳を持って行った者だろうと何だろうと構わなかった。

憎悪と愛情は常に紙一重だ。

深い絶望を舐めたのはヤサカニだけではない。同じように、ヤナギも孤独とともに生きていた。

そんな彼女を救いたい。それしか頭にはなかった。

以前のヤサカニが今の自分を見たら、一笑にふしただろう。

娘一人に自国を裏切るなど馬鹿な男だ、と。

ヤサカニは挑むようにカガミを睨みつけ、剣を構え直す。死ぬ気でかからなければカガミに隙は生まれない。

ヤナギ様をこの王宮から逃がすまで命があればいい。

空の左目が熱い。何かが込み上げてくる。哀しく猛る感情の渦。

もう二度と戻れない、カガミや仲間と声を上げて笑い合った日々が脳裏に浮かんでは消える。

カガミは自嘲するように笑った。

「ヤサカニ、俺はお前が心底羨ましい。それ故……」

一旦、言葉を切ってカガミは全身から殺気を放出させた。

「疎ましい」

カガミは床を思い切り蹴ってヤサカニに斬りかかってきた。大剣を振り上げた時、一瞬上半身が無防備になる。その隙をヤサカニは見逃さなかった。決死の覚悟で懷に飛び込み、心臓を狙う。カガミは舌打ちして身を翻し、間合いを取った。

ヤサカニの穴目の奥に宿った熱が暴れ出す。少しだけ目がくらんだ。

「もうじき、この宮は墜ちるぞ。生き延びたいのならば、ヤナギを

俺に渡せ」

「断る」

にべもなくヤサカニはカガミの言を一刀両断した。

「ヤナギを……俺の妹を返せ！」

カガミの目に危険な色が浮かぶ。

隠し部屋全体が蒸し風呂のように温度が上昇していく。

炎は轟音を上げて目前に迫り来ていた。

五・

一向に引く気配を見せないヤサカニと斬り結びながら、カガミは齒軋りした。

ヤナギがお前の耳目を奪ったのだ、と言えばヤサカニが簡単に迷いを見せるだろうと踏んでいたカガミは、予想外のヤサカニの行動に内心肝を冷やした。

ここまで強い口調でヤサカニがカガミを拒絶したことなどなかった。

いつも、軍議の折や命令の決定などの意見が食い違った時も、彼は『しょうがないですね、カガミ様は』と苦笑しながらも譲ってくれていた。

そのヤサカニが、カガミの前に立ちはだかっている。

まさか、と思った。

ムロたちやカガミとは違う方面から高天原国へ侵入したバシヨウが、涙で顔を濡らしながら語ったことは、到底カガミに受け入れられることではなかった。

『ヤサカニ様が前線で高天原国軍を率いて采配を揮っている』

そうバシヨウから伝達を受けた時、カガミは声をなくした。

甘かったと言われればそれまでのことだが、心のどこかで彼は決して黄昏国を裏切ったりしないと考えていた。最後はきつと黄昏国軍へ帰ってくると、信じていたのだ。

わずかな希望は潰え、失望の中、カガミは剣を揮ってここまで辿り着いた。

悲願であつた高天原国殲滅の刻限は近い。

ムロは都の外で地祇の力を借りて自然を操っている。いくら、高天原国が海若に守られていると言っても、現に人の器に乗り移っていない海若よりも地祇の力を借りたムロの方に分がある。

ヤサカニの白刃が煌めき、カガミに鋭い一閃を与える。

ゆがけの紐が取れた。カガミはそれを素早く拾うと、部屋のすみに体を寄せる。

じりじりと、警戒色を宿した黒髪の青年はカガミを追い込む。

カガミの剣の師をしていた者の子供でもあるヤサカニに、一瞬でも隙を見せるのは命取りだ。

軍師だと言っても、彼はれっきとした剣士として育て上げられている。ただ、常人より軍の采配が巧みだったために軍師となったに過ぎない。

ヤサカニと初めて会った時から、カガミはこの三つ年下の青年に信を置いていた。いつ何時も、冷静さを見失わずに彼は正道を行く。彼はいつもカガミの影となり、付き従ってくれていた。それをどれだけ頼もしいと思っていたか、感謝の念を常に感じていたか、もうヤサカニには伝えられない。

地祇が海若に護られた高天原国の都に雷を落とす。遠く響く雷鳴が、この国の終焉を示している。

「……ヤサカニ、戻れ」

これが最後の誘いだと思い、カガミはヤサカニの双剣を受け止めて呟いた。

「もう、無理ですよ。黄昏国が王子」

悲しげにヤサカニは目を細めた。眼帯をしていない彼の剥き出しになった左眼孔の奥にある暗闇が、赤く蠢いて見える。

カガミは思わず不快感を露わに剣を弾き返した。

ヤサカニは不規則な呼吸を繰り返している。手を合わせてすぐに気がついたが、彼の左腕はほとんど機能していない。

どす黒い血が滴り落ちているところを見る限り、戦闘中に矢でも穿たれたのだろう。これ幸いとカガミは目を光らせる。

弱点を突けば、人間は誰しもそれを庇おうとする。そこで一気に片をつけてしまえばいい。

冷酷に、迷いなく結論を出したカガミは執拗にヤサカニの左腕を

狙う。案の定、彼は左腕を庇うために体を引く。

カガミの目はヤサカ二の首筋に向いていた。

せめて一瞬で終わらせることが、元主であるカガミにできる精一杯の情けだ。動脈を一薙ぎすれば、安穩とした死がヤサカ二へ舞い降りる。

「終わりだっ」

大剣を思い切り横へ払う。ヤサカ二の体がふっと消えた。

カガミは足の脛に激痛が走るのを感じる。思わず苦痛の声を洩らすと、床に寝転がった隻眼の青年と目が合った。その口許には薄っすらと微笑が浮かんでいる。

眼帯の氷獅子^{こおりじし}。その名に相応しい、冷静な判断力。

獅子は決して逃げない。不利だと知りながら楽に死のうなどと考えない。

ヤサカ二は己の体から力を抜くことで、カガミの渾身の一撃を避けたのだ。

力を抜く。それは常であれば戦の上で最もしてはならないことである。しかし、先程の状況下では一番正しい判断だった。床に倒れ込むことでカガミの剣から逃れたのだから。

カガミは怒りに身を戦慄^{わなな}かせた。

ともに戦場を駆けていた頃は気がつかなかった。この青年が、ここまで自らと対等に渡り合えるということ。

いつも、訓練の合間や遊び半分で手合わせする時、ヤサカ二は勝ちに行こうとしていなかった。

今思えば、カガミの剣がもつと磨かれるようにと心を砕いてくれていたのだろう。彼と手合わせする度にカガミは新たな剣法を学べたし、太刀筋も整っていった。

カガミの大剣が宙を舞った。乾いた音とともに剣がヤサカ二の後ろ側へ滑って行く。

ヤサカ二は無表情でカガミの前に立ち塞がる。だらりと下げた左腕が痛々しい。彼はこめかみから溢れる血を拭いもせず右手に握

った中剣をカガミへ突きつける。

（俺は、こいつに負けるのか）

生まれて初めて、カガミは心から負けたくないという思いに駆られた。

両手を握りしめ、爪を掌に食い込ませる。強い力に皮膚が破けて血が滴る。

何とか状況を打破できないか考えていると、ヤサカニの殺気が緩んだ。カガミはいきなりのヤサカニの変化を怪訝に思いながらも、好機だとばかりに前転して己の剣を手に取った。柄の部分についた玉が揺れる。

屈辱を果たさんとカガミは大剣を振り上げるが、呆然と一点を見据えるヤサカニを不審に感じ、その方向を見た。そして、カガミもまたヤサカニと同じように目を丸くする。

けたけたと、手を叩いてヤナギが笑っていた。幼子のように明るい笑顔。紅を引いた唇だけが彼女を大人びて見せる。きやらきやらと口許に手を当てて、腹を擦ってヤナギは笑い続ける。

緊縛した雰囲気の中、よろよるとヤナギが立ち上がる。

カガミはじつとヤナギを見つめる。

カガミもヤサカニも、彼女の雰囲気がいつもと違うことに気付いていた。

何か禍々しい。

カガミはヤナギの異常な行動と顔つきに思い当たるふしがあり、舌打ちする。

神降ろしだ。ヤナギの行動や笑い声は、遠い昔聞いた海若のものと非常に酷似していた。あの時の記憶を、カガミは忘れることなどできなかった。身の毛も弥立つ、恐怖と怒り。神々を呪い、初めて自らが傀儡でなくなったあの日。

しかし、まさかヤナギが神降ろしをするとは思わなかった。いや、海若が無理矢理ヤナギの中へと滑り込んだのだろっ。

「……ハルセ、兄上……」

ヤナギはカガミを見つめて、滂沱^{ほうた}の涙を流した。

カガミの心が波打つ。純粹な涙を零す娘は、ヤナギの顔をしている。カガミは向けたくもない剣をヤナギへ向ける。彼女の目に喪失が浮かんた。兄とわかった青年から刃を向けられた悲運の少女。そうとは思えない青ざめた顔をしたヤナギは、俯く。

ヤサカニは、カガミの前に立ちほだかる。彼はヤナギを守る気なのだ。

きっと、神に操られているのを気がついていない。

ヤナギの顔つきが変わる。いたいけな少女のものから、魔性の女の顔へ変化する様は、見ていて背筋が凍る。

八章 渺茫へびょうぼうの大地

涙はもう枯れた。

カガミは、己の目の前にいる者たちを見据えた。

ともに苦難の道を歩む覚悟を誓い合った隻眼の従者は、カガミに對して双剣を構えている。

全てを思い出した最愛の妹は、従者の後ろで虚ろな目をしている。

「……殺させません」

「ヤサカニ」

名を呼べば、従者の肩がびくりと震えた。

カガミは自分の声が酷く冷えているのに気付きながらも言葉を続けた。

「姫巫は、いてはいけない」

ヤサカニは、カガミの発言に果敢にも立ち向かってきた。

「わかっています、わかっていますとも」

意外なヤサカニの返答にカガミは心底驚いた。ヤサカニはきつくまなじり 眦を上げて叫んだ。

「そんなこと、貴方に言われなくともわかっている！　だが、畏まりましたと言えるほど、俺は出来た人間ではありません！」

ヤサカニの頬に一筋の涙が走る。

カガミの構えが一瞬解ける。

隻眼の従者は震える声で言った。

「俺は、姫巫を愛してしまった」

炎が空高く舞い上がった。

「だから、貴方を殺します」

そう決然と言いつ放った彼は、カガミが今まで見てきた誰よりも覇気を宿していた。

火の手が幾分か緩む。

ヤナギが目を開けた瞬間、まるで外部から部屋一面が切り離されたような不安定さを、ヤサカニは感じた。熱風が髪を煽っていたはずなのに、今はぎんやりとした冷気が垂れ込めている。

（とにかく、ヤナギ様をお守りしなければ）

従順にヤサカニはヤナギを背に庇い、殺気の籠もった目をした力ガミの前に勇み立つ。

力ガミの瞳孔はヤナギへ向いている。ヤサカニは双剣を握り直し、床を蹴った。はっとして力ガミはヤサカニの刃を受け止める。余裕の感じられない力ガミの守りに転じた剣はとても脆い。ヤサカニは力を込めた。力ガミの顔が歪む。

力ガミは舌打ちして横へずれた。

金属音が何度もぶつかり合う。ぎりぎりと身を絞るような音を立てて二人の剣は交叉する。

「キョウカ……！ 意識をしっかり持て！」

力ガミは打ち合いながらも、必死にヤナギを正気に戻そうとする。ヤサカニはヤナギを垣間見た。

自らの兄である力ガミの言葉も届いていないのか、ヤナギの目は虚ろなままだ。

何かが 神が彼女に乗り移ったのかもしれない。有り得る話だ。姫巫という戦女神を加護している神ならば、ヒト一人の体に乗っ取ることなど容易いだろう。しかし、それを案じてヤナギへ駆け寄ることはできない。力ガミからヤナギを守ることが先決である。

力ガミは、ヤナギを殺す気だ。間違いない。ヤサカニは、かつて力ガミが仲間をも見捨てようとしていたことを思い浮かべ、唾を嚥下した。目的達成のためには、小さな犠牲を厭わない。そのことを

彼に教え込んだのは、戦死するまで筆頭軍師を務め上げたヤサカ二の父親だった。

ヤサカ二は、よく思想の相違から父親と口論した。ヤサカ二は小さな犠牲を払えば、のちのちそれが大きな火種になると思っていたし、その考えを曲げるつもりは毛頭なかった。

王位に値しない人間だからこそ、そのような言を吐けるのだと激昂した父親の厳格な形相を思い出し、ヤサカ二は父と、眼前にいるカガミとを重ねた。

今なら、少しだけ理解できる。自分の命がなくなってしまうたら、どうしようもないのだ。命の重みは皆一緒だと識者たちは説くが、それは違う。カガミとヤサカ二の命の重みは、違う。カガミの代わりとなれる者は決して存在しないのだ。生まれ落ちた時より王となるべく定められた者。その者に誰がなり代われようか。地上の国々から戦に臨んでいる者たちは、誰しもカガミの名を口にする。

死ぬわけにはいかないのだ。カガミの命は、もう既に彼自身だけのものではない。何百……いや、何千の人のものでもある。

高天原国が姫巫を何より大切に扱っているのと同じだ。地下の国々の者たちも、国ではなく、カガミ自身を寄る辺にしている。

妹であるヤナギとて、小さき犠牲の一つだろう。胸の底では深く悲しむだろうが、カガミは迷わない。きっと、ヤサカ二が引けばすぐにでもヤナギを殺す。

ヤナギが何の力も持っていない少女だったら、事態は変化したに違いない。いたいけな身よりなき少女であれば、カガミは黄昏国へ連れ帰り、大切に慈しみ妹姫をかわいがったろう。ヤサカ二はカガミが高天原国に潜伏していた頃、彼が時折見せるヤナギに対する言動や行動がとても優しくかったことを覚えている。珍しいこともあるものだとは傍観していたが、まさか血を分けた兄妹だとは思ひもなかった。

カガミは、ヤナギのことをとても大切に思っているのは確かだ。しかし、それを差し引いても高天原国が懐刀である姫巫に沙汰を下

さないのは今後、黄昏国を復興するに当たって障害になるのは必至である。姫巫がいれば、この戦は終息しない。

のちに、牙を剥くかもしれない火種を残す危険を孕む者の生存を、カガミが許すわけがなかった。

高い鈴の音に似た音がぶつかり合う。ヤサカニは髪を振り乱しながら、目と鼻の先にいるカガミを睨んだ。

「ヤナギ様は、殺させませんっ」

「お前、まだ言うか！」

怒号を上げ、怒りに満ち満ちた顔でカガミは猛攻を仕かけてくる。どこにそれほどまでの力を温存していたのか疑問に思っくらい、彼は鮮やかにヤサカニを壁へ追いやる。溢れんばかりにふくらんだ気迫が、ヤサカニを劣勢へと押す。

そのまま壁を突き破らんばかりに渾身の力を込めた一撃を何とか受け止めた。手が痺れる。ヤサカニの右手から中剣が零れ落ちる。カガミは激しく打ち込んでくる。何とかもう一方の中剣で白刃を受け止めたが、もともと強度のある剣ではない。どちらかと言えば、ヤサカニの持つ技巧を生かせる造りをした剣なのだ。カガミの相次ぐ強打にずっと耐えきれないわけがない。

鉄で鍛えた剣であれば問題なかったのだが、鉄剣は高価過ぎてヤサカニにはとても手が届く代物ではなかった。

ヤサカニは右手を刀身に添えて、カガミの攻撃をじつと耐える。きつと、この銅剣に亀裂が入った時が唯一の形勢逆転の機会だ。

カガミはその時、己の勝利を確信して少しだけ隙を作るはず。もし、機会を逃す　もしくは機会自体訪れなかった場合、確実にヤサカニは死ぬ。

ヤサカニは、どうにかしてヤナギだけでも逃がせないかと様々な筋書きを脳内で構築する。

（力が欲しい。ヤナギ様を守るだけの力が）

ヤサカニは切に思った。

自分は無力だ。

手負いの自分ではヤナギを守り通せない。かと言って、自分以外がカガミに相對せるかと言われれば、答えは否だ。

ヤサカニは齒軋りする。ぽっかり穴の空いた左眼孔が熱い。思わず掻き篋りたくなる。

（どんな代償も厭わない。楊様をお守りすることができるならば）
願いにも似た強い想いがヤサカニの全身に脈打つ。

それと同時に、閃光がヤサカニを包んだ。あまりの眩しさにヤサカニもカガミも目を瞑る。

『 良いだろう青草よ。ひとときのみに、我はそちに少しだけ力を貸そうぞ』

重々しく低い声がヤサカニの右耳に囁いた。それは偉大な父の如く、何事にも動じない安心感を覚える声だった。

左目に異物感が走る。鋭く走った痛みにヤサカニは片膝をつく。

ヤサカニは恐る恐る左目に手をやって、当惑した。いつもなら平らかな感触であるはずの左眼孔に、目玉がある。目を開けば、いつもに比べて格段に視野が広い。

閃光が収まり、目を開けたカガミもヤサカニの様子を見て驚愕の表情を象る。飛び上がらんばかりに驚いただるうに、彼はすぐに自分を取り戻して剣を構え直し、ヤサカニへ剣を向けた。不思議なことに、ヤサカニは彼の攻撃を難なく交わすことができる。

視えるのだ。幼い頃に見ていたのと同じ光景が。小さき神々の姿が視える。そして、瞬きする度、映り込むのは一瞬先に起こる未来の光景。

カガミの取ろうとしている行動全てが、ヤサカニには手に取るように読めた。

（勝機が見えた……っ）

唇を白くなるまで強く噛みしめるカガミを前にして、ヤサカニの両目に希望の光が宿った。

カガミは半ば茫然としてヤサカニの変貌を見ていた。

舞い降りた白き光は火柱のようにヤサカニを包み、数刻経って跡形もなく消失した。

眩さに目を開けていられず、強く瞼を閉ざしている間に何が起ったかはわからないが、ヤサカニから発せられる神々しい空気にカガミは息を呑む。

神降ろしが、カガミの眼前で二度も行なわれた。

その事実には歯噛みする。

ヤナギは自我を海若に奪われており、ぼんやりと虚空を見つめている。海若は依坐よりましを傀儡とすることを望んだのだ。対してヤサカニは、完全に自らの意思があつた。ヤサカニに力を貸した神は氣まぐれに彼の意思を尊重したのだ。彼の場合、完全な神降ろしとは言い難い。ムロが神降ろしをする様を近くで見ていたカガミには、その微細な違いを察することができる。ヤサカニに宿つた力は不完全なものだ。ヤサカニががむしやらに打ち据えてくるところを見るに、姫巫やムロがして見せたような自然事象を操るといふ芸当はできないようだった。

カガミはヤサカニの切れ味のある攻めに苦心した。銅剣のはずであるヤサカニの剣が、鉄剣を圧倒する。腕力から違つた。しかも、手負いとは思えない俊敏さをヤサカニは手に入れていた。不完全とは言つても、まさしく神の力。いくら剣の腕が立とうが、常人であるカガミにヤサカニと同等に渡り合うことはできない。

『……力を貸そうか』

頭の中に声が入り込んでくる。

地祇ぢぎの声だと瞬時にわかつた。カガミは答えない。目前に迫るヤサカニと刃を合わせながら、自分の考えを先読みしてくる彼に対抗するためにどんな手段を使おうか、と思索していた。

いつそ、左手を切らせて意識を朦朧とさせて、自分でも何も考えずに行動を起こしてみようか、とカガミらしくもない無謀な策が浮かぶ。

『高天原国の都は完全にそちらの手中に墜ちた。我がムロからそこに身を動かしても、劣勢になることはなかるう』

なおも地祇はカガミに語りかけてくる。

カガミは、神降ろしだけは行ないたくなかった。幼い頃の出来事が、神を拒む。だが。

ヤサカニの左目は瞬きもせず、絶えずカガミ凝視している。昔、ヤサカニは全てを見通す左目と神々の声を聞くことができる左耳を持っていたと彼の父から聞いたことがある。

今、ヤサカニに宿った神の力は左目に凝固しているのだろう。黒曜石のように艶めいた左目が、一国の王子として厳しく恐れを感じぬよう育てられたカガミでさえも足を竦ませた。

善灯村を訪れた折、サブライに言われたことが脳裏にひらめく。

神降ろしを行使しろ。さすれば、老いを代償にして神の力が手に入る。

カガミは神の力を得たことで不幸になった者たちに、思いを馳せた。ヤナギ、姫巫、そして、己の実弟・ムロ。彼らはもう自然な形で死を享受できない。神の力が宿った武器によって死するほか、方法はない。

一瞬逡巡したが、カガミは口を一文字に引き結び、声に出さず地祇に答えた。

（力を）

床が軋み、大地が意思を持ったように唸る。ヤサカニの剣舞が止まった。地祇の気配を感じているのだ。

カガミはふと笑みを洩らした。ここに、三神が集おうとしている。古代史に書かれた神々の戦。彼らはそれぞれの領域を侵したがい。神と神とのぶつかり合いは、全てを無に帰するほど壮絶な戦いとなる。

今、ヤサカニに手を貸している神が何なのかカガミには皆目見当がつかないが、地祇や海若でないことは確かだ。しかし、辺境の地に住まう小さき神々のような力なき神ではないだろう。既に海若がいるにも関わらず場に姿を現し、力を貸すということは力ある神でないといけない。それも、海若と同等か、それ以上に力を持つ神でなければ。

その神の力を借りたヤサカニと戦うのだ。カガミは己の死を覚悟する。

稲穂の擦れ合う匂いが鼻孔をくすぐった。

金色の淡い光彩がカガミの中へ飛び込んでくる。手足が震えた。

カガミは自身の意思とは関係なく、胸元を押さえて背を丸め、声を上げた。

大地が咆哮を上げる。

神々の戦は始まった。

雷鳴が轟き、大地が揺れた。

ム口は、頭できつく縛った長い黒髪をはためかせて宮を振り返った。

貧困街にある丘上にいたム口は嫌な空気を感じて顔をしかめる。自分の体内から地祇の力が抜け出て行く。かの力が宮内へ向かったのを感じた。地祇の力は完璧にム口からカガミへ身を移した。ム口は親指を噛み、ヤナギがいると思われる宮殿を、苦しげに見据える。

地祇がカガミに力を貸す理由はただ一つ。申し子であるカガミが窮地に陥っているからだ。ム口は高天原国軍と戦っている最中に感じた不穏な気配が宮に集中しているのを感じる。地祇以外にも、地表に降りた神がいるのだらう。

ム口は高天原国を捨てた己にヤナギを案じる資格はないと思いつつも、瞑目し、ヤナギの無事を祈った。

「ムロ指揮官、捕縛した高天原国軍の奴らの処遇、どうする？」

後ろから声がかかる。凜とした女の声が、ムロをヤナギへの想いから戦の現実へと引き戻した。黄昏国から先陣を切って進んできたムロの部隊が、強行軍であつたにも関わらず、誰一人としてくじけずここまでこれたのは、この女。副指揮官を務めるルイのおかげだった。彼女は自らの疲労や不安を押し潰して皆を励ましてくれた。ルイの笑顔は太陽のように暖かく、見ているだけで元気が出ると誰もが口を揃えて言う。

神の力を揮うムロは、慣れない自らの力に戸惑いつつ戦場を駆けて兵たちへ激を飛ばしていた。時に、眩みそうになる意識を必死に覚醒させて死ぬような思いで都を陥落させた。宮内にいる台王や王子、ヤナギたち巫のことは力ガミに任せた。もとより、その手筈でこの国へ乗り込んだのだ。

高天原国の最期を飾るは、？神の腕？

ムロは、高天原国軍と相対した時の彼らの顔を思い出した。苦渋が胸を満たす。誰もが、ムロに剣を向けて裏切り者と罵倒した。中には、西門軍の者の中には、ムロを前にしてがっくりと腰を砕き、自らの首を差し出す者もいた。

ムロが捨てたのは、高天原国武官長という軍の中でも抜きん出た地位だけではない。自らを主と慕った者たちをも捨てたのだと思う知る。

「……指揮官」

苛立たしげな口調でルイが再度呼びかけてくる。

「処遇は力ガミに決断してもらう。逃亡したり、自害しないようにしっかり縛って見張りを置いておけ」

そう答えると、ルイは心得たとばかりに頷き、捕虜のいる方へ駆けて行った。

「いいか、力ガミが戻ってくるまでに一般人は保護して蜘蛛の廻廊へ連れて行け。我らに牙を向けてこようと、決して傷つけるな。傷つけた者は、それと同じ傷を俺が与える。敵兵もできる限り捕虜に

しろ」

「はっ」

ムロはヤナギを助け出したい想いを抑え込み、近場にいた兵たちに指令を送る。ここでヤナギを守るために身を翻すわけにはいかなかった。

ヤナギの願いを叶えるためには、高天原国を滅亡させるしかない。カガミたちを助け出した、あの火事の時、彼女はムロに言った。

救って。神などいらないの。姫巫の呪から私を解放して、と何度も何度も、私は願ってきた。

彼女は、絶えぬ戦いを心より憂いていた。自らが姫巫という立場にいることを厭うていた。彼女は、望んでいた。姫巫がいなくなることを、切に望んでいた。

あの時、ヤナギの心の声を聞いたのは自分だけだ。彼女の願いを聞き届けることが、ヤナギを守ることになるとムロは自らを慰める。（ヤナギ様、高天原国さえ滅亡すれば姫巫は存在意義をなくすはず。あなたの願いは、叶います）

ムロはヤナギの存命を望んでいた。しかし、それを敢えてカガミに伝えはしなかった。決断を下すのはムロではなく、カガミ。たとえば、ムロが黄昏国の第二王子だとしても、正当な王位継承者であるカガミに個人的な意見など述べることはできない。

ヤナギの微笑が瞼の裏に映り込む。柄にもなく、動揺した。

感傷に浸るムロの横に、ルイが並んだ。捕虜の対処を他の兵たち指示し、ムロのもとへ戻ってきたのだ。高天原国へ潜入していた折、薄茶の髪を黒くまだらに染めていた短い髪は、だいぶ伸びて肩にくまどになっていた。毛先は方々に跳ね、収まりがない。彼女は強行軍の途中、よくムロの髪を恨めしそうに見つめて嘆息した。カガミ様と同じ直毛のあんたが羨ましい、と。蜜色の薄い目がムロを射抜く。

まるで、彼女にヤナギを慕う己の浅ましい心を見透かされたような気がして、ムロはルイから視線を外した。

ルイは傷付いたように顔を強張らせる。彼女は俯き加減で、呟いた。

「あたしの顔は、見ていられないくらい醜いの？」

男勝りなルイの殊勝な声色に、ム口は驚き目を見張った。

「いや、そんなことは」

「……そう。なら良かった」

へへつとルイは鼻をこする。その態度が、心に負った傷を無理矢理隠す仕草にム口は感じられた。ヤナギも心が折れそうになる時ほど、強い言葉を吐いて己を自戒していた。

ム口は改めてルイの顔面を見て、どうして彼女が視線を逸らしたことを気にしたのかわかった。額に残った裂傷のせいだ。忌み部屋で兵たちから受けた傷は、彼女の額にしっかりと刻まれている。一向に薄くならないそれは、女の身として呪わしい証だろう。なのに、ルイはそれを隠そうとしなかった。これはカガミ様を売らなかった誇り高き傷なのだと高らかに言い、黄昏国の皆を感心させた。

だが、彼女が傷付いていないわけがないのだ。

ム口は考えなしの己の行動を反省する。

「すまない」

思わず謝罪の言葉を口に出すと、ルイはム口の背を優しく叩く。

「何謝ってるんだよ。あたしが変に気にしただけなんだから、あなたは気にしないでいいの。それより、ほら見て」

ルイが空を見上げて口角を持ち上げる。黒と藍が混じる夜空の奥が、薄く赤まっていた。都を包む炎の色ではなく、優しいまろやかな赤。

「宵の明星が光を放ってる」

燃える都の真上には、夜明けを告げる星が一つ、瞬いていた。

三・

陽炎が揺らめく宮殿の奥部に、一人の青年が倒れていた。神の加護を受けて奮闘したヤサカニは、神降ろしを行なったカガミの前に敗れた。神の力を借りただけのヤサカニと、神を身に降ろし器となったカガミの力の差は歴然としていた。それでも、ヤサカニは体の自由が効かなくなるまで双剣を振るった。

ヤサカニは、弱々しく顔を上げて睫毛を震わせた。火の粉がヤサカニの視界を横切る。最早、起き上がる力もなく、彼は薄目を開けて手を伸ばした。その先にいる少女は、薄い笑みを浮かべて焦点の合わぬ目を彷徨わせていた。空虚な瞳が瞬いた。

少女に朽葉色の髪をした青年が近づく。それを見た黒髪の青年は、「ヤナギ様、お逃げください」

と声を絞り出す。少女は逃げない。その瞳は真摯に朽葉色の髪を持つ青年　カガミを見つめた。

「キョウ力を返せ」

ひたとヤナギの首筋にカガミは剣を向ける。

ヤナギの意識を乗っ取った海若は、けらけらと不気味な笑い声を上げる。

「そなたに我は、倒せぬ。申し子に宿った神を破ることができるのは、神剣のみ。そこに伏した男は神の加護を拝借しただけだったから、倒せたのじゃ。……わらわは、キョウ力の中に宿っておる。そのなまくら刀は効かぬぞ」

カガミの眉が撥ね上がる。

ヤナギの体を操る海若は笑んだ。その笑みは俗世離れた、恐怖さえ誘う美しさがあつた。

「悲しいもののよ。そなたとキョウ力。実の兄妹が争うさまは」
海若は世を儚んでいた。

遙か昔、人間の手によつて壊された高天原国。それを加護していた海若は、国を懸命に現世へ繋ぎ止めようとしていたのだ。なのに、自らが力を与えた氏族　台王は、それを自ら壊そうとする。戦を起こし、国を肥やすことしか考えない。もう、自分たちの国が滅びているとも知らずに、彼らは増長していった。

腹立たしく、やるせなかった。

しかし、海若は現世に於いて無力だった。神世と違い、現世に神が直接介入することは許されていない。古の盟約がとても口惜しく、海若はそれこそ気の遠くなるほどの年月を自らの力を存分に揮える存在の誕生を待っていた。

わずかながら海若の血脈を受け継ぐ一族　姫巫の一族の体へ乗り移り、真の申し子が産声を上げる刻限をじっと待っていた。

そして、海若は二人の子供を見つけたのだ。

ハルセとキヨウカ。

姫巫の血脈を受け継ぐ、まぎれもない申し子だった。兄のハルセは、黄昏国を加護する地祇の器としても存在していたため、おいそれと手を出せなかったが、キヨウカは別だった。少女は海若を身に宿すことができる唯一の存在。

海若は狂喜した。キヨウカの体を手に入れられれば、この世全てを無に帰し、全てを新たに作り直すことができる。

幼い時分には神を体内に宿し続けることはできないが、大きくなれば体に負担をかけずに宿せるだろうと思い、海若は心躍らせていた。

なのに、何を思ったかキヨウカの祖母に当たる姫巫は、海若がキヨウカの身の内へ入ることができぬように人柱を置いた。人柱となつた付き童　サコの、キヨウカに対する思いは深く、強く。海若は一寸の隙をつくことも憚られ、手をこまねいていた。

それが、今。こうしてキヨウカの体を得ることができた。

海若は両手を広げて妖艶に目を細めた。目じりに引かれた紅い線が見えなくなる。

「この地はわらわの領域。いくら地祇を身に宿していたとて、わらわに打ち勝つことはできな」

言葉が止まった。

カガミが腰帯に差していた黒々とした鞘を海若へ突き出したのだ。ゆつくりと、彼は鞘から剣を抜く。柄に刻まれた掬漚の花と竹林の絵が海若の双眸に映る。柄の端に青い玉が嵌め込まれていた。海若の頬が引き攣る。

ずっと引き抜かれた抜き身の白刃は、月を思わせる。波打つ刃は波紋の如く、揺らめいていた。

剣が耳をつんざくような高い音で啼いた。

つきみずかがみのみづるぎ
「月水鏡剣……」

脱力した口調で海若が呟く。

昔、自らの神力を込めた剣を姫巫の一族へ贈った。剣は月水鏡剣と呼ばれ、神聖な神の秘宝として丁重に扱われた。それは代々、鏡月池に沈めており、戦や神儀の折にのみ使われていた。

「何故、そちがそれを……」

問う海若に、カガミは酷薄な笑みを送った。

「理に逆らって存在するものなど、空しいだけ。キョウカも薄薄そう感じていたはず」

彼は決然とした表情で海若を睨み据える。

「海若よ、しばし常世へ帰ってくれ」

「この体はヤナギのもの。切れば、こやつは死するぞ」

海若は必死の形相でカガミに叫んだ。そう言えば、己の妹可愛さにカガミの剣が下ろされると思ったのだ。しかし、カガミは剣を握る手を微動だにしなかった。

カガミはひと思いに、剣を薙いだ。首の動脈が掻き切れ、血飛沫が噴き出す。返り血がカガミの顔や体にかかった。世を引き裂くような絶叫が上がる。

ヤナギの体が傾ぐ。カガミの手から剣が滑り落ちる。乾いた音を立てて剣の切っ先が床と衝突する。白刃には、血の一滴さえついて

いない。

カガミはヤナギの体を抱き止めた。

ぽうつと淡い光とともに、ヤナギの中から何かが抜け出して行く。
光が宙を舞った。

「……申し子よ、何が望みだ」

光はカガミに訊いた。

「高天原国からの解放を」

何を、とは敢えてカガミは言わなかった。

海若は哄笑の渦の中姿を消した。

四・

薄い意識の中で、ヤサカニは動かなくなったヤナギを支えるカガミを見た。彼女を見つめる彼の瞳は、揺れていた。

膨大な神の力を完璧に操ったカガミ。彼の圧倒的な精神力に、ヤサカニは素直に尊敬の念を抱いた。

ヤサカニはうつ伏せだった体を仰向けに直し、自分に力を貸してくれた神に胸中で礼を言う。ヤナギから出て行った海若と同じように、ヤサカニの中から小さき光が姿を現す。その瞬間、左目の視力がなくなる。ぼろぼろの自分に手を貸すのは、神にとっても複雑だったろう。

静かに、ヤサカニは涙を流した。何より、ヤナギを喪ったことの方が彼にとって大きかった。もう、ヤナギはこの世から姿を消したのだ。

守れなかった。

ヤナギも、そして カガミも。

実の兄に殺された妹と、実の妹を殺した兄。

二人の心を救えなかった力なき自分に不甲斐なかった。

体は限界点を越えている。息もつけない。折れた肋骨が肺に突き刺さっているようだった。

（叶うならば、どこまでもヤナギ様にお供できるよう）

決してヤナギが一人にならないよう、ヤサカニは祈りつつ瞳を閉じた。脳裏によみがえるのは、ヤナギの壊れそうな笑顔。

「あなたと、このまほろばで出会えたことに感謝する」

その言葉を最期に遺し、ヤサカニは息を引き取った。

ヤナギは深い闇の中にいた。ここが常闇洞泉だと気がついたのは、前にカガミと二人でこの道を辿ったことがあったからだ。

後ろの方から滝がとうとうと落ちる轟音が響いてくる。引き返すことは叶わなかった。死者の黄泉路であるここから、生者の住まう領域へ逆上することは不可能だ。生きているのならまだしも、ヤナギは既に死んでいる。

ヤナギは自分がカガミに殺されたのを知っていた。彼女の他にも幾人か鍾乳洞の奥部を目指す人の姿がある。彼らの体は透けており、うつすらと発光する水晶の光に淡く照らされている。

怖くなどなかった。

「これでいい」

ヤナギは眩き、緩やかな風が吹き込む常闇洞泉の出口へ足を進めた。

「ヤナギ様」

声がかかる。横を見ると、ヤサカニがいた。ヤナギは微笑んだ。

「ほら、二人ともさつさと歩いて。あとがつつかえてるんだから」どこからか、憤然としたチズコの声がする。じん、とヤナギの胸を温かなものが満たした。

生きている時に踏み入れた常闇洞泉は、恐怖の象徴でしかなかった。しかし、死後の人々には安らかな光を感じさせる。

再び現世に生まれ落ちるための、道。

そう思った。

ヤナギとヤサカニは、チズコの声をたよりに黄泉路を下る。

。

ヤナギは振り返った。

自分を繰り返し呼ぶ、哀しい声が聞こえてくる。鍾乳洞内を反響し、涙に滲んだ声は更に歪む。

ヤナギは常闇洞泉の入り口から洩れる光に向かって、花が綻ぶように笑って見せた。

「見渡す限り広がる大地は、貴台の前にある。どうか、高天原国のぶんまで皆が幸せである国を」

ヤナギを抱きしめていたカガミの頬を、一筋の涙が伝った。

五・

炎に巻かれた高天原国の宮殿は、ついに大きな音を立てて崩れ落ちる。一旦、一か所が崩れてしまえば、あとはなし崩しに壊れて行く。

ムロは、いまだ宮から姿を見せないカガミを、今か今かと南門で待っていた。しかし、逃げ出してくるのは高天原国軍や官ばかりで、その中にカガミの姿はない。

まずいと思ったムロは、頭から水を被る。

都に住む者たちの大半は、蜘蛛の廻廊より地下へおろした。

神をなくしたこの国は終わるのだ。

国の滅びる音がすれば、嘘だとたたかう者も信じて蜘蛛の廻廊へ来てくれるだろう。ムロは、他の廻廊に待機中の者たちの采配を信じて、指揮官をルイに託して、単身王宮へ飛び込んだ。

火の海は深い。

神力の大きさを物語るように、燃え盛る炎は高く渦を巻く。きつと、カガミは台王のいる寢所付近にいるだろうと当たりをつけたムロは、懸命に記憶の糸を辿り、焼ける宮中を奔走した。

ようやく、寢所らしき部分に足を踏み入れる。謁見の間ほど焼けではおらず、まだ抜け出そうと思えばすぐにでも逃げられそうだった。

寢所の奥間に来たムロは、ぐるりと目を見張った。

まず、クルヌイの最期が目に入った。その死に顔は、すべてを悟った安らかさを感じさせた。ムロは自分が武官長になった時、本当に心から喜んでくれた優しき王子の横へ片膝をつき、黙祷を捧げた。台王の遺体もあるかと思つて近くに目を配るが、彼の遺体は見つけれなかった。

ふと、ムロは奥間の飾り棚の横に、不自然な観音扉を見つけた。彼はその扉を用心深く、ゆっくりと開ける。

罣が仕掛けられていないか、まず懷刀を部屋へ投げ入れてみる。

反応はない。扉に身を寄せたまま、覗き込んだ。ム口の目に飛び込んだんで来たのは、無惨に裂かれた御簾がかかった上座だった。真っ暗な室の四隅には燈台が儂い灯を揺らしている。

上座のわきに、黒髪の青年がム口の方を向いて息絶えているのが見えた。愕然として、ム口は室内へ滑り込む。

黒髪の青年は、ぼろぼろになって死んでいる。ム口は思わず呼吸を忘れた。彼の名を、ム口はよく知っていた。

ヤサカニだ。

カガミの腹心だった彼は、高天原国軍の防具を身につけ、死んでいる。彼は、最後までヤナギを守ろうと奮戦したのだ、とム口は苦しい気持ちを抱いた。

ム口の足許に何か転がっている。それに目をやると、台王だった。彼は白目を向いて死んでいた。汚らしいものに触れたように、ム口は鼻に皺を寄せるとそれを足で無造作に横へやる。

そして、ム口は上座の中央部で多量の血を流すヤナギを掻き抱いているカガミの前に腰を下ろした。敢えて、ヤナギの死に顔を見ることは避けた。泣きそうな思いを懸命に耐える。

カガミは声も立てず、泣いていた。

初めて見たカガミの涙に、ム口は衝撃を覚える。

「……カガミ、ここはもうじき陥落する。脱出するぞ」

「ム口……。俺には、わからない。涙の、止め方が」

ム口は無言でカガミの左脇に腕を入れて引き上げた。

「俺は、楊との約束を破ってしまったな」

そうカガミは呟く。

この世で一番幸せな姫に　。

ム口はせめて、自分だけでも泣かないよう、まっすぐ前を見据えた。

ヤナギの遺体を運び出したいと懇願するカガミを何とか諫め、ムロはカガミを連れて宮を脱して都を駆ける。

ムロとて、ヤナギの遺体をあの宮から出してやりたかった。だが、ヤナギを背負って火の手を掻い潜ることが出来る力はカガミもムロも持っていない。地祇の力を揮ったことで、カガミとムロの体力と精神力は限界に近かった。

ムロがカガミを見つけた時、地祇はカガミの中から出て行ったあとだった。

神は気まぐれだ。ムロは何度も地祇を呼んだが、反応は返ってこない。あとは自分たちの力でどうにかしろということなのだろう。

途中、逃げ惑う人々を誘導する兵たちがカガミの姿をとらえて笑顔を向けたが、カガミは無言でムロの後に続く。

高天原国の兵も人々も、カガミたちと一緒に逃げていた。

ようやく溪谷を抜けて山一つ抜けた先にある蜘蛛の廻廊に着いた瞬間、地鳴りがした。

大きな水の音が彼方より近づいてくる。

姫巫という傀儡を手放し、海若はようやく高天原国を解放するのだろう。まるで桃源郷のような、この国を。

しんがりを務めたムロとカガミは、見納めだと思って高天原国を振り返る。

国全土に広がる夜明けは、目映いほどに美しかった。

山々の連なりとその合間から射しこむ陽炎。虹色に輝く空。崩壊する直前の、危うい美しさが目に焼きつく。

カガミは、圧巻の眺めに見入っていたが、やがて口を開いた。

「必ず、この一国を奪ったに足る国を建国してみせる」
固く彼は決意を表した。

それにしても、とムロは頭の後ろで手を組んだ。

「兄弟揃って神の呪を受けることになるうとはな」
とムロは溜め息混じりに口にした。

カガミは、それもいい、と笑った。

終章 神燈国へしんとつづく

深い溜め息が謁見の間に立ち込めた。

側近や女官たちは戸惑ったように顔を見合わせる。

神燈国。
しんとうこく

かつてこの世には、他国とは隔絶された亜空間にある高天原国と
呼ばれる国があった。

その国は？神の口？から生まれた姫巫という軍神を有しており、
姫巫の口から発せられた全ての事象は現実となつて敵国を襲った。

大きな旱魃、飢饉、津波。人々は喘ぎ苦しんだ。

そんな時、姫巫に対抗出来る唯一の希望が、黄昏国王の息子とし
て産声を上げた。

？神の腕？。
かいな

その王子は、自らの身に神を降ろし、神の力を使って姫巫との戦
いに勝利した。

黄昏国第一王子ハルセは、その後、浮世にある全ての国を統治す
ることとなった。

そうして出来た国が、日輪国だ。由来は黄昏国の古称から来たら
しい。

ハルセはよく国を統治し、見る見るうちに国土は潤った。

民は大王であるハルセを神と崇め奉った。

彼は五十年の間、国を治めた。そして

「大王……？」

恐る恐る、初老に差し掛かった側近はム口に声をかけてきた。

「何だ」

ム口は艶のある髪の手先をいじりながら、気のない返事をする。

玉座に座っているにも関わらず、彼から大王の威厳や恐怖は感じられない。

「どうかなさったのですか？」

「……どうもこうもない」

ばん、とム口は横に置かれていた卓を叩いた。

ああ、と女官は慌てた声を上げる。

その卓は一昨年前に地方の豪族より献上された、至高の技巧を凝らされた卓だったからだ。

構わずム口は不満を口にする。

「何がどうしたら、俺が大王なんだ」

「ですから、ハルセ大王がそう文を遣されておりました……」

「そのハルセは見つからないのか」

「は、はい」

ム口は親指の爪を強く噛む。

旅から戻ってきて、いきなり謁見の間に呼ばれたので何事かと思えば、ハルセが姿を消したのだという。

しかも、次期大王はム口にという厄介な木簡を残して。

（あいつも、俺と同じように神の呪を受け入れた者だ。おいそれと死ぬことはあるまいが、まさか……）

一つの仮説に行き当たり、ム口は厳しい表情を浮かべる。

「まさか、常闇洞泉へ？」

いや、とム口は首を振る。

そんなはずはない、と自分の考えを打ち消す。

常闇洞泉が存在する高天原国へと続く道はもうこの世にはない。

それはム口が一番よくわかっている。

この五十年間、ヤナギのもとへ逝こうとあらゆる地へ放浪したのだ。

それでも、蜘蛛の廻廊は全て重き岩で塞がっていた。

「ム口大王」

ム口は呼ばれてまた大きな溜め息を吐いた。

「わかった。ハルセが帰還するまでならば」

安堵の溜め息がそこかしこから上がった。

どう見ても二十そこそこの青年に見えるム口は、側近から大王の証である月水鏡剣を受け取る。

すつと鞘より抜いてみる。

抜き身の刃は鏡月池の水面のように静かに凧いでおり、ヤナギを殺した剣とは到底思えなかった。

『あら、あなた、サコと一緒に宮へ来た子じゃない。私はヤナギと
いうの。よろしくね』

懐かしい声が脳裏に過ぎった。

ム口は驚いて目を見開く。

『国を護りなさい』

優しい笑顔がちらつく。

「……………はい、ヤナギ様」

ム口の両の目より、透明な雫が滴った。

滝の如く止まることを知らない涙を流す自分自身に、ム口は酷く戸惑った。

ヤナギ様、ム口は高天原国の平和を守れなった。貴女との約束を破ってしまいました。

だから、せめて。ヤナギ様という大きな犠牲を払って建国したこの国を、きつと守ってみせます。

のちに神燈国しんとくと呼称を変えることとなる、日輪国が二代目の大王、ム口。

初代大王であるハルセの異母弟にして、武の天才。

神燈国建国の際には尽力し、姫巫討伐にも一役買ったとして、民に敬みわれていた。

海松色に染めた一つ結びの髪に芥子けしの実色をした瞳は、見る者を

捕らえて離さない魅力を持っている。

後に彼は、神燈国歴代大王の中でも髄一の賢君と呼ばれることになる。

平和を最も大切にした彼の治世は、とても穏やかで人々に安寧の時代をもたらした。

黄昏国と呼ばれていた傾国が、第一王子ハルセの功績によって復興されて早五十年。日輪国と呼び名を変えた国は破竹の勢いで地上全土を統合していった。

そんな日輪国の一角で、深い皺の刻まれた顔を緩めて感慨に耽っている老人がいた。ほど良くついた筋肉が、若い頃は武に通じていただろうことを窺わせる。

国々は自然とハルセの名のもとに傘下へ下り、かの王子は見事な手腕で国を纏め上げて大王として君臨した。

老人は、五十年前に見た、ハルセの必死なまでに迷いや不安を押し殺した顔を思い出し、苦笑する。

まだ二十前半だった彼が決断に苦渋するのは当たり前だったろう。頼みの綱であるはずの父王は腑抜け、有能な部下は敵国へ寝返った。あの激動の最中、異母弟だけがハルセを支えた。芥子の実色をした、意志が強い眼差しを向けるム口が、老人の脳裏に浮かぶ。

もとは炎來国との境目にあつて、絶えぬ戦禍に身を縮めていたこの善灯村も、ハルセが大王となつてからは争い一つ起こらない。

遠方の地ではまだ日輪国に抵抗する豪族がいると伝え聞くが、ハルセは、かの高天原国のように齒向かう者たちを、神の力で押し伏せることはしていない。

正しい道を彼は歩んだのだ、と老人 サブライは思う。

サブライの言に従い、神降ろしを行使したハルセは、自ら望んで神を身に降ろしたム口と同様に不老不死となつて、在位五十年を過ぎた。

民は皆、ハルセやム口を神の子だと敬い、慕う。彼らがいる限り、日輪国は不滅だと詩人は唄う。

サブライは葦の揺れる中、歩いていった。老体には若干厳しい道の

りだったが、一日たりともこの道を歩まない日はない。

家からそう遠くない場所にある葦原。黄金に色づいたその中にはいくつも墓石がある。

サブライはその一つ一つを、手にしていた桶の中に入れていた布切れで丁寧に磨いていく。

高天原国に屠られた哀れな魂が、天へ還れるように。

五十年経った今でも、たまに黄泉路を見つけれずに戻ってくる魂がある。そんな魂が、自らの墓石を見た時、少しでも安らかになれるようにと祈りを込めて、サブライは墓石を拭き上げた。

最後に、サブライは崖上にある四つの墓前へ手を向ける。

昔は、サコの墓石しかなかった場所。

今はヤナギとチズコ、そしてヤサカニの墓石もある。彼らの遺体はない。

ハルセとムロは二人で三つの墓を作った。サブライは、二人に手伝おうかと申し出たが、ハルセたちはそれを断った。

ハルセは墓石を作り上げたあとも、随分長い間じっとその場を動こうとしなかった。ヤナギの墓に触れ、何を言うでもなく撫で続けていた。

それが、ハルセに会った最後だったとサブライは記憶している。

ちょうど、五十年。

もう、そんなに時が経ったのだ。

ムロはちよくちよくサブライに顔を出してくれる。

彼はサブライのもとに来る折に触れて、旅で出会った面白い土産話を持ってくる。そして、必ずヤナギたちの墓前に手を合わせる。

ムロの姿は十代後半で成長を止めているため、いつ見ても少年にしか見えなかった。

サブライは随分年老いた自らの手を眺める。齢九十。よくもまあ、ここまで長生きしたものだと自分に感心してしまう。

ハルセは今頃、どうしているだろうか。

サブライは、知っている。

サブライの前には姿を現さないものの、ハルセはヤナギたちの墓石に何度も足げく通っていた。

大王となったハルセが私情をまじえて墓前を訪れることは良くないと自覚していながらも、こつそりと彼は葦原へやって来る。

ハルセは必ず、墓前に花を添える。拯溟の花だ。サブライもム口も、その花を供えようとはしない。

あまりに生々しく死者を思い出してしまうためだ。花の香りは呼び起こしたくもない過去を揺さぶる。

また、この五十年の間に拯溟の花は大層希少なものとなっていた。昔は善灯村の水辺にも咲いていたのだが、段々数が減ってきて、ついには一つ残らず消え失せた。

時代の流れだろう。

神秘に満ちた時代は終わりを告げようとしている。霧が晴れるように、国々に陽光が射し込んできた。それに伴い、古き時代のものゝ姿を隠す。

墓石を建てた折に、サブライは拯溟の花を供えるハルセに訊いた。

『この花の持つ意味を知っているか』と。

彼は否と首を横に振ったため、サブライは花の由来を教えてやった。

『水に溺れてしまいそうな者を助ける　転じて常世への導き、現世へ還る折の標を担うという意味を持つ』

そう言うところ、ハルセは何事か考え込むように遠くに眼差しを送った。そして、サブライの方を振り返って言ったのだ。

『では、この花はヤナギたちの標になるだろうか』

ハルセの顔は真剣だった。

ただの言い伝えだと笑い飛ばしたりできず、サブライは頷くしかなかった。ハルセが縊るような目をしていたせいだ。

サブライの中での表情が消えることはない。

ふと、ヤナギたちの墓石を見やると、朝焼けに照らされて黒く光っていた。

石の下には拯溟の花が飾ってある。水々しいところを見るに、まだ花が手折られてからそれほど時間は経っていないことがわかる。

サブライは遙か遠くに連なる山の奥間から覗く太陽を見つめる。

あまりの眩さに腕を目の上にやった。

「常世に行った時は、皆で杯を交わしたいな」

サブライは呟き、葦原の中を引き返した。

ム口は体を丸めて小さく息を吐く。

夜明けは遠い。

「無理に抗うな」

苦しげに顔を歪めるム口に、カガミはそう助言した。

「抗えば抗うほど、神の力は増大するぞ」

「……ああ」

ム口はカガミの助言に従い、体の力を抜く。

決戦の時は刻一刻を忍び寄っている。

ム口とルイの二人は、最前線に立って地上軍を指揮する役目を負っている。カガミたちの中で誰よりも先に蜘蛛の廻廊へ足を踏み入れるのだ。きっと、ム口は上手くやってくれるに違いない。カガミは異母弟を信じていた。

今までの戦は、常にヤサカニが采配を揮っていたが、今回の戦は違う。有能な軍師はここにいない。

ム口は素早く姿勢を正し、カガミと向かい合った。漆黒に染め上げたム口の長い髪が滑らかに零れる。

「カガミ、約束しろ。俺はきっと高天原国を陥落させる。そのかわり、きつと……ヤナギ様を解放してくれ」

虚を突かれ、カガミは返事に窮した。

まさか、ここまできてム口からそんな言葉が飛び出すとは思っていなかった。

ム口は自嘲の笑みを浮かべ、腰に手を当てて片眉を上げる。

「どうせ、何を今更と思っているんだろっ」

「ああ」

素直に答えれば、はんつとム口は鼻を鳴らした。

「国など俺にとっては取るに足りないもの。お前のように王子として日々を暮らしたわけでもないしな」

カガミは同じ王族の血を継ぎながら、あまりにも自分と違うム口を静かに見据える。ム口は宵の宴に興じる人々の方へ視線を転じた。戦へ行く者たちを鼓舞するために開かれた宴は、たいそう賑わっている。

「お前の肩に黄昏国の者たちの願いが乗っているように、俺の肩にはサコやチズコ、そしてヤナギ様の願いが乗っている。だから、きつとお前が高天原国を滅亡させられるよう血路を拓いてみせる。ヤナギ様は……解放されたいと 姫巫という業より抜け出したいと願っておられた。その願いを叶えてやってくれ」

カガミは下唇を噛みしめた。思わず拳に力がこもる。

羨ましかった。ヤナギに対する誠実な想いを、まっすぐに口にすることが許されるム口が。己の立場を投げ打ってヤナギのもとに馳せ参じたヤサカニが。

「お前が、叶えてやればいいじゃないか」

嫉妬混じりに言えば、ム口は苦笑した。

「俺はヤナギ様を殺せない。……笑えばいい。俺はヤナギ様を救いたいと思いつながら、自分の想いを凍らせられない愚か者だ」

ム口は言い捨て、身を翻した。

宴席では、鼓や笛の音が楽しげに鳴っている。笑い声と杯を合わせる音。どれもカガミの耳を空しくすり抜ける。

ム口は、ヤナギのことを真剣に好きなのだ。彼は出会った時より、ヤナギ以外を見ていない。

それはカガミにもわかる。カガミもまた、ヤナギしか見ていなかったから。

異母弟は、ヤナギが自分の異母姉であると気がついていないはずだ。伝えようかとも思ったが、結局カガミは真実を告げなかった。告げれば、ム口は傷つくだろう。今より更に。ム口が辛い思いを抱えるような事態は避けたいとカガミは考えた。

十分だろう。

ムロはヤナギに忠誠を誓っていたにも関わらず、彼女の願いを叶えるために、あれほど憎悪していた黄昏国へ下った。そして、そこで自らが王族であるということを知ったのだ。これ以上、ムロが悲しみの連鎖で悲嘆するのをカガミは見たくなかった。

（俺だけで十分だ）

人の記憶はおかしなものだ。

カガミは、幼げでいたいけな少女だった妹とヤナギが同一人物に思えなかった。

「出発するのか」

威厳ある声が暗がりからした。カガミは、影から現れた男の姿を見止めて肩を竦めた。

「ムロとルイの部隊だけ先に出発する。彼らが通る蜘蛛の廻廊は少し遠い。明朝、出発だな」

答えると、男は鷹揚に頷いた。

「して、サブライ。あなたは何をしにきたんだ。軍に加わりたいたいということならば、喜んで迎えるが……」

「いや、わしは中立の立場からこの戦を見届ける」

「そうか」

カガミはサブライの返しを予期していた。

サブライは顎鬚をさすり、まなじりを下げた。

「何、久しぶりにムロと手合わせしてみたいとも思いたってな」

「そうか　待っていてくれ。すぐにムロを呼んで」

「王子」

宴に参加して酒をあおっているムロを連れてこようとするカガミを、サブライは呼び止めた。

「強すぎる愛情は、時として憎悪を伴う。逆もまたしかり。それは止められぬ定め」

カガミは、自分自身が何度も何度も己に言い聞かせ戒めてきた言葉をサブライが放ったことに驚き、目を丸くした。

「……王子、愛しているのだろう。ヤナギ様を」

カガミは息が止まるかと思った。サブライは暗闇からカガミとム口の会話を盗み聞きしていたのだ。そして、会話の最中にカガミが見せた揺らぎを敏感に察知したのだろう。そうでないなら、心を見透かす占手か何かでしか有り得ない。

何も言わず、カガミは月を眺めた。上弦の月は、幼い頃ヤナギと見たものと似ていて。

「俺は、拯渙の花でも、空に浮かぶ月でも、常にそばで見守ってやれる男でもないから」

サブライは黙って聞いている。カガミはサブライの澄んだ目に向き合う。

「以前、あいつは拯渙の花が好きだと言っていた。摘んできてやれば、顔を綻ばせて笑ってくれたものだ。ある時は、闇夜に浮かぶ月に手を伸ばして綺麗だと言っていた。庭先にある池に月が映っているのを見せてやれば、これまた嬉しそうに俺の手を握ってくれた」

カガミは瞋目した。記憶の果てからヤナギの笑い声がする。

それを振り切って、カガミは目を開いた。

「サブライ。俺は、ヤナギへの気持ち、俺自身 いや、黄昏国で俺の勝利を待つ民のためにも認めるわけにはいかない」

遠い過去を振り返りながら、ハルセは歩き続ける。放浪の旅を始めてから早数ヶ月が経った。

「どこに行くのですか」

行く先々で問うてくる声に、ハルセは曖昧に笑う。

ハルセは自分の統治した国々を見て回り、豊かさを知る。これも地祇の加護あつてのことだと思った。地祇は大地に豊穰をもたらした。

かの神は、自らに実りの一部を献上することを条件に、日輪国を加護してくれている。

天災もほぼなく、人々の笑い声が野にも山にも木霊している。

当て所もない旅の最中、出会う者たち全てが飢えや渴きから解放された顔をハルセに向ける。

良かった、と思う。

民の様子が、高天原国を討ったことは間違いなんかではなかったのだとハルセに思わせてくれる。

ハルセは長い間、高天原国を滅ぼしたことが果たして最善だったのかと自分自身に問い続けてきた。もう二度とあの国は蘇れない。天上と地上をたゆたっていた桃源郷は滅びたのだ。

私憤に駆られて高天原国を討ったのではない、と言い切れない自分が不甲斐なかった。

そうは言っても、ハルセや地祇の恩恵へ賛美を口にする人々を見ていると、素直に嬉しいと感じる。

この五十年の間、ずっと日輪国のことだけを考えてきた。自らのことなどかなぐり捨てて、国に仕えてきた。

もう、いいだろう。

ハルセは、ずっと息を吸い込んだ。新緑と土の匂いが入り混じった匂いがする。

『そろそろ、終わりを迎えたいのか』

体内より地祇の念が伝わってくる。

地祇は気まぐれにハルセとム口の体に入り込んで、人　地祇は青草と呼んでいる　の暮らしを遊山していた。

ハルセは、そうだな、と笑んだ。

「宿命は、全うしただろう」

いつの間にか落葉樹の生い茂る一帯に入り込んでいた。水辺には、優しげに拯溟の花がざわめく。

三・

チズコは耳を澄まし、川べりで衣を洗っていた手を止めて腰を上げた。

木漏れ日の柔らかい揺らめきと、清流の音。そしていつからか失われた自然の息吹。

太古が息づくこの地には、ただ安らぎと優しいまどろみだけがあった。この地では、身分の違いも何も意味を為さない。

高天原国を地上の国々は桃源郷と呼んでいたが、こここそが常世。絶対に波風の立たない平穩の地。

幻のような危うさで、この地は存在していた。

現の体を失い、たゆたいながらチズコは常闇洞泉を抜けてこの地へやって来た。もう何十年とここにとどまっている。まだ、生まれ変わりの予兆はない。きっと、再び生まれ変わる時は皆が集まってくるのだ、とチズコは妙な確信を持っていた。

姫巫と神の腕を軸にして、彼らに関わりあった者だけがいまだ生まれ変わりの道を示されていない。黄泉を司る神は理由を黙しているが、きっとそうなのだ。神々に関わった者たちは再び同じ世を生きる定めにあるのだろう。

その証拠に、チズコと同じ時期に黄泉へやって来た者たちは皆転生の道を示され、この地を去って行った。

繰り返す輪廻転生の合間の、小休止。

この地は善人も悪人も一様に受け入れ、緩やかに時を刻んでいく。チズコは心地よい風を受けて瞑目する。五感に届くもの全てが優しい。

ぱしゃりと大きな音を立てて、チズコの横にいた男が川に遊ばせた衣を乱暴に引き上げる。

「なんで俺が……」

ヤサカニは小声で悪態を吐く。

彼はヤナギとともに竹林へ出かけたかったのだ。しかし、半ば強引にチズコはヤサカニの耳を引っ張ってこの小川までやって来た。洗濯物はチズコ一人では片付けられない量だった。頼みの綱であるサコには、幼子たちの相手に手いっぱいのため手伝えないわ、と眉を下げて断られた。

チズコは文句を垂れるヤサカニを、腰に手を当てて叱咤した。

「ヤナギ様だつて言つてたろう。薬草くらい一人で採りに行けるつて。ごらん、わたくしの方が大わらわじゃないか」

「……チズコはこの程度の洗濯物など、どうとでもなりそうだが、ヤナギ様は……」

全く、とチズコは嘆息した。ヤサカニは心配げに竹林の方角を見やる。

「常世に来てまで、ヤナギ様が人々を助けなくとも良いだろうに」
「ぼやくヤサカニにチズコは苦笑した。彼の言うことは一理ある。

常世でも風邪をこじらせたり傷をこさえたりするが、時が経てば治癒する。生まれ変わる前に死んでしまうことなど、まず有り得ないのに、ヤナギは度々竹林へ薬草を採取しに行つては、煎じ薬を作つたり、干し薬を作つたりして人々に分け与えている。

現世の時と、少しも変わっていない。ヤナギの心は透き通っている。姫巫という呪われし重責より解放されたヤナギは、いつも笑っていた。

それを見ていると、自然チズコたちも笑顔になれた。このまま、生まれ変わらずここに留まりたいとさえ思ふ。

しかし。

チズコはヤサカニと同じく竹林に目を転じる。

この世とあの世の狭間が荒れている。大きな気配が動いた。

強い、一陣の風が吹く。

チズコは目を細めた。

「ヤサカニ」

弾んだ声でチズコはヤサカニの名を呼んだ。

ふて腐れたヤサカニは恨めしげにチズコを見上げるが、彼女の顔に喜色が浮かんでるのを見ると瞠目した。

「どうした、そんな嬉しそうに」

「……ようやくおでましのようだ。やれやれ、本当に待ちくたびれたな」

不可解なチズコの言にヤサカニは首を傾いだが、やがてその言葉の意味を理解したのか立ち上がる。彼の手から真白い衣がすり抜け、水草の上に着地した。

見る見るうちにヤサカニの表情が和らぎ、彼は破顔した。

四・

清浄な風があつた。

青い竹が、ヤナギにさやさやと囁きかけてくる。

ヤナギは竹林の中で深呼吸した。遠くから匂い立つ湧水と、平穩を象徴する木々のざわめきが耳をくすぐる。

息を胸いっぱい吸い込めば、現世にいたときと変わらないものに満たされていく。

常世には全てがあつた。ヤナギが望んだもの全てがあつた。平穩と飢餓のない暮らし、そして人々の笑顔。

ヤナギは漆黒の長い髪を解き放ち、天を仰いだ。黒曜石のように輝く濡れた瞳に蒼穹の空が映る。

何十年も、同じ日常を過ごしている。山に生えた薬草や食物を採って皆で細々と寄り添って時を歩んでいた。

一点の曇りもないまろやかな陽射しが竹の葉の間より射し込む。

その光はヤナギの目を刺激する。ヤナギは緩く瞬きをしつつ、藪を掻き分けて竹林の奥へ歩を進めた。

竹林の奥部には拓けた場所があり、野の花や薬草、そして拯溟の花が咲き誇っている一角がある。そこには高天原国の梔子斎森の如く神聖な空気を纏っており、たくさんの貴重な薬草が生えていた。

ヤナギは月に一度、そこへ薬草の採取へ行っている。少しだけ、高天原国《あの国》にある竹林に似ている常世の竹林が、ヤナギの心を落ち着かせる。

零れんばかりに拯溟の花が咲き誇っている。ヤナギは腰を下ろし、精神を和ませる花の香りを体に取り込んだ。

拯溟はこの世とあの世を繋ぐ標花。ヤナギは拯溟の花の中、寝転んだ。

遙か彼方に空があつた。手を伸ばす。どこまでも気高く、澄み渡

った空は、あの人を彷彿とさせて。

朽葉色をしたざんばら髪と意志の強い鋭き双眸でヤナギを見透かすかの人は、最後に見た時、髪をばっさりと切っていた。瞼の裏にある残像は胸を締めつける。

(……会いたい……)

強く思った。いつかまた、ここで必ず会えると云うチズコの言葉を笑って流しながらも、本当は信じていた。彼はきつと、ここへ辿り着く。そしてその時こそがヤナギにとって、現の終わり。そして始まり。

ふわりと花弁がヤナギの顔に零れた。それと同時に体が浮いた。慌てて眼を開けると、そこには困ったように微笑むカガミがいた。

カガミのいきなり過ぎる登場に仰天したのか、いきなり体を持ち上げられたから仰天したのかは定かでないが、ヤナギは目を剥いて手足をばたつかせて強引に地面へ降り立つと、後ずさる。彼女が手にしていた竹かごが花の上に落ちた。

幻影を見ていると思っっているようだ。ヤナギはしきりに両目を擦っている。

その様子がおかしくてたまらず、カガミは弾けるように笑った。

カガミ。

ヤナギの声を聞いた気がして、野を越え山を越え、落葉樹の生い茂る一帯の水辺に辿り着いたカガミは、強く願った。ヤナギに会いたい、と。

その瞬間、常闇洞泉とこやみどうせんはカガミの前に姿を現した。旅の終わりにようやくカガミは気付いた。必要だったのは、導いてくれる花と強い想いだったのだ、と。ヤナギのもとへ行けると確信したカガミは、迷いもせずに常闇洞泉へ飛び込んだ。途中、体の中から地祇の気配が消えた。かの神はカガミから手を引いてくれたのだ。不老不死の

体をカガミはするりと脱ぎ捨て、洞窟の終わりに見える小さな光目指して駆けた。次第に強まる光を浴びながら、歡喜に胸を震わせる。胸に去来するのは、カガミを呼ぶヤナギだけ。五十年間、地上の救い手として生を貫いた青年は、ようやく自らの心を解き放った。そして光の先にあったのは、いつか高天原国で見た竹林の中に咲き乱れる拯溟の花と、その中に寝転び瞑目しているヤナギだった。

カガミは両手を広げる。

「来い、キヨウカ」

優しい面差しは遠い昔、ヤナギが見たものと同じで。

熱い想いがヤナギを満たした。会いたいと強く思うばかりに、もしや幻を見ているのではと自分の視覚を疑っていたヤナギは、泣き出しそうに優しく微笑むカガミが本物だと確信し、抑制していた感情の渦に吞まれた。

ヤナギはカガミに思い切り飛びついた。

「ただいま、キヨウカ」

「兄上、おかえりなさい」

声がする。耳に残る響きに導かれ、カガミはようやく守るべきものではなく、守りたいもののもとへと還って来た。

響くは始まりと終わりを告げる宿運ときが関との声。
歴史に埋もれし真実はそのままだに、いざ逝かん。

導くは愛かなしい者の足跡。

大地に広がりし陽光はやがて、民を救わん。
巡りめぐった全てを抱き、ようやく帰巢せん。

残響ざんきょう帰巢。唯一無二の居場所はかの心なり。

響くのは物事の始まりと終わりを告げる、運命の産声。
歴史の中に埋もれた真実が胸に秘めて、私はこの世を去ろう。

私を導いてくれるのは、恋焦がれた者の辿った足跡。
大地に広がった眩い太陽の光が、澱んだ空のもとにいる人々を救
うだろう。

万物を巡って繰り広げられた全てを私は受け入れ、ようやく巣へ
戻った。

耳に残る声を頼りにし、私はここへ帰って来た。この世でたった
一つの私の居場所は、あなたの心こころだった。

それは古に語り継がれた伝承。太古の昔の記憶。
結ばれることなく世を去った二人の、物語。

《完》

四・（後書き）

長かった……。

構想を練ったのが2008年の冬。書き出したのがその翌年の春。そして、修正しながら書き終えたのが今。

物語の結末は当初考えていたものと同じです。でも、そこに至る道筋は二転三転……。自分で書きながら、「何でこここうなる！」と突っ込みながら執筆しました。

ヤナギの運命。カガミの運命。そして、二人を取り巻く人々。いくつもの偶然と必然を綴りながら、物語は完結しました。

ヤナギとカガミは正反対の性質を持つ子でした。でも、本質は同じだった。二人ともどこか寂しげで、葛藤していて。

逃避と向き合うことは対極にあるようでいて常に隣に寄り添いあっている、私は思っています。

物事から逃避すること。それは自分の中の何かを守るための行為守ると同時に何かを喪う。ヤナギが辿った行く末。

物事に向き合うこと。それは自分を傷つける結果を招くことがある。カガミが辿った行く末。

似ていないようで、とてもよく似た行く末。

この話はずもとと短編用に作ったものだったんですが、せっかくだから長編で書いてみようという私の気まぐれによって、ここまでの長編となりました。

疲れました。

というのが今の心境です。

細かい修正や矛盾点や表現の変更など、あとでチヨコチヨコいじりますが、一先ずここで『残響の導き』は完結です。

ここまでご覧になって頂いた方全てに感謝致します。

それでは、また充電し終えたらまた長編を書き散らすと思いますので、それまで皆さまお元気で。

2010・08・09
✕

番外編 大地の休息（前書き）

戦の合間の小休止。
ハルセとキヨウカの過去話です。

番外編 大地の休息

拯溟^{しょうめい}の花片が、春の麗らかな風に吹かれている。視界一面を覆うそれに、ハルセは目を細めた。

蒼く晴れた空に灰色の花が舞う様は、何とも不釣り合いであった。
「あにうえ」

舌つ足らずな拙い声が花吹雪の向こう側から聞こえる。

ハルセは精悍な顔つきを少しだけ和らげ、声の主を振り返る。拯溟の花弁の隙間より見え隠れするその幼い姫に手を差し伸べれば、姫はすぐに花吹雪を突っ切ってこちらへやって来た。

「来い、キヨウカ」

キヨウカは豪勢な簪を揺らしながら、迷わずハルセの足に抱き着く。ハルセは軽く笑い、自分の腿の付け根程しかない背丈のキヨウカを抱き上げる。

夕陽色をした衣を纏いし少女は天真爛漫に顔を緩めた。薄く色づいた頬は、走ってここまで来たのだということを実に物語っていた。額と額を合わせて彼女の大きな黒い瞳を覗き込んだ。

「俺を捜しに来てくれたのか？」

「うん。きょうかは、あにうえと一緒にいたかったの」

温かな言葉に胸を突かれた。日溜まりの匂いがする。柔らかな頬を擦り寄せてくるその動作に愛しさを覚え、ハルセはキヨウカをより一層強く抱きしめた。

暗い戦が続く黄昏国。その渦中に、このような純粋な少女がいるなどと、ハルセはキヨウカと出会うまで微塵も信じていなかった。

黄昏国の掟では兄妹（または姉弟）の場合、下の子が齡三つになるまで血が繋がっていようと面会することが出来ない。ハルセとキヨウカもそれに従い、昨年の冬に初めて顔を合わせた。

雪が降りしきる宵。そこで二人は出会ったのだ。ハルセが十とな

った祝杯の宴でのことであつた。血縁のみが寄り合い、円座に腰を下ろして酒を飲み交わす。新年の厳かな雰囲気の宴だつた。

あの時のことを生涯忘れることはないだろう。

朱塗り盃を翳して口元に運ぶハルセを、真正面に座す母の後ろよりじつと観察していたキヨウ力はやがて、小首を傾げてハルセの前に立つた。そして、母親譲りの黒髪をおかっぱにした姫はハルセの頭を撫でたのだ。

場の空気は凍り付いた。

生まれ出でた際に？神の腕？と占者が結論づけた黄昏国が第一王子、ハルセ。神力を欲しいがままに扱える素質を持つとされた彼に進んで近づく者はいなかった。母でさえ何かの秘密を隠すかのように、ハルセを避けて通つた。

そんな、無礼を働けば返り討ちに遭うと畏れられ、実父でさえ手を持て余していたハルセに、キヨウ力は触れたのだ。皆、姫が彼の逆鱗に触れたと思い、息を止めた。

錦糸の織り込まれた装束の裾を捌き、母がキヨウ力をハルセより引き離そうとする。

「これ、兄上に無礼なことをするでない」

軽く諫める母の手を嫌がり、キヨウ力は眦を吊り上げた。

「だって先程から、あにうえ一人でいるのだもの。だから、きょうかが一緒にいるの」

予想外の返しにハルセは目を見張つた。

キヨウ力は隙をついてハルセの懷に飛び込んだ。その振動で盃の中身が零れ、床に散つた。

「はじめまして、あにうえっ。きょうかはあにうえが大好き」

どうして自分がここまで懷かれるのか。困惑を隠せないハルセは立ち竦む母の顔を窺い見る。母は長く艶やかな髪を耳にかけ、ほうと息を吐いた。

「キヨウ力は、そなたが毎朝鍛錬を行なっている様を見ていたようです。物心ついてより、ずっと。いつ会えるのかとそればかり聞い

ておりました。今日、こうして会えたことに嬉しさが隠せなかったのでしょうね」

ハルセが鍛錬を行なっている齋庭にわの垣根の向こうには、女子が住まう離れがある。垣根の隙間より、キヨウ力は自分を知ったのだらう。

ハルセの着物を掴んでいるキヨウ力の小さな手を、そつと自分の手で包んだ。すると、キヨウ力は嬉しそうに顔を上げてハルセに笑いかける。屈託ない笑顔は、様々な重圧によつて大人ぶる他なかった十の少年の心をほぐした。

「……キヨウ力……」と名を呼べば、はいと歯切れ良い返事をする。どうしようもなく温かな気持ちになつて、少女の頭を撫でた。すると、キヨウ力も負けじと撫で返してくる。

ハルセは自然と唇を綻ばせた。周囲は騒然とする。大人顔負けの余裕と貫禄を持つハルセが、今は年相応な顔をしているのだから仕方ない。

「お前がキヨウ力を気に入ったのなら良かった良かった。少々じゃじゃ馬だが、たまには遊び相手になるのだぞ」

黄昏国王　父の言葉にハルセは頷く。

はたしてその言葉通り、ハルセとキヨウ力は仲睦まじく暮らした。戦へハルセが赴く度、キヨウ力は泣きべそをかきながらも、大きく手を振つて彼を送り出してくれる。

どこぞの夫婦のようだとは二人に近しい護衛はいつも囁し立てた。

「もうっ」

縦皺を寄せてキヨウ力はハルセの胸板を叩いた。はつとして彼女を見やれば、頬を膨らませて顔を逸らされた。

怪訝な表情でキヨウ力の髪を撫でると、じと目でこちらを睨んでくる。

「どうした？」

「きょうかが話しかけても上の空でした」

「ああ」

ふっとハルセは納得した。どうやら、物思いに耽り過ぎてキヨウカの声を拾えなかったらしい。

「悪かった。かわりに今日は一日中、キヨウカと遊んでやろう」

キヨウカは何も言わずにハルセへしがみつく。彼の着物の袷部分に顔面を押し付けた姫の表情はわからないが、喜んでいるのは伝わってくる。

広い宮殿の中、一人でいるのは心細かろうとハルセは思う。

空より垂れた目に見えぬ闇は、始終黄昏国を覆っている。その核部にある王宮の腐敗具合と言ったら、目に余るものがあつた。

父である王は政に戦にと忙しく、ろくに顔も見ることが出来ない。母である王妃は、高天原国の姫巫^{ひめみこ} ”神の口” という異名もある、戦女神と名高い神力を操る巫より度々送り付けられる文に頭を抱えていた。その文の内容は、ハルセにもわかり兼ねる。しかし、あまり良い内容ではないのは容易に想像出来た。

「……………きょうかは、あにうえとずっと一緒にいたい」

唐突に、怖い夢を見た直後のような萎れた声で、キヨウカは言った。黙っていると、彼女は涙を湛えた黒曜石の瞳でハルセを見る。

「かあさまは駄目だと言っていたの。何故？ きょうかがあにうえに『相応しい姫』ではないとかあさまは言ったわ」

虚を突かれた。賢しげなキヨウカ。だが、まだ四つでしかない。どうやら彼女は彼女なりに、ハルセとどうしたらずっと共にいられるかを模索していたらしい。

「……………この髪色がいけないの？ 顔が駄目？ 我が儘な中身が問題なの？」

キヨウカは兄上と一緒にいたい、と彼女は震える声で悲鳴を上げた。

ハルセは静謐な双眸^{せいひつ}でキヨウカを見据えた。朽葉色の長い髪が、瞳が、淡く煌めく。

「俺はキヨウカの、長く漆黒の髪が好きだけれど」

手入れが行き届いたその艶やかな髪を指ですいた。

「全てを見透す澄んだ瞳、可愛らしい顔立ちも好きだけれど」
ハルセは幼姫の輪郭をなぞった。

「何より好きなのは、一人でいる者に笑顔で手を伸ばす、その優しい中身」

穢れを知らない白い陶磁器の如き頬に唇を落とすと、誰にも渡したくないとの願いを込めて再び強く抱きしめる。

大地より巻き上がる突風に、拯溟がまた吹雪く。

「歪んだ世、お前だけが美しい」

芯から凍える冬椿。

たかまのはらいく

高天原国に怯えて暮らす、傾いた黄昏国。亡国同然のこの国を、復興する役目を担って生まれたのだと周囲は口々に呟いた。崇めた。畏れた。

飛び交う幾多の情報。一体、どれが真なのだと頭を抱えた日もあった。

だが、弱味は見せられない。自らが唯一、地上に残された一縷の希望なのだとハルセは自覚していた。

冬晴れの空は、宿運に翻弄されし王子と姫に、束の間の穏やかさを与えてくれた。

番外編 煉獄の記憶（前書き）

ハルセの過去話。短いです。

番外編 煉獄の記憶

煌々とした赤き炎はとぐろを巻き、王宮を包んでいた。木造建築のそれは、激しい音を立てて燃え盛る。

ハルセは我が身も顧みず、王宮へと飛び込もうと駆け出す。
「よせ」

しわがれ、干乾びた声がそれを止めた。

ハルセはゆっくりと振り向く。重臣に支えられて立つ父王の姿に齒軋りした。

「何故、止めるのですか。宮内にはまだ、母上が……っ」

「あやつが火を放ったのだぞ」

低く、重苦しい言葉はハルセの鼓膜をじりじりと揺さぶる。

「ハルセ様、貴方様まで天に召されてしまったら、わたしどもはどうして生きることができましょう」

女官が着物の袖に顔を埋めて静かに泣く。傍に控える兵達も一樣に俯いていた。

ハルセは瞳に映り込む王宮に、全てを怨む醜惡な母親の姿を見た。最後に会った時、彼女は笑ってハルセに言い放ったのだ。

「わたくしには、高天原国から逃げおおせることもできない。キヨウカさえ守れず、国王の心も繋ぎ止められない。ただの女。ならば」

狂気を孕んだ母親の眼が細められる。

『国王の願いくらい、わたくしが叶えて差し上げましょう』

赤紅を引いた唇が弧を描く。次の瞬間、彼女は掲げていた油を流した床に、松明の炎を落としたのだ。その様を目の前で見ていたハルセがよくもまあ、こうして脱出できたものだ。

「……まだ助かるかもしれません。救援を」

「駄目だ」

「何故です。仮にもあの人は黄昏国^{たそがれ}の王妃でございましょう」

「 姫巫より、伝達が来た。宮を明け渡して投降しろ。もしそれができないのなら、王妃を差し出せ、と」

ハルセは淡々と言葉を紡ぐ父王に、驚愕の表情を向けた。

「まさか……父上……」

煉獄の炎は、とどまることを知らず火の粉を吹く。

父王の瞼に翳が落ちる。

「赦せ」

その言葉にハルセは目の前が白くなる。

彼は言ったのだ。キョウ力を失い、絶望する自分の正妃に向かって、非情とも言える願いを口にしたのだ。

高天原国の掌中に落ちるくらいなら、自害を選んでほしい、と。指先に震えが走る。

『黄昏国のため、必要な犠牲だったんだ』

『兄上』

脳裏にこびりついて消えない、癒えない記憶。

一体何度、失えばいいのか。

ハルセは下唇を噛みしめ、拳を握った。

「王子」

「ハルセ様」

「王太子」

数多の声が、ハルセの肩にのし掛かって来る。

「……………あなたは、どこまで愚かになったのですか」

「何？」

父王は眉間に深く皺を刻んだ。

ハルセは威厳ある父の様子に臆することなく嘲笑を洩らした。

「必ず高天原国を殲滅する。そう言っただけ俺を連れ、戦地を巡ったあなたはどこへ行ったというのですか」

至極、穏やかな物言い。

王宮から死に物狂いで逃げ出した官や兵たちは黙している。

「この国の主は、いつからそんなさもしい者となり下がった！」

ハルセの激昂が飛んだ。

父王は険しい顔をしたまま、瞳を潤ませた。彼は声もなく、何筋もの涙を流す。諦めを知った者が見せるその涙にハルセは顔を引き締めた。

王宮へと一歩、また一歩と進み出る。それを咎める兵たちの悲鳴が上がったが、ハルセは気にも留めなかった。

「あなたがこの国を守らないというならば、俺が守ります」

そう言い、両腕を水平に薙ぐ。

「散れ」

腹の底から、彼はとぐろを巻く炎に向かって言った。それでもなお、収まる気配のないそれに、ハルセは再び「散れ」と言霊を紡ぐ。目の奥に力をこめる。

瞬間、頭上に暗雲が立ち込め、雷が鳴った。

遠くから近くから雷鳴は轟き、どこからともなく雨音がし出した。とても細かった雨はやがて土砂降りとなり、炎に沈んだ王宮を鎮静させる。

辺りから聞こえるのは人の囁き泣く声と雨音ばかり。

ハルセは見事な朽葉色の御髪を拭うでもなく、その場に佇んでいた。

「おお」

ようやく我に返ったのだろう。父王はハルセに縋りついてきた。そこにいたのは高天原国を倒すために尽力していた王ではなく、た

だの老人の姿があつた。

「やはりお前……“神の腕”」

畏怖が籠もった、しかし、期待の滲んだ父王の言葉にハルセは視線を逸らす。そして、場にいる大勢の人々を前に、決意を新たにする。

これまで、救いの王子と呼ばれながらもハルセは大切なものを一つとして守れなかった。

王子であるという前提がハルセの行動に足枷を嵌める。

ならば。

「これより、我が名はカガミ。国を復古する一兵に、王族の名は要らない」

カガミ。それは遙か昔、黄昏国を王が建国する際に最も貢献したと云われる異境の兵の名。彼は黄昏国が建国したのを見届け、静かに姿を隠したらしい。

自分もその兵の如く、黄昏国の礎となれたなら、本望だ。

そう思い、ハルセは灰色の空を仰ぐ。大粒の雨が顔を叩きつけ、頬を伝った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5223/>

残響の導き

2010年11月15日19時40分発行